

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第213集

若江北遺跡・北鳥池遺跡

東大阪市

若江北遺跡・北鳥池遺跡

大阪府営水道 中期整備事業 系統連絡送水管布設工事に伴う発掘調査報告書

二〇一一年二月

財団法人
大阪府文化財センター

2011年2月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第213集

東大阪市

若江北遺跡・北鳥池遺跡

大阪府営水道 中期整備事業 系統連絡送水管布設工事に伴う発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

東大阪市に所在する若江北遺跡と北鳥池遺跡は、河内平野およびその東縁部に立地しています。東に生駒山地をのぞむこの地域には、山地西麓から平野部にかけて、数多くの遺跡が展開しています。

若江北遺跡は、これまで財団法人大阪文化財センター（平成7（1995）年度より財団法人大阪府文化財調査研究センター、現財団法人大阪府文化財センター）が、近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い、第1次調査（昭和54～57（1979～82）年）、第2次調査（昭和57～58（1982～83）年）を、都市計画道路大阪中央環状線関連工事に伴い、第3次調査（平成4（1992）年）、第4次調査（平成5～6（1993～94）年）、第5次調査（平成7（1995）年）を実施しています。その結果、弥生時代の竪穴建物や周溝墓が検出されたほか、近畿地方最古段階に位置づけられる弥生土器も出土し、弥生時代の集落、墓域として、広く知られることになりました。その成果は、概要報告書、調査報告書の刊行により、一般に公開されています。

北鳥池遺跡は、昭和39（1964）年、大阪府営水道枚岡ポンプ場建設工事に際し、弥生土器や土師器が多数出土したことにより、発見された遺跡です。弥生時代～古墳時代の集落として周知され、昭和50・54（1975・79）年に東大阪市遺跡保護調査会、平成8（1996）年に大阪府教育委員会の調査が行われています。

本書で報告するのは、平成21・22（2009・10）年度に実施した、大阪府営水道中期整備事業系統連絡送水管布設工事に伴う発掘調査の成果です。若江北遺跡は当センターが発掘調査を開始してから第6次の調査、北鳥池遺跡は当センターとしては初めての調査にあたります。

若江北遺跡では、弥生時代前期、弥生時代中期末、弥生時代後期後葉の遺構面で溝をはじめとする遺構を、弥生時代後期末以降の遺構面で水田を検出しました。

北鳥池遺跡では、縄紋時代～弥生時代にかけての層準を確認し、遺跡の立地する河内平野東縁部における地形形成過程を考える上で、貴重なデータを得ることができました。

最後になりましたが、調査に際し、大阪府教育委員会、大阪府水道部東部水道事業所、東大阪市教育委員会をはじめ、皆様にご援助いただきましたことに感謝申し上げますとともに、今後とも当センターの文化財調査に一層のご理解とご協力をお願いする次第です。

2011年2月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、大阪府東大阪市に所在する若江北遺跡（わかえきたいせき）、北鳥池遺跡（きたとんのいけいせき）の発掘調査報告書である。今回の調査区は、それぞれ若江西新町3丁目、若草町に位置する。調査名は、若江北遺跡09-1、北鳥池遺跡09-1である。なお、報告は調査を実施した順に、北鳥池遺跡から行う。
2. 現地調査および整理作業は、「大阪府営水道 中期整備事業 系統連絡送水管布設工事に伴う若江北遺跡・北鳥池遺跡発掘調査委託」として、大阪府東部水道事業所から財団法人大阪府文化財センターが平成22（2010）年1月4日～平成23（2011）年2月28日の間に委託を受け、実施した。現地調査は、北鳥池遺跡を平成22（2010）年1月8日～2月17日、若江北遺跡を平成22（2010）年4月8日～7月28日に実施した。遺物整理は、平成22（2010）年2月18日～4月7日、同年7月29日～11月30日に実施し、平成23（2011）年2月28日、本書刊行をもって完了した。
3. 調査は以下の体制で実施した。

平成21（2009）年度 調査部長兼調査課長福田英人、調整グループ長金光正裕
調査グループ長寺川史郎、中部総括主査秋山浩三、副主査信田真美世

平成22（2010）年度 調査部長兼調査課長福田英人、調整グループ長江浦 洋、主幹岡本茂史
調査グループ長岡戸哲紀、主査片山彰一〔写真〕
中部総括主査秋山浩三、副主査信田真美世
資料活用総括主査村上年生、主査山口誠治、専門調査員倉賀野健〔保存〕
4. 樹種同定は、山口が行った。木製品は、山口、倉賀野が保存処理を行っている。また、若江北遺跡の現地調査においては当センター職員三好孝一、北鳥池遺跡の弥生時代以前の層準については同井上智博、石器、石製品については同新海正博、木製品については同黒須亜希子から教示を受けた。
5. 調査にあたり、東大阪市教育委員会、下記の方々をはじめとする各機関、諸氏にご指導、ご協力を賜った。深く感謝いたします。

阿部幸一（大阪府教育委員会）、芋本隆裕（東大阪市教育委員会）、別所秀高（国史跡・重要文化財鴻池新田会所）
6. 放射性炭素年代測定（AMS法）は株式会社パレオ・ラボに、珪藻分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。本書第3章第3節第1項「放射性炭素年代測定（AMS法）」は株式会社パレオ・ラボ中村賢太郎ほか、同第2項「珪藻分析」はパリノ・サーヴェイ株式会社辻本裕也による。
7. 第3章第3節第3項「北鳥池遺跡・大阪府教育委員会96年度調査地点でみられた堆積層について」は別所氏、第4章第3節第1項「第4a-1面出土土器群」は当センター職員市村慎太郎の寄稿である。
8. 本書の執筆、編集は、信田が行った。
9. 本調査に関わる写真、実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値で、すべてm単位である。
2. 遺構図の座標は、世界測地系（測地成果2000）によって測量し、国土座標法による平面直角座標第VI系で示している。ただし、若江北遺跡については、世界測地系移行前から継続して調査が行われている遺跡であることを鑑み、遺構面の平面図等に日本測地系（改正前）の座標（ \diamond で図示）も併記した。表記はすべてm単位である。
3. 遺構図に付した方位は、すべて座標北である。
4. 調査は、財団法人大阪府文化財センター 2003 『遺跡調査基本マニュアル [暫定版]』に準拠して行った。地区割の第I・II区画は、北鳥池遺跡がH 6 - 4、若江北遺跡がH 6 - 2である。
5. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2008年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6. 遺構番号は、種類に関係なく通し番号を付した。
7. 遺構実測図の詳細は以下の通りである。
 - ・縮尺は、各図のスケールに明記している。
 - ・断面位置は、「└─ ─┘」によって示している。
8. 遺物実測図・拓本の詳細は以下の通りである。
 - ・縮尺は、各図のスケールに明記している。土器、瓦、木製品が1／4、石製品、石器が1／2である。ただし、木製品のうち大形のもの1／6とした。
 - ・土器・磁器実測図の直線のうち、実線は強い稜線、隙間を1箇所開けた線は調整の境界、隙間を2箇所開けた線は調整の単位の境界または弱い稜線を表現している。
 - ・木製品の木取りは、断面図内に木目を模式的に図示することにより表現している。
 - ・番号は、実測図掲載順の通し番号である。図版にのみ掲載しているものは、実測図の最終番号に続く番号を付した。また、木製品等で付表にのみ掲載しているものは、図版にのみ掲載しているものの最終番号に続く番号を付した。
9. 付表の法量は、（）を付したものは復元値、〈〉を付したものは残存値である。
10. 第3・4章の各遺構の項における遺物についての記述は、掲載遺物に限らず、出土した遺物すべてを対象としたものである。
11. 図版の縮尺は統一していない。

目 次

序文
例言
凡例
目次

第1章 位置と環境	1
第1項 自然環境	1
第2項 歴史環境、既往の調査	1
第2章 調査の経緯、経過と方法	
第1項 調査の経緯、経過	5
第2項 調査の方法	5
第3章 北鳥池遺跡の調査成果	
第1節 基本層序	7
第2節 各遺構面の遺構と遺物	
第1項 第1～4面（第1～4層）	9
第2項 第5面（第5層）	9
第3項 第6面（第6層）	9
第4項 第7～9面（第7～9層）	9
第5項 第10面（第10層）	9
第6項 第11面	13
第3節 弥生時代以前の層準に関する分析	14
第1項 放射性炭素年代測定（AMS法）	14
第2項 珪藻分析	17
第3項 北鳥池遺跡・大阪府教育委員会96年度調査地点でみられた堆積層について	25
第4節 総括	28
第4章 若江北遺跡の調査成果	
第1節 基本層序	29
第2節 各遺構面の遺構と遺物	
第1項 第1面（1層） - 中世以降の耕作面 -	33
第2項 第2面（3・4 a層） - 古墳時代～古代の遺構面 -	33
1. 第2 - 1面	33
2. 第2 - 2面	34

第3項 第3面(4b・4d層) - 弥生時代後期末以降の水田面 -	35
1. 第3a-1面	35
2. 第3a-2面	35
3. 第3b面	36
第4項 第4面(5a・5b層) - 弥生時代中期末～後期後葉の遺構面 -	38
1. 第4a-1面	39
2. 第4a-2面	51
3. 第4a-3面	55
4. 第4b面	70
第5項 第6・7面(6～9層)	73
第6項 第8面(11層)	75
第7項 第9面(12層) - 弥生時代前期の遺構面 -	76
1. 第9a面	77
2. 第9b面	78
3. 第9c面	79
4. 第9d面	81
第8項 第10面(13～15層) - 縄紋時代晩期の遺構面 -	83
第3節 総括	
第1項 第4a-1面出土土器群	85
第2項 遺構面	86
抄録	

挿 図 目 次

図1 遺跡分布図	3	図18 放射性炭素年代測定結果	27
図2 北鳥池遺跡 調査地位置図	4	図19 土層図	30・31
図3 若江北遺跡 調査地位置図	4	図20 基本層序・遺構面対応模式図	32
図4 北鳥池遺跡 地区割図(第Ⅲ・Ⅳ区画)	6	図21 1b層 出土遺物	33
図5 若江北遺跡 地区割図(第Ⅲ・Ⅳ区画)	6	図22 第2-1面 平面図	34
図6 土層断面 模式図	8	図23 1・2土坑 平面・断面図	35
図7 第6面 平面図	10	図24 3a層 出土遺物	35
図8 1土坑 断面図	10	図25 第3a面 平面図	36
図9 第4～9層 出土遺物	11	図26 第3b面 平面図	37
図10 第10面 平面図	11	図27 3・4・6土坑 断面図	37
図11 第11面 平面図	12	図28 第4a-1面 平面図(1)	38
図12 第11面 ピット 平面・断面図	13	図29 第4a-1面 平面図(2)	39
図13 暦年較正結果	15	図30 7土坑 平面・断面図	40
図14 分析地点の層序および試料採取位置	17	図31 8溝 断面図	40
図15 主要珪藻化石群集の層位分布	18	図32 8溝 杭 平面・立面図	41
図16 北鳥池遺跡周辺の地形分類	25	図33 8溝 遺物出土状況 平面図	42
図17 大阪府教育委員会96年度調査地点の堆積柱状図	26	図34 8溝 出土遺物	43

図35	8溝・12-1溝 断面図	44	図64	12-2溝 出土木製品(4)	66
図36	12-1溝底面上堆積シルト層 出土遺物	45	図65	13溝 遺物出土状況 平面図	67
図37	盛土東裾部 遺物出土状況 平面・断面図	46	図66	13溝 断面図	68
図38	盛土 断面図	47	図67	13溝 出土遺物	69
図39	盛土東裾部 出土遺物	48	図68	14・15溝 断面図	70
図40	盛土層 出土遺物	48	図69	第4b面 平面図	70
図41	土器集積 出土状況 平面・断面図	48	図70	16土坑 平面・断面図	71
図42	土器集積 出土状況 平面図	49	図71	17・18溝 断面図	72
図43	土器集積 出土遺物	50	図72	19～22ピット 断面図	72
図44	第4a-2面 平面図	51	図73	5a層 出土遺物	73
図45	9・10土坑 平面・断面図	52	図74	5b層 出土遺物	73
図46	9土坑 出土遺物	53	図75	第6面 平面図	74
図47	11ピット 平面・断面図	53	図76	9層 出土遺物	74
図48	集石 平面・断面・立面図	54	図77	第8面 平面図	75
図49	第4a-3面 平面図	55	図78	11層 出土遺物	76
図50	12-1・2溝 断面図	56	図79	第9a面 平面図	76
図51	12-2溝 杭 平面・立面図	57	図80	24・26溝 断面図	77
図52	12-2溝 木製品、石器等 出土状況 平面図	58	図81	第9b面 平面図	78
図53	12-2溝南端部 木製品等 出土状況 平面図	59	図82	12b層 遺物出土状況 平面図	78
図54	12-1・2溝境界部 出土遺物	59	図83	12b層 出土遺物	79
図55	12-2溝 上層 出土土器(1)	59	図84	第9c面 平面図	79
図56	12-2溝 上層 出土土器(2)	60	図85	27・28溝 断面図	80
図57	12-2溝 上層 出土土器(3)	61	図86	27溝 遺物出土状況 平面図	80
図58	12-2溝 西肩部 出土遺物	62	図87	27溝 出土遺物	81
図59	12-2溝 中層、下層 出土遺物	62	図88	第9d面 平面図	82
図60	12-2溝 上層 出土石器	62	図89	29土坑、30ピット 平面・断面図	82
図61	12-2溝 出土木製品(1)	63	図90	第10a面 平面図	83
図62	12-2溝 出土木製品(2)	64	図91	流路 断面図	84
図63	12-2溝 出土木製品(3)	65			

表 目 次

表1	測定試料および処理	15	表3	珪藻分析結果(1)	19
表2	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	15	表4	珪藻分析結果(2)	20

写 真 目 次

写真1	珪藻化石	24
-----	------	----

付 表 目 次

付表 1	掲載土器等一覽表 (1)	付表 7	掲載土器等一覽表 (7)
付表 2	掲載土器等一覽表 (2)	付表 8	若江北遺跡 掲載石器、石製品一覽表
付表 3	掲載土器等一覽表 (3)	付表 9	若江北遺跡 第 4 a - 2 面集石等一覽表
付表 4	掲載土器等一覽表 (4)	付表10	若江北遺跡 木製品等一覽表 (1)
付表 5	掲載土器等一覽表 (5)	付表11	若江北遺跡 木製品等一覽表 (2)
付表 6	掲載土器等一覽表 (6)	付表12	若江北遺跡 木製品等一覽表 (3)

図 版 目 次

図版 1	北鳥池遺跡 調査地周辺	図版38	若江北遺跡 第 4 a - 3 面 (4)
図版 2	北鳥池遺跡 土層断面 (1)	図版39	若江北遺跡 第 4 a - 3 面 (5) 第 4 b 面 (1)
図版 3	北鳥池遺跡 土層断面 (2)	図版40	若江北遺跡 第 4 b 面 (2)
図版 4	北鳥池遺跡 全景 (1)	図版41	若江北遺跡 第 4 b 面 (3)
図版 5	北鳥池遺跡 全景 (2)	図版42	若江北遺跡 第 6 面 9 層
図版 6	北鳥池遺跡 第11面	図版43	若江北遺跡 第 8 面
図版 7	若江北遺跡 調査地周辺	図版44	若江北遺跡 第 9 a 面
図版 8	若江北遺跡 土層断面 (1)	図版45	若江北遺跡 12 b 層 第 9 c 面 (1)
図版 9	若江北遺跡 土層断面 (2)	図版46	若江北遺跡 第 9 c 面 (2)
図版10	若江北遺跡 全景 (1)	図版47	若江北遺跡 第 9 c 面 (3)
図版11	若江北遺跡 全景 (2)	図版48	若江北遺跡 第 9 c 面 (4)
図版12	若江北遺跡 全景 (3)	図版49	若江北遺跡 第 9 d 面
図版13	若江北遺跡 全景 (4)	図版50	若江北遺跡 第10 a 面
図版14	若江北遺跡 全景 (5)	図版51	北鳥池遺跡 出土遺物 若江北遺跡 出土遺物 (1)
図版15	若江北遺跡 全景 (6)	図版52	若江北遺跡 出土遺物 (2)
図版16	若江北遺跡 全景 (7)	図版53	若江北遺跡 出土遺物 (3)
図版17	若江北遺跡 全景 (8)	図版54	若江北遺跡 出土遺物 (4)
図版18	若江北遺跡 全景 (9)	図版55	若江北遺跡 出土遺物 (5)
図版19	若江北遺跡 全景 (10)	図版56	若江北遺跡 出土遺物 (6)
図版20	若江北遺跡 第 2 - 1 面 第 3 a - 1 面	図版57	若江北遺跡 出土遺物 (7)
図版21	若江北遺跡 第 3 b 面 (1)	図版58	若江北遺跡 出土遺物 (8)
図版22	若江北遺跡 第 3 b 面 (2)	図版59	若江北遺跡 出土遺物 (9)
図版23	若江北遺跡 第 4 a - 1 面 (1)	図版60	若江北遺跡 出土遺物 (10)
図版24	若江北遺跡 第 4 a - 1 面 (2)	図版61	若江北遺跡 出土遺物 (11)
図版25	若江北遺跡 第 4 a - 1 面 (3)	図版62	若江北遺跡 出土遺物 (12)
図版26	若江北遺跡 第 4 a - 1 面 (4)	図版63	若江北遺跡 出土遺物 (13)
図版27	若江北遺跡 第 4 a - 1 面 (5)	図版64	若江北遺跡 出土遺物 (14)
図版28	若江北遺跡 第 4 a - 1 面 (6)	図版65	若江北遺跡 出土遺物 (15)
図版29	若江北遺跡 第 4 a - 1 面 (7)	図版66	若江北遺跡 出土遺物 (16)
図版30	若江北遺跡 第 4 a - 1 面 (8)	図版67	若江北遺跡 出土遺物 (17)
図版31	若江北遺跡 第 4 a - 1 面 (9)	図版68	若江北遺跡 出土遺物 (18)
図版32	若江北遺跡 第 4 a - 1 面 (10)	図版69	若江北遺跡 出土遺物 (19)
図版33	若江北遺跡 第 4 a - 2 面 (1)	図版70	若江北遺跡 出土遺物 (20)
図版34	若江北遺跡 第 4 a - 2 面 (2)	図版71	若江北遺跡 出土遺物 (21)
図版35	若江北遺跡 第 4 a - 3 面 (1)	図版72	若江北遺跡 出土遺物 (22)
図版36	若江北遺跡 第 4 a - 3 面 (2)	図版73	若江北遺跡 出土遺物 (23)
図版37	若江北遺跡 第 4 a - 3 面 (3)	図版74	若江北遺跡 出土遺物 (24)

第1章 位置と環境

北鳥池遺跡は、大阪府の東部、東大阪市若草町、末広町、下六万寺町3丁目に所在する。本書で報告する09-1調査区は、若草町の枚岡ポンプ場南西隅に位置する。若江北遺跡は、東大阪市若江西新町3・4丁目、若江北町3丁目、若江南町3丁目に所在する。本書で報告する09-1調査区は、若江西新町3丁目の巨摩橋交差点北側、近畿自動車道と大阪中央環状線南行車線の間位置する。

第1項 自然環境

北鳥池遺跡と若江北遺跡は、河内平野およびその東縁部に立地している。西は上町台地、東は生駒山地に限られる平野には、東から恩智・玉串・楠根・長瀬・平野川の旧大和川水系の河川が北西方向に向かって流れている。生駒山地は南北に長く、山地の西麓には扇状地が発達している。

北鳥池遺跡は、河内平野の東部、生駒山地を間近にのぞむ位置に立地している。生駒山地からのびる扇状地の末端部から低地部にかけて展開する遺跡である。遺跡範囲の南縁から西縁部にかけて、長門川が流れる。生駒山地から西へ向かって流下し、遺跡範囲の南西隅部で北向きに流れをかえ、遺跡北方で恩智川と合流する流路である。現在の標高はT.P.7.2m前後である。

若江北遺跡は、河内平野の中央部に立地している。現在は遺跡内を第二寝屋川が北西流しているが、1934年の河川改修によるもので、それ以前は楠根川が流れていた。現在の標高はT.P.4.3m前後である。

第2項 歴史環境、既往の調査

縄文時代には海水面の上昇によって河内湾が形成されており、この時期の遺跡は、生駒山麓に立地している。しかし、次第に大和川水系の河川や生駒山地から流下する谷川の堆積作用により陸化が進み、縄文時代後期には山麓以外にも人間の活動痕跡が残されるようになる。以後、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて遺跡が増加、弥生時代中期になると一層河内平野の形成が進み、その数が急増していく。

北鳥池遺跡は、1964年に枚岡ポンプ場建設工事で多数の土器が出土したことにより、発見された遺跡である。枚岡市教育委員会により緊急調査が行われ、「黒色有機土層」より出土した土器は、弥生土器から土師器への移行を考える上で重要な資料として知られている。

その後、1979年に東大阪市遺跡保護調査会によって実施された調査では、溝状遺構が検出されている。溝状遺構内と第5層上面から、土師器、須恵器をはじめ、韓式系土器等、古墳時代の遺物が出土している。弥生時代後期の土器も含まれており、当該期の包含層が削平されたと考えられている。

また、1996年に大阪府教育委員会によって実施された調査では、縄文時代後期頃の土器細片が出土している。

若江北遺跡は、北には巨摩遺跡、瓜生堂遺跡、南には山賀遺跡が隣接している。これらの遺跡群では、近畿自動車道建設に伴う調査をはじめとしてこれまでに多くの発掘調査が実施され、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世の多大な調査成果が蓄積されている。特に、弥生時代については、前期より集落、水田が営まれること、中期には方形周溝墓が広範囲に築かれること等が広く知られており、河内平野を代表する遺跡群として位置づけられている。

若江北遺跡の主な既往の調査は、財団法人大阪文化財センター（1995年度より財団法人大阪府文化財

調査研究センター、現財団法人大阪府文化財センター）が、近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い実施した、第1次調査（1979～82年）、第2次調査（1982～83年）、都市計画道路大阪中央環状線関連工事に伴い実施した、第3次調査（1992年）、第4次調査（1993～94年）、第5次調査（1995年）である。

縄文時代後期前葉の深鉢が、第4次調査において出土している。

弥生時代前期の遺構面では、竪穴建物、掘立柱建物等集落関係の遺構群と、水田が検出されている。この時期には、山賀遺跡等、近隣の遺跡においても集落および水田が営まれていたことがわかっている。また、第5次調査等で出土した弥生時代前期前半の土器群は、近畿地方において最古段階に位置づけられる弥生土器であるとして注目されている。

弥生時代中期になると瓜生堂遺跡、巨摩遺跡で方形周溝墓群が展開するが、若江北遺跡では後期の遺構面で方形周溝墓が検出されている。若江北遺跡の弥生時代後期の遺構面では、平地建物、水田も検出されており、居住域、墓域、生産域が確認されていることになる。

そのほか、古墳時代前期の遺構面では水田が、中世後期の遺構面では東側の若江城跡に関連すると考えられる遺構群が検出されている。

関連文献

北鳥池遺跡

枚岡市史編纂委員会 1966 『枚岡市史 第三巻 史料編（一）』

大阪府立花園高等学校地歴部 1970 『河内古代遺跡の研究』

東大阪市遺跡保護調査会 1975 『若江城跡 北鳥池遺跡調査報告』

芋本隆裕 1980 「北鳥池遺跡出土土器の再整理」『東大阪市遺跡保護調査会年報 1979年度』 東大阪市遺跡保護調査会

東大阪市遺跡保護調査会 1981 『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集 1980年度』

大阪府教育委員会 1998 「北鳥遺跡（96014）・北鳥池遺跡（96033）」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報1』

若江北遺跡

財団法人大阪文化財センター 1983 『若江北』

大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター 1984 『巨摩・若江北（その2）』

大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター 1987 『河内平野遺跡群の動態Ⅰ プロローグ編』

大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター 1991 『河内平野遺跡群の動態Ⅱ 北遺跡群旧石器・縄文・弥生時代前期編』

財団法人大阪文化財センター 1993 『巨摩・若江北（その3）』

財団法人大阪文化財センター 1995 『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告 - 第4次 - 』

財団法人大阪府文化財調査研究センター 1996 『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告 - 第5次 - 』財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第15集

大阪府教育委員会 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1996 『河内平野遺跡群の動態Ⅲ 北遺跡群弥生時代中期編』

大阪府教育委員会 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998 『河内平野遺跡群の動態Ⅳ 北遺跡群弥生時代後期以降編』

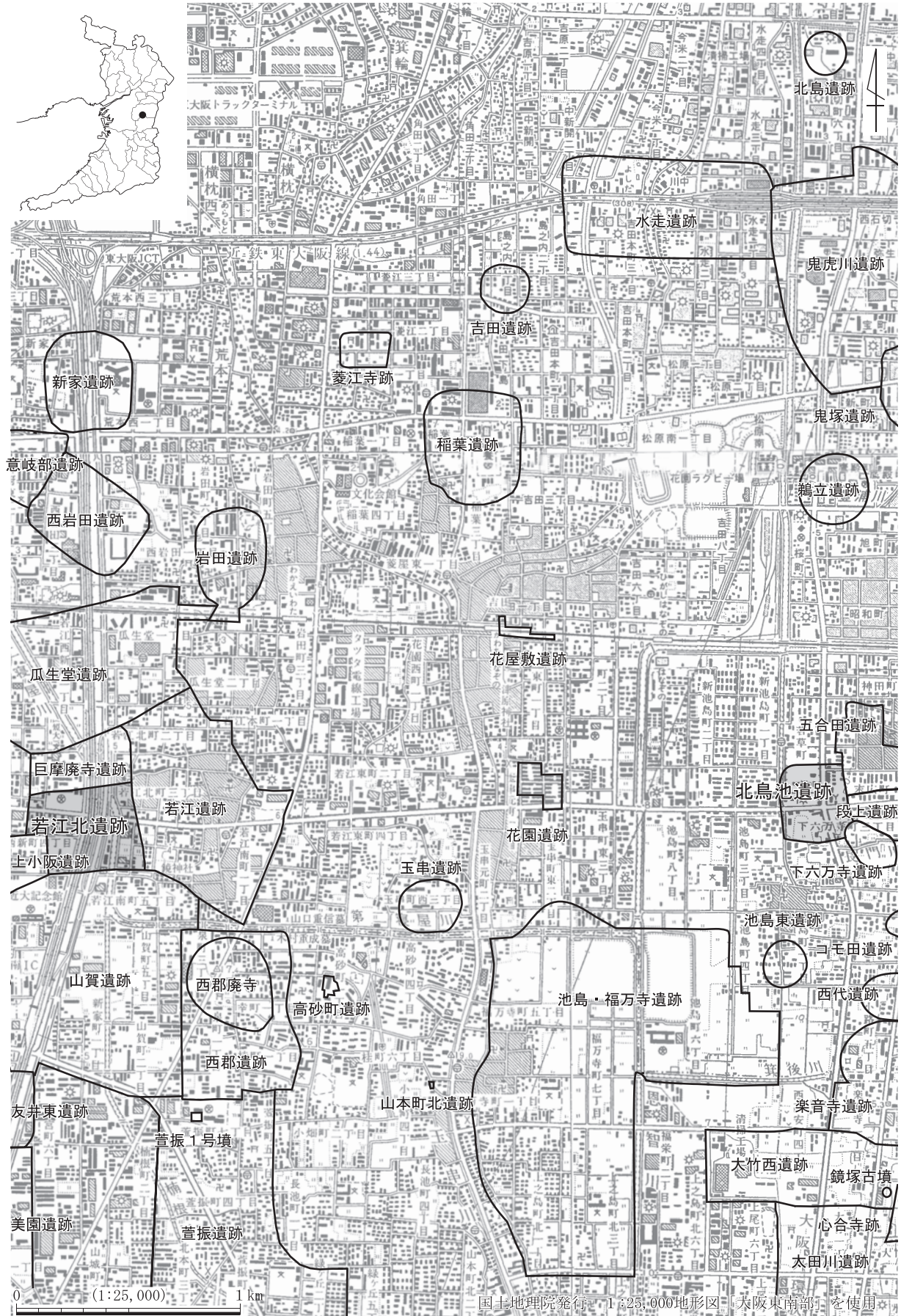


図1 遺跡分布図

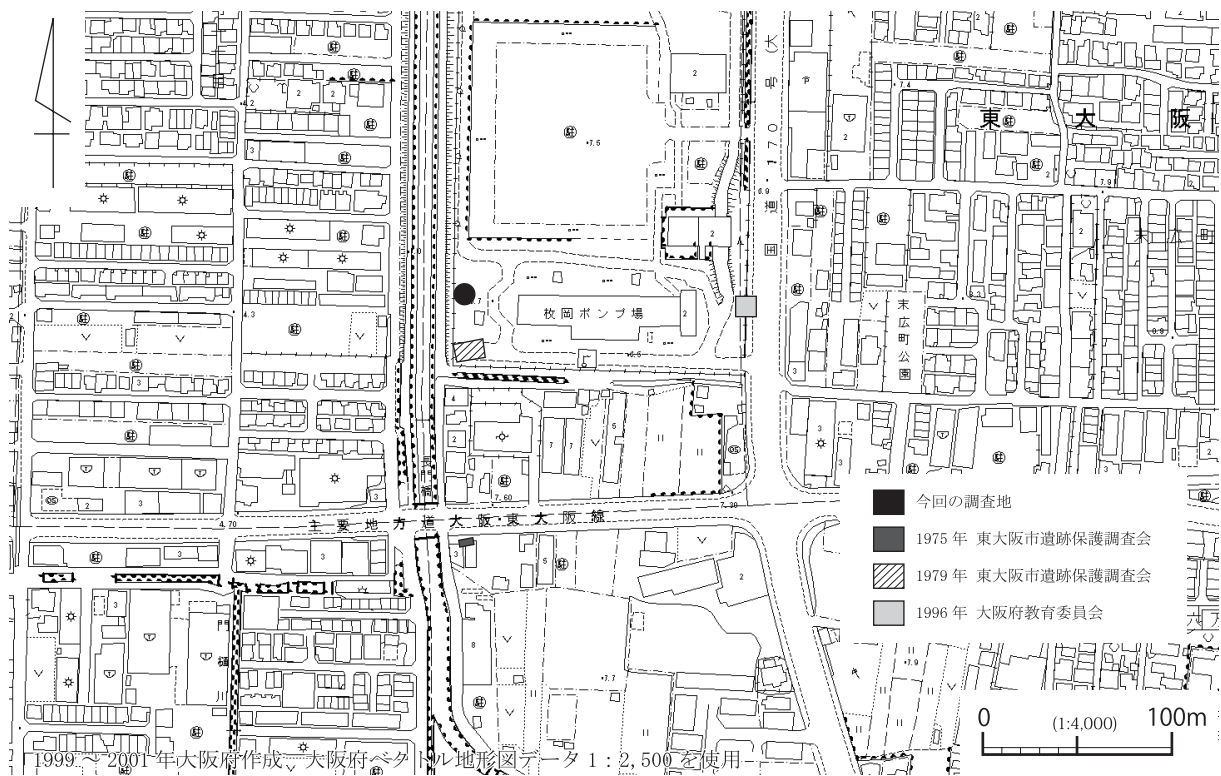


図2 北鳥池遺跡 調査地位置図

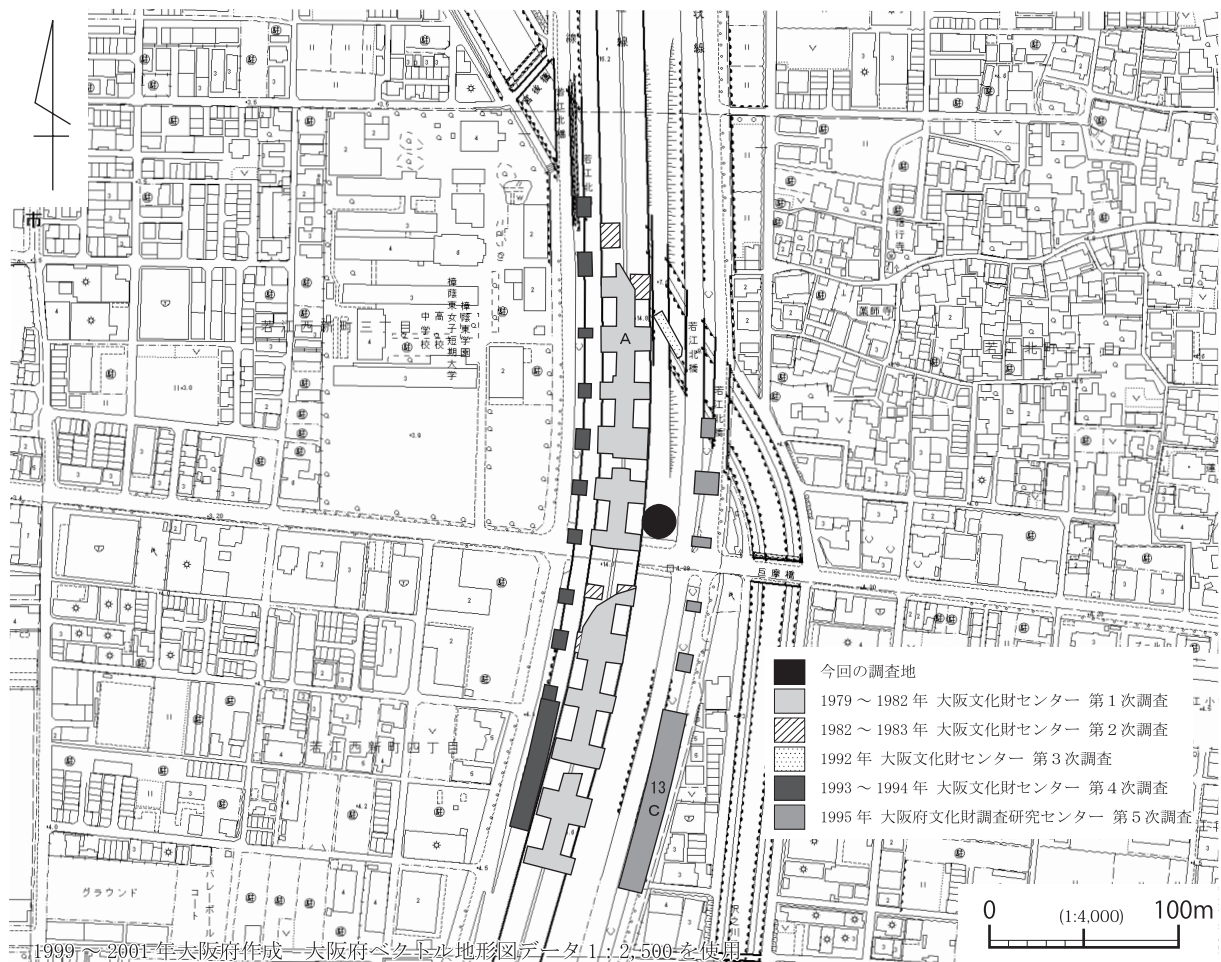


図3 若江北遺跡 調査地位置図

第2章 調査の経緯、経過と方法

第1項 調査の経緯、経過

今回の調査は、大阪府が実施している大阪府営水道整備事業に伴うものである。大阪府営水道の長期施設整備基本計画に基づく中期整備事業として策定された施設整備事業のひとつである系統連絡送水管布設工事に伴い、大阪府東部水道事業所から、財団法人大阪府文化財センターが「大阪府営水道 中期整備事業 系統連絡送水管布設工事に伴う若江北遺跡・北鳥池遺跡発掘調査委託」として委託を受け、平成21・22（2009・10）年度に現地調査事業および報告書作成事業を実施した。

北鳥池遺跡の調査区は、遺跡西端部にあたり、大阪府枚岡ポンプ場の南西隅部に位置する。東部水道事業所発注の「枚岡立坑築造工事（上小阪枚岡系統連絡管・東大阪市）」に伴い、立坑築造箇所の調査を実施した。面積は111㎡で、調査期間は平成22（2010）年1月8日～2月17日である。

若江北遺跡の調査区は、遺跡北部にあたり、第1次調査の調査区の東側、第5次調査の調査区の西側に近接している。東部水道事業所発注の「送水管布設工事（上小阪～枚岡φ1000）東大阪1工区その1」に伴い、立坑築造箇所の調査を実施した。面積は174㎡で、調査期間は平成22（2010）年4月8日～7月28日である。調査は、1次掘削としてT.P.1.44mまで掘削した後、ケーソン圧入範囲外周に鋼矢板を打設、2次掘削を行うという工程で実施した。2次掘削調査範囲は1次掘削調査範囲の内側におさまるため、1次掘削調査範囲の外周部分（2m幅）は、1次掘削で調査終了（遺構面としては第4 a - 1面）となった。

第2項 調査の方法

調査は、2003年度に導入された調査マニュアル（財団法人大阪府文化財センター 2003 『遺跡調査基本マニュアル』）に基づいて実施した。そのため、若江北遺跡については、既往の調査と今回の調査で依拠するマニュアルが異なる。ただし、測量法改正による2002年度の世界測地系移行以前から継続して調査が行われている遺跡であることを鑑み、遺構面の平面図等に、既往の調査で使用していた日本測地系（改正前）の座標も併記した。

遺構面の平面図は、主要な遺構面については、クレーンを使用した写真測量により、1/50で作成した。それ以外の遺構面については、写真測量と同一の測量成果を用いて平板測量および水準測量を実施した。調査区の基本層序等を記録するための土層断面図は、調査区中央に南北方向のセクションを設定し、写真測量と同一の測量成果を用いて、縮尺1/20で実測した。個別の遺構図（平面図・断面図・立面図・遺物出土状況図等）も、写真測量と同一の測量成果を用いて、縮尺1/2、1/5、1/10、1/20で実測した。

写真撮影には、6×7カメラ（モノクロ・リバーサル）、35ミリカメラ（モノクロ・リバーサル）、デジタルカメラを使用した。

出土遺物は、北鳥池遺跡がコンテナ2箱分、若江北遺跡が18箱分である。注記は、調査区名「キタトンノイケ09 - 1」、「ワカエキタ09 - 1」の後に登録番号である。

図面、写真、出土遺物は、登録し、台帳を作成している。

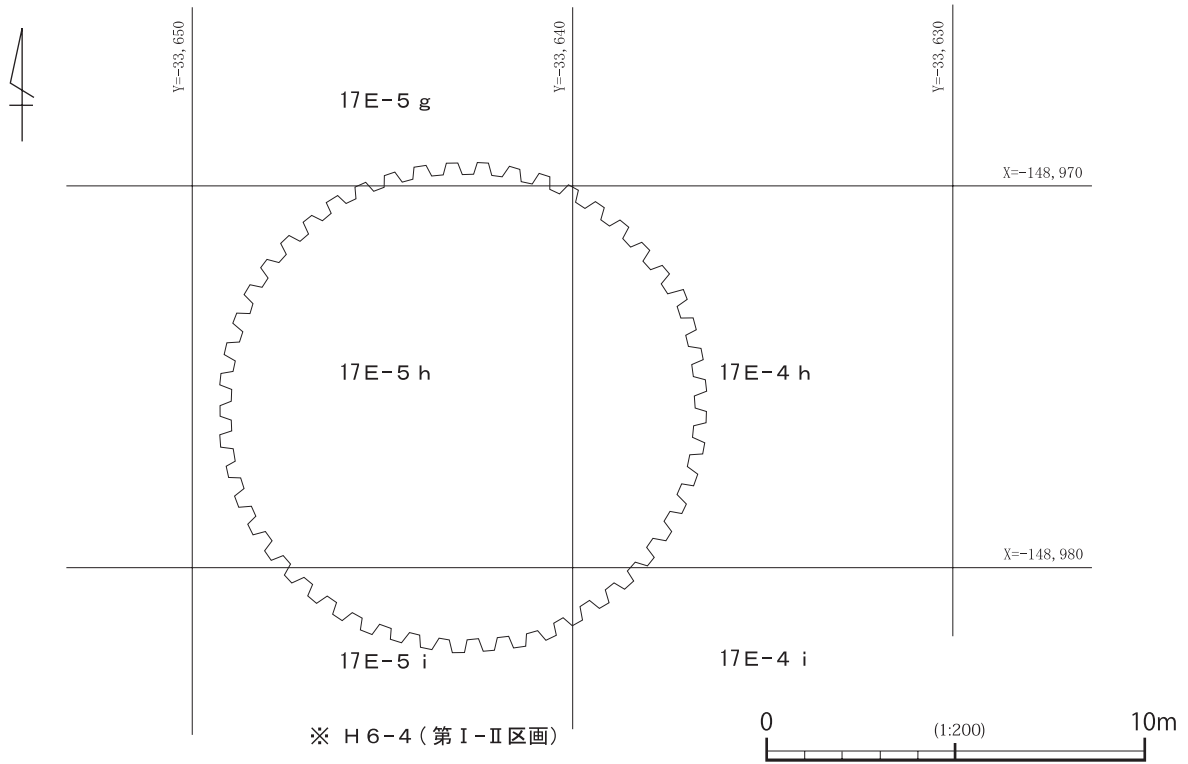


图4 北鳥池遺跡 地区割図 (第III・IV区画)

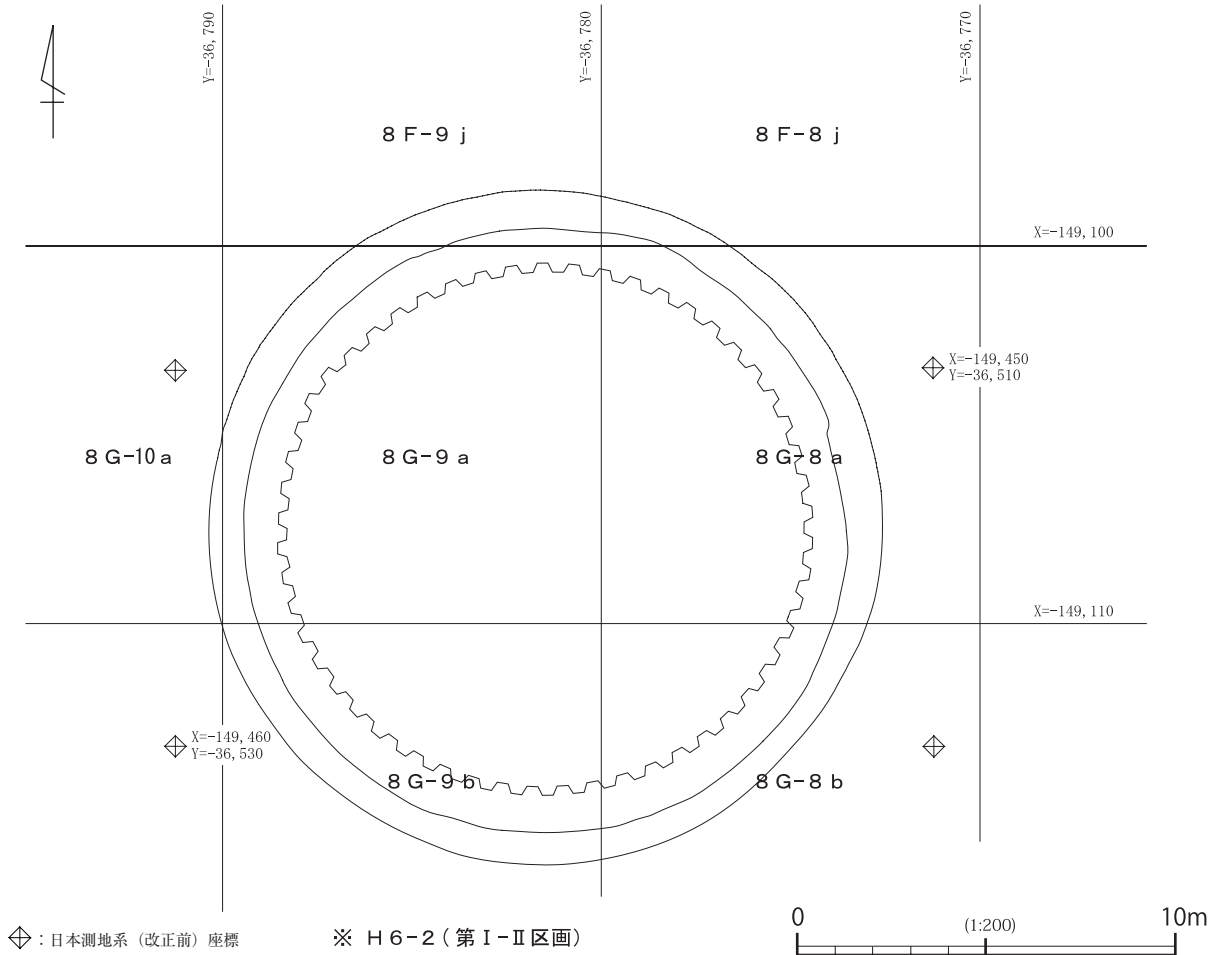


图5 若江北遺跡 地区割図 (第III・IV区画)

第3章 北鳥池遺跡の調査成果

第1節 基本層序

現地盤高は、T.P.7.2mである。厚さ約3mの現代盛土層の下に、下記の層準を確認した（図6 図版2・3）。

遺構面の呼称は、その基盤となる層の名称を用いて表現（第○層上面は第○面）している。

第1層 現代盛土層直下の作土層である。

第1b層 調査区東部で0.4m以上の厚みを持つ、ラミナのみられる堆積層である。シルト主体で、上部に中砂～粗砂が堆積している。

第2～4層 作土層である。粗砂・小礫等を比較的多く含むシルトである。

第5層 作土層である。シルトで、粗砂・小礫を比較的多く含む。出土遺物が少量で、中世後期以降であることは確かであるが、詳細な時期は不明である。

第6～9層 中世後期の作土層である。第5層以上と比較して砂粒の含有が少ないシルトである。

第10層 調査区西部、東部以外に遺存するシルト主体の作土層である。出土遺物が少量、小片であるため、詳細な時期は不明である。

第11層 T.P.3.0～3.3m以下は、ラミナのみられる堆積層である。極細砂～細砂で、シルトをラミナ状に含む。T.P.2.5m以下は、木片等を含むシルトと極細砂～細砂の互層となる。出土遺物はない。T.P.2.1mで検出した立木について、放射性炭素年代測定（AMS法）を実施したところ、弥生時代中期という結果が出ている。

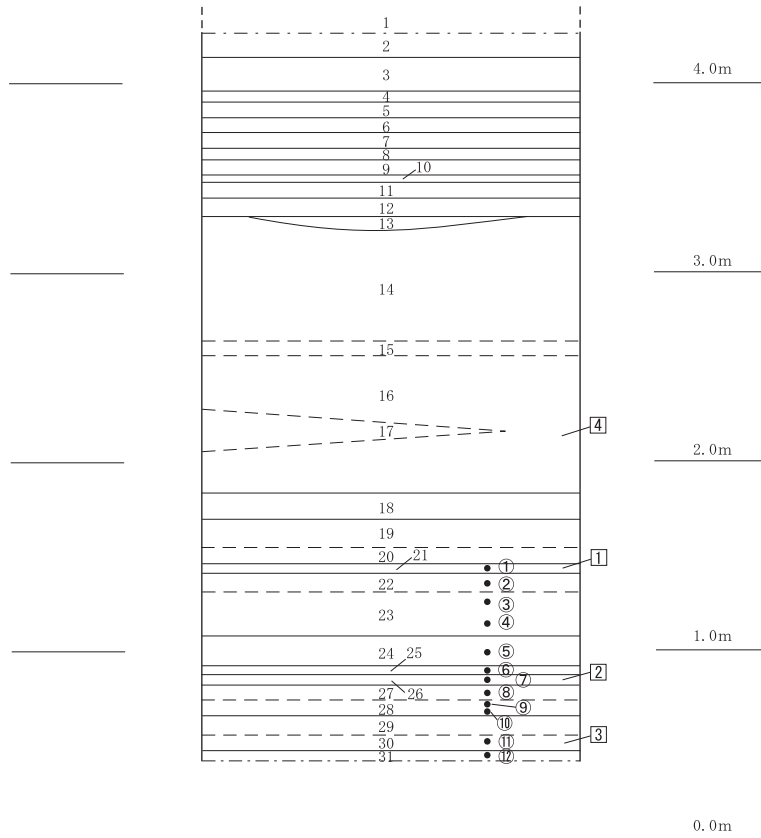
下層部 T.P.2.0m以下は、調査区中央部に設定した東西約2.0m、南北約1.0mのトレンチで確認した層準である。いずれの層からも、遺物は出土していない。

T.P.1.8～1.9mで、厚さ0.1～0.2mのラミナのみられる細砂～粗砂・小礫層（図6 - 18層）を確認した。その下は、厚さ約0.2mの極細砂のラミナを含むシルト層（図6 - 19・20層）である。植物遺体を含む。

T.P.1.4mで、厚さ約0.3mの土壤層（図6 - 22・23層）を確認した。オリーブ黒色シルトで、下部は灰色である。植物遺体を少し含む。直上に厚さ約0.1mの、植物遺体を含む灰色シルト層（図6 - 21層）が堆積している。直下は、厚さ約0.2mの青灰色シルト層（図6 - 24層）である。図6 - 21層内の植物遺体について、放射性炭素年代測定を実施したところ、弥生時代中期という結果が出ている。

T.P.0.9mで、厚さ数cmの土壤層（図6 - 26層）を確認した。暗灰色シルトである。直下も厚さ約0.2mの土壤化している灰色シルト層（図6 - 27・28層）である。直上には、厚さ数cmの灰色シルト層（図6 - 25層）が堆積している。図6 - 26層内の有機物について、放射性炭素年代測定を実施したところ、縄紋時代後期中葉という結果が出ている。

土壤層より下、T.P.0.7m以下は、T.P.0.4mまで層準を確認した。上から順に灰色粗砂（図6 - 29層）、植物遺体を含む灰色シルト（図6 - 30層）、植物遺体を含む粗砂～小礫混じり灰色シルト（図6 - 31層）が堆積している。図6 - 30層内の植物遺体について、放射性炭素年代測定を実施したところ、縄紋時代後期前葉～中葉という結果が出ている。



- | | |
|---|---|
| 1. 青灰 5BG5/1 中砂～粗砂多く含むシルト（小礫を多く含む）〈第1層〉 | 17. 灰白 N8/0 極細砂～細砂（ラミナ有 木片を含む）〈第11層〉 |
| 2. 灰白 7.5Y8/1 中砂～粗砂（緑灰 10GY6/1 シルトを下部にラミナ状に含む）〈第1 b層〉 | 18. 灰白 N7/0 細砂～粗砂・小礫（ラミナ有） |
| 3. 緑灰 10GY6/1 粗砂混シルト（灰 7.5Y5/1 シルトをラミナ状に含む）〈第1 b層〉 | 19. 黄灰 2.5Y5/1 シルト（灰白 5Y7/1 極細砂のラミナを含む 植物遺体を含む） |
| 4. 灰 7.5Y5/1 シルト（浅黄 5Y7/3 中砂をラミナ状に含む）〈第1 b層〉 | 20. 黄灰 2.5Y5/1 シルト（灰白 5Y7/1 極細砂のラミナを少し含む） |
| 5. 灰 5Y5/1 粗砂・小礫混シルト〈第2層〉 | 21. 灰 5Y5/1 シルト（細砂を少し含む 植物遺体を含む） |
| 6. 灰 10Y4/1 粗砂・小礫を多く含むシルト〈第3層〉 | 22. オリーブ黒 5Y3/1 シルト（細砂を少し含む 植物遺体を少し含む） |
| 7. 灰 7.5Y6/1 中砂～粗砂混シルト〈第4層〉 | 23. 灰 5Y4/1 シルト（植物遺体を少し含む） |
| 8. 暗青灰 5BG4/1 粗砂・小礫混シルト〈第5層〉 | 24. 青灰 5BG6/1 シルト |
| 9. 青灰 5BG5/1 細砂混シルト（粗砂を少し含む）〈第6層〉 | 25. 灰 N4/0 シルト |
| 10. 緑灰 7.5GY5/1 粗砂混シルト〈第7層〉 | 26. 暗灰 N3/0 シルト |
| 11. 緑灰 5G5/1 粗砂を少し含むシルト～極細砂〈第8層〉 | 27. 灰 N6/0 シルト |
| 12. 緑灰 5G6/1 シルト～極細砂〈第9層〉 | 28. 灰 N5/0 シルト |
| 13. 青灰 5PB5/1 シルト～極細砂〈第10層〉 | 29. 灰 10Y4/1 粗砂 |
| 14. 緑灰 10G6/1 極細砂～細砂（ラミナ有 上部鉄分の沈着等あり）〈第11層〉 | 30. 灰 5Y4/1 シルト（粗砂・小礫を少し含む 植物遺体を含む） |
| 15. 緑灰 10G6/1 極細砂～細砂（灰 5Y5/1 シルトをラミナ状に含む）〈第11層〉 | 31. 灰 5Y4/1 粗砂～小礫混シルト（植物遺体を含む） |
| 16. 灰 5Y5/1 シルト（緑灰 10G6/1 極細砂をラミナ状に含む 木片を含む）〈第11層〉 | |

①～④ 放射性炭素年代測定試料採取層位

①～⑫ 珪藻分析試料採取層位

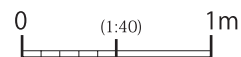


図6 土層断面 模式図

第2節 各遺構面の遺構と遺物

第1項 第1～4面（第1～4層）

現代盛土層直下の第1層は、作土層と思われる。第1b層がラミナのみられる堆積層であるほか、第2～4層も作土層と思われる。

第1～4層から採取した遺物は、土師器、瓦質土器、須恵器、陶器、網目紋染付碗等の小片である。

第2項 第5面（第5層）

第4層を除去して検出した、第5層上面である。遺構は認められなかった。出土遺物が少量で、詳細な時期は不明であるが、第6層出土遺物から中世後期以降の耕作面と考えられる。

第5層出土遺物

土師器、瓦器の小片が各1点出土している。

第3項 第6面（第6層）（図7 図版4）

第5層を除去して検出した、第6層上面である。土坑を1基検出した。出土遺物から、中世後期の耕作面と考えられる。

1 土坑（図7・8）

調査区南西部に位置する。南側の調査区外に続いているため全形は不明であるが、東西約5.5m、南北2.7m以上の方形と想定できる。深さは約0.8mである。下層はシルト、上層は中砂～粗砂のブロックを含むシルトである。

遺物は、土師器、瓦の小片が少量出土している。中世以降のものであるが、詳細な時期は不明である。

第6層出土遺物（図9）

古墳時代の須恵器杯のほか、土師器、回転台土師器皿（1）、瓦器、瓦質土器播鉢・羽釜（2）、備前焼播鉢、瓦、焼土塊の小片が出土している。中世後期のものである。

第4項 第7～9面（第7～9層）

第7～9層はいずれも作土層と思われる。各層上面で精査を行ったが、遺構は認められなかった。出土遺物から、中世後期の耕作面であると考えられる。

第7～9層出土遺物（図9 図版51）

第7層からは、土師器皿、瓦器、陶器、玉縁口縁の白磁碗、布目痕を持つ瓦等の小片が出土している。土師器皿は、14～15世紀のものである。

第8層からは、土師器皿、瓦器等の小片が出土している。土師器皿は、中世後期のものである。

第9層からは、弥生土器、古墳時代の須恵器杯のほか、土師器皿、瓦器碗・皿（3）、須恵器甕等の小片が出土している。瓦器碗は13～14世紀、土師器皿は中世後期以降のものである。

第5項 第10面（第10層）（図10 図版4）

第9層を除去して検出した、第10層上面である。ただし、第10層の遺存していない、調査区西部および東部では、第11層上面である。南北方向の畦畔、溝群等を検出した。

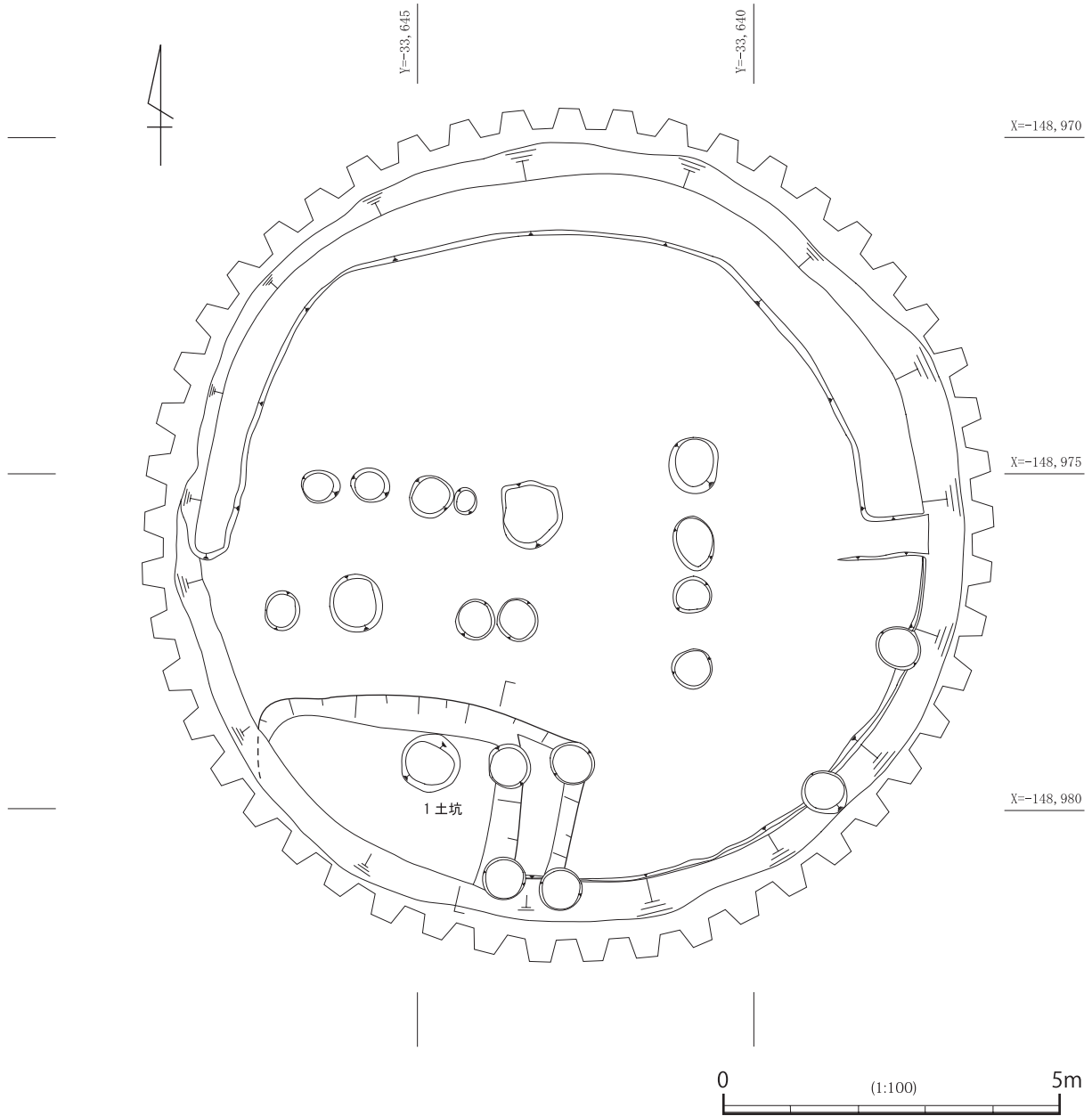


図7 第6面 平面図

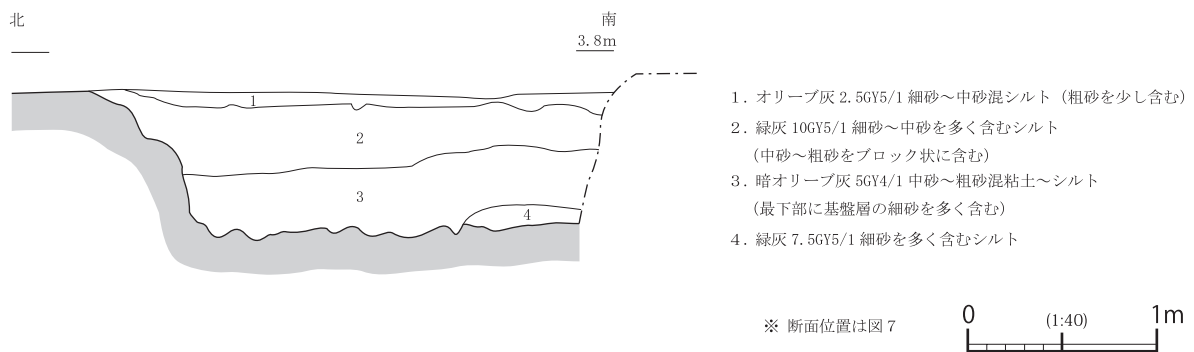


図8 1土坑 断面図

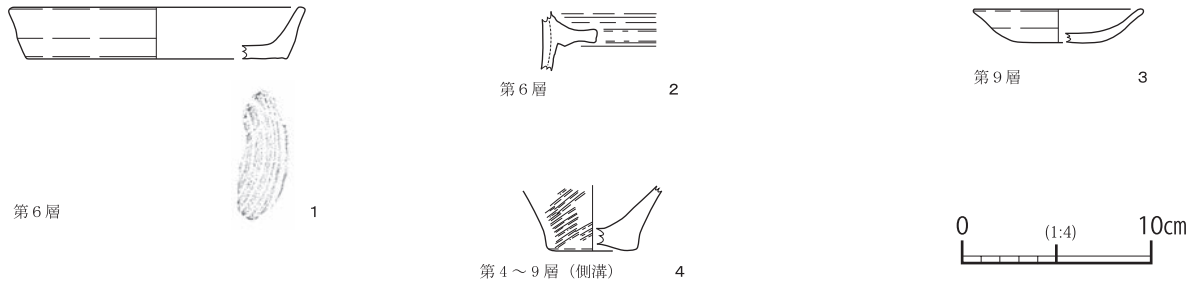


図9 第4～9層 出土遺物

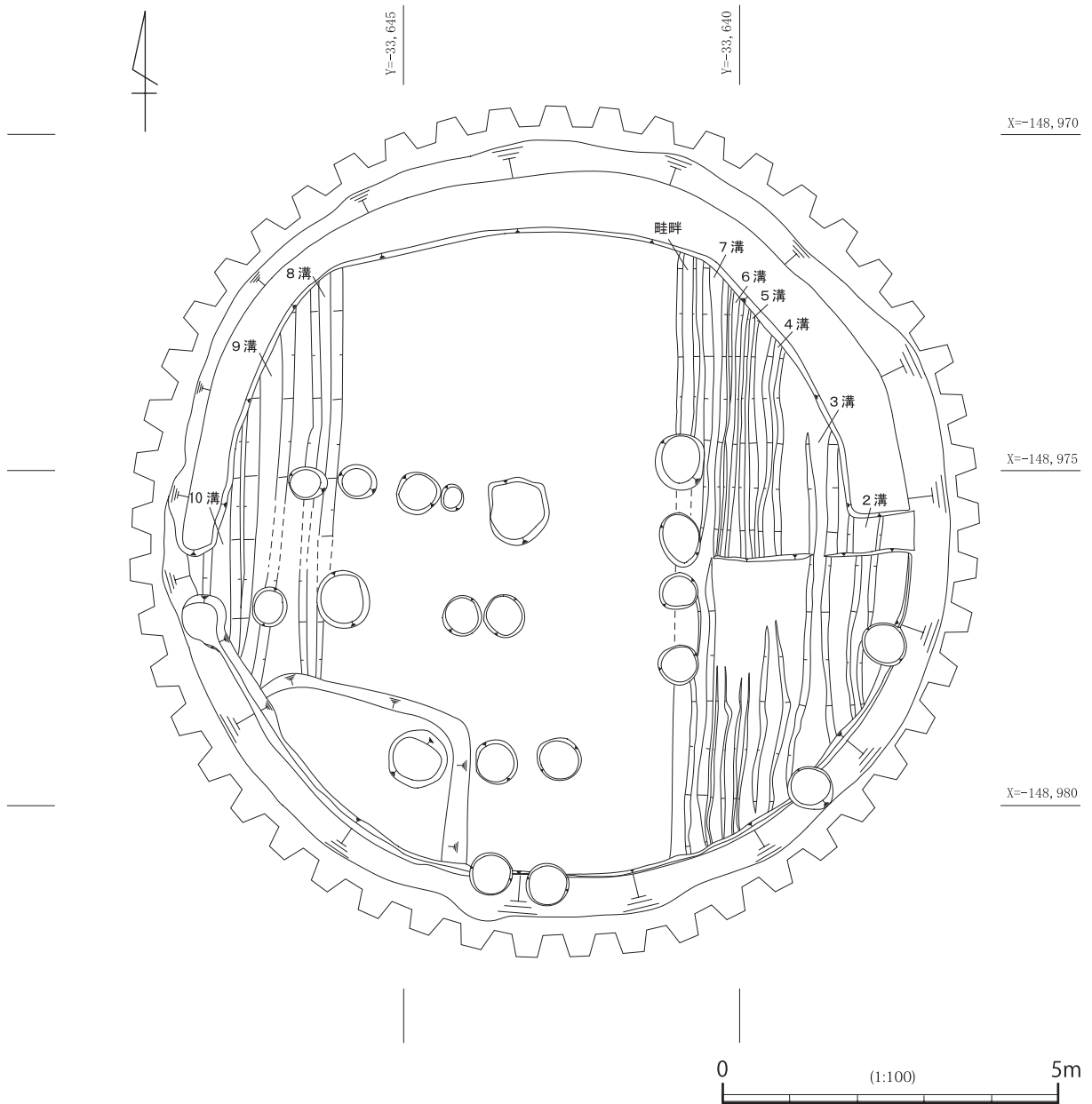


図10 第10面 平面図

畦畔（図10 図版4）

調査区東寄りで検出した。南北方向で、調査区南部では攪乱等の影響で明確に検出し得なかったが、南北ともに調査区外に続くと思われる。検出長約9.4m、高さ4～5cmである。

基盤層である第11層の盛り上がりとして検出している。調査区東部には第10層が遺存しておらず、第9層耕作時（第9面）の畦畔の基部であると考えられる。畦畔上部は、第9面直上の第8層耕作時に削平されたと思われる。この畦畔を境として僅かに東が高く、西が低い。

2～10溝（図10 図版4）

調査区東部と西部の第11層上面で検出した、南北方向の溝群である。南北ともに調査区外に続いており、深さ約0.1mである。埋土は極細砂混じり粘土～シルトで、第9層の耕作に伴うものと思われる。

遺物は、古墳時代の須恵器杯のほか、土師器、瓦器碗の小片が出土している。瓦器碗は、13世紀以降のものである。

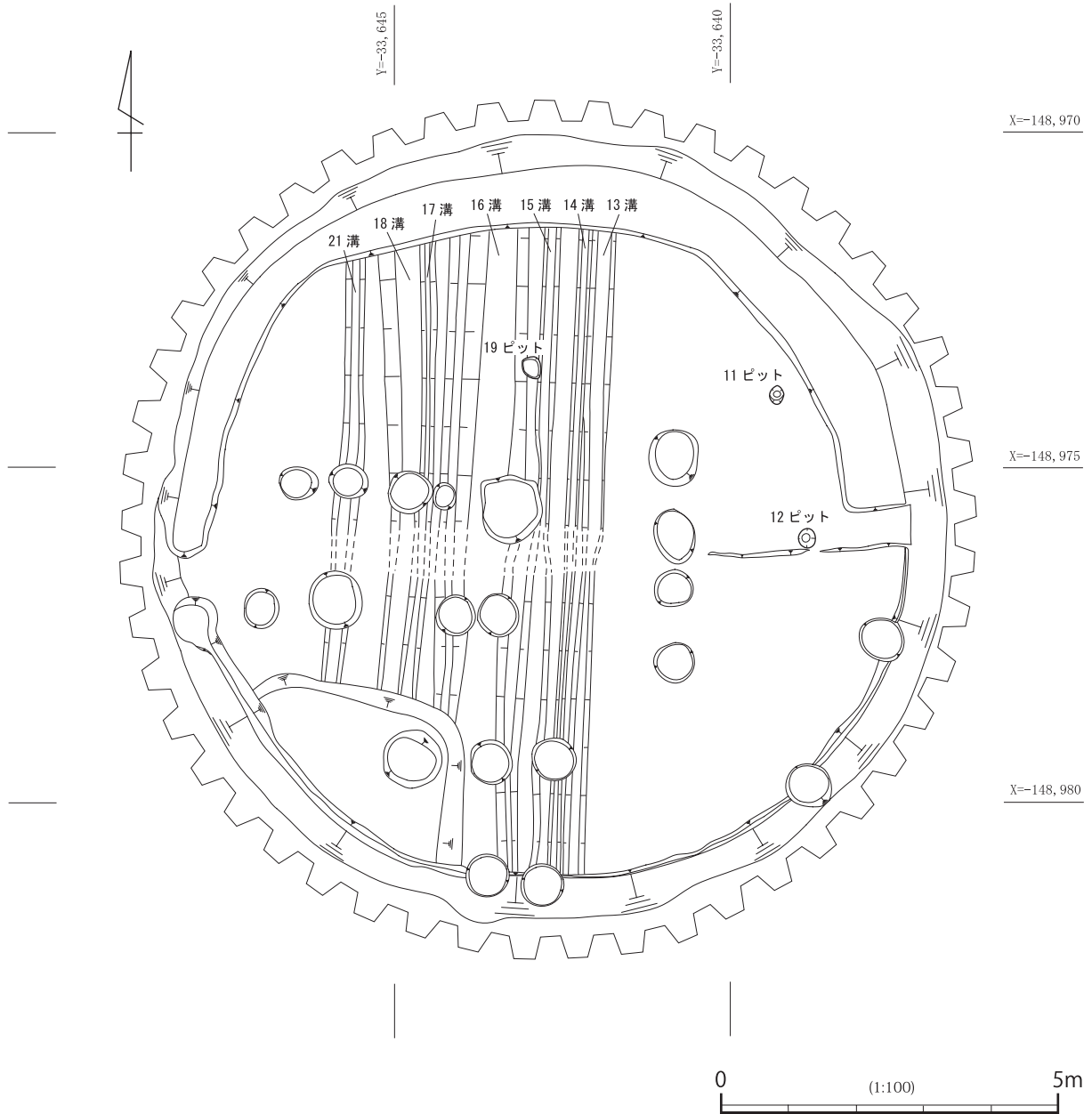


図11 第11面 平面図

第10層出土遺物

土師器、瓦器椀、須恵器等の小片が出土している。瓦器椀は、12～13世紀のものである。

第6項 第11面（図11 図版5）

第10層を除去して検出した、第11層上面である。ただし、東部と西部は、第9層を除去した段階で第11層上面が露出している。溝群とピット3基を検出した。出土遺物が少量、少片であるため、詳細な時期は不明である。

13～18・21溝（図11 図版5）

調査区中央部で検出した、南北方向の溝群である。南北ともに調査区外に続いており、深さは約0.1mである。第10層の耕作に伴うものと思われる。

遺物は、土師器の細片が少量出土している。

11・12・19ピット（図12 図版6）

調査区北東部に位置する。11・12ピットは、第10面溝群の埋土を除去した際に検出しているが、第10層を除去した第11層上面で検出した19ピットと埋土が酷似しており、第11面に帰属する可能性が高い。

径0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mである。11ピットには、木質が遺存していた。遺存状態が不良であるため細部を観察することはできないが、径10cm以下と細く、柱等ではないと考えられる。いずれのピットからも遺物が出土しておらず、時期は不明である。

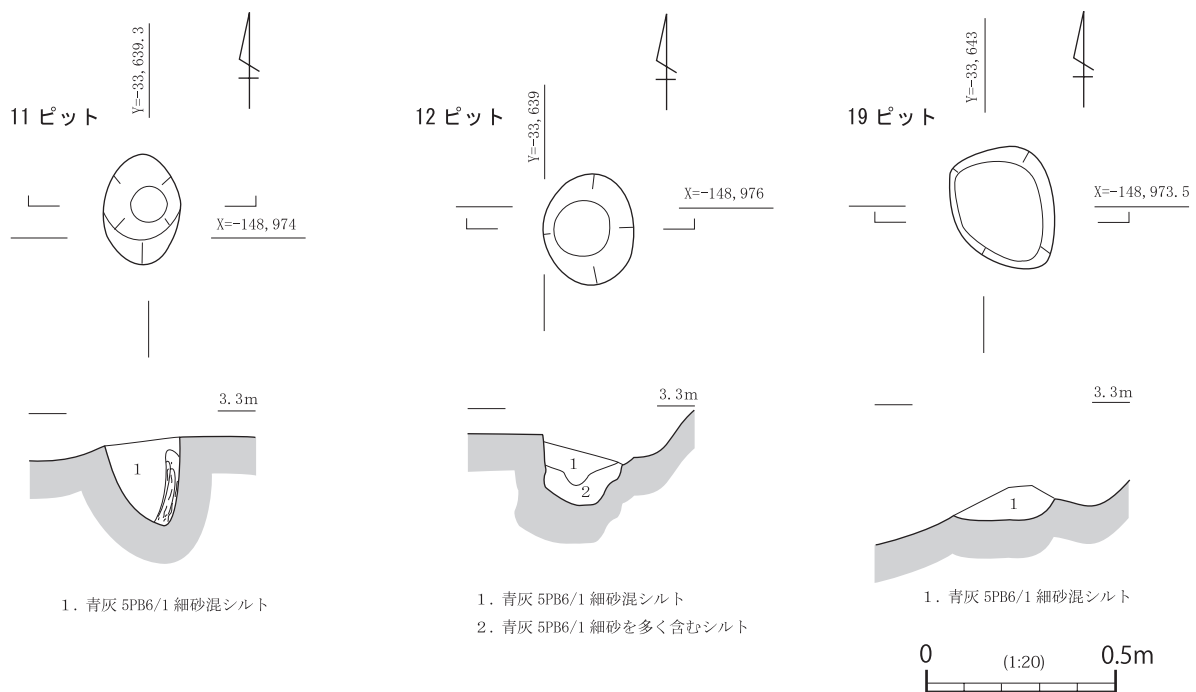


図12 第11面 ピット 平面・断面図

第3節 弥生時代以前の層準に関する分析

北鳥池遺跡は、弥生時代後期～古墳時代の集落遺跡として知られている。しかし、弥生時代中期以前の環境や景観については、明らかになっていない。今回の調査では、縄紋時代後期～弥生時代中期に相当する可能性を持つ層準を確認した。

これらの層準について、年代を推定し、層準に関して得られたデータを、遺跡が形成される過程を復元する手がかりとして有効なものとするため、放射性炭素年代測定を実施した。

また、遺跡が形成される過程を復元する手がかりを得るため、珪藻分析を実施した。

これらのデータは、北鳥池遺跡のみならず、河内平野の成り立ちを考える上で重要である。あわせて、大阪府教育委員会が1996年に実施した調査における堆積層に関するデータも示す。

第1項 放射性炭素年代測定（AMS法）

1. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料採取層準は上位から図6-16層、同21層、同26層、同30層である。16層は砂泥互層である。16層中からは立木が検出された（図版3）。立木は、ヤナギ属で、樹皮が残っており、中心から最外年輪までの年輪数は12であった。立木の最外年輪を採取し試料とした（④：PLD-16552）。21層は灰色シルトで、有機質に富む。灰色シルトから草本を選別し試料とした（①：PLD-16553）。26層は暗灰色シルトで有機質である。暗灰色シルトから植物遺体の選別を試みたが、十分な植物遺体を得られなかったため、土壌中有機物を測定対象とした（②：PLD-16554）。30層は礫混じりの灰色シルトで、有機質に富む。灰色シルトから草本を選別し試料とした（③：PLD-16555）。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

2. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を、図13に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

表1 測定試料および処理

番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-16552	試料No. ④ 層位：16層(第11層) 堆積物の特徴：砂泥互層	試料の種類：生材(ヤナギ属, 12年輪) 試料の性状：最外年輪 状態：wet その他：立木、樹皮付	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-16553	試料No. ① 層位：21層 堆積物の特徴：灰色シルト	試料の種類：生の草本 状態：wet その他：堆積物から選別	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-16554	試料No. ② 層位：26層 堆積物の特徴：暗灰色シルト	試料の種類：有機質の堆積物 状態：wet その他：植物遺体を洗い出したが量不十分のため土壌中有機物を測定対象	湿式篩分 106 μ m 酸洗浄(塩酸:1.2N)
PLD-16555	試料No. ③ 層位：30層 堆積物の特徴：灰色シルト(礫混じり)	試料の種類：生の草本 状態：wet その他：堆積物から選別	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-16552 (試料No. ④)	-27.39 \pm 0.15	2064 \pm 22	2065 \pm 20	146BC (3.1%) 141BC 111BC (65.1%) 43BC	167BC (91.1%) 37BC 30BC (1.9%) 21BC 11BC (2.4%) 2BC
PLD-16553 (試料No. ①)	-28.78 \pm 0.17	2128 \pm 22	2130 \pm 20	200BC (46.0%) 151BC 140BC (22.2%) 112BC	345BC (4.8%) 323BC 206BC (86.8%) 88BC 77BC (3.8%) 57BC
PLD-16554 (試料No. ②)	-18.39 \pm 0.11	3533 \pm 25	3535 \pm 25	1915BC (35.0%) 1876BC 1843BC (19.4%) 1819BC 1798BC (13.8%) 1780BC	1942BC (95.4%) 1771BC
PLD-16555 (試料No. ③)	-24.59 \pm 0.12	3682 \pm 25	3680 \pm 25	2133BC (43.9%) 2082BC 2060BC (24.3%) 2029BC	2187BC (0.3%) 2185BC 2142BC (88.5%) 2010BC 2001BC (6.6%) 1977BC

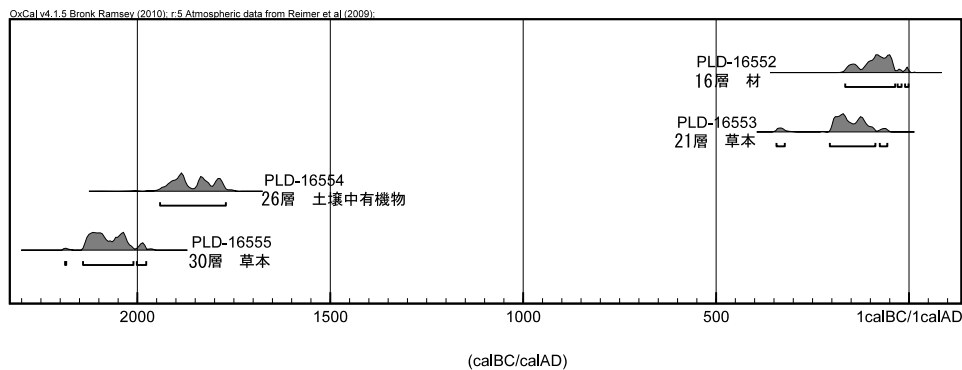


図13 暦年較正結果

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：Intcal09）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

3. 考察

春成（2004）、小林・春成（2006）、小林（2008,2009）を参照し、 2σ 暦年代範囲に着目して結果を整理する。

図6 - 16層の立木（④：PLD-16552）は、167-37 cal BC（91.1%）、30-21 cal BC（1.9%）、11-2 cal BC（2.4%）の範囲を示した。これは弥生時代中期に相当する。

図6 - 21層の草本（①：PLD-16553）は、345-323 cal BC（4.8%）、206-88 cal BC（86.8%）、77-57 cal BC（3.8%）の範囲を示した。これは弥生時代中期に相当する。

図6 - 26層の土壌中有機物（②：PLD-16554）は、1942-1771 cal BC（95.4%）を示した。これは縄紋時代後期中葉に相当する。

図6 - 30層の草本（③：PLD-16555）は、2187-2185 cal BC（0.3%）、2142-2010 cal BC（88.5%）、2001-1977 cal BC（6.6%）の範囲を示した。これは縄紋時代後期前葉～中葉に相当する。

参考文献

- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の14C年代編集委員会編『日本先史時代の14C年代』日本第
四紀学会 3-20.
- 春成秀爾 2004 「近畿・中国の実年代」『弥生時代の実年代』学生社 20-33.
- 小林謙一・春成秀爾 2006 「近畿地方における年代測定の成果」西本豊弘編『新弥生時代のはじまり第1巻 弥生時代の新年
代』雄山閣 96-97.
- 小林謙一 2008 「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学2 - 歴史のものさし -』同成社 257-269.
- 小林謙一 2009 「近畿地方以東の地域への拡散」西本豊弘編『新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代』
雄山閣 55-82.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards,
R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer,
B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J.
and Weyhenmeyer C.E. 2009 IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP.
Radiocarbon, 51 1111-1150.
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates, Radiocarbon, 51(1) 337-360.

第2項 珪藻分析

はじめに

今回の分析調査では、弥生時代以前の北鳥池遺跡の古環境に関する情報を得ることを目的として、調査区で確認された弥生時代以前の堆積層を対象として珪藻分析を実施した。なお、堆積層の形成年代については、第1項の放射性炭素年代測定結果に基づいている。

1. 試料

調査区の堆積層の累重状況を図14に示す。珪藻分析は、調査区中央部の下層トレンチ土層断面で確認された図6 - 21~31層から採取された12点の試料について実施した。なお、この項で使用している層名は、すべて図6中のもので同一である。

2. 分析方法

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後プレウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではないが、全面を走査する）。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer (1992)、Krammer & Lange-Bertalot (1986,1988,1991a,1991b)、渡辺ほか (2005)、小林ほか (2006)、Witkowski et al. (2000)などを参照し、分類基準は、Round, Crawford & Mann (1990)に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢 (2000)に従う。

同定結果は、中心類 (Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae) と羽状類 (Pennatediatoms) に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類 (Araphidpennate diatoms; 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae) と有縦溝羽状珪藻類 (Raphid

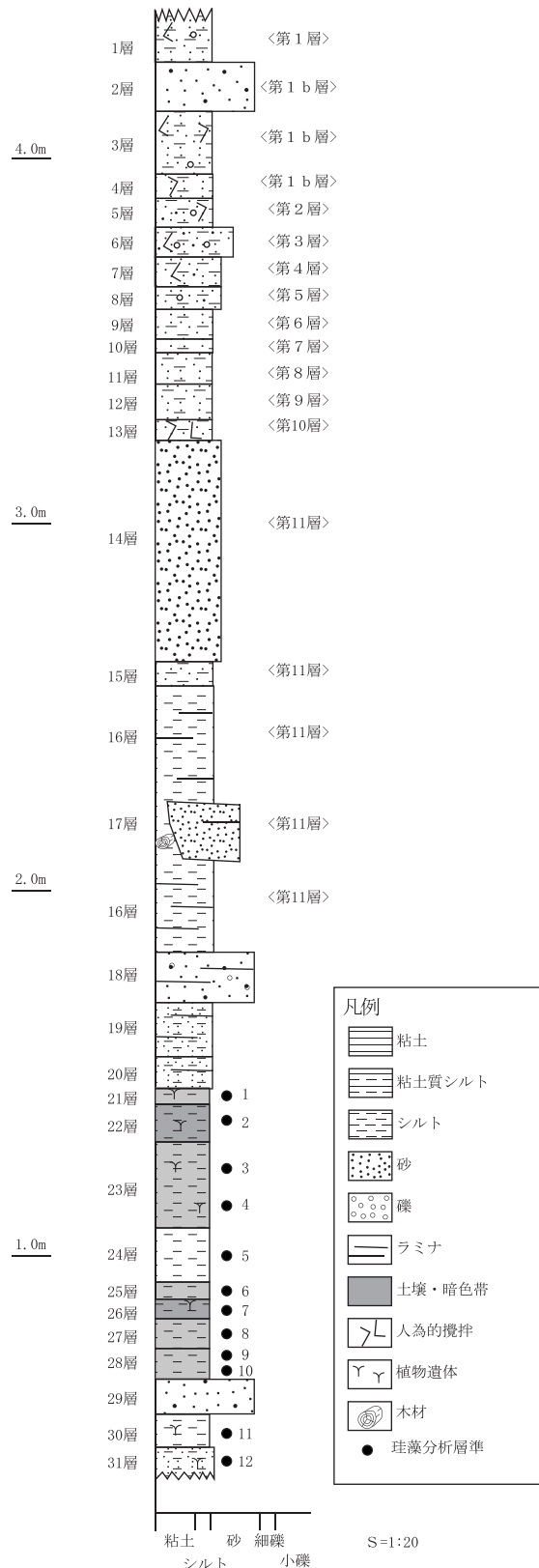


図14 分析地点の層序および試料採取位置

pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae) に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性については、Vos & de Wolf (1993) を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は Lowe (1974) に従い、真塩性種 (海水生種)、中塩性種 (汽水生種)、貧塩性種 (淡水生種) に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の種類について主要珪藻化石群集の層位分布図を作成するほか、淡水生種の生態性についても100個体以上の試料について図示する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、海水生種 (真塩性種) ~ 汽水生種 (中塩性種) については小杉 (1988)、淡水生種 (貧塩性種) については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については渡辺ほか (2005) の環境指標種を参考とする。

3. 結果

結果を表3・4、図15に示す。産出した珪藻化石は41属91分類群である。最上位の21層 (試料1) では豊富に産出し、完形殻の出現率も約70%と化石の保存状態も比較的良い。これに対して、22~31層 (試料2~12) では珪藻化石の含有量が極端に少なく、完形殻の出現率も低い値を示す層準が多い。ただし、これらの珪藻化石の含有量が少ない層準から僅かに産出した種類をみると、30層と28層の間の層

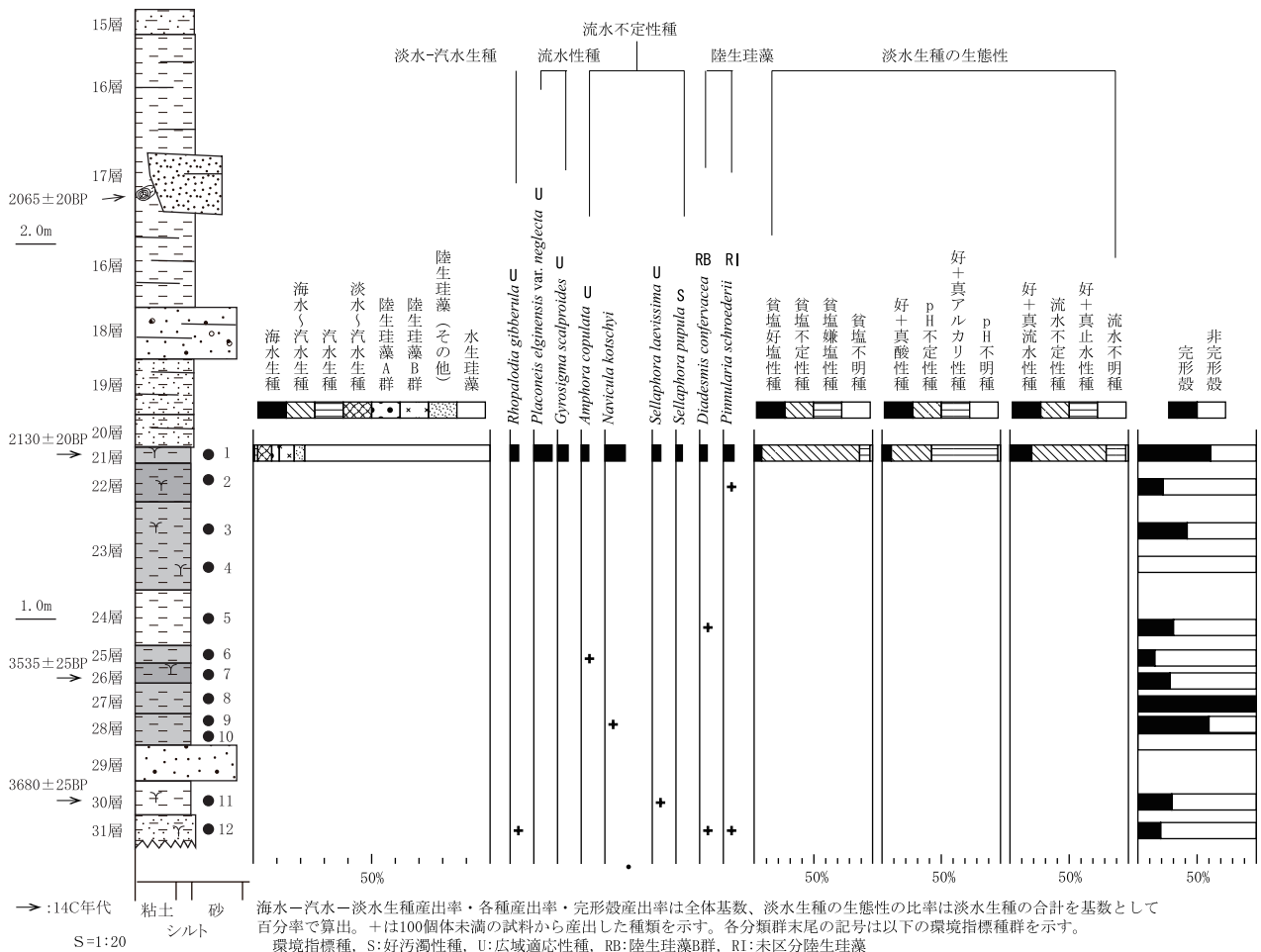


図15 主要珪藻化石群集の層位分布

表3 珪藻分析結果(1)

種類	生態性			環境 指標種	上段:層名 下段:試料番号											
	塩分	pH	流水		21層	22層	23層		24層	25層	26層	27層	28層		30層	31層
					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Bacillariophyta(珪藻植物門)																
Centric Diatoms(中心型珪藻類)																
<i>Aulacoseira crenulata</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Aulacoseira granulata</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
<i>Coscinodiscus</i> spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cyclotella striata</i> - <i>C. stolorum</i>	Euh-Meh			B	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Thalassiosira</i> spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
Raphid Pennate Diatoms(有縦溝羽状珪藻類)																
Monoraphid Pennate Diatoms(単縦溝羽状珪藻類)																
<i>Fragilariforma bicapitata</i> (A.Mayer)Williams & Round	Ogh-hob	ind	l-bi	P	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Meridion constrictum</i> Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pseudostaurosira brevistriata</i> (Grun.)Williams & Round	Ogh-hil	al-il	l-ph	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Staurosira construens</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Staurosirella pinnata</i> (Ehr.)Williams & Round	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ulnaria ulna</i> (Nitzsch)Compere	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ulnaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Grammatophora macilenta</i> W.Smith	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
<i>Grammatophora</i> spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
Raphid Pennate Diatoms(有縦溝羽状珪藻類)																
Monoraphid Pennate Diatoms(単縦溝羽状珪藻類)																
<i>Achnanthes brevipes</i> var. <i>intermedia</i> (Kuetz.)Cleve	Meh			D1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Planothidium lanceolatum</i> (Breb. ex Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Biraphid Pennate Diatoms(双縦溝羽状珪藻類)																
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	7	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Anomooneis sphaerophora</i> (Kuetz.)Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind		1	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella cuspidata</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Placoneis elginensis</i> (Greg.)E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Placoneis elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema sarcophagus</i> Gregory	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis parva</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	1	4
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula cryptotenella</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula elginensis</i> var. <i>cuneata</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula kotschyi</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		19	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Navicula placenta</i> fo. <i>obtus</i> Meister	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula rostellata</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Plagiotropis lepidoptera</i> var. <i>proboscidea</i> (Cleve)Reim.	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma scalproides</i> (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Craticula accommoda</i> (Hust.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Craticula ambigua</i> (Ehr.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Craticula perrotettii</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis acuta</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> fo. <i>hattorii</i> Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i> var. <i>capitata</i> Krasske	Ogh-ind	al-il	ind		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cosmioneis pusilla</i> (W.Smith)Mann & Stickler	Ogh-Meh	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Diadsmis biceps</i> Arnott ex Grunow in Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diadsmis confervacea</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	7	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
<i>Diadsmis contenta</i> (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Luticola goeppertiana</i> (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-hil	al-il	ind	S	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	1	2	2	-	1	-	-	1	-	-	-	-
<i>Neidium dubium</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium productum</i> (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	ind	ind		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表4 珪藻分析結果(2)

種類	生態性			環境指標種	上段:層名 下段:試料番号											
	塩分	pH	流水		21層	22層	23層		24層	25層	26層	27層	28層		30層	31層
					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
<i>Caloneis truncatula</i> (Grunow)	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia anglica</i> Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind	T	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia divergens</i> W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>dissimilis</i> H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> cf. <i>hemiptera</i> (Kuetz.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-ph		3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia neomajor</i> Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia schoenfelderii</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia schroederii</i> (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	10	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia ueno</i> Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	3	-	1	1	6	3	-	-	3	1	4
<i>Sellaphora americana</i> (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Sellaphora bacillum</i> (Ehr.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sellaphora laevissima</i> (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sellaphora pupula</i> var. <i>subcapitata</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	S	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
管縦溝類																
<i>Bacillaria paxillifer</i> (O.F.Mull.)Hendey	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	3	3	3	1	2	3	3	-	1	1	-	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia linearis</i> (W.Smith)W.Smith	Ogh-ind	al-bi	r-bi	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	1	-	1	-	-	1	-	-	-
<i>Tryblionella levidensis</i> W.Smith	Meh			S	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Tryblionella salinarum</i> (Grunow)Pelletan	Meh			U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Tryblionella victoriae</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	U	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia quisumbirgiana</i> Skvortzow	Ogh-hil	al-il	r-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Rhopalodia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
翼管縦溝類																
<i>Campylodiscus</i> spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Surirella robusta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ind	l-bi		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
短縦溝類																
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> (Ehren.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	1	4	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	4
海水～汽水生種					1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
汽水生種					3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
淡水～汽水生種					13	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	5
淡水生種					205	25	10	3	10	14	11	1	5	4	7	17
珪藻化石総数					222	28	12	3	10	14	11	1	5	4	14	26

凡例

H. R. : 塩分濃度に対する適応性

pH : 水素イオン濃度に対する適応性

C. R. : 流水に対する適応性

- Euh : 海水生種
- Euh-Meh : 海水生種～汽水生種
- Meh : 汽水生種
- Ogh-Meh : 淡水～汽水生種
- Ogh-hil : 貧塩好塩性種
- Ogh-ind : 貧塩不定性種
- Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk : 貧塩不明種

- al-bi : 真アルカリ性種
- al-il : 好アルカリ性種
- ind : pH不定性種
- ac-il : 好酸性種
- ac-bi : 真酸性種
- unk : pH不明種

- l-bi : 真止水性種
- l-ph : 好止水性種
- ind : 流水不定性種
- r-ph : 好流水性種
- r-bi : 真流水性種
- unk : 流水不明種

環境指標種

- B:内湾指標種, D1:海水砂質干潟指標種 (以上は小杉, 1988)
- K:中～下流性河川指標種, M:湖沼浮遊性種, O:沼沢湿地付着生種, P:高層湿原指標種 (以上は安藤, 1990)
- S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種 (以上はAsai and Watanabe, 1995)
- R:陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

準を境として変化していることが確認される。以下に珪藻化石群集の特徴について記載する。

21層（試料1）は、産出種を塩分濃度に対するカテゴリーで類別すると、淡水域に生育する淡水生種（以下、水生珪藻と言う）が全体の約80%を占め優占する。これに付随して、陸上のコケや土壤表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻、淡水生～汽水生種が低率ながら産出する。淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性）の特徴は、貧塩不定性種、好+真アルカリ性種、流水不定性種が優占あるいは多産する。主要種は、流水域を好んで生息する好流水性種の*Placoneis elginensis* var. *neglecta*、流水にも止水にも普通に生息する流水不定性種の*Navicula kotschyi*がそれぞれ約10%産出する。また、これに次いで好流水性の*Gyrosigma scalproides*、流水不定性の*Amphora copulata*、*Sellaphora laevis*、*Sellaphora pupula*、陸域にも水域にも生息する陸生珪藻B群の*Diademsis confervacea*、未区分陸生珪藻の*Pinnularia schroederii*などが産出する。これらの種類の汚濁に対する適応性は、*Sellaphora pupula*、*Diademsis confervacea*が有機汚濁の進んだ腐水域に生息する好汚濁性種であるほかは、広域適応性種とされるものが大部分である。なお、産出数量の関係でグラフでは表示されなかったが、中～下流性河川指標種の*Navicula rostellata*、*Meridion constrictum*、沼沢湿地付着生種の*Placoneis elginensis*、*Stauroneis phoenicenteron*、*Pinnularia nodosa*、*Eunotia minor*などの環境指標種群も産出する。

22～28層（試料2～10）は珪藻化石の含有量が少ないが、僅かに産出する珪藻化石は試料1で認められたような水生珪藻と陸生珪藻からなることが特徴である。

30～31層（試料11・12）は、22～28層と同様に珪藻化石の含有量が少ないが、僅かに産出する主群の構成は異なり、*Coscinodiscus* spp.、*Cyclotella* spp.、*Thalassiosira* spp.、*Grammatophora* spp.などの海水生種の破片が比較的多く認められる。

4. 考察

今回の調査区の最下位の31・30層は、珪藻化石の含有量が少なく、化石の保存状態も悪かった。僅かに産出した珪藻化石は海水生種の破片が主体をなし、下記する28層より上位層準とは明らかに異なる群集組成を示した。海水生種は保存状態が悪く種まで特定できなかったため、詳細な堆積環境の検討はできないものの、31・30層が海水の影響を受ける堆積環境下で形成されたことが示唆される。形成年代は30層の放射性炭素年代測定から、縄紋時代後期前葉～中葉と推定される。

28～25層でも珪藻化石数が少なかったが、僅かに産出した種群は水生珪藻と陸生珪藻の種群からなり、海水生種は産出しなくなる。このことから、28～25層形成期には調査地点の堆積環境が大きく変化していたことが推定される。僅かに産出した種群の生態性をみると、好気的な乾燥に耐えうる陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*が連続して産出すること、28～25層の層相が調査地点における土壤生成を示唆する腐植の集積するシルトからなることから、当時の調査地点が土壤生成の進行する時期を挟在する氾濫原の堆積環境に変化していたことが推定される。放射性炭素年代測定結果から縄紋時代後期中葉に変化していることが推定される。

ところで、珪藻化石を構成するシリカは、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている（千木良,1995）。また、珪藻殻と類似した化学組成を持つ植物珪酸体は、土壤の風化によって溶解する可能性が指摘されているほか（近藤,1988）、pH値が高い場所や乾湿を繰り返すような場所では、風化が進みやすいと考えられている（江

口,1994,1996)。その他、湿原の乾燥化によって珪藻殻数が急減し保存が悪くなる現象もみられる（小杉,1987)。今回の28~25層で珪藻化石の産出が不良であった原因として、これらの要因が指摘される。

24~22層も珪藻化石の含有量が少なく、化石の産出が不良であり、陸生珪藻A群のHantzschia amphioxysが連続的に産出するなど、上記の28~25層と同様の産状を示した。また、層相も23・22層については土壤生成の進行を示唆する腐植質シルトからなる。これらのことから、23・22層も乾湿を繰り返すような氾濫原の堆積環境で形成され、特に23・22層形成期には土壤生成が進行する状況にあったことが推定される。放射性炭素年代測定結果を踏まえると、23・22層は長期にわたって形成された土壤の可能性はある。

22層を覆う弥生時代中期に形成された21層もやや腐植に富むシルトからなるが、珪藻化石の産状は下記層準と大きく異なり、水生珪藻が多産するようになる。群集組成をみると、Navicula kotschyi等の流水不定性種を主として、Placoneis elginensis var. neglecta等の好流水性種、低率ながら流水指標種や沼沢湿地付着生種も伴う組成を示した。したがって、21層形成期には、調査地点は流水の影響を受ける沼沢湿地のような堆積環境に変化したことが推定される。

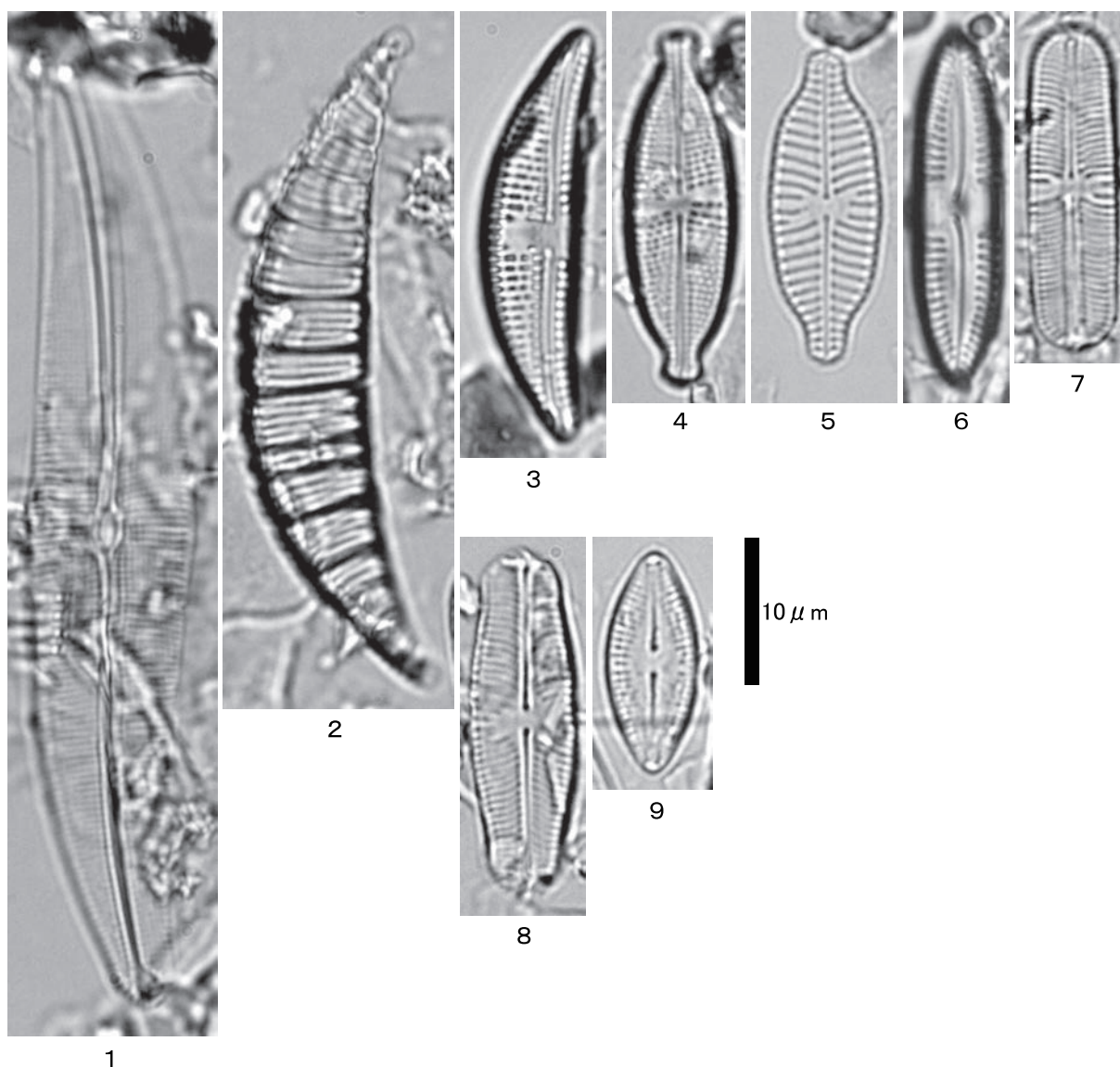
以上、弥生時代中期以前に形成された21~31層形成期における調査区の堆積環境は、30層と28層の間の層準で変化していることが確認された。すなわち、31・30層形成期では海水の影響を受けていたが、28層より上位の堆積層形成期には陸水の影響を受ける堆積場に変化していたことが推定される。この変化は、放射性炭素年代値から縄紋時代後期中葉に起こっていることが推定される。その後は、比較的安定した堆積場であり、土壤生成が進行する堆積環境が弥生時代中期頃まで継続していたことが推定される。

本遺跡の南西方向の沖積低地に位置する池島・福万寺遺跡では、弥生時代前期以前の堆積環境の変化が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,2007)。それによると、池島・福万寺遺跡では、縄紋時代中期のある段階から、干潟潮上帯塩性湿地から感潮域の湿地や湖沼が存在する陸上デルタの下部デルタプレインの堆積環境に変化し、縄紋時代後期前葉~中葉（第15 a 層形成期）に多湿や過湿の土壤が形成される、上部デルタプレインの堆積環境、縄紋時代後期前葉~中葉（第15 - 1 層形成期）に河川氾濫の影響を受ける頻度の高い後背湿地の堆積環境、縄紋時代後期（第14 b 層形成期）に氾濫原および流路の堆積環境、縄紋時代晩期~弥生時代前期（第14 - 2 a 層）に土壤生成が進行する好気的な堆積環境、弥生時代前期（第14 - 1 層）に河川氾濫の影響を受ける頻度の高い湿地や沼沢地の環境、と変化したことが確認されている。また、この堆積環境の変化は、海岸線の前進に伴うデルタ形成（堀・斉藤,2003）に伴う陸化過程を反映していることも指摘されている。今回の調査区で捉えられた陸化の時期は、池島・福万寺遺跡で捉えられている陸化の時期とおおむね一致していることがうかがえる。

引用文献

- Hustedt, F. 1937-1939 Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Archiv für Hydrobiologie, Supplement, 15:131-177,15:187-295,15:393-506,15:638-790,16:1-155,16:274-394.
- Lowe, R.L. 1974 Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986 Bacillariophyceae. I. Teil: Naviculaceae. In: Süßwasserflora von Mitteleuropa. Band 2/1. Gustav Fischer Verlag, 876.

- 小杉正人 1987 「北江古田遺跡の珪藻化石群集と古環境」『北江古田遺跡発掘調査報告書』(2) 中野区北江古田遺跡調査会 419-433.
- 近藤錬三 1988 「植物珪酸体 (Opal Phytolith) からみた土壌と年代」ペトロジスト32 189-202.
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」第四紀研究27 1-20.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988 Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/2. Gustav Fischer Verlag 536.
- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」東北地理42 73-88.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990 The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747. Cambridge University Press, Cambridge.
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」珪藻学会誌6 23-45.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b Bacillariophyceae.4.Teil: Achnantheaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248.
- Krammer, K. 1992 PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J. CRAMER, 353.
- Vos, P. C. & H. de Wolf 1993 Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands: methodological aspects. Hydrobiologica, 269/270 285-296.
- 江口誠一 1994 「沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例として」植生誌研究2 19-27.
- Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47.
- 千木良雅弘 1995 『風化と崩壊』 近未来社 204.
- 江口誠一 1996 「沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値」ペトロジスト40 81-84.
- 原口和夫・三友清史・小林 弘 1998 「埼玉の藻類 珪藻類」『埼玉県植物誌』 埼玉県教育委員会 527-600.
- Witkowski, A., & Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D. 2000 Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast I. A.R.G. Gantner Verlag K.G., 881.
- 柳沢幸夫 2000 「II - 1 - 3 - 2 - (5) 計数・同定」『化石の研究法 - 採集から最新の解析法まで -』 化石研究会 共立出版 49-50.
- Lange-Bertalot, H. 2001 Navicula sensu stricto 10 genera separated from Navicula sensu lato, Frustulia. 526. In: Lange-Bertalot, H. (ed.) Diatoms of Europe: Diatoms of the European Inland Waters and Comparable Habitats 2. A.R.G. Gantner Verlag K.G., Ruggell.
- 田中正昭 2002 『日本淡水産動・植物プランクトン図鑑』 584.
- 堀 和明・斉藤文紀 2003 「大河川デルタの地形と堆積物」地学雑誌112,3 337-359.
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子 2005 『淡水珪藻生態図鑑』 内田老鶴圃 666.
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五 2006 『小林弘珪藻図鑑』第1巻 内田老鶴圃 531.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2007 「第4節 池島・福万寺遺跡の古環境変遷2」『池島・福万寺遺跡』3 財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第158集 財団法人大阪府文化財センター 397-473.



- 1 . *Gyrosigma scalproides* (Rabh.)Cleve(21層;試料番号1)
- 2 . *Rhopalodia gibberula* (Ehr.)O.Muller(21層;試料番号1)
- 3 . *Amphora copulata* (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald(21層;試料番号1)
- 4 . *Navicula kotschy* Grunow(21層;試料番号1)
- 5 . *Placoneis elginensis* var. *neglecta* (Krasske)H.Kobayasi(21層;試料番号1)
- 6 . *Pinnularia schroederii* (Hust.)Krammer(21層;試料番号1)
- 7 . *Sellaphora laevissima* (Kuetz.)Mann (21層;試料番号1)
- 8 . *Sellaphora pupula* (Kuetz.)Mereschkowsky (21層;試料番号1)
- 9 . *Diadesmis confervacea* Kuetzing(21層;試料番号1)

写真1 珪藻化石

第3項 北鳥池遺跡・大阪府教育委員会96年度調査地点でみられた堆積層について

大阪府教育委員会による北鳥池遺跡96年度調査地点（以下、大阪府教委96年度調査地点）は、本調査地東150mの枚岡ポンプ場東端で、近隣は生駒山を流下する長門川とその分流が形成した扇状地扇端～扇状地間低地に位置する（図16）。大阪府教委96年度調査地点で標高3.0～-1.7m付近の地層を連続的に観察する機会を得た。本報告に併せて同地点の地層の記載と観察結果（図17）、年代測定結果を簡潔に報告する。なお、年代測定供試料は堆積物中に含まれる有機物や植物遺体細片で、測定は米国Beta Analytic社でAMS放射性炭素年代測定を行い、校正プログラムCalib6.0を使用して校正年代を求めた（図18）。

大阪府教委96年度調査地点では標高1.0mより下位に海成の堆積層、上位に陸成の堆積層がみられた。標高-1.7～-0.3mは貝の生痕が顕著で砂と泥の葉層が互層する。このうち、標高-1.1～-1.5m付近では直立合殻のハマグリ、ウミナヤや貝化石の破片が多産することから干潟潮間帯下部～同潮下帯の堆積相を示す。また、その上下は干潟潮間帯の堆積相を示し、当時の海面を支持する。標高-1.4mで6856-7255calBP, 99% (Beta145169) の年代値が得られたことから、およそ7100年前まで標高-1.4m付近で停滞していた海面が上昇し、干潟潮間帯から干潟潮下帯へ堆積環境が変化したと推測される。

標高-0.3～0.4mのうち最下部は水平層理をなし、粗粒砂～礫混じりの細粒砂～中粒砂からなる。下部には偽礫が多数みられ、下位の干潟の堆積層を侵食している。その上位を砂と泥の葉層が互層する干潟の堆積層、トラフ型斜交層理をなす細粒砂～中粒砂層、泥炭質層、植物遺体細片や材化石を多数含む砂混じりシルト層が順に累重する。標高-0.3m、0.1m、および上位層の0.4m付近で、それぞれ6311-6562calBP, 100% (Beta146757)、5716-5954calBP, 96%, (Beta145167)、5598-5762calBP, 84% (Beta145166) の年代値が得られた。以上より、およそ6400年前に干潟に潮汐流路が形成され、上流域

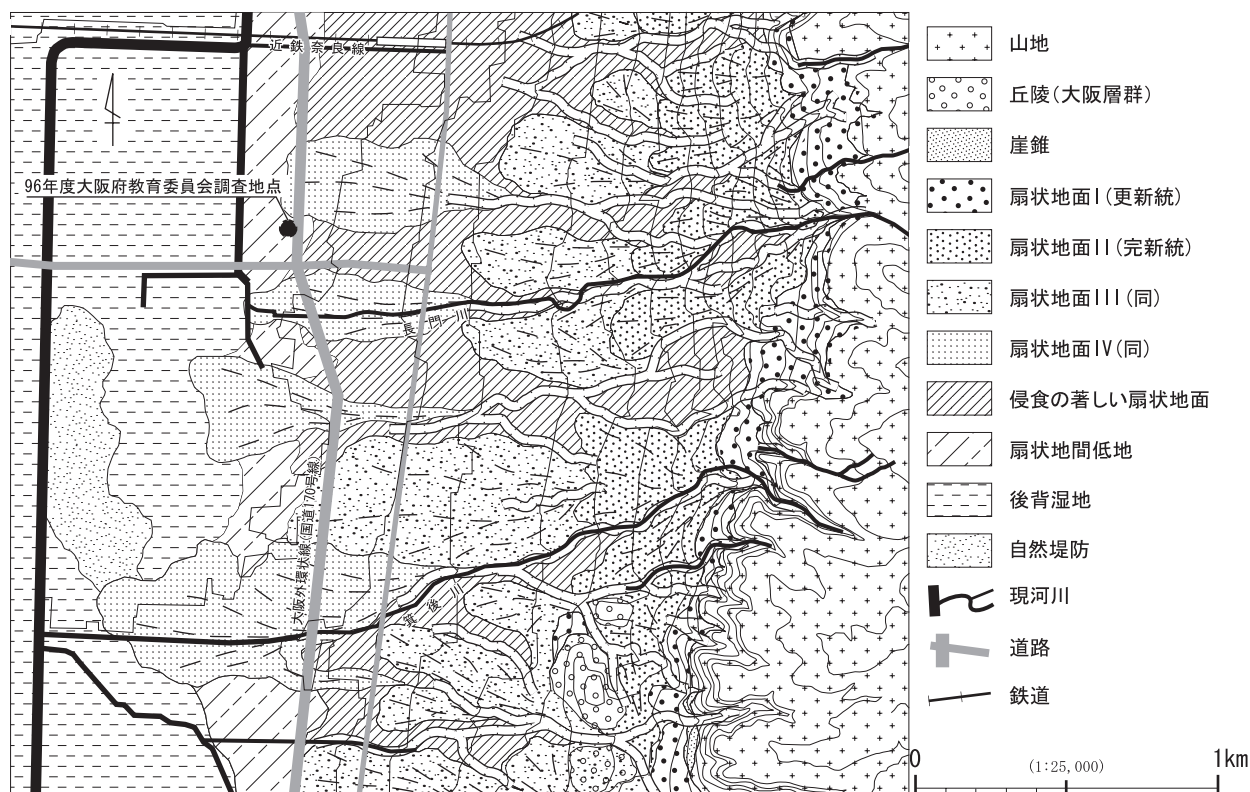


図16 北鳥池遺跡周辺の地形分類

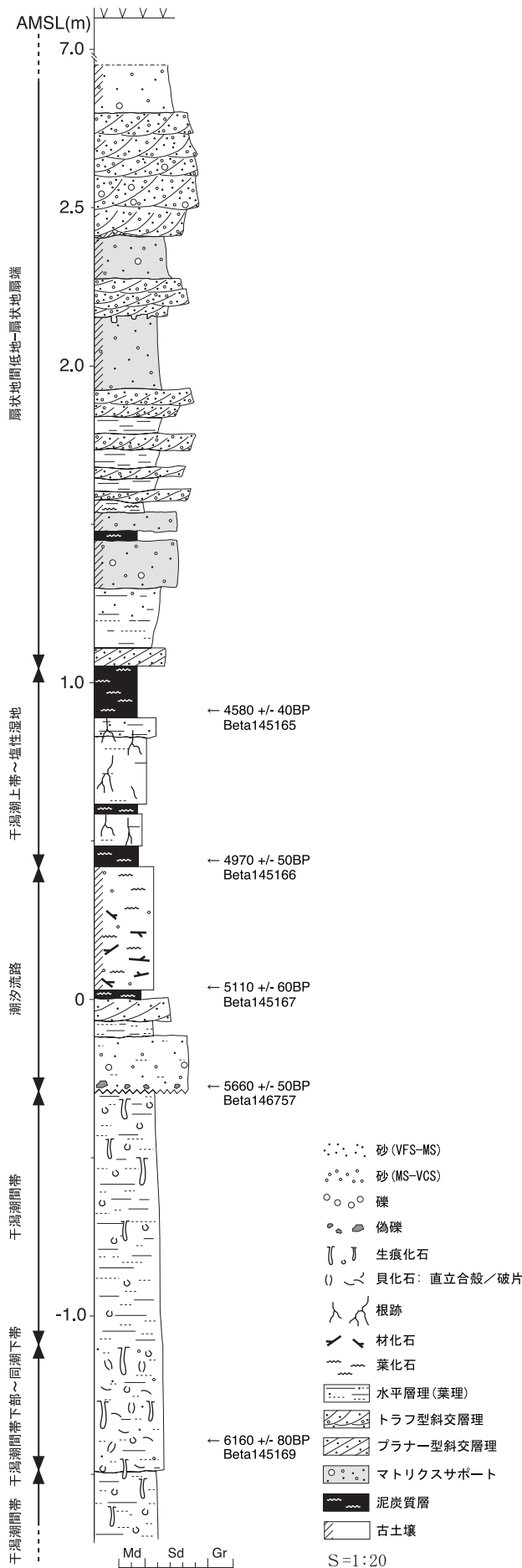


図17 大阪府教育委員会96年度調査地点の堆積柱状図

からの土砂供給や流路内での干潟形成があった。しかし、およそ5800年前を境に土砂供給が急減するとともに流路内はやや静穏で好気的な環境に変化し、およそ5700年前にかけて有機物に富む泥質堆積物で充填されたと推測される。

標高0.4~1.1mは下位より泥炭質層、細粒砂の葉理を挟みヨシの根跡が顕著な粘土質シルト層のセットが繰り返り累重し、その上位は水平層理をなす細粒砂~シルト層、泥炭質層が累重する。標高0.9m付近で5054-5189calBP, 39% / 5259-5328calBP, 39% (Beta145165) の年代値が得られた。干潟の潮間帯堆積層の上位に載ることから、およそ5300~5100年前にかけて干潟の潮上帯からその背後の塩性湿地の堆積環境が推測される。本層に対比される地層は河内平野一帯で広く見られる。

標高1.1~2.9mは下位より、プラナー型斜交層理をなす細粒砂~中粒砂、水平葉理をなす細粒砂~シルト、マトリクスサポートをなす砂礫混じり泥と有機物混じり粘土質シルトのセットの繰り返し、トラフ型斜交層理をなす細粒砂~粗粒砂と水平層理をなす極細粒砂~細粒砂のセットの繰り返し、およびトラフ型斜交層理をなす中粒砂~粗粒砂とマトリクスサポートをなす砂礫混じり泥の繰り返しからなる。やや静穏な水域で間欠的に土砂が流入する扇状地間低地から、頻繁に土砂が供給されてローブ状の堆積地形が形成され(扇状地扇端)、周辺が陸化したことがうかがえる。(別所秀高)

CALIB RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM*
 Copyright 1986-2009 M Stuiver and PJ Reimer

*To be used in conjunction with:
 Stuiver, M., and Reimer, P.J., 1993, Radiocarbon, 35, 215-230.

Beta145165
 soil
 Radiocarbon Age 4580+/-40
 Calibration data set: intcal09.14c
 # Reimer et al. 2009
 10 Year moving average
 One Sigma Ranges: [start:end] relative area
 [cal BP 5079: cal BP 5104] 0.153953
 [cal BP 5136: cal BP 5162] 0.178936
 [cal BP 5281: cal BP 5323] 0.492836
 [cal BP 5418: cal BP 5441] 0.174275
 Two Sigma Ranges: [start:end] relative area
 [cal BP 5054: cal BP 5189] 0.387667
 [cal BP 5214: cal BP 5226] 0.011982
 [cal BP 5233: cal BP 5247] 0.012998
 [cal BP 5259: cal BP 5328] 0.394094
 [cal BP 5382: cal BP 5448] 0.19326

Beta145166
 soil
 Radiocarbon Age 4970+/-50
 Calibration data set: intcal09.14c
 # Reimer et al. 2009
 10 Year moving average
 One Sigma Ranges: [start:end] relative area
 [cal BP 5615: cal BP 5629] 0.07953
 [cal BP 5642: cal BP 5745] 0.92047
 Two Sigma Ranges: [start:end] relative area
 [cal BP 5598: cal BP 5762] 0.8361
 [cal BP 5810: cal BP 5888] 0.1639

Beta145167
 soil
 Radiocarbon Age 5110+/-60
 Calibration data set: intcal09.14c
 # Reimer et al. 2009
 10 Year moving average

One Sigma Ranges: [start:end] relative area
 [cal BP 5752: cal BP 5827] 0.572328
 [cal BP 5861: cal BP 5920] 0.427672
 Two Sigma Ranges: [start:end] relative area
 [cal BP 5716: cal BP 5954] 0.952735
 [cal BP 5959: cal BP 5990] 0.039265

Beta146757
 soil
 Radiocarbon Age 5660+/-50
 Calibration data set: intcal09.14c
 # Reimer et al. 2009
 10 Year moving average
 One Sigma Ranges: [start:end] relative area
 [cal BP 6354: cal BP 6364] 0.047199
 [cal BP 6397: cal BP 6497] 0.952801
 Two Sigma Ranges: [start:end] relative area
 [cal BP 6311: cal BP 6562] 1.

Beta145169
 soil
 Radiocarbon Age 6160+/-80
 Calibration data set: intcal09.14c
 # Reimer et al. 2009
 10 Year moving average
 One Sigma Ranges: [start:end] relative area
 [cal BP 6955: cal BP 7163] 1.
 Two Sigma Ranges: [start:end] relative area
 [cal BP 6806: cal BP 6810] 0.002683
 [cal BP 6856: cal BP 7255] 0.997317

Ranges marked with a * are suspect due to impingement on the end of the calibration data set

PJ Reimer, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, PG Blackwell, # C Bronk Ramsey, CE Buck, GS Burr, RL Edwards, M Friedrich, PM Grootes, # TP Guilderson, I Hajdas, TJ Heaton, AG Hogg, KA Hughen, KF Kaiser, B Kromer, # FG McCormac, SW Manning, RW Reimer, DA Richards, JR Southon, S Talamo, # CSM Turney, J van der Plicht, CE Weyhenmeyer (2009) Radiocarbon 51:1111-1150.

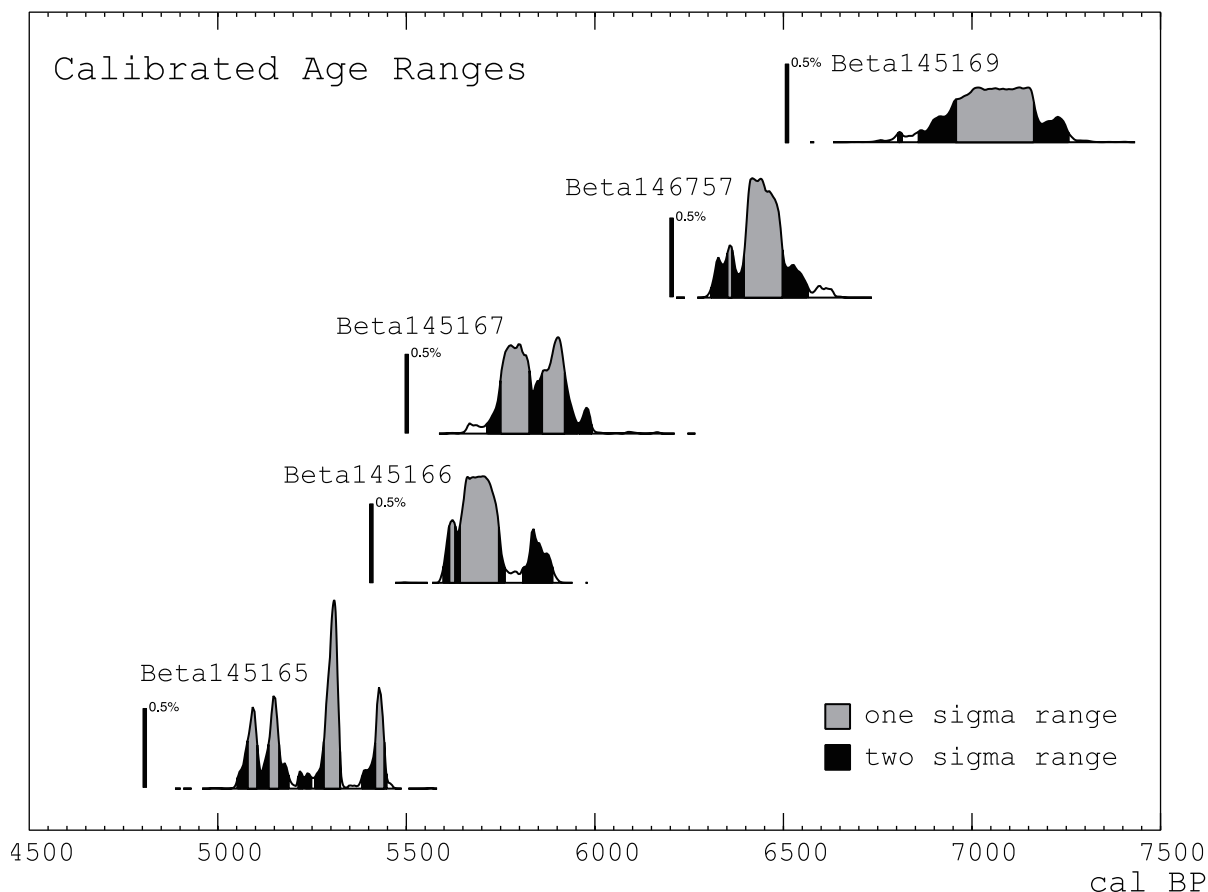


図18 放射性炭素年代測定結果

第4節 総括

第1～9層は、14世紀以降の作土層である。第10層も詳細な時期は不明であるが、中世である可能性が高い。第9・10層の下面（第10・11面）で検出した畦畔、溝群が南北方向であることから、条里地割で区画された耕作地であったことがわかる。遺跡周辺は、条里地割が広範囲に認められることで知られている。今回の調査地では、14世紀頃に耕作地の造成が行われ、それ以降現代にいたるまで連綿と条里地割で区画された耕作地であったことが確認できた。

北鳥池遺跡は、弥生時代～古墳時代の集落遺跡として周知されている。

遺跡として周知されるきっかけとなった、1964年に行われた緊急調査の土層断面図には、基準高の記録がない。しかし、当該期の土器が含まれていた「黒色有機土層」より下に、砂利や弱粘土を含む砂層が比較的厚く堆積していることが記されている。

1979年に実施された東大阪市遺跡保護調査会の調査では、古墳時代の溝状遺構が検出されている。この溝が検出された遺構面の基盤層は、粘土・シルト・細砂の互層で植物遺体を含み、厚さ0.5～1.0mである。その下は厚さ0.6～1.6mの砂礫層で、下部に基底礫層が約0.2mの層厚で堆積している。この基盤層が、1964年に確認された「黒色有機土層」の基盤層にあたると思われる。

今回の調査では、土質や層厚等から、第11層極細砂～細砂層（図6-14～17層）が「黒色有機土層」直下の砂層にあたることが想定できる。近接している1979年調査区との対応では、第11層は1979年調査区の砂礫層にあたると思われる。今回の調査区では第11層下層にシルトが多く含まれていたが、1979年調査区寄りの調査区南部では、北部に比べてシルトの含有が少なかった。また、その直下が層厚約0.2mの礫層（図6-18層）であることも共通している。

上述のとおり、1979年調査区では、砂礫層の上に植物遺体を含む粘土・シルト・細砂の互層が存在し、その上面で古墳時代の遺構が検出されている。しかし、今回の調査区では、第11層極細砂～細砂層の直上は、中世以降かと思われる作土層であった。1979年調査区で確認された、厚さ0.5～1.0mの粘土・シルト・細砂の互層が、中世段階の耕作地造成の際に削平された可能性がある。

第11層上面（第11面）で検出した3基のピットは、埋土が酷似しており、同時期のものと思われる。出土遺物がないため時期を知ることはできないが、周辺の調査成果より、削平をまぬがれた弥生時代～古墳時代のものである可能性がある。

今回の調査では、これまで明らかになっていない遺跡の地形形成に関するデータを得るため、弥生時代以前の層準について分析を行った。

今回の調査で確認した最下層部（T.P.0.5m）の植物遺体を含む灰色シルト（図6-30層）は、放射性炭素年代測定で縄紋時代後期前葉～中葉の年代を得た。珪藻分析では微量ではあるものの海水生種が検出され、海水の影響を受ける堆積環境であったことが明らかになった。T.P.0.9mとT.P.1.4mで土壌層を確認した。同測定により下層（図6-26～28層）は縄紋時代後期中葉、上層（図6-22・23層）はその直上層（図6-21層）が弥生時代中期であるという結果を得た。珪藻分析では「土壌生成の進行する時期を挟在する氾濫原の堆積環境」に変化したことが指摘されている。第11層下部で検出した立木は、同測定で弥生時代中期という年代を得た。弥生時代中期頃の遺跡周辺は、土砂の堆積が進む環境が続いていたといえる。弥生時代後期、古墳時代になって、厚く堆積した土砂層の上に安定した土壌が形成され、集落が営まれるようになったと考えられる。

第4章 若江北遺跡の調査成果

第1節 基本層序

現地盤高は、T.P.4.3mである。厚さ約2mの現代盛土層より下に、下記の層準を確認した（図19・20 図版8・9）

層および遺構面の名称は、直近の調査である第4・5次調査に準じている。ただし、1層、3層、4d層、5b層相当層は、複数層に分層できたため、層名にa・b、1・2・3を付して区別した。

0層 近現代の表土層である。

1a層 作土層である。細砂～中砂混じり灰色シルトである。

1b層 中世の作土層である。青灰色シルトである。

2層 第4次調査で中世整地層とされている層であるが、今回の調査区には存在しない。

3a層 オリーブ灰色シルトで、弱く土壌化している。6～8世紀の遺物を含む。下面（第2 - 1面）で、遺構を検出した。

3b層 灰白色極細砂～細砂で、堆積層である。古墳時代の遺物を含む。

4a層 細砂を多く含む灰色シルトである。既往の調査区の一部ではこの層上面で畦畔が検出されており、水田作土層である可能性がある。

4b層 炭化物と灰白色極細砂の薄層をラミナ状に含む、厚さ数cmの灰色シルトの堆積層である。既往の調査において、鍵層とされてきた層である。

4c層 第4・5次調査で確認された層であるが、第5次調査の一部の調査区と同様、今回の調査区では認められなかった。

4d - 1層 4d層は土壌層である。2層に分層でき、4d - 1・2層とした。

4d - 1層は、水田作土層である。厚さ数cmの細砂を多く含む灰色シルトである。上面（第3a - 1面）で小区画水田を検出した。

4d - 2層 シルト混じり灰色細砂で、土壌層である。厚さ2～3cmである。

5a層 上層は灰白色極細砂～粗砂、下層は炭化物の薄層をラミナ状に含む灰色シルトで、堆積層である。ともに厚さ約0.1mで、5b - 1層上面（第4a - 1面）を覆っている。溝等の深さのある遺構内には主に砂層が堆積している。弥生時代後期の遺物を含む。

5b - 1層 5b層は厚さ0.2m未満の土壌層である。3層に分層でき、5b - 1～3層とした。各層理面（第4a - 1～3面、第4b面）で、弥生時代中期末～後期後葉の遺構を検出した。

5b - 1層は、細砂～中砂を多く含む暗灰色シルトで、強く土壌化している。

5b - 2層 シルト混じり灰色細砂～中砂で、土壌層である。

5b - 3層 細砂混じり灰色シルトで、強く土壌化している。

6層 明緑灰・浅黄色細砂～粗砂で、ラミナのみられる堆積層である。厚さ0.2～0.3mである。

7層 青灰色シルト～極細砂とオリーブ黄色細砂～粗砂の互層で、最下部は植物遺体を少し含む灰色シルト～極細砂層と灰色細砂層である。ラミナのみられる堆積層で、厚さ0.4～0.5mである。

8層 シルト混じり灰色細砂で、厚さ約0.1mの土壌層である。

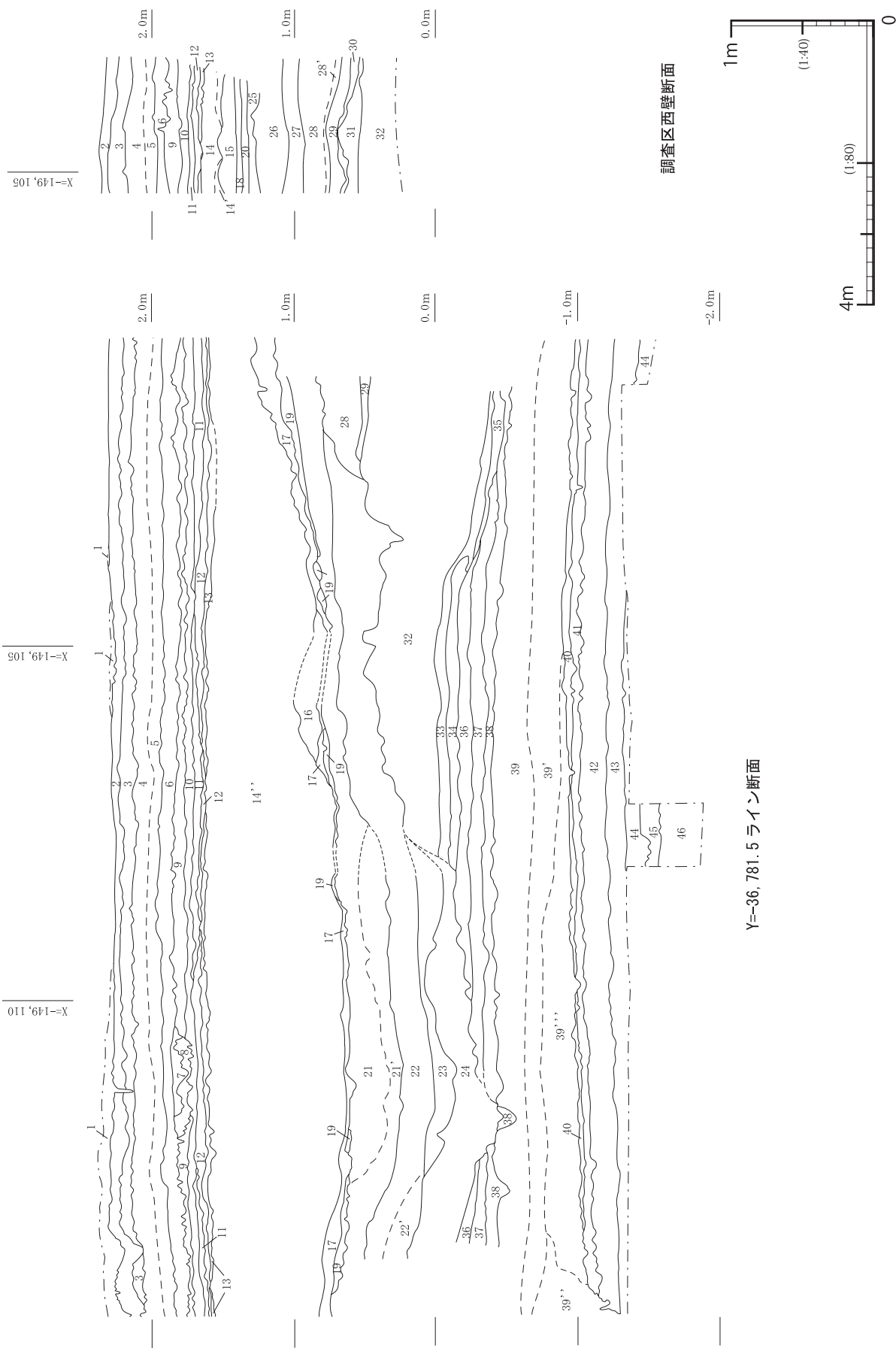


図19 土層図

1. 暗青灰 10B64/1 粗砂・小礫混シルト<0層>
2. 青灰 10B65/1 中砂～粗砂混シルト (小礫を少し含む)<0層>
3. 灰 10Y6/1 細砂～中砂混シルト<1 a層>
4. 青灰 5B5/1 シルト (中砂を少し含む)<1 b層>
5. 青灰 5B6/1 シルト (細砂を少し含む)<1 b層>
6. オリーブ灰 5Y6/1 シルト<3 a層>
7. 灰 5Y6/1 シルト<2土坑>
8. 黄灰 2.5Y4/1 シルト (灰黄 2.5Y6/2 細砂の小ブロックを含む)<2土坑>
9. 灰白 5Y7/2 極細砂～細砂<3 b層>
10. 灰 5Y6/1 細砂を多く含むシルト<4 a層>
11. 灰 N6/0 シルト (暗灰 N3/0 炭化物の薄層をラミナ状を含む 一部に灰白 5OY8/1 極細砂の薄層をラミナ状を含む)<4 b層>
12. 灰 5Y5/1 細砂を多く含むシルト<4 d-1層>
13. 灰 N4/0 シルト混細砂<4 d-2層>
14. 灰白 7.5Y7/1 シルト混極細砂 (ラミナ有)<5 a層>
- 14'. 灰白 5Y7/2 細砂～中砂 (下部は極細砂 ラミナ有)<5 a層>
- 14''. 灰白 7.5Y7/1 細砂～粗砂 (上部は細砂、下部は粗砂が主体 ラミナ有)<5 a層>
15. 灰 5Y6/1 シルト (炭化物の薄層をラミナ状を含む)<5 a層>
16. 暗灰色 N3/0 中砂混シルトと青灰 5B5/1 シルト混細砂～中砂と緑灰 5G6/1 シルトがブロック状に混じる (植物遺体を少し含む)
17. 灰 7.5Y6/1 シルト (植物遺体をラミナ状を含む)
18. 暗灰 N3/0 細砂～中砂を多く含むシルト<5 b-1層>
19. 暗灰 N3/0 細砂～中砂混シルト (植物遺体を少し含む)
20. 灰 7.5Y6/1 シルト混細砂～中砂<5 b-2層>
21. オリーブ黒 5Y3/1 シルト (細砂～中砂の薄層を含む 土器、木製品を含む)<12溝上層>
- 21'. オリーブ黒 10Y3/1 細砂～中砂を多く含むシルト (植物遺体を含む 土器、木製品を含む)<12溝上層>
22. 灰 5Y5/1 シルト (極細砂をラミナ状を含む 植物遺体をラミナ状に多く含む)<12溝中層>
- 22'. 灰 10Y4/1 シルトと細砂の五層 (灰 10Y6/1 中砂～粗砂を含む 植物遺体を含む ラミナ有)<12溝中層>
23. オリーブ灰 5G5/1 シルト～極細砂の五層 (植物遺体を含む)<12溝中層>
24. 灰 10Y6/1 シルトとオリーブ黒 10Y3/1 シルトとオリーブ灰 5G5/1 細砂～粗砂がブロック状に混じる<12溝下層>
25. 灰 7.5Y5/1 細砂混シルト<5 b-3層>
26. 明緑灰 10G7/1 細砂と黄 2.5Y7/4 細砂～粗砂の互層 (ラミナ有)<6層>
27. 青灰 5B5/1 シルト～極細砂 (細砂をラミナ状を含む)<7層>
28. オリーブ黄 5Y6/3 細砂～粗砂 (ラミナ有)<7層>
- 28'. 青灰 5B6/1 細砂 (ラミナ有)<7層>
29. 灰 5Y4/1 シルト～極細砂 (植物遺体を少し含む ラミナ有)<7層>
30. 灰 5Y6/1 細砂 (中砂～粗砂をラミナ状を含む)<7層>
31. 灰 10Y4/1 シルト混細砂 (中砂～粗砂を少し含む)<8層>
32. 明緑灰 7.5G7/1 細砂と灰 7.5Y5/1 シルト～極細砂が互層になっている (中に灰白 5Y7/1 細砂～粗砂をレンズ状を含む 植物遺体を少し含む)<9層>
33. 灰 10Y6/1 シルト (植物遺体をラミナ状に多く含む)<9層最下層>
34. オリーブ灰 5G6/1 シルト (極細砂を含む 植物遺体を多く含む 上面に植物遺体の薄層がラミナ状に堆積)<11層>
35. 灰 7.5Y5/1 シルト～極細砂 (植物遺体を含む)<11層>
36. オリーブ黒 7.5Y3/1 細砂混シルト<12 a層>
37. 灰 7.5Y4/1 細砂混シルト<12 b層>
38. オリーブ黒 5Y3/1 シルト混細砂<12 c層>
39. オリーブ灰 5G6/1 極細砂～細砂 (ラミナ有)<13層>
- 39'. オリーブ灰 2.5G5/1 極細砂～細砂とシルトの互層<13層>
- 39''. 暗灰黄 2.5Y4/2 シルトと明オリーブ灰 5G7/1 極細砂～細砂の互層
- 39'''. オリーブ灰 2.5G5/1 細砂～中砂 (下部に灰 7.5Y4/1 シルトをラミナ状を含む)
40. 灰 10Y4/1 シルト (極細砂をラミナ状を含む 植物遺体を少し含む)
41. 暗灰 N3/0 シルト<14層>
42. オリーブ灰 5G6/1 シルト<15層>
43. 灰 5Y4/1 細砂混シルト (中砂～粗砂を少し含む 植物遺体を少し含む)
44. 灰 5Y6/1 シルト混中砂～粗砂 (シルトブロックを含む 植物遺体を含む ラミナ有)
45. 灰 5Y5/1 シルト～極細砂 (細砂を少し含む)
46. 灰 5Y5/1 シルト～極細砂と灰 7.5Y6/1 中砂～粗砂の五層 (植物遺体を含む ラミナ有)

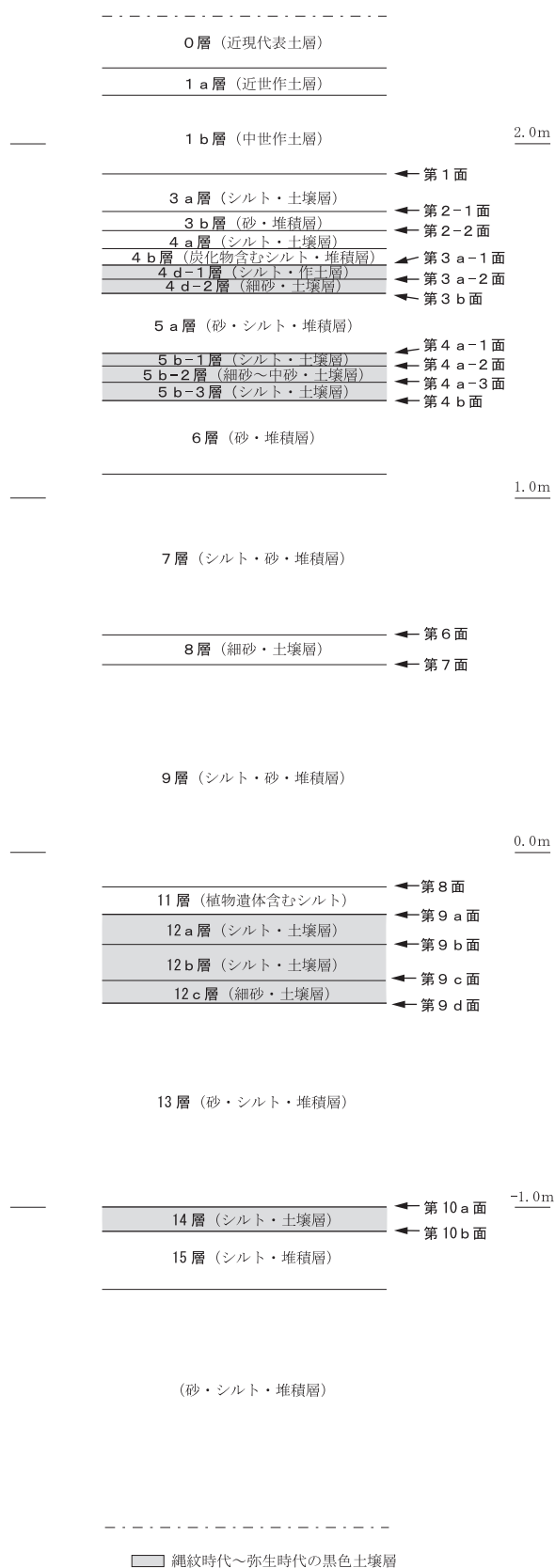


図20 基本層序・遺構面对应模式図

9層 明緑灰色細砂と灰色シルトの互層で、部分的に灰白色細砂～粗砂層を含む。ラミナのみられる堆積層で、植物遺体を含む。厚さ0.6～0.9mである。

10層 第4・5次調査の一部の調査区で認められた層で、今回の調査区には存在しない。

11層 植物遺体を多く含む、オリーブ灰色シルトである。厚さ0.1m未満である。上面に植物遺体の薄層がラミナ状に堆積している。調査区北部の地形が低くなっている部分では、植物遺体を含む灰色シルト～極細砂である。

12 a層 12層は厚さ約0.3mの土壌層で、12 a～c層の3層に分層できる。各層理面（第9 a～d面）で、弥生時代前期の遺構を検出した。

12 a層は、細砂混じりオリーブ黒色シルトで、強く土壌化している。12 b層の上部が強く土壌化したものと思われる。

12 b層 細砂混じり灰色シルトで土壌層である。
12 c層 シルト混じりオリーブ黒色細砂で、強く土壌化している。直下の13層が土壌化したものと思われる。

13層 オリーブ灰色極細砂～細砂とシルトの互層で、ラミナのみられる堆積層である。厚さ約0.6mである。14層上面（第10 a面）を覆っており、流路内には明オリーブ灰色細砂等が堆積している。

14層 暗灰色シルトで、土壌層である。厚さ0.1m未満である。出土遺物はないが、既往の調査成果から縄文時代晩期と考えられる。直上に、厚さ数cmの植物遺体を含む灰色シルト層が堆積している。14層上面（第10 a面）で流路を検出した。

15層以下 14層の直下は、オリーブ灰色シルトで、これを15層とした。厚さ約0.2mである。

これより下は、植物遺体を少し含む細砂混じり灰色シルト、植物遺体を含むシルト混じり灰色中砂～粗砂、灰色シルト～極細砂、灰色シルト～極細砂と灰色中砂～粗砂の互層等の堆積層である。今回を含め既往の調査でも遺物は出土していない。

第2節 各遺構面の遺構と遺物

第1項 第1面（1層） - 中世以降の耕作面 - （図版10）

第5次調査では、1層下面が第1面である。今回の調査区では1層を細分でき、上層を1a層、下層を1b層とした。1b層はさらに上下層に細分できる。各層理面で精査を行ったが、遺構は認められなかった。

層出土遺物から、1b層には10～13世紀の時期が与えられる。いずれも作土層と思われ、上面は耕作面であったと考えられる。

1a層からは、土師器皿、瓦器、須恵器、染付碗・皿、陶器椀、瓦の小片を採取した。

1b層出土遺物（図21 図版51）

古墳時代の須恵器杯、土師器皿、瓦（1）のほか、下層からは土師器皿、黒色土器A類椀、黒色土器B類椀、白磁碗（2）の小片が出土している。土師器皿が13世紀のものであり、下層出土遺物には10～13世紀の時期が与えられる。

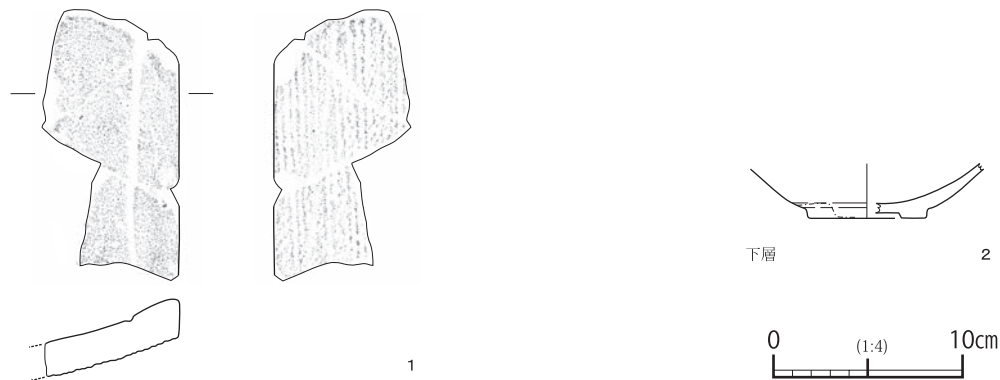


図21 1b層 出土遺物

第2項 第2面（3・4a層） - 古墳時代～古代の遺構面 -

第5次調査では、3層内および3層を除去した4a層上面が第2面である。今回の調査区では3層を2層に分層でき、上層を3a層、下層を3b層とした。3a層下面を第2-1面、4a層上面を第2-2面とした。

層出土遺物から、古墳時代～古代の遺構面であると思われる。

1. 第2-1面（図22）

3a層はシルトの土壌層である。下面で土坑を2基検出した。

1土坑（図23 図版20）

調査区北部に位置する。径約0.9mの円形で、深さ約0.1mである。埋土は、シルト～極細砂でシルトの小ブロックを含む。

遺物は出土していない。

2土坑（図23 図版20）

調査区中央南寄りに位置する。南北約1.6m、東西約1.4mで、深さ約0.1mである。埋土は、シルトで細砂の小ブロックを含む。

遺物は出土していない。

2. 第2 - 2面 (図版10)

3 b層は極細砂～細砂の堆積層で、4 a層上面を覆っている。4 a層は細砂を多く含むシルトで、既往の調査ではこの上面で畦畔が検出されている。今回の調査では、畦畔を確認する作業を行ったが、認められなかった。

3 a層出土遺物 (図24 図版51)

須恵器杯 (3・4)・甕等の小片が出土している。3は6世紀、4は8世紀のものと思われる。

3 b層出土遺物

古墳時代のものと思われる須恵器等の小片が少量出土している。

4 a層からは、遺物は出土していない。

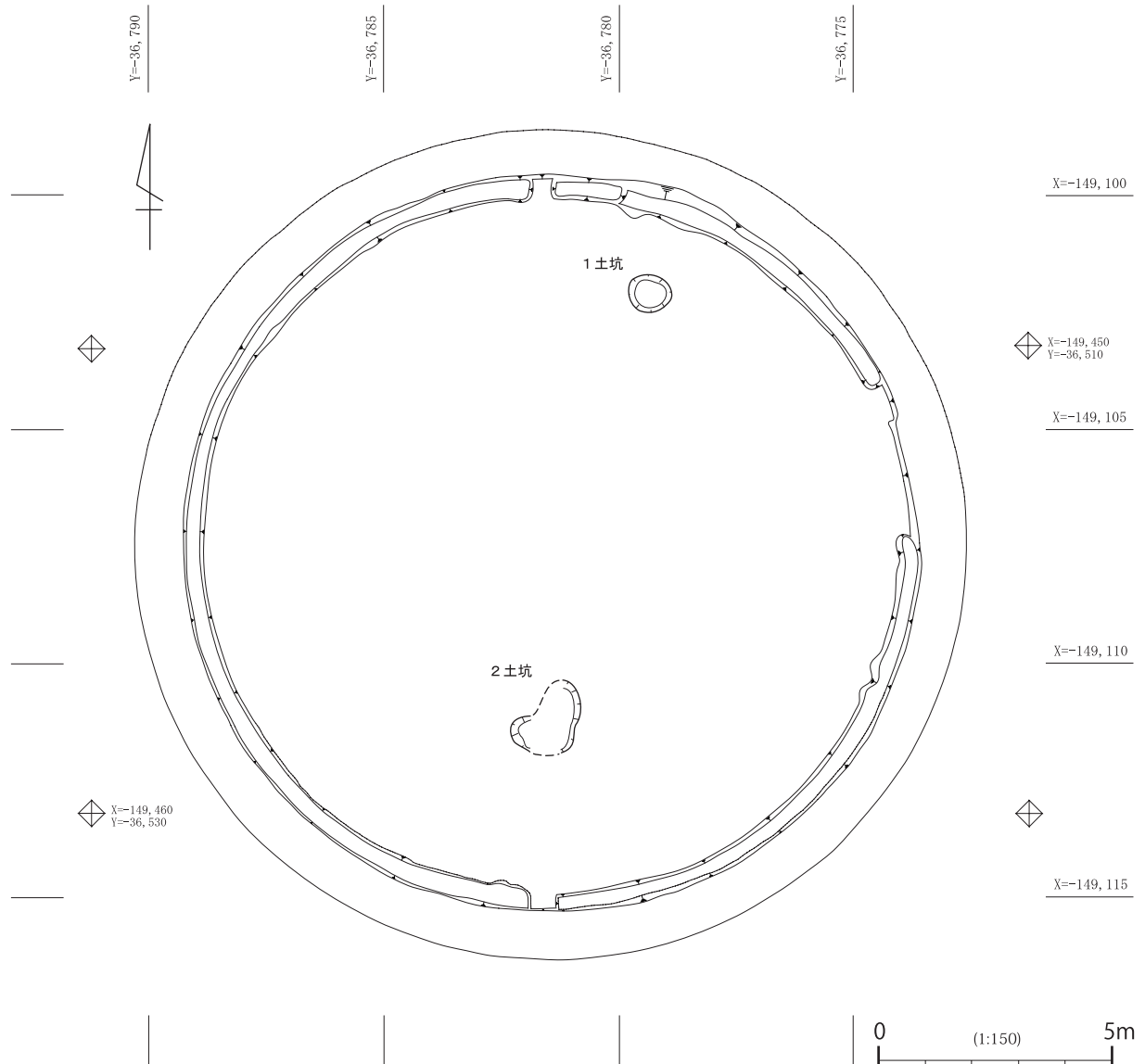


図22 第2 - 1面 平面図

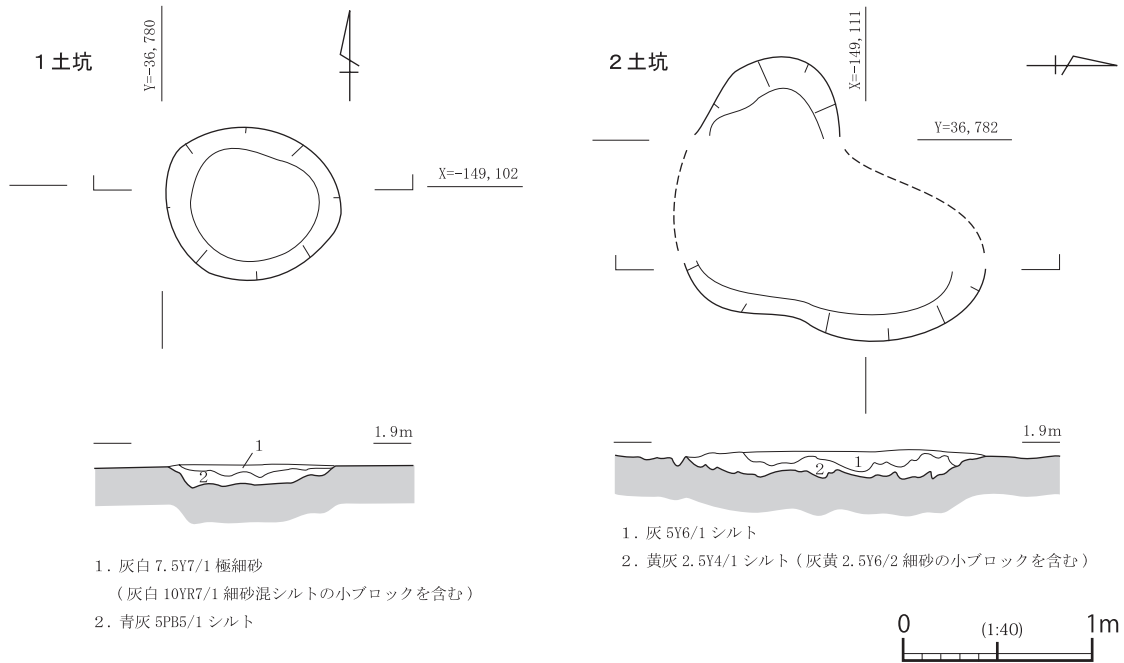


図23 1・2土坑 平面・断面図

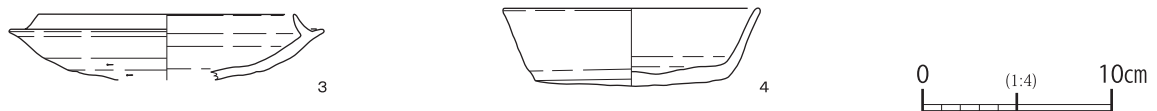


図24 3 a層 出土遺物

第3項 第3面（4 b・4 d層） - 弥生時代後期末以降の水田面 -

4 b層を除去した4 d層上面が第3 a面、4 d層下面が第3 b面である。今回の調査区では4 d層を2層に分層でき、上層を4 d - 1層、下層を4 d - 2層とした。4 d - 1層上面が第3 a - 1面、4 d - 2層上面が第3 a - 2面である。

時期を示す出土遺物はないが、上下の遺構面の時期から弥生時代後期末以降の遺構面と思われる。

1. 第3 a - 1面（図25 図版11・20）

4 b層は、炭化物と極細砂の薄層をラミナ状に含む厚さ数cmのシルトの堆積層で、4 d層上面を覆っている。既往の調査において、鍵層となってきた層である。

4 d - 1層は厚さ数cmの細砂を多く含むシルトで、上面で畦畔を検出した。畦畔の高さは1～2cmである。水口については、明確にそれと判断できる箇所は認められなかった。

調査区内の微地形は、西から東に向かって低くなっている。比高差は約0.1mである。等高線に沿う方向である南北方向に、5～6m間隔で幹線畦畔を築き、その間を5～6m間隔に区切る畦畔を設けている。区画の形状は方形に近く、比較的整然とした平面形状の小区画水田である。面積がわかるのは1筆のみで、約29㎡である。

2. 第3 a - 2面（図25 図版12）

4 d - 2層はシルト混じり細砂である。この上面で畦畔の痕跡を確認した。第3 a - 1面で検出した

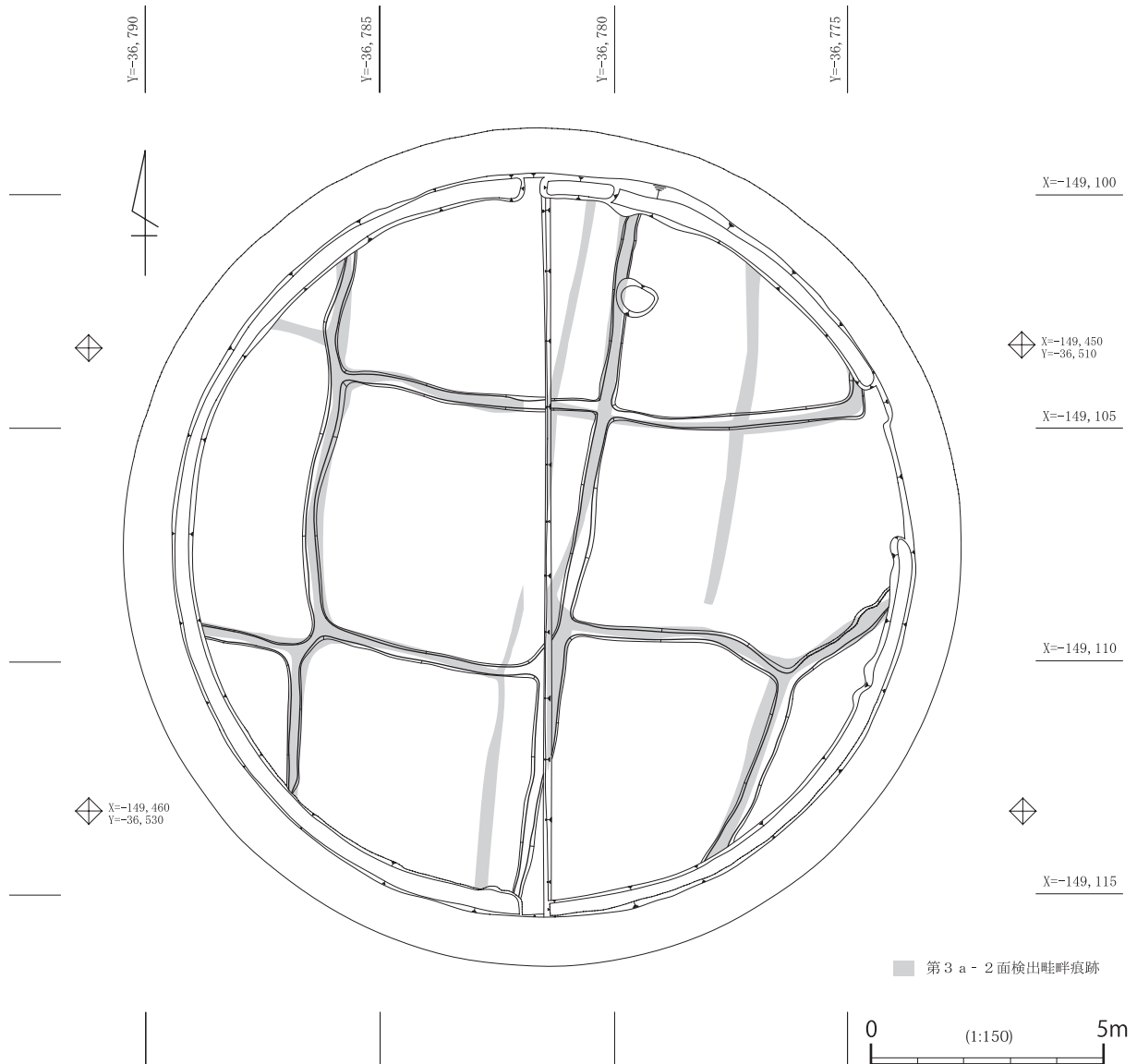


図25 第3 a 面 平面図

畦畔と重複しており、その痕跡であると思われる。ただし、南北方向（幹線方向）に2条、東西方向に1条、第3 a - 1面の畦畔と重複しない位置に痕跡を確認している。調査区北西端部で確認した東西方向のものについては、第3 a - 1面で畦畔を見落とした可能性が高いと思われる。調査区中央部で確認した南北方向のものは、第3 a - 1面の幹線畦畔と約1mの間隔を持って並行している。位置関係から、2条の畦畔が同時に存在したとは考え難い。幹線畦畔の造り替えがあり、第3 a - 2面で確認した畦畔の痕跡は古い段階のものである可能性が考えられる。調査区東寄りの南北方向のものについては、同様に造り替え以前の幹線畦畔の可能性はあるが、第3 a - 1面検出時に4 b層を完全に除去しきれていなかった箇所にあたっており、第3 a - 1面の畦畔を見落とした可能性も否定できない。

3. 第3 b 面（図26 図版12）

4 d - 2層の下面で、基盤層は5 a層である。土坑を3基検出した。

3・4・6土坑（図26・27 図版21・22）

不定形で、長さ2.1~2.9m、幅0.6~0.7m、深さ0.1m未満である。埋土は4 d - 2層と似ているが、炭

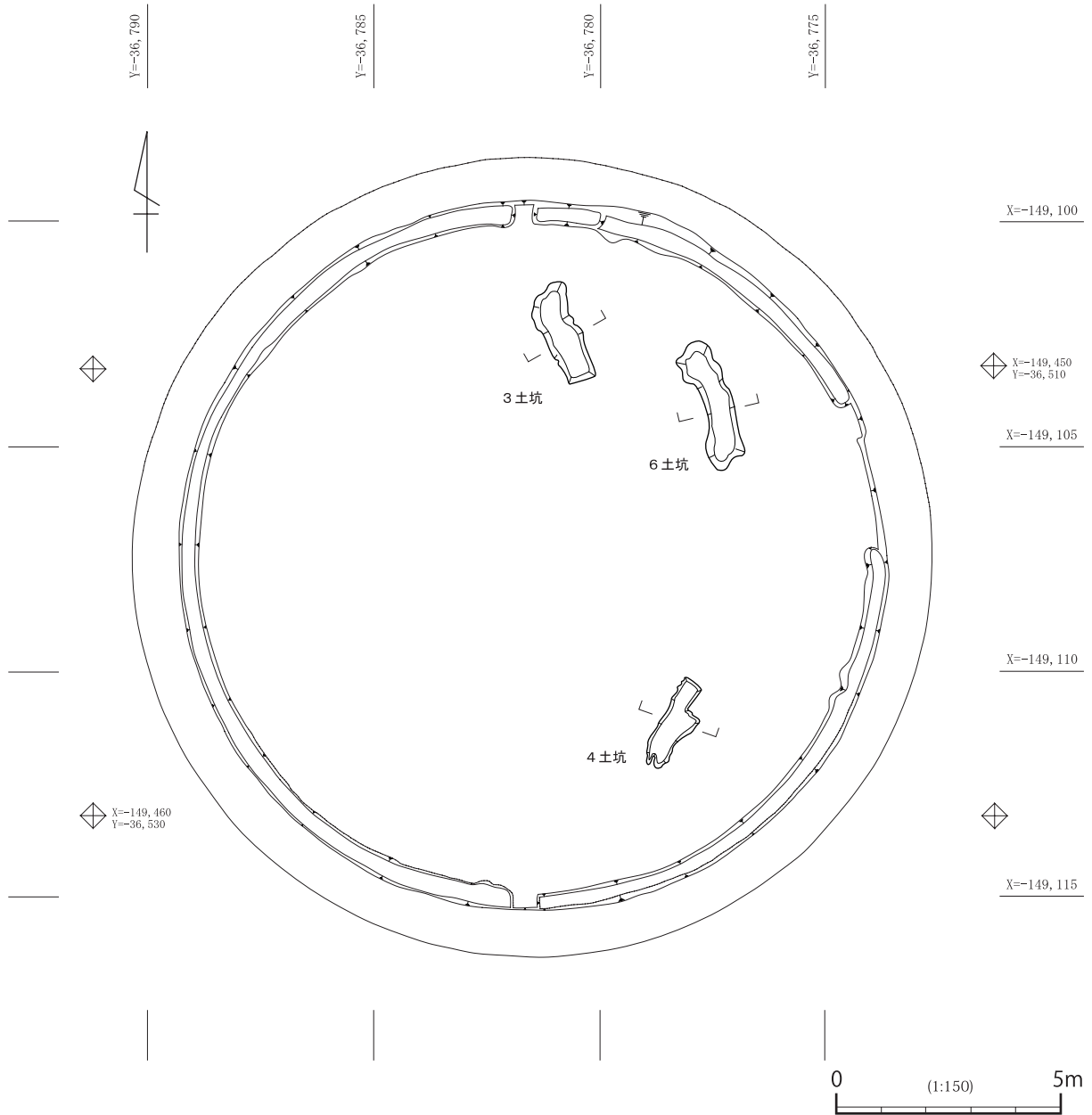
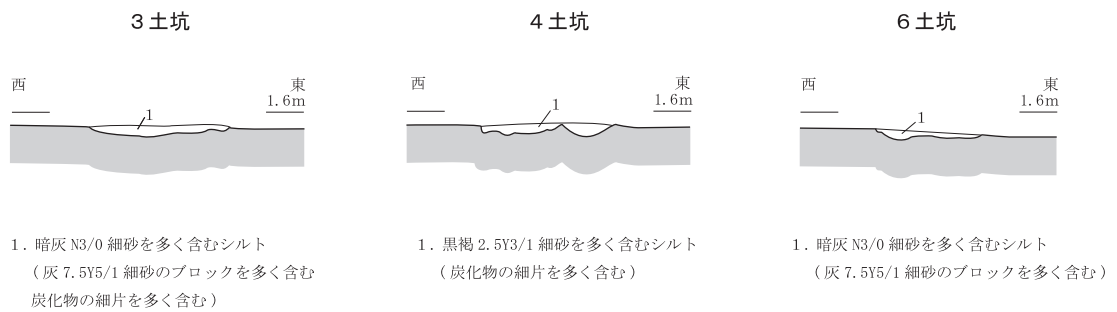


図26 第3 b面 平面図



※ 断面位置は図 26

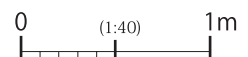


図27 3・4・6土坑 断面図

化物の細片や細砂のブロックを含む。遺物は出土していない。

4 d 層出土遺物

4 d - 1・2層から、弥生土器の細片が少量出土している。いずれも5層出土のものと同様であり、弥生時代中期末～後期初頭のものである。この遺構面の時期を示すものではないと思われる。

4 b層からは、遺物は出土していない。

第4項 第4面（5 a・5 b層） - 弥生時代中期末～後期後葉の遺構面 -

5 a層を除去した5 b層上面が第4 a面、5 b層下面が第4 b面である。5 b層を3層に分層でき、上層を5 b - 1層、中層を5 b - 2層、下層を5 b - 3層とした。5 b - 1層上面が第4 a - 1面、5 b - 2層上面が第4 a - 2面、5 b - 3層上面が第4 a - 3面である。

出土遺物から、弥生時代中期末～後期後葉の遺構面であると思われる。

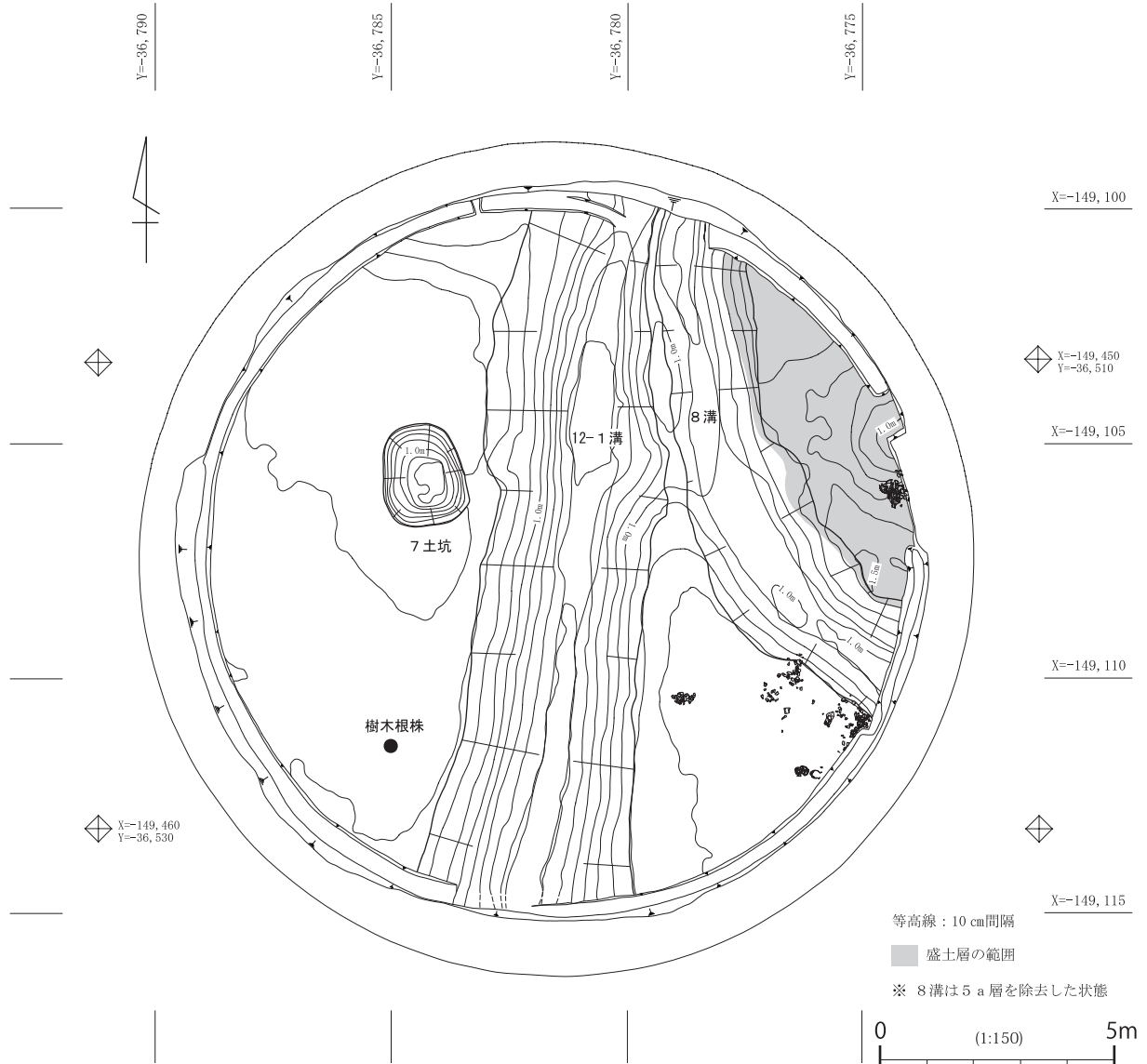


図28 第4 a - 1面 平面図（1）

1. 第4 a - 1面 (図28・29 図版13・14・23)

5 a層は上層が極細砂～粗砂、下層が炭化物の薄層をラミナ状に含むシルトで、5 b - 1層上面を覆う堆積層である。5 b - 1層は細砂～中砂を多く含むシルトで、強く土壌化している。上面で土坑、溝、盛土、土器集積を検出した。また、この面を検出した際、調査区南西部で樹木根株を確認している。

なお、調査工程は1次掘削としてT.P.1.44mまで掘削した後、1次掘削調査範囲より2 m内側に鋼矢板を打設、2次掘削を行うというものであった。具体的には、大阪府教育委員会の指示の下、T.P.1.44 m以下の箇所も含む第4 a - 1面を検出し、1次掘削終了とした。ただし、調査区外周部に近く、深度を有する8溝については、作業の安全を確保するため鋼矢板打設後に完掘することとし、5 a層を除去した段階で1次掘削を終了した。

7土坑 (図30 図版23)

調査区中央部西寄りに位置する。南北約2.2m、東西約1.7mの楕円形で、深さ約0.5mである。下部約0.1mに細砂～中砂と極細砂がブロック状に混じる埋土があるが、それ以上は5 a層細砂で埋没している。遺物は出土していない。

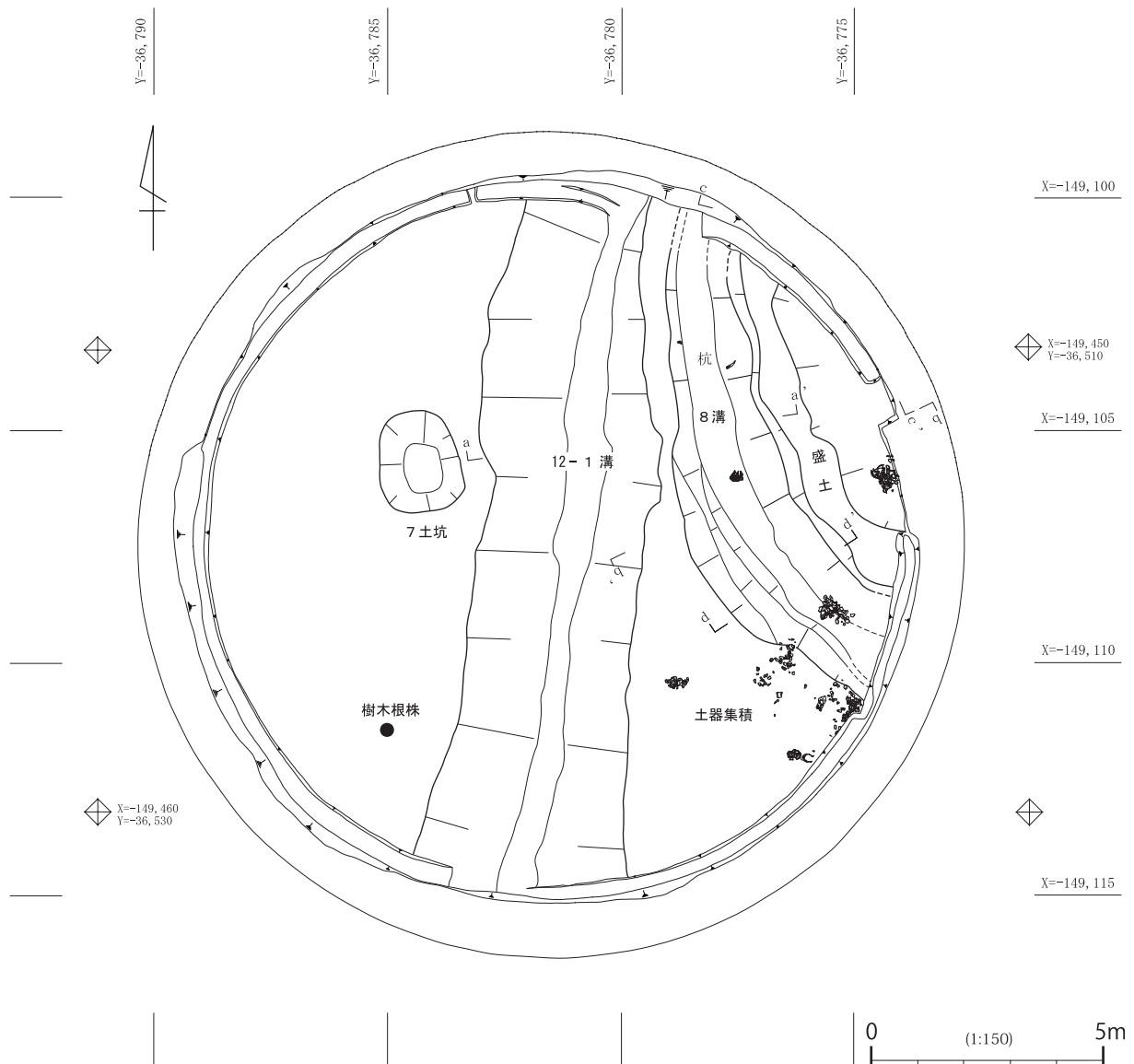


図29 第4 a - 1面 平面図 (2)

8 溝 (図28・29・31~35・38 図版24~30・52)

調査区東寄りに位置する。南東 - 北西方向で、調査区外に続く。検出長約11.5m、幅1.4~2.5m、深さは南部で約0.6mである。底面のレベルは、南から北へ向かって低くなっている。

最下層 (図31 - 7層) は、シルトと極細砂の小ブロックを含むシルト~極細砂である。その上の図31 - 6層は、シルト~極細砂と細砂~中砂の互層で、ラミナの顕著な流水堆積層である。これが溝機能

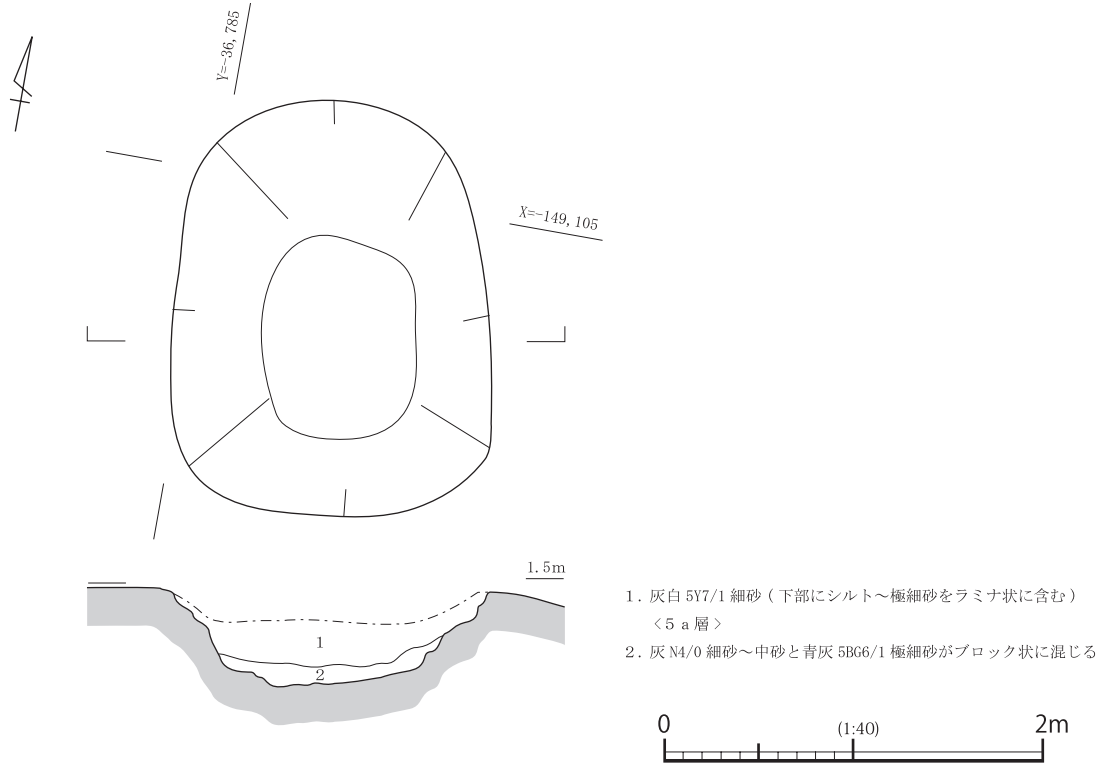
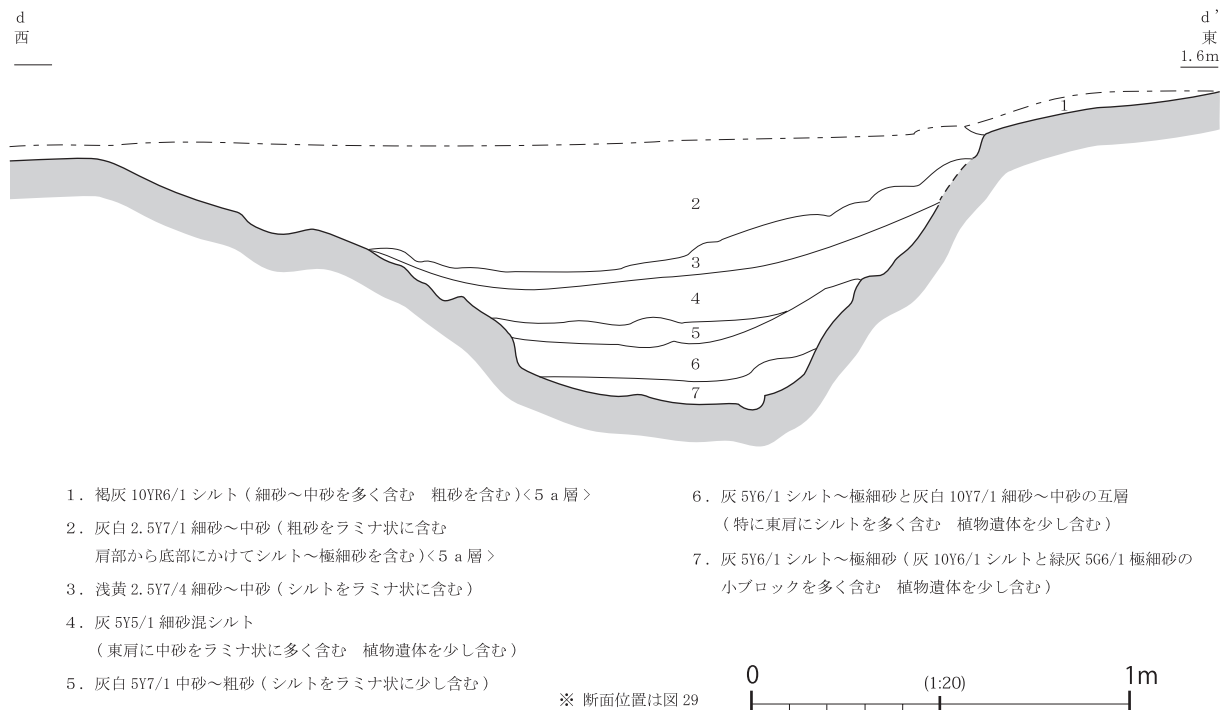


図30 7土坑 平面・断面図



- | | |
|---|---|
| 1. 褐灰 10YR6/1 シルト (細砂~中砂を多く含む 粗砂を含む) <5 a 層> | 6. 灰 5Y6/1 シルト~極細砂と灰白 10Y7/1 細砂~中砂の互層 (特に東肩にシルトを多く含む 植物遺体を少し含む) |
| 2. 灰白 2.5Y7/1 細砂~中砂 (粗砂をラミナ状に含む 肩部から底部にかけてシルト~極細砂を含む) <5 a 層> | 7. 灰 5Y6/1 シルト~極細砂 (灰 10Y6/1 シルトと緑灰 5G6/1 極細砂の小ブロックを多く含む 植物遺体を少し含む) |
| 3. 浅黄 2.5Y7/4 細砂~中砂 (シルトをラミナ状に含む) | |
| 4. 灰 5Y5/1 細砂混シルト (東肩に中砂をラミナ状に多く含む 植物遺体を少し含む) | |
| 5. 灰白 5Y7/1 中砂~粗砂 (シルトをラミナ状に少し含む) | |

※ 断面位置は図 29

図31 8溝 断面図

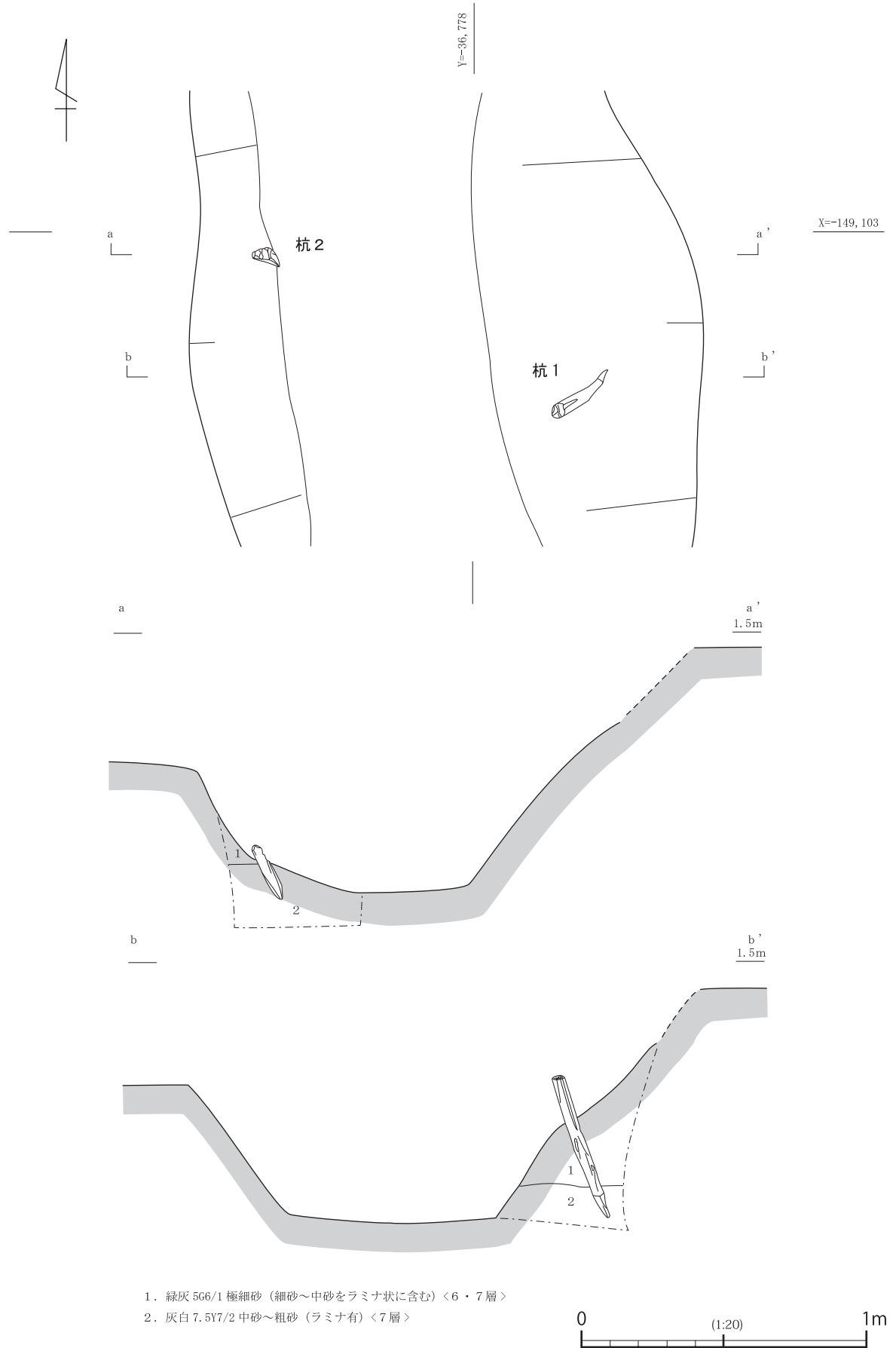


図32 8溝 杭 平面・立面図

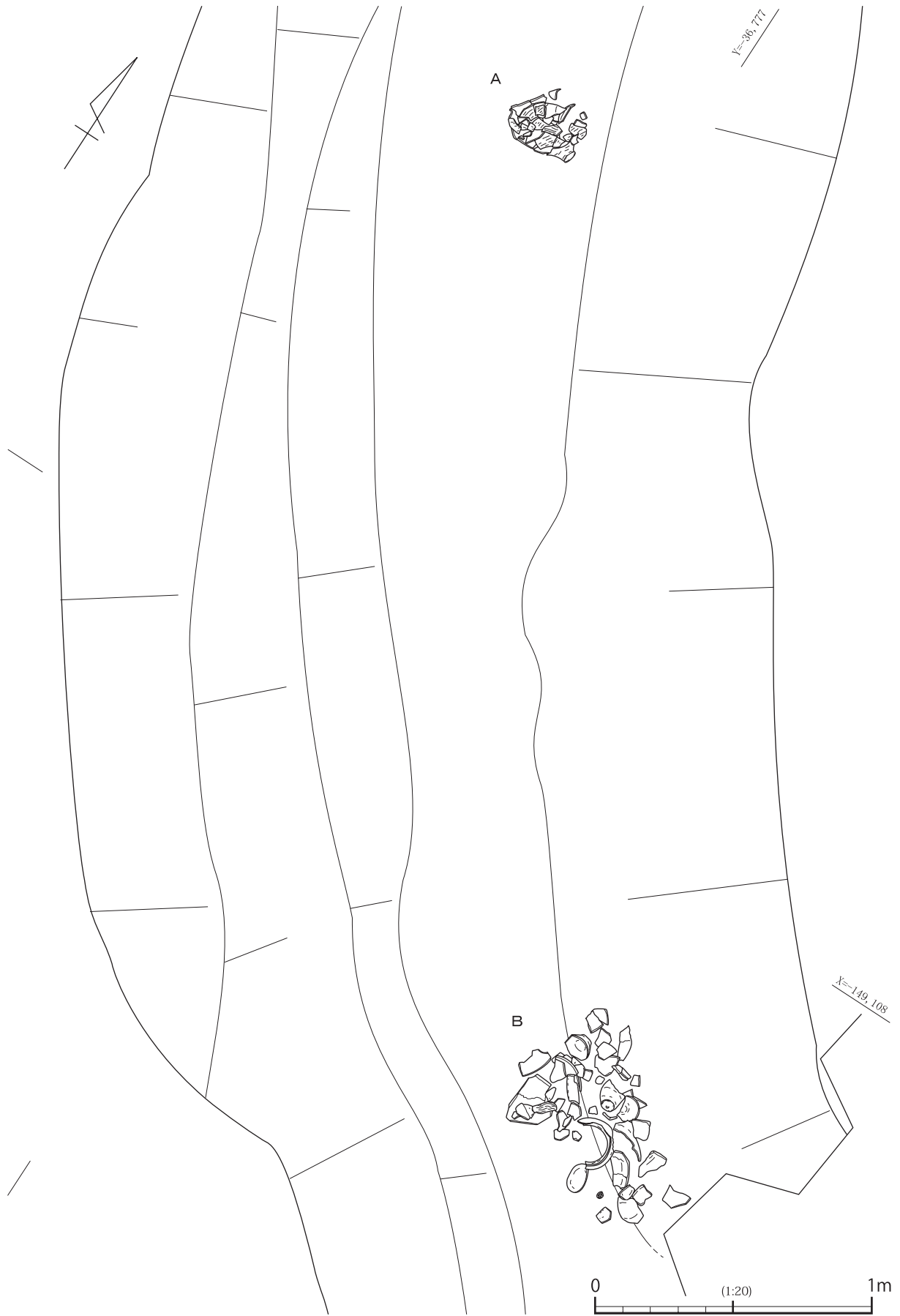


图33 8溝 遺物出土状況 平面図

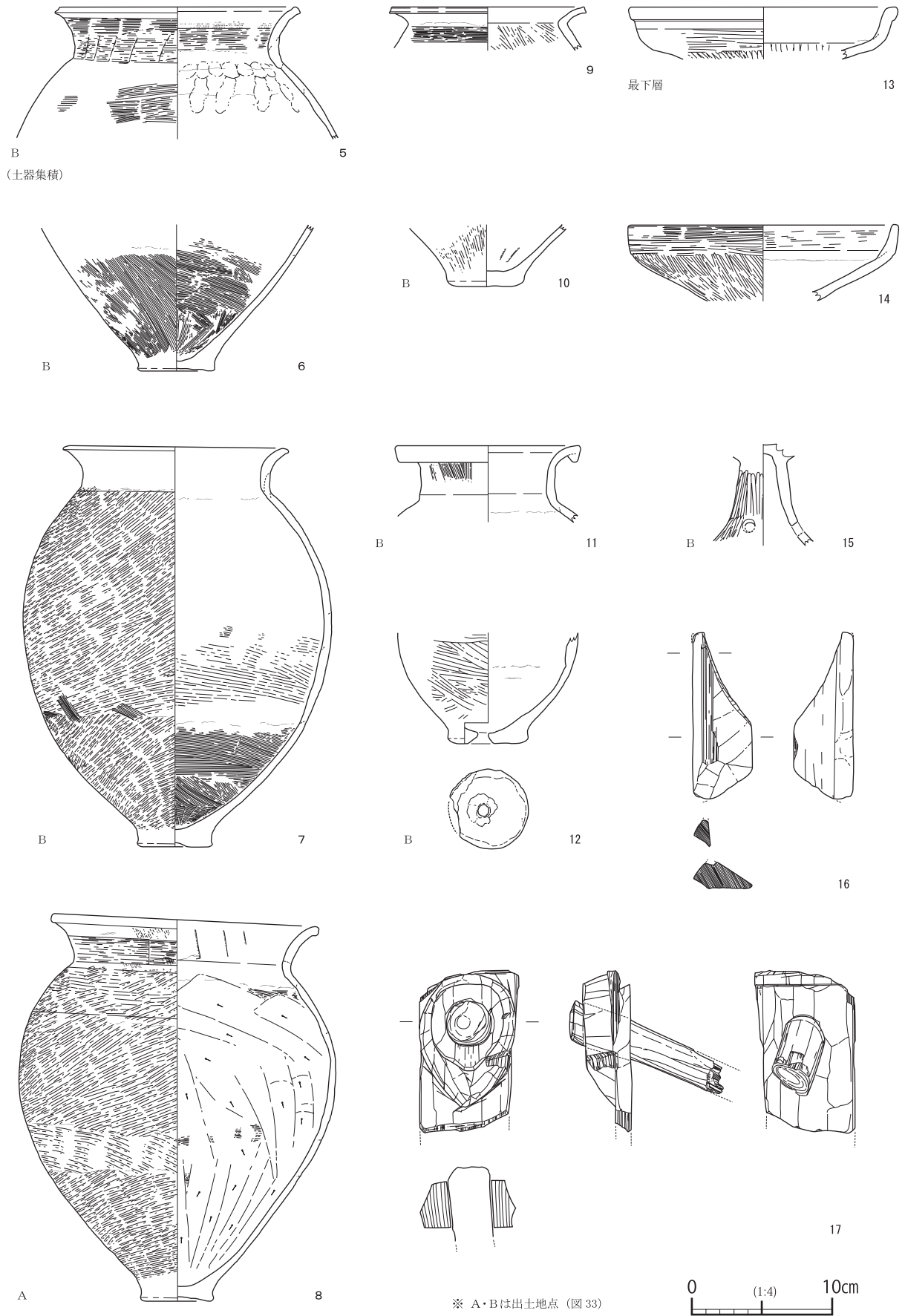


図34 8溝 出土遺物

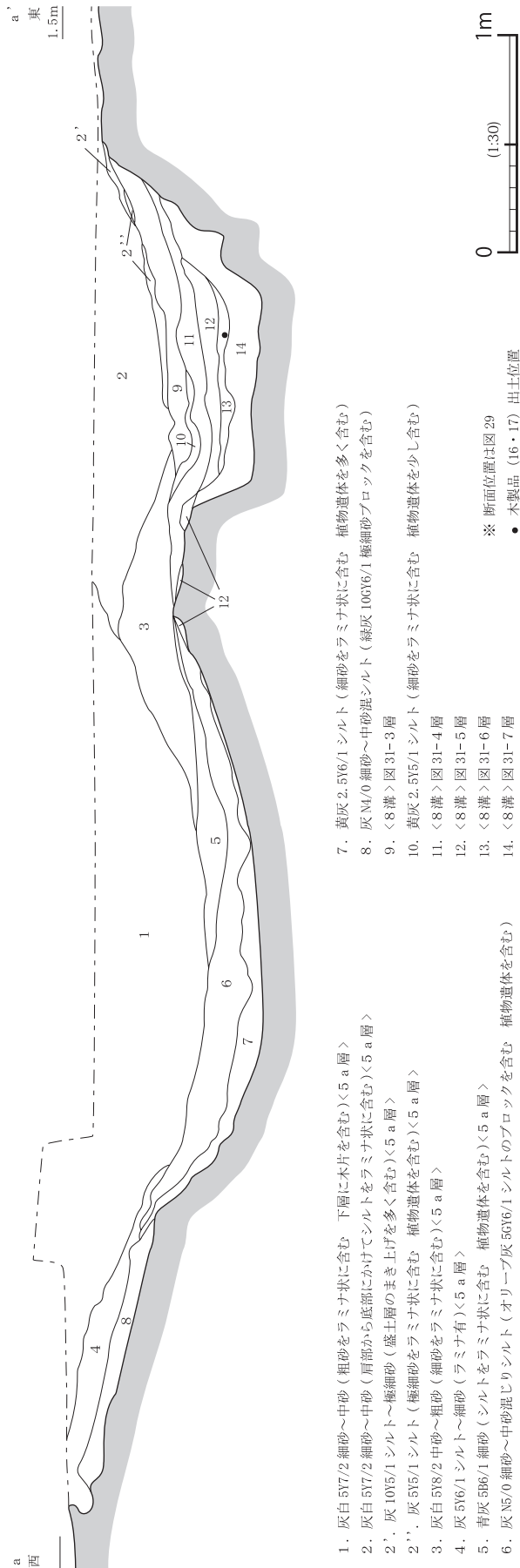


図35 8溝・12-1溝 断面図

時の堆積であると思われる。この上面で、遺物がまとまって出土した。溝は、その上に中砂～粗砂 (図31-5層) が堆積した後、砂混じりシルト等 (図31-3・4層) で埋没している。ただし、溝が完全に埋没するのは5 a層細砂～中砂の堆積によってである。図28に、5 a層を除去し、溝埋土を検出した状況を図示している。

北部で、杭を2本検出した。杭1は東肩部に打設されており、残存長53.0cm、径5.0cmである。下部40cmが基盤層に及んでいる。杭2は西肩寄りの底部に打設されており、残存長20.0cm、幅5.0cmである。下部15cmが基盤層に及んでいる。ともに先端を尖らせる加工が施されている。

遺物は、主に図31-6層上の2箇所出土した。A地点では弥生土器甕 (8) が、B地点では弥生土器甕 (5～7・10)・壺 (11・12)、脚 (15) 等が出土した。板状木製品 (16) と直柄鋏 (17) は図31-6層出土である。図35に出土位置を示している。高杯等、やや時期の古いものが含まれているが、同時期のものが出土している下の遺構面に由来するものと思われる。甕 (7) に弥生時代後期後葉の時期が与えられ、おおむね後期中葉～後葉のものと考えられる。なお、西肩部に位置する土器集積出土の小片がB地点出土の甕 (5) と接合している。付表10に、木製品等の樹種同定結果を掲載している。

12-1溝 (図28・29・35・36・50 図版24・27・53)

調査区中央に位置する南北方向の溝である。調査区外にのびており、検出長は約15.3mである。幅は南部で約4.4m、北部で約2.6m、深さは0.6～0.8mである。底面のレベルは一定していない。

底部に肩部の5 b - 1層と連続する土壤層がみられ、5 a層の堆積によって埋没している。底部の土壤層は、肩部の5 b - 1層に比べて砂粒の含有が少なく、植物遺体を含む。厚さ数cmであるが、5 b - 1層同様比較的強く土壌化しており、上面が相当の期間、オープンな状態であったと考えられる。

溝内に堆積している5a層は主として細砂～中砂であるが、底面上にはシルトがみられる。最下層は厚さ約0.1mの植物遺体を多く含むシルト（図19-17層、図35-7層）で、北部の一部にはさらにその上に厚さ約0.2mのシルトのブロックと植物遺体を含む細砂～中砂混じりシルト（図19-16層、図35-6層）が堆積している。5a層下層のシルトとして掘削したが、これらは遺構面上に堆積している5a層下層シルトとは層相が異なっており、5a層堆積以前の溝埋土である可能性も否定できない。

第4a-3面の12-2溝と重複している。12-1溝は、12-2溝が第4a-1面時まで完全には埋没せず、溝の形状を保っていたものである可能性が考えられる。

図36に、上述の溝底面上に堆積しているシルト層出土の遺物を掲載した。弥生土器甕（18～25）・壺（26～28）・器台（29）、脚（30～33）、板状木製品（スギ）、分割材（ニレ属）等である。12-2溝出土遺物と同様の弥生時代中期末のものも含まれているが、甕（22・23・25）、器台（29）、脚（30・31）等、12-2溝出土遺物には認められない新しい要素を持つものがみられ、弥生時代後期の時期が与えられる。

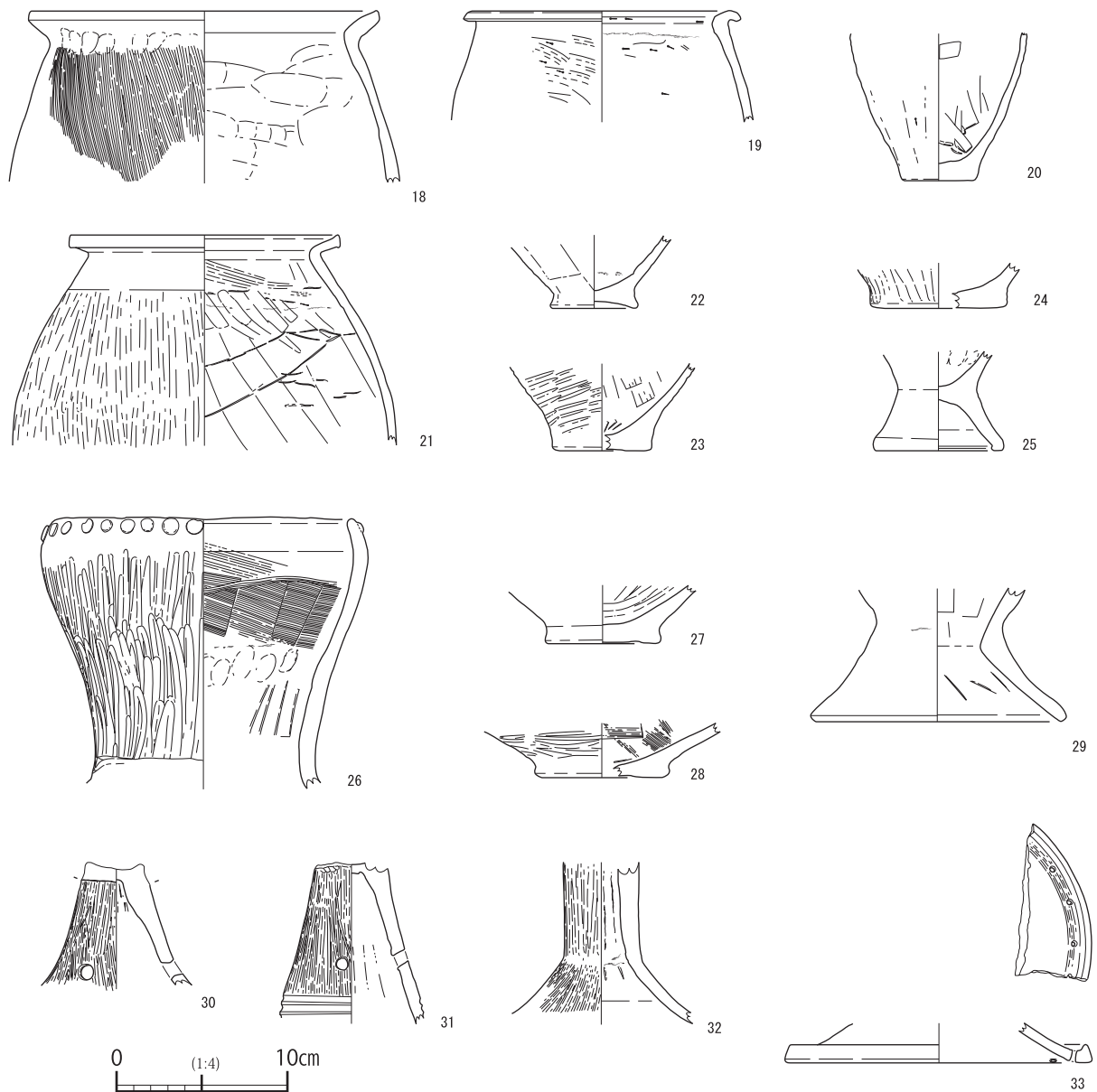


図36 12-1溝底面上堆積シルト層 出土遺物

盛土 (図28・29・37～40 図版28～30・54)

調査区北東部で、5 a層と5 b - 1層の間にブロック土を多く含む層準を確認した。5 b - 1層上に施された盛土であると考えられる。断面形は東側が裾広がりのいびつな台形状である。

盛土層の厚みは約0.2mである。図38の北東 - 南西方向の断面 (b - b') 箇所では約0.4mで、周囲より厚い。これは第4 a - 3面の13溝が窪みとして残っている箇所にあたるために、盛土を施す前のレベルが周囲よりもやや低くなっていることに起因していると考えられる。ただし、盛土を施した後も、その頂部のレベルが周囲に比べてやや低い。

おおまかに2層に分層できる。上層はシルト混じり細砂～中砂または細砂～粗砂混じりシルト等で、極細砂～中砂等のブロックを含む。下層は細砂～中砂混じりシルト、細砂～中砂を多く含むシルト、極細砂がブロック状に混じる層である。下層は、上述の13溝が窪みとして残っている箇所にも認められる。

西側には8溝が並行している。盛土は下面の溝の影響で窪みになっている箇所を埋めているが、調査区東端部ではその限りではない。8溝東肩部に沿っているといえる。

盛土除去面 (5 b - 1層上面) および5 b - 1層除去面で精査を行ったが、盛土と関連すると思われる遺構等は検出していない。

盛土上東裾部で土器がまとまって出土した。複数個体の土器片が重なっている状態で、5 a層に覆われている。弥生土器甕 (34～37・39)・鉢 (38) 等である。弥生時代後期のものである。

盛土層からは、弥生土器甕 (40～42)・高杯 (43) 等の小片が出土している。

土器集積 (図41～43 図版28・31・32・55・56)

調査区南東部において、遺構面上で土器がまとまって出土した。南東側の調査区外に続いている可能

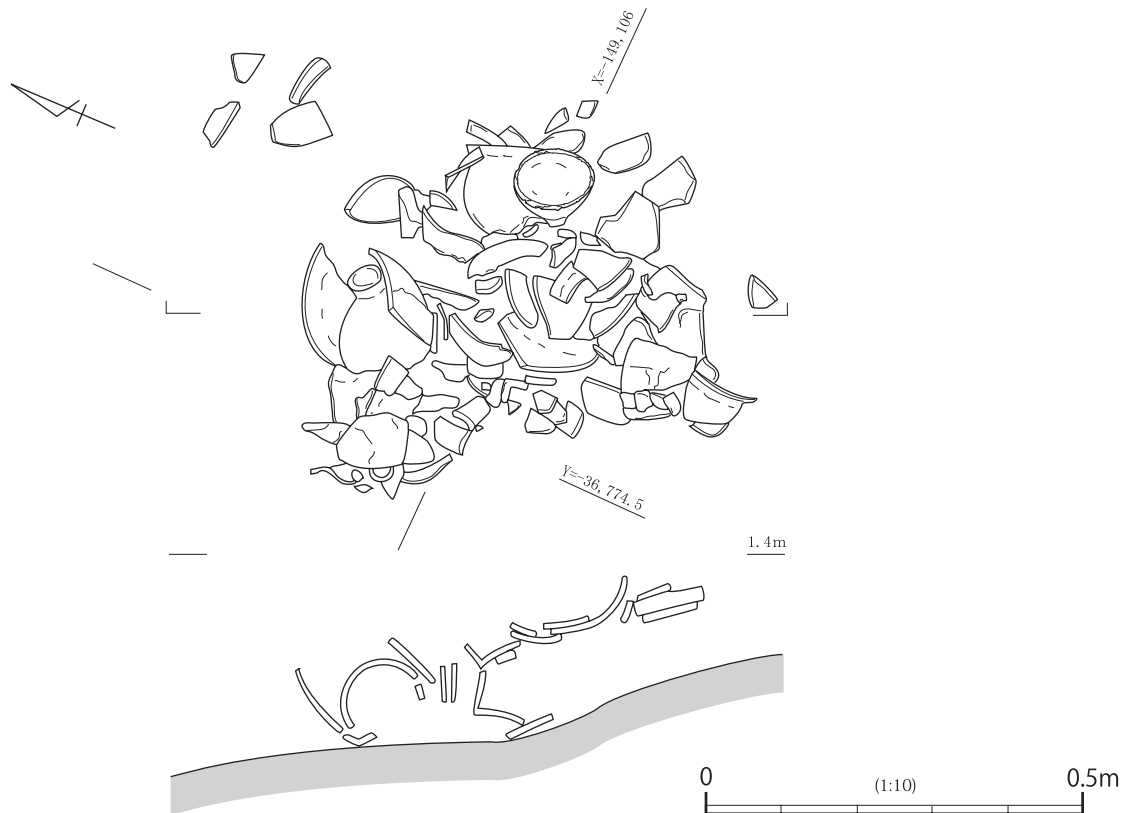


図37 盛土東裾部 遺物出土状況 平面・断面図

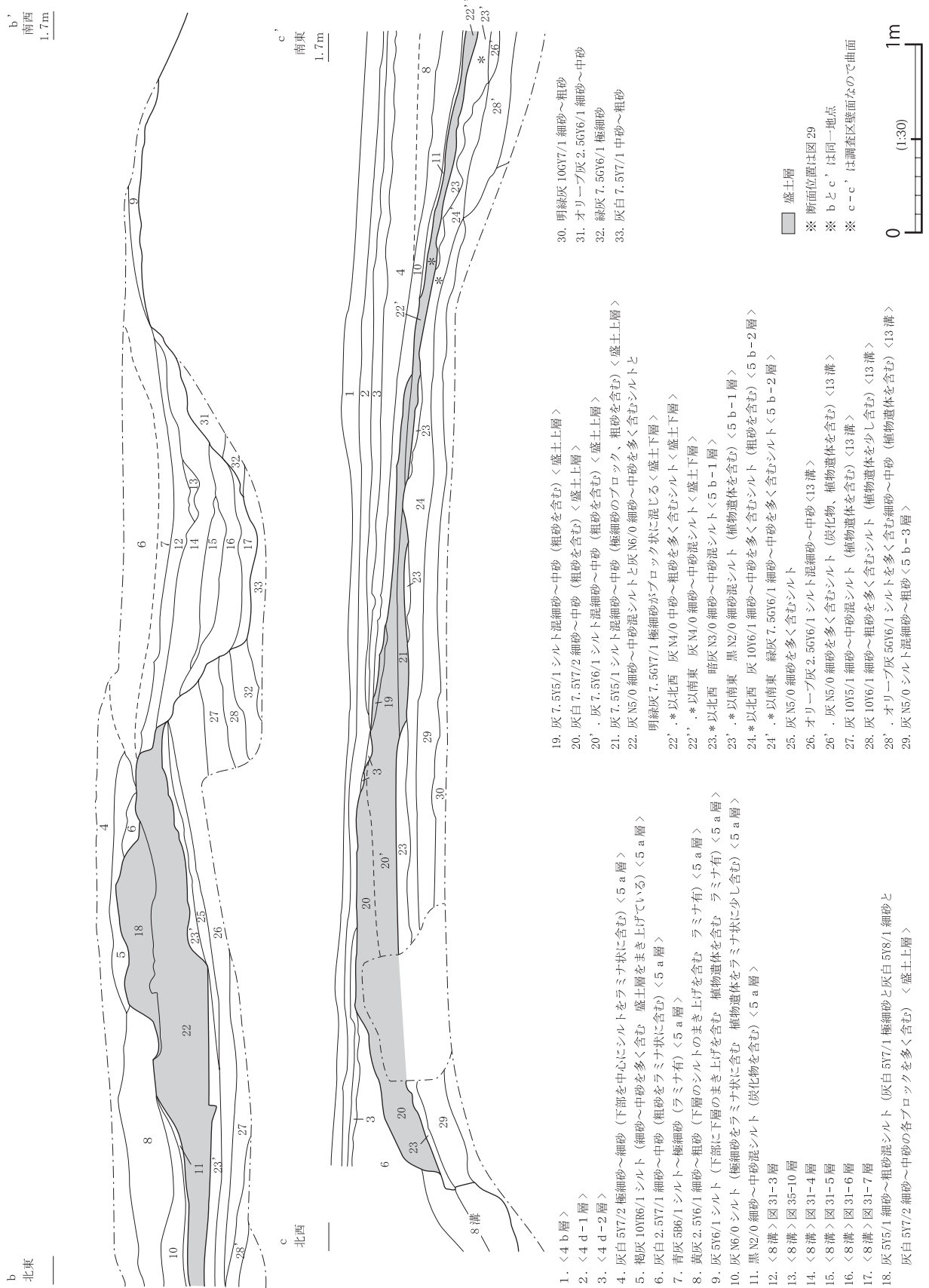


図38 盛土 断面図

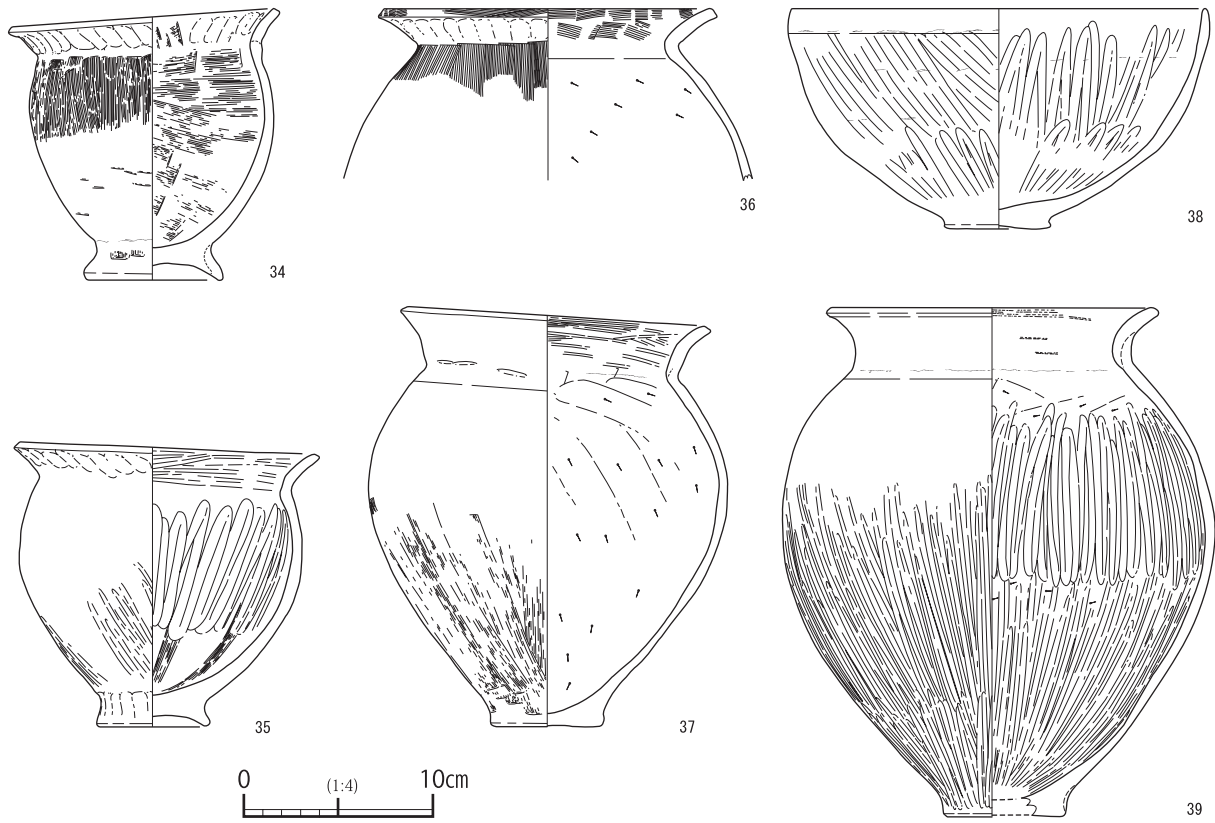


图39 盛土東裾部 出土遺物

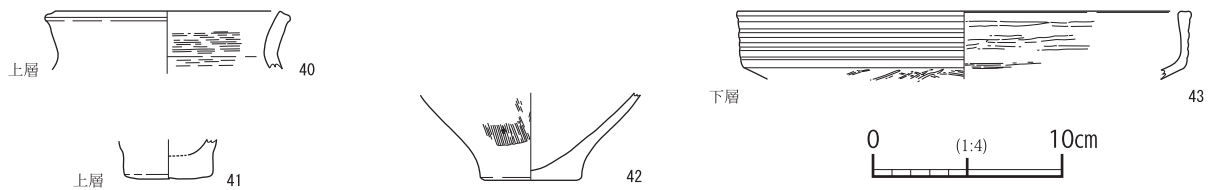


图40 盛土層 出土遺物

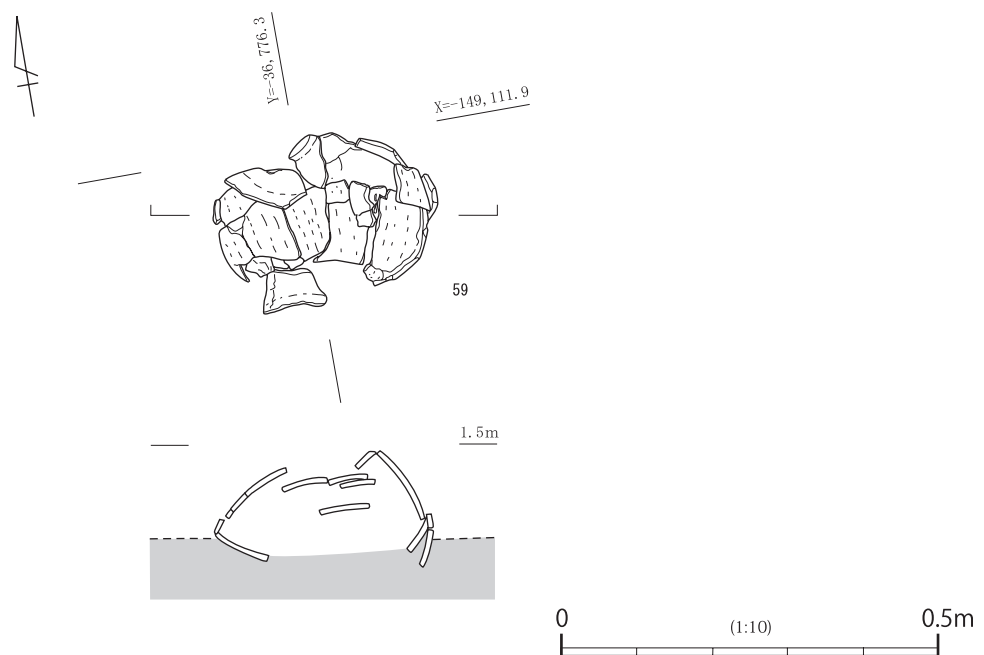


图41 土器集積 出土狀況 平面・断面図



図42 土器集積 出土状況 平面図

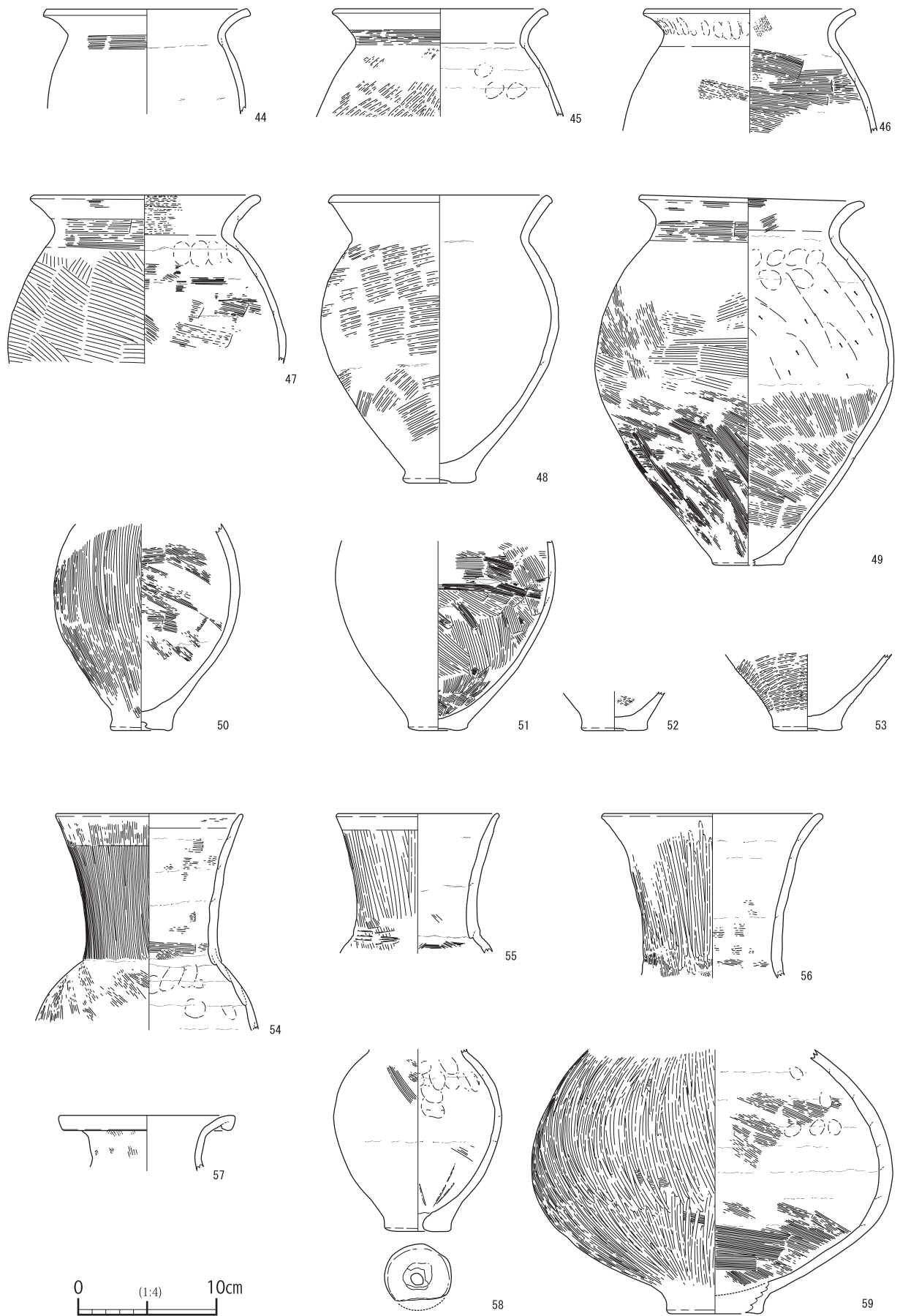


图43 土器集積 出土遺物

性がある。

土器群は5 b - 1層上に載っており、5 a層シルト層に覆われている。破片であるが、比較的原形を留めているものも認められる。出土状況から、遺構面上に置かれたものが5 a層の堆積によって埋没したと考えられる。

8溝の西肩部に多く分布している。小片が8溝B地点(図31 - 6層上面)出土の甕(5)と接合した。器種の判別できるものは、高杯等の脚小片が1点あるほかは、すべて甕と壺である。図化できたのは、甕(44~53)、壺(54~59)である。弥生時代後期の時期が与えられる。

2. 第4 a - 2面(図44 図版15)

5 b - 2層はシルト混じり細砂~中砂で、土壌化している。上面で土坑、ピット、集石を検出した。中央部には南北方向の12溝が存在していたと考えられる。

9土坑(図45・46 図版33・58)

調査区西端部に位置する。側溝と重なり西部分を確認できなかったが、東西1.5m以上、南北約1.0m

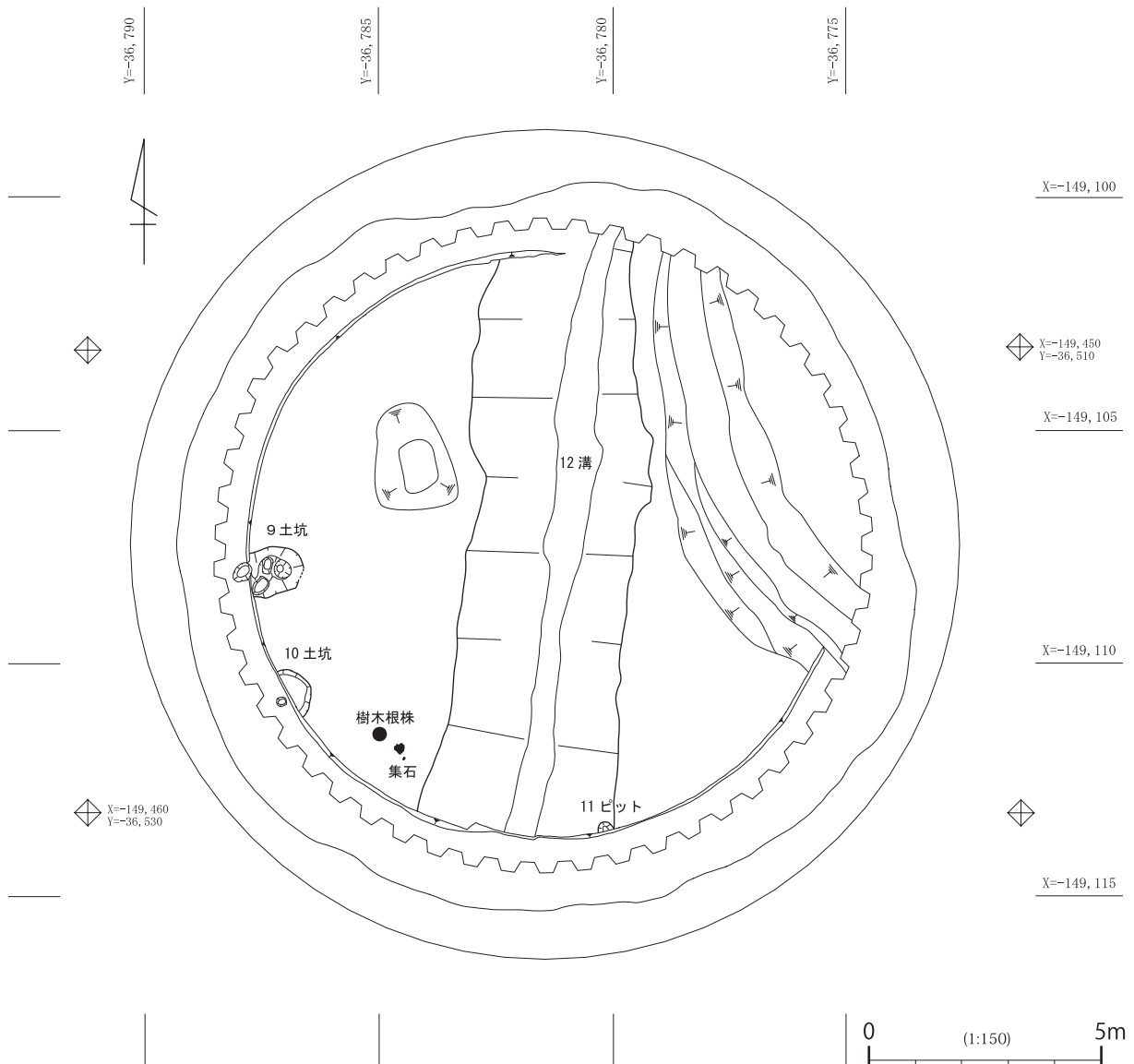


図44 第4 a - 2面 平面図

の楕円形かと思われる。土坑の深さは0.1~0.2mであるが、内部に遺構面からの深さ0.5~0.7mのピットが複数掘られている。ピットは4基以上で、平面形は不整な楕円形である。長径約4.0m、短径0.2~0.4mで、大きさは一定ではない。

埋土はピット部分も含め、シルトや細砂等がブロック状に混じっている。

遺物は、砥石 (60) のほか、弥生土器の小片が少量出土している。

10土坑 (図45 図版33)

調査区南西端部に位置する。側溝と重なり北東部のみを検出した。側溝底面でピットを検出している

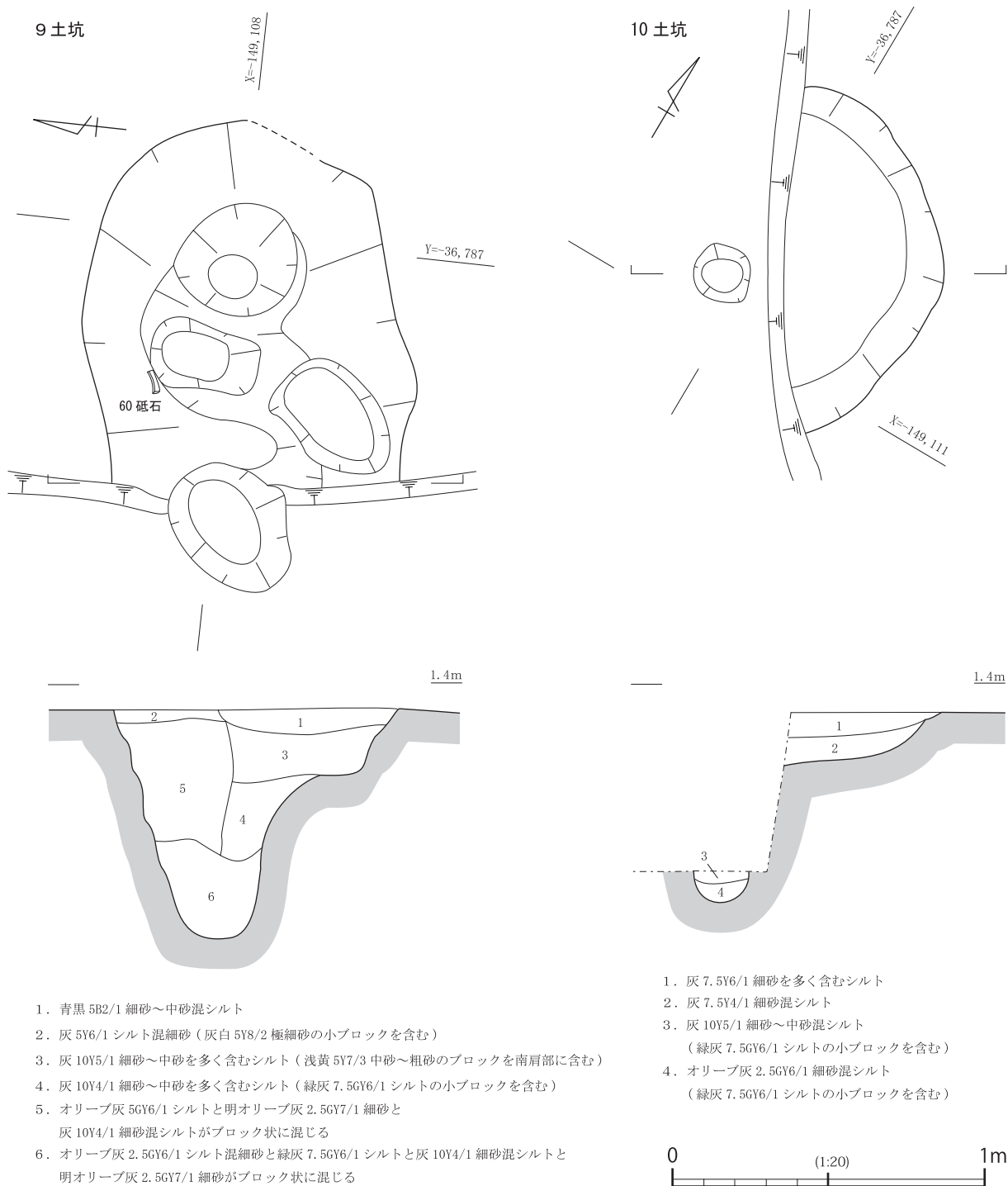


図45 9・10土坑 平面・断面図

が、土坑との位置関係や埋土から、9土坑内部のピットと同様のものと考えられる。

北東 - 南西方向0.8m以上、北西 - 南東方向約1.1mで、深さは約0.2mである。ピットの深さは、遺構面から約0.6mである。

埋土は細砂混じりシルト、ピット部分ではシルトのブロックを含む細砂混じりシルト等である。

遺物は出土していない。

11ピット (図47 図版33)

調査区南端部に位置する。側溝と重なり南部を確認できなかったが、径約0.3mと思われる。深さは約0.3mである。

埋土は、基盤層の小ブロックを含む細砂～中砂混じりシルト等である。

遺物は出土していない。

集石 (図48 図版34・57・58)

調査区南西部に位置する。直径約0.2mの範囲に、礫が積み重なっている。

礫は38個で、約0.1m南東で検出したものも含めると39個である。長さ5～8cm、幅2～4cmで、細長

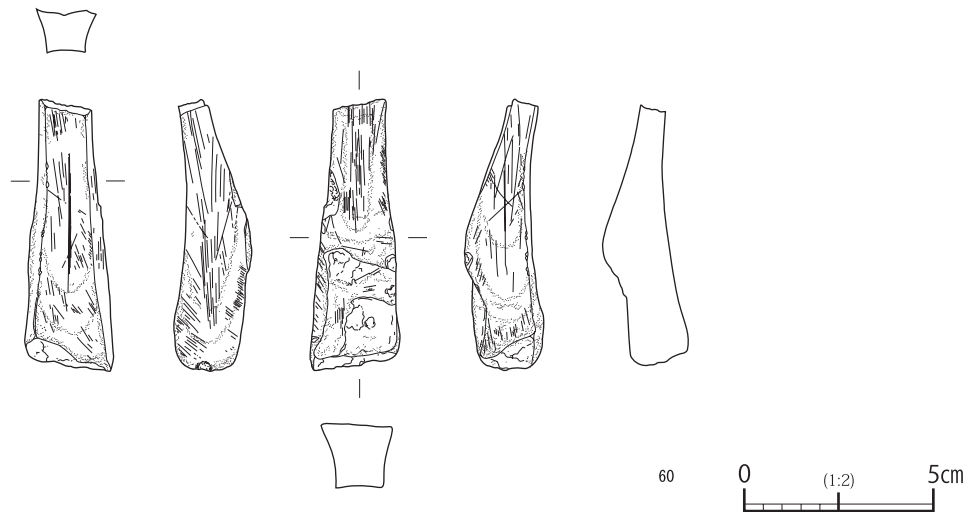
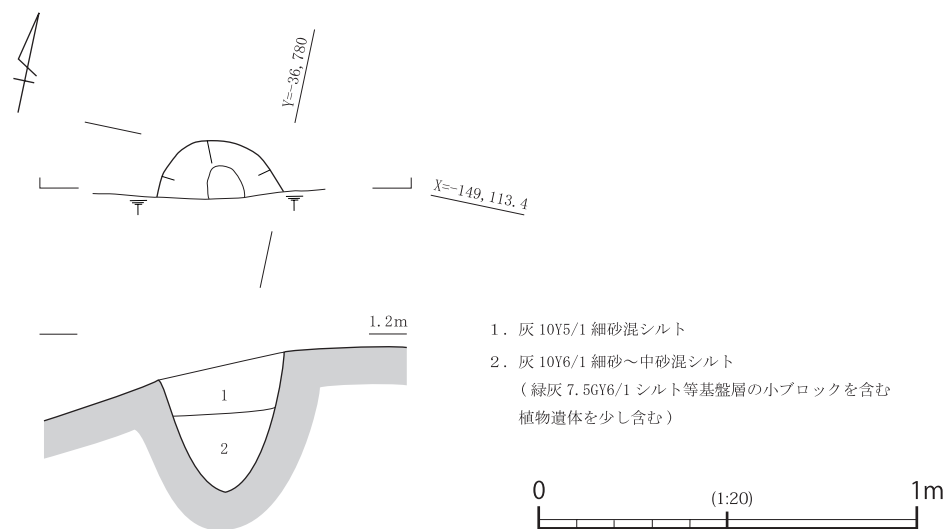


図46 9土坑 出土遺物



1. 灰 10Y5/1 細砂混シルト
2. 灰 10Y6/1 細砂～中砂混シルト
(緑灰 7.5GY6/1 シルト等基盤層の小ブロックを含む植物遺体を少し含む)

図47 11ピット 平面・断面図

い形状のものが多い。付表9に一覧を掲載している。

5 b層、下層の6層にもこの大きさの礫は含まれておらず、出土状況からみて人為的に置かれたものと考えられる。礫除去後に5 b - 2層上面で精査を行ったが、遺構等は検出していない。

上面の第4 a - 1面で確認した樹木の根株が、約0.4m西に位置している。根株を確認したのは5 a層を除去して5 b - 1層上面を検出した際であるが、5 b各層は層厚が薄く、樹木の生育していた遺構面を特定するのは難しい。集石と同じ遺構面に帰属するならば、樹木の下に石が積まれたことも考えられる。樹木については樹種鑑定を行い、ミズキ属という結果を得ている。

なお、第4 a - 3面12 - 2溝上層から2点、13溝最上層から1点、同様の大きさ、形状の礫が出土している。

集石に伴う遺物は出土していない。

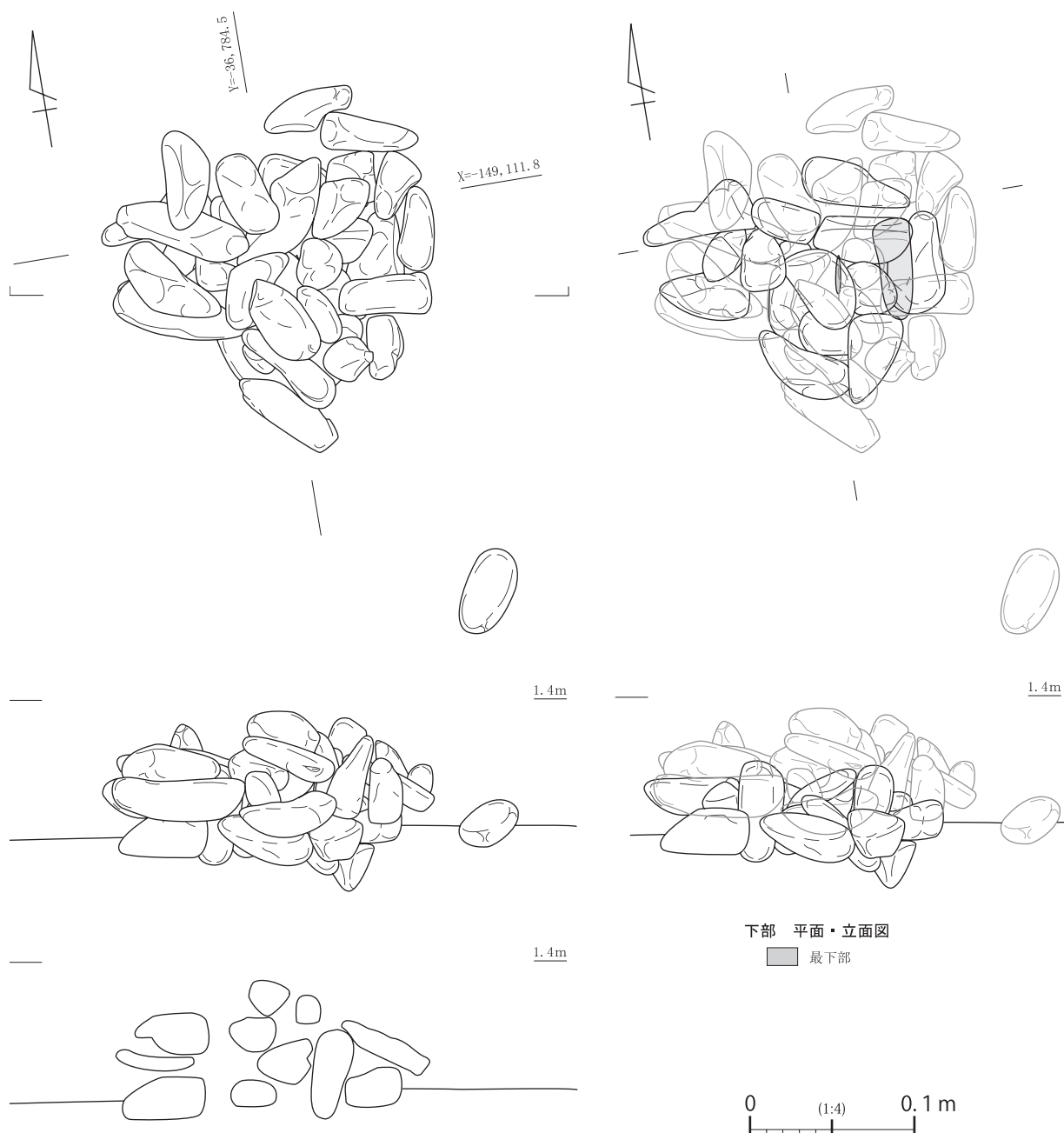


図48 集石 平面・断面・立面図

3. 第4 a - 3面 (図49 図版15)

5 b - 3層は細砂混じりシルトで、強く土壌化している。上面で溝を検出した。

12 - 2溝 (図49~64 図版35~37・58~70)

調査区中央に位置する南北方向の溝である。調査区外にのびており、検出長約12.5m、深さ約1.4mである。断面形がV字型を呈しており、人為的に掘削されたと考えられる。底面のレベルは一定していない。

第4 a - 1面12 - 1溝の底面土壌層を除去すると、埋土が確認できる。埋土と肩部の土壌層との関係を把握することが困難で、帰属面を確認することができなかった。ただ、詳細は後述するが、13溝と一体として機能していたと考えられることから、13溝と同じく第4 a - 3面で掘削されたと考えられる。

最下層 (図50 - 11層) は、基盤層等の小ブロックを多く含むシルト~極細砂である。下層 (図50 - 10層) は、ラミナのみられるシルト~極細砂で、流水堆積層である。中層 (図50 - 9層) は、肩部に細砂~中砂をラミナ状に多量に含み、植物遺体を多く含むシルト~極細砂で、流水堆積層と考えられる。

肩部に堆積している図50 - 8層は、シルトの小ブロックを含み、細砂~中砂を多く含むシルトで、明

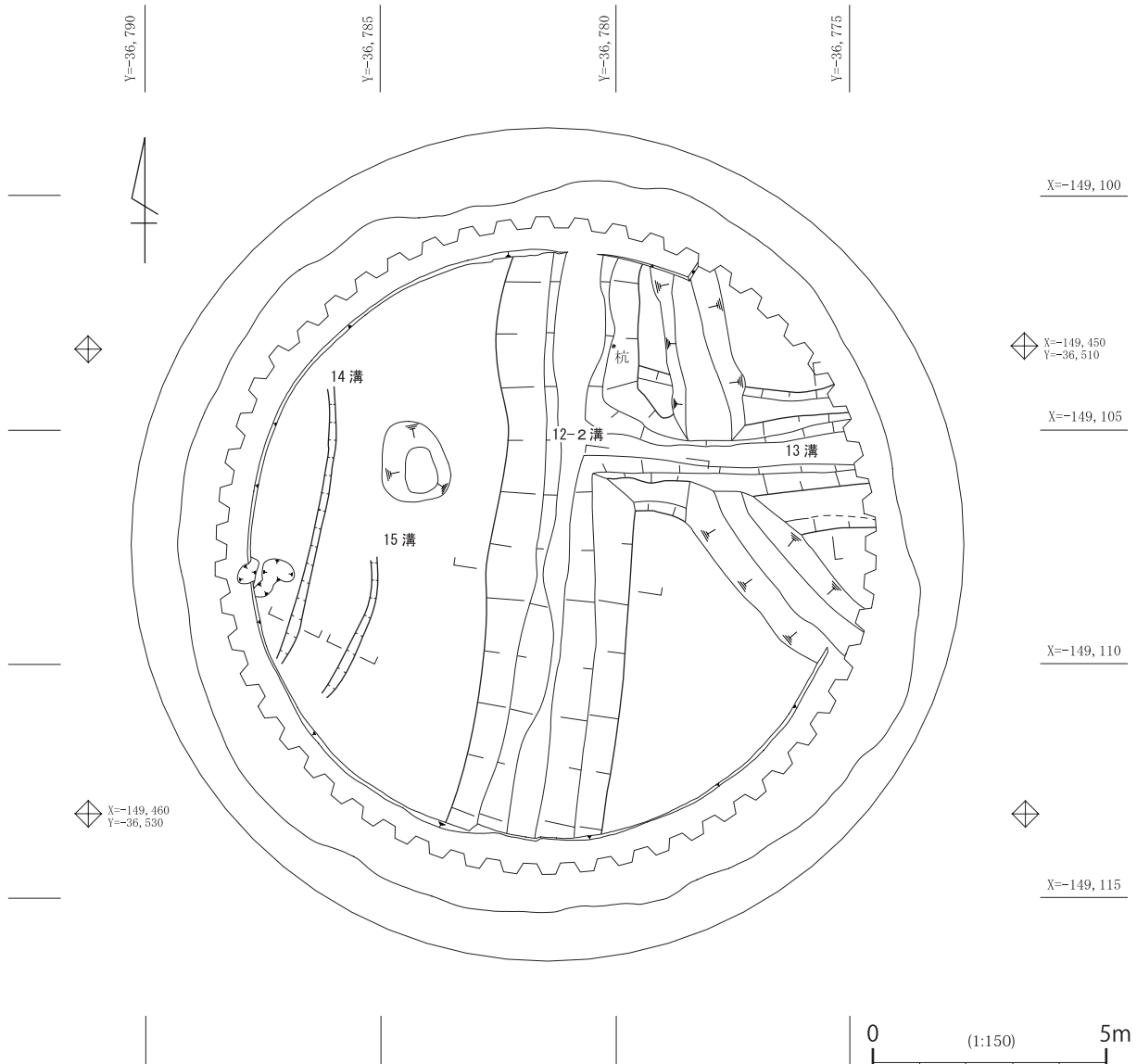


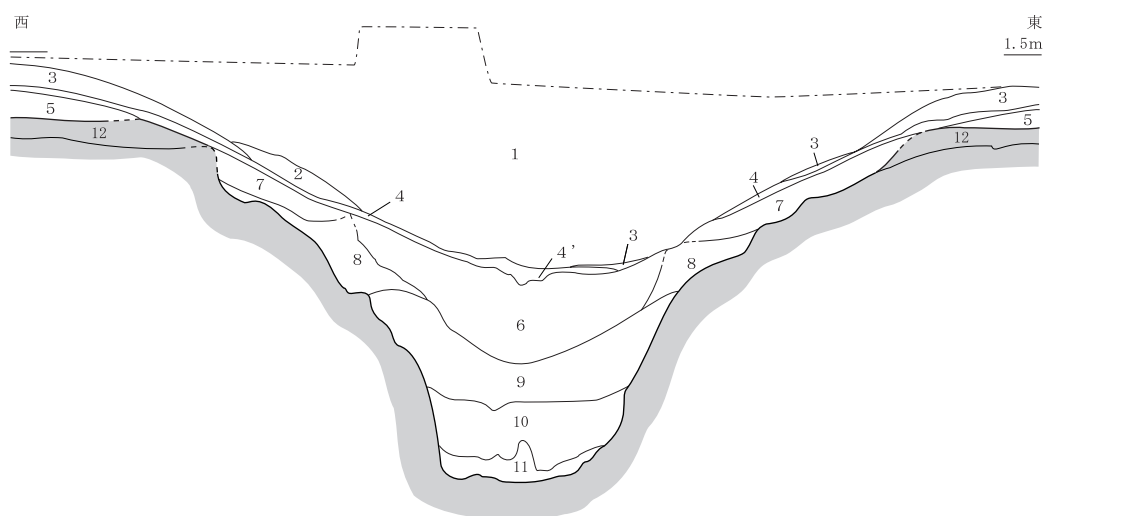
図49 第4 a - 3面 平面図

らかに水成堆積ではない。その上に堆積している上層（図50 - 6層）は、細砂～中砂をラミナ状に含み、植物遺体を多く含むシルト～極細砂で、比較的多数の土器片のほか、木製品、石器、自然木、礫等を含む。層相、遺物等の出土状況から、滞水状態であったことが想定できる。肩部の図50 - 7層は、細砂～中砂を多く含むシルトで、これも水成堆積ではない。

流水堆積層である中層（図50 - 9層）と下層（図50 - 10層）は、12 - 2溝に連結する位置関係で検出した、13溝の中層（図66 - 6・8層）と酷似している。両溝の底面のレベルも一致しており、一体として機能していたと考えられる。なお、12 - 2溝の13溝合流部以北では、流水堆積層が南部よりも厚く堆積している状況がみられた。

上層と中・下層は、層相、遺物等の含有量ともに全く異なっている。中・下層部は、第4 a - 3面時に13溝と一体となり、流水を伴う溝として機能していたと考えられる。上層部は、中・下層部が埋没し、さらに図50 - 8層等のブロックを含む層準が溝を埋めた後、滞水状態となった部分である。層内の土器片、木製品、石器、自然木、礫等は、流水により運ばれたものとは考え難く、人為的に入れられたことが想定できる。

上層については帰属面を明らかにできていない。埋没が進んだ段階で再掘削された部分である可能性もある。また第4 a - 2面、第4 a - 1面の古い段階に機能していた可能性も否定することはできない。



1. 灰白 5Y7/2 細砂～中砂（粗砂をラミナ状に含む 肩から底部にかけて最下層にシルトをラミナ状に含む 下部に木片を含む）〈5 a層〉
2. 明黄褐 10YR6/6 中砂と暗灰 N3/0 細砂混シルトがブロック状に混じる〈5 a層〉
3. 黄灰 2.5Y6/1 シルト（植物遺体をラミナ状に含む）〈5 a層〉
4. 暗灰 N3/0 細砂～中砂混シルト（植物遺体を少し含む）〈5 b-1層〉
- 4'. 底部 暗灰 N3/0 シルト～極細砂（植物遺体を含む）
5. 灰 5Y5/1 細砂～中砂を多く含むシルト〈5 b-2層〉
6. オリーブ黒 5Y3/1 シルト～極細砂（細砂～中砂をラミナ状に含む 植物遺体を多く含む 土器、木製品等を含む）〈上層〉
7. 灰 10Y4/1 細砂～中砂を多く含むシルト〈肩部〉
8. オリーブ灰 2.5GY6/1 細砂～中砂を多く含むシルト（シルトの小ブロックを含む）〈肩部〉
9. 灰 5Y5/1 肩部に細砂～中砂をラミナ状に多量に含むシルト～極細砂（植物遺体を多く含む）〈中層〉
10. 灰 7.5Y5/1 シルト～極細砂（下部に灰白 7.5Y7/1 細砂～中砂をラミナ状に含む）〈下層〉
11. 灰 5Y5/1 シルト～極細砂（暗紫灰 5P4/1 シルト（基盤層）、明緑灰 7.5GY7/1 極細砂等の小ブロックを多く含む）〈最下層〉
12. 暗灰 N3/0 細砂～中砂混シルト〈5 b-3層〉

※ 断面位置は図 49

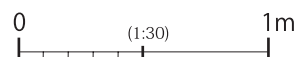


図50 12 - 1・2溝 断面図

北部で杭(121)を検出した。東肩部に打設されているが、溝埋土との関係は確認できていない。残存長23.7cm、幅7.4cmで、下部15cmが基盤層に及んでいる。ミカン割材を使用し、先端を尖らせる加工を施している。樹種はアカガシ亜属である。また、掘削中に抜けてしまい、記録を残すことができなかったが、同箇所西肩部でも杭を1本確認している。杭は、第4a-1面12-1溝の東側に位置する8溝内で検出した2本の杭と東西方向に並ぶ位置関係にあることも勘案すれば、12-1溝に伴うものである可能性も考えられる。

上層から比較的多くの遺物等が出土した。出土レベルはばらついており、層内に散在している状態である。ただし、調査区南端部で出土した木製品等、まとまりをもつ一群もみられる。なお、先行して掘削した溝の東半部出土遺物については、上層として取り上げたもののなかに、ごく少数とは思われるが肩部、中層、下層等に帰属するものが紛れている可能性がある。

弥生土器は、鉢(68~72・104)・水差(73)・蓋(74)・甕(75~91)・壺(92~99)・高杯(100~103)、脚(105~109)、把手(164)等である。破片で、接合するものは比較的少ない。いずれも生駒西麓系の胎土でススが付着しているものが目立つ。掲載したもの以外にコンテナ1箱分の小片がある。

木製品には、横槌(118・119)、背負子(120)、櫓(122)、櫓未成品(123)、一木鋤(124)のほか、

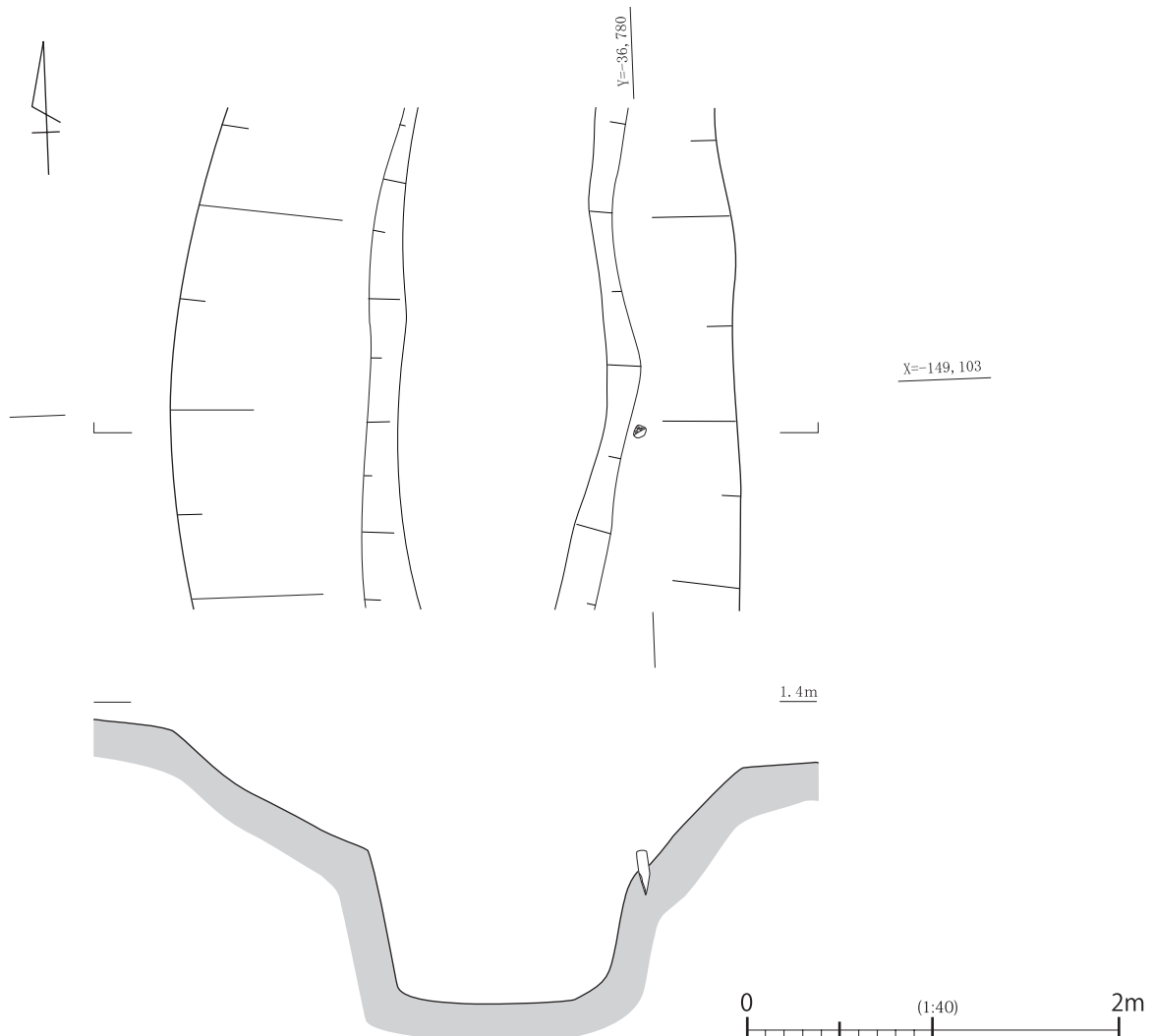


図51 12-2溝 杭 平面・立面図

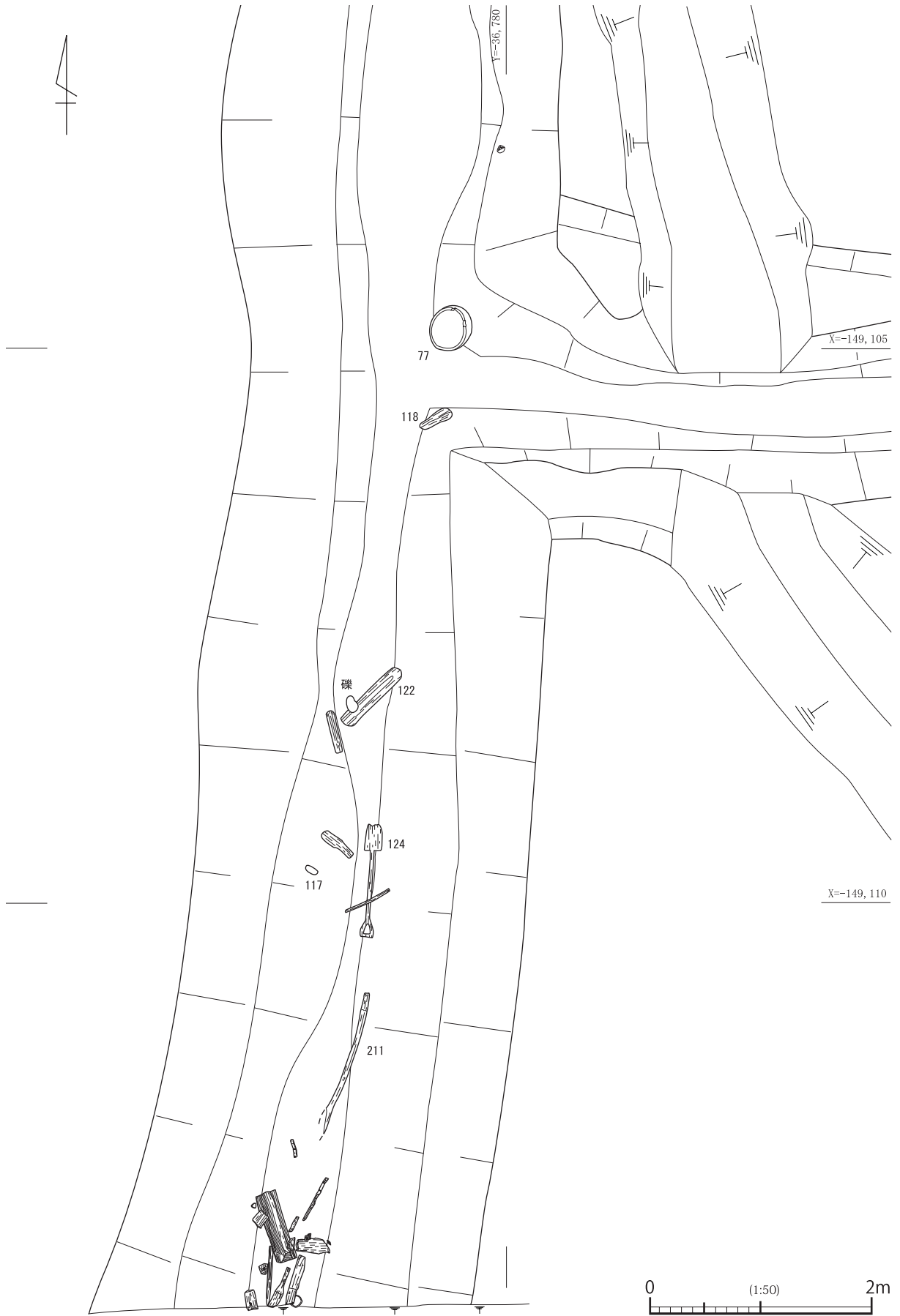


图52 12-2溝 木製品、石器等 出土状況 平面図

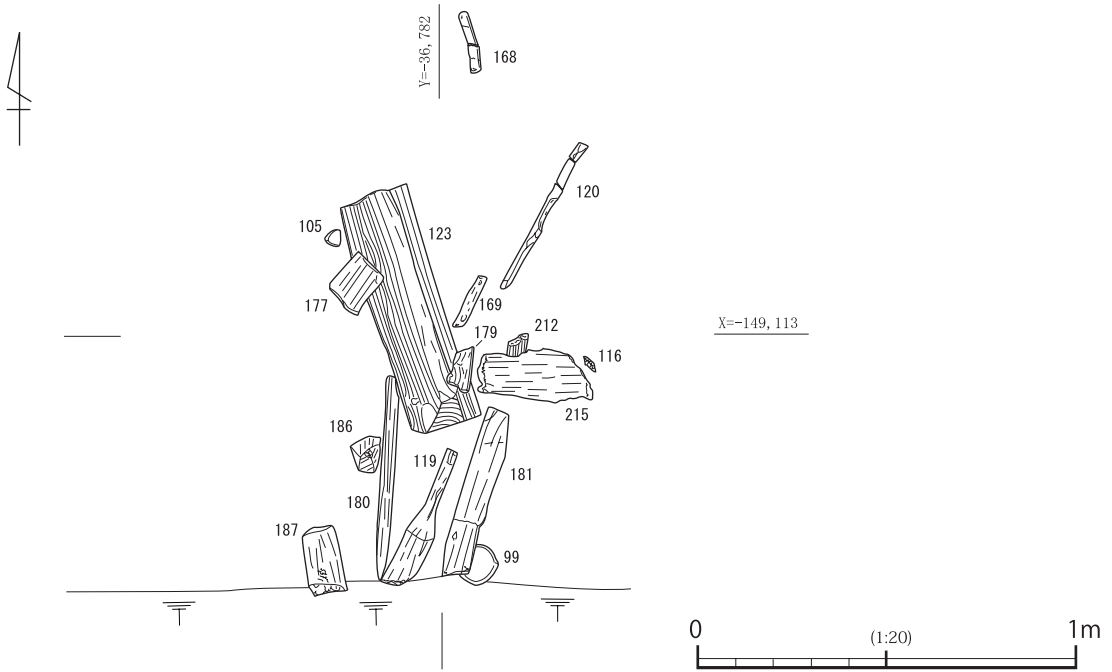


図53 12-2溝南端部 木製品等 出土状況 平面図

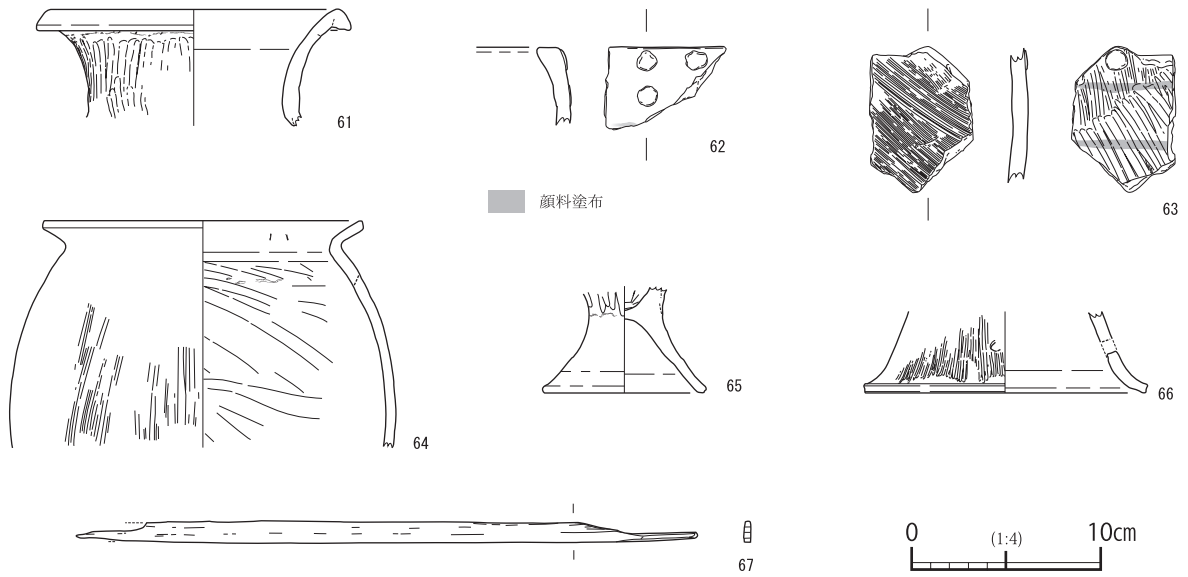


図54 12-1・2溝境界部 出土遺物

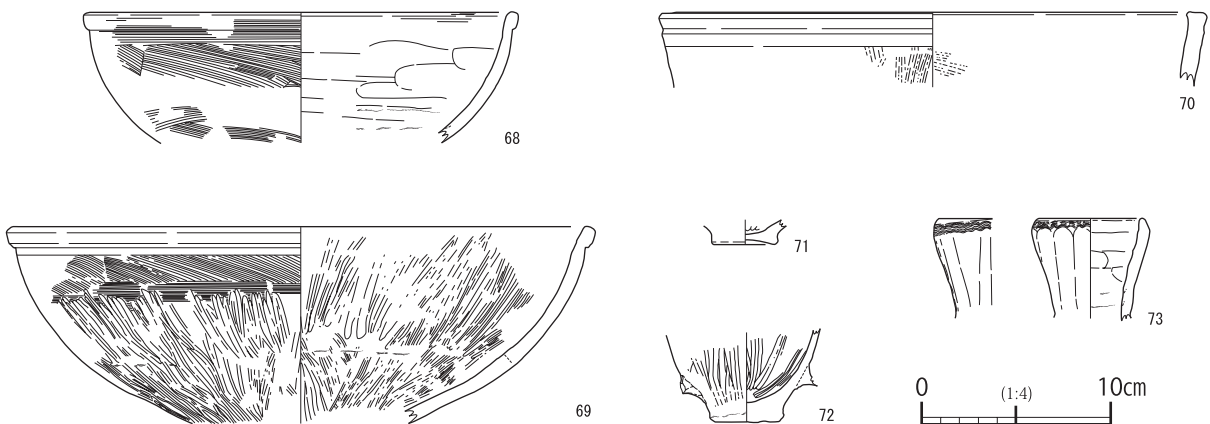


図55 12-2溝 上層 出土土器(1)

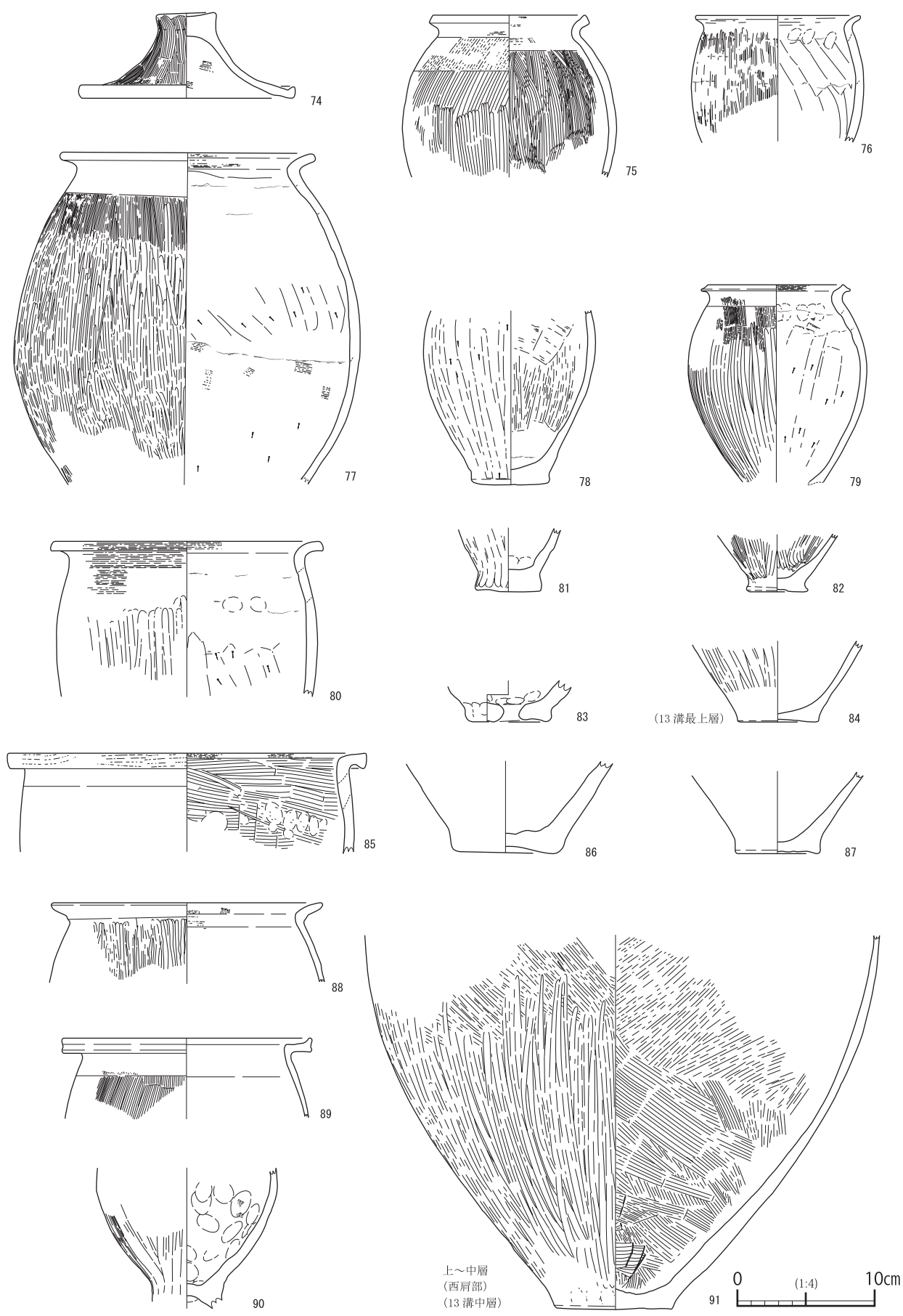


图56 12-2溝 上層 出土土器(2)

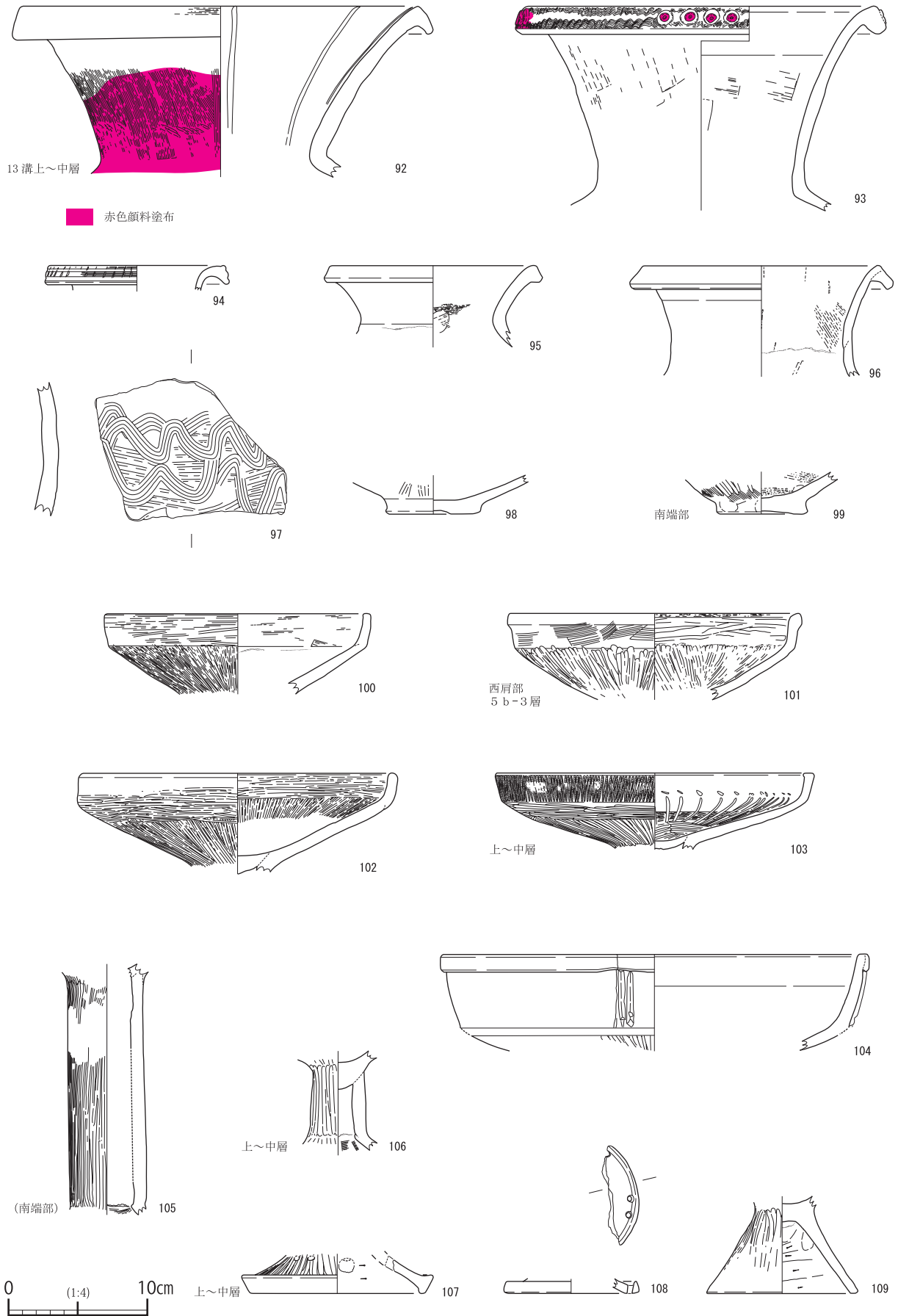


図57 12-2溝 上層 出土土器(3)

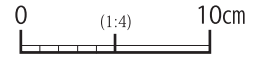
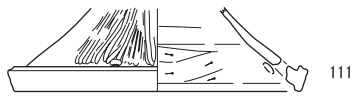
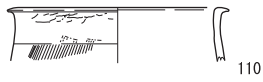


図58 12-2溝 西肩部 出土遺物

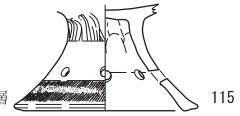
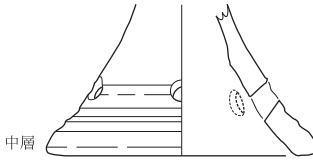
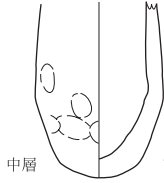
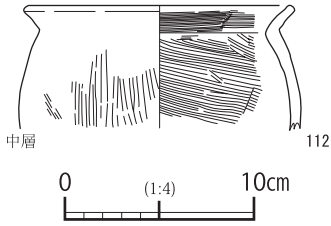
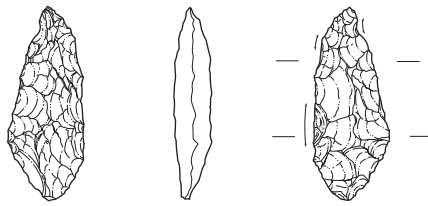
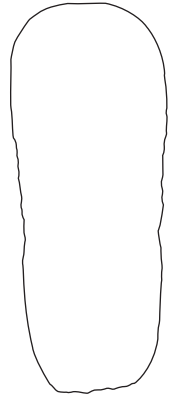
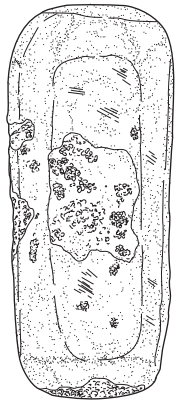
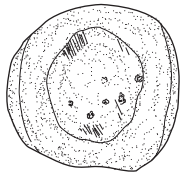


図59 12-2溝 中層、下層 出土遺物



南端部

←→ 矢印間は敲打によるツブレ



117

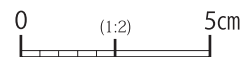
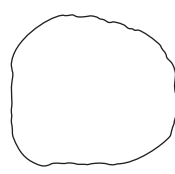
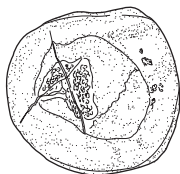


図60 12-2溝 上層 出土石器

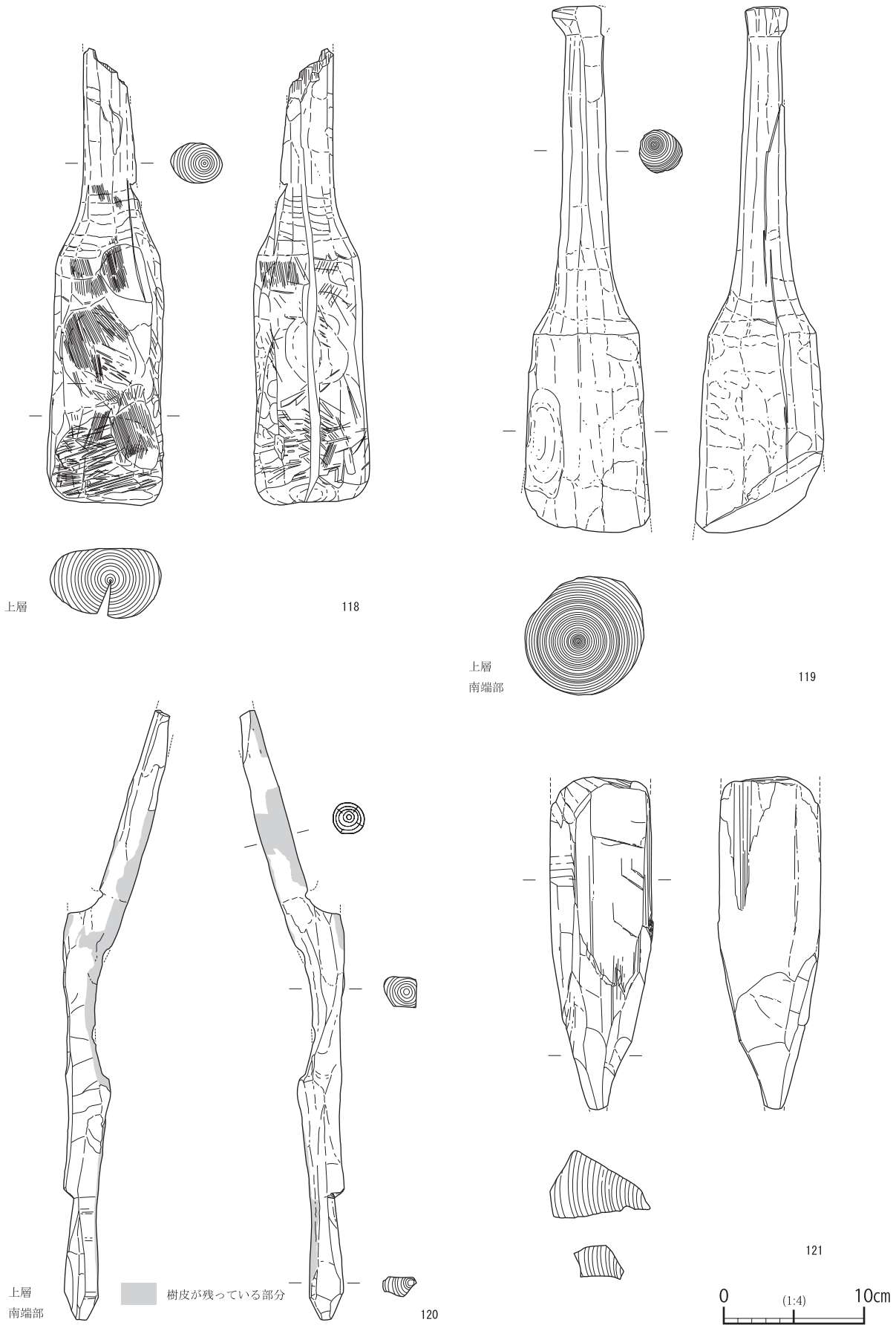


図61 12-2溝 出土木製品(1)

杭（165）、棒状（167～172）、板状（173～181）のものや、分割材（182～187）等も認められる。自然木も少なからず含まれていた。付表10～12に樹種同定の結果を掲載している。

石器は、石鏃（116）、敲・磨石（117）の2点である。石鏃は側面にツブレが認められることから、失敗品の可能性がある。また、第4 a - 2面集石の礫と同様のものが2点出土している。そのほか自然礫には、20cm大のもの等もみられる。

肩部（図50 - 7・8層）からは、弥生土器鉢（110）・脚（111）等の小片のほか、杭（166）が出土している。

中層からは、弥生土器甕（112）・飯蛸壺（113）・脚（114）等の小片が少量出土している。

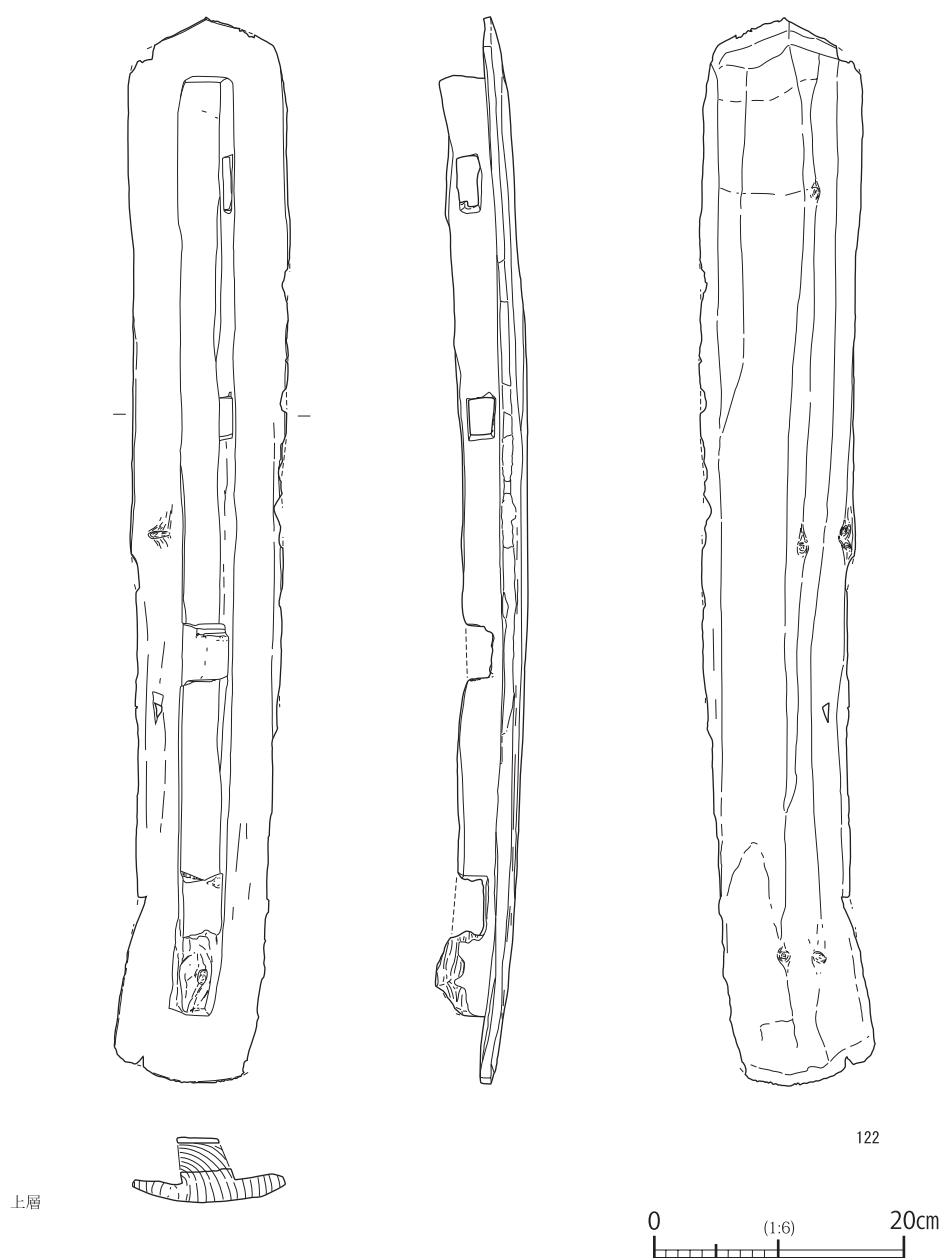


図62 12 - 2 溝 出土木製品（2）

下層からは、弥生土器脚（115）等の小片が少量出土している。

いずれも弥生時代中期末のものである。

なお、第4 a - 1面12 - 1溝の底面土壌層を掘削した際、比較的多数の土器が出土した。遺物を豊富に含む12 - 2溝上層の直上にあたる、厚さ数cmの層である。やや掘り下げ過ぎたこともあり、出土した遺物の多くが12 - 2溝上層に帰属する可能性が高いと思われる。図54に掲載した。弥生土器壺（61～63）・甕（64）・脚（65・66）、棒状木製品（67）で、ほかに板状破材、サヌカイト剥片等がある。壺（63）には、横線状に顔料が塗布されている。付表10に、木製品等の樹種同定結果を掲載している。

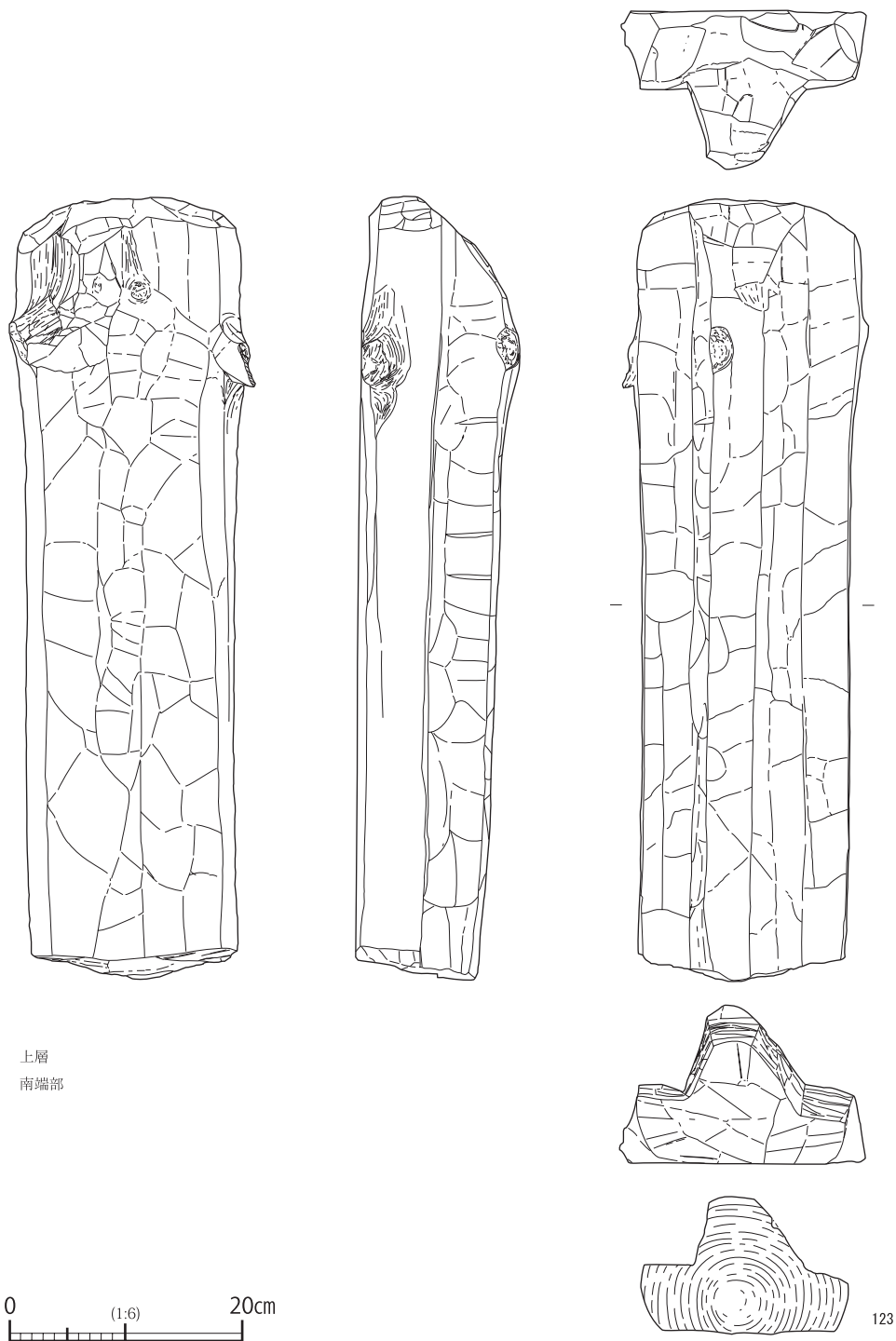


図63 12 - 2溝 出土木製品（3）

13溝 (図49・65～67 図版35・38・70～72)

調査区東部に位置する東西方向の溝である。調査区外にのびており、検出長約6.0m、幅約3.0m、深さ約1.2mである。断面形がV字型を呈しており、人為的に掘削されたと考えられる。

西端が12-2溝に連結していたと思われる。底面のレベルは、西に向かって低くなっている。

最下層(図66-11層)は、シルトのブロックを含む細砂～中砂混じりシルトである。その上の図66-10層は、ラミナのみられる中砂～粗砂で、明らかな流水堆積である。下層(図66-9層)は、シルト～細砂でブロックが目立つ。西部では中砂をラミナ状に含み、西端部では中砂が主体となる。明らかな流水堆積である。中層のうち図66-8層は、肩部に細砂～中砂をラミナ状に多く含み、シルトをラミナ状

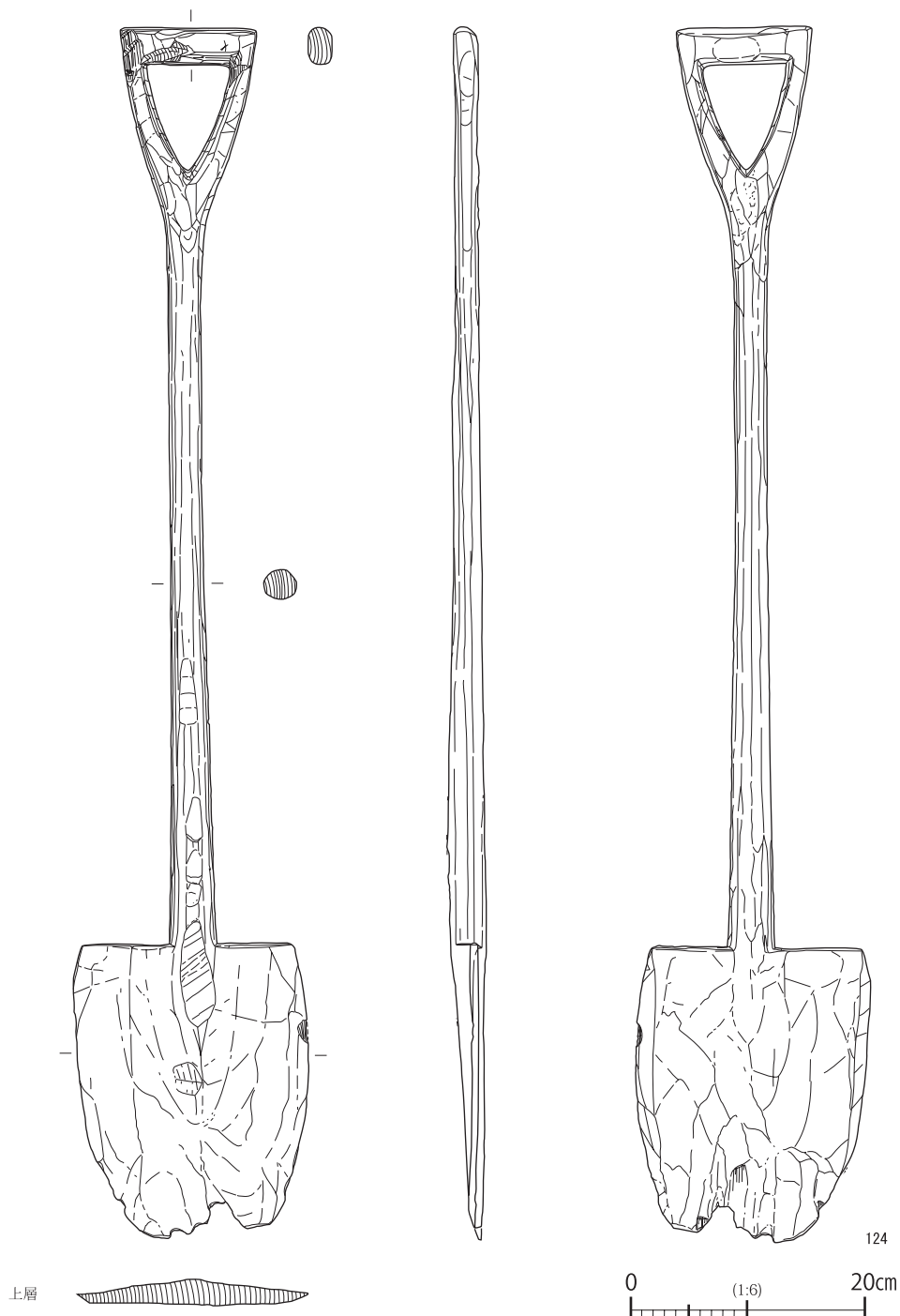


図64 12-2溝 出土木製品(4)

に含む極細砂である。西部ではシルトをラミナ状に含む細砂～中砂で、西端部ではシルトが主体となる。流水堆積である。中層のうち図66-6層は、肩部に細砂～中砂を含む、ラミナのみられるシルト～極細砂で、植物遺体を含む。上層（図66-3層）は、ラミナのみられる細砂～中砂混じりシルトで、植物遺体を含む。西端部では細砂～中砂が主体となる。最上層（図66-2層）は、細砂～中砂混じりシルトである。なお、東西方向の断面は、西部では溝中央部であるが東部は南肩部に寄っている。

下層から中層にかけての流水堆積層は、いずれも西に向かってレベルを下げており、12-2溝に流入していたと考えられる。12-2溝の項に記したとおり、中層が12-2溝の中・下層に対応すると思われる。そうであれば、13溝の下層は12-2溝下層より先に堆積したことになる。なお、上層は、肩部のブロック層を挟んで中層の直上にあることや遺物の出土状況から、12-2溝上層と対応する可能性もある。

図38に、13溝と5b層の記録がある。溝肩は5b-3層で、5b-1・2層は溝埋土上に載っている。5b-1・2層ともに溝埋土上では変色したり層理面が波打つようにやや乱れたりしている。これは、13溝が埋没はしているものの、遺構面より0.3～0.4m低い窪みとして残っていたことに起因していると思われる。第4a-1面の盛土がこの箇所に厚く施された理由も同じである。なお、図66の0・1層は、溝埋土上面に堆積した5b層である可能性がある。

最上層から弥生土器甕（125～132）・脚（133）・壺（134・135）等が出土している。ただし、最上層として取り上げたもののなかには、図66-2層以外に1・4層と3・5層の肩部分出土のものも含まれている。また、上記のとおり図66-1層は5b層である可能性を持つ。上層からは弥生土器甕（136～138）・水差（139）、棒状木製品等が出土している。138・139は破片がまとまって出土しており、図65に出土状況を示している。ほかに簾状紋を持つ小片等の破片がある。中層からは弥生土器高杯（141）・脚（140）等が出土している。掲載したもの以外に弥生土器鉢・甕または壺の破片が数点ある。下層からは弥生土器壺（142・143）、分割材等が出土している。ほかに土器小片が2点ある。下層から時期の古いものが出土しているが、143は上～中層および12-2溝上層出土の小片が接合したもので、溝の時期を示すものではない。上・中層出土遺物は、弥生時代中期末のものである。

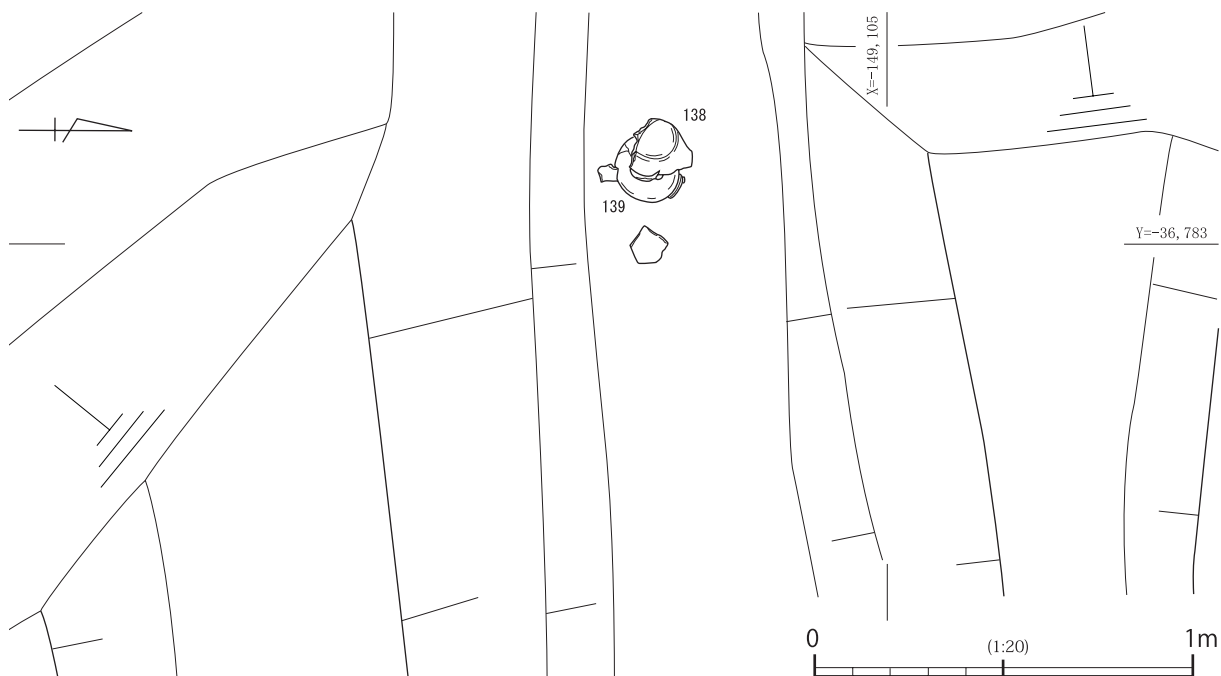
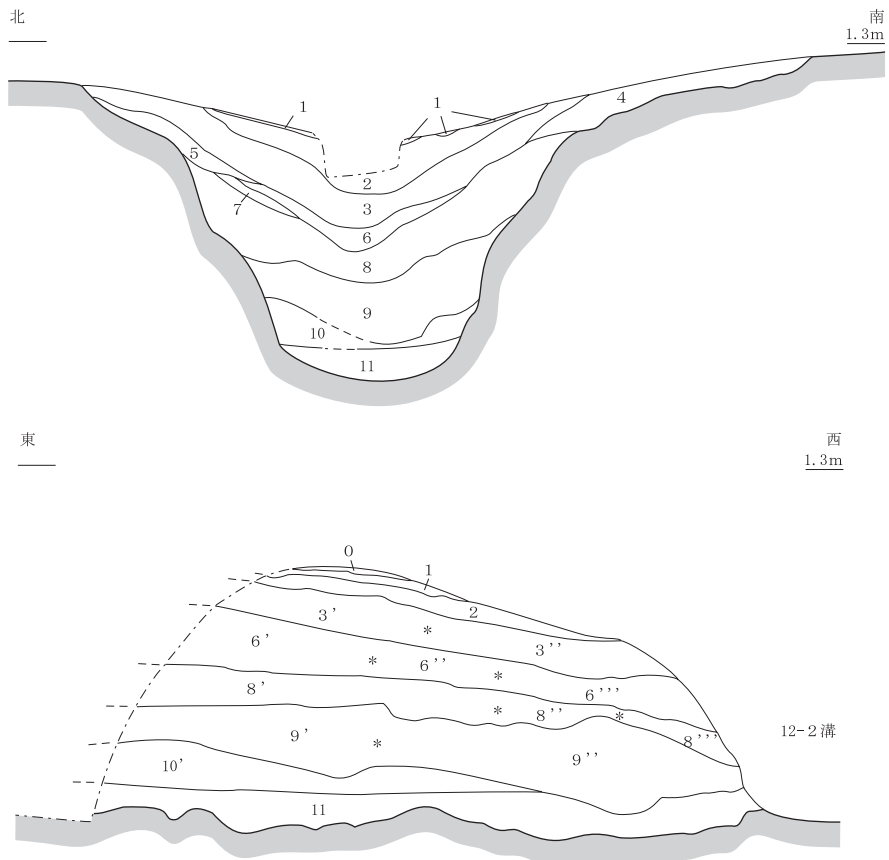


図65 13溝 遺物出土状況 平面図



0. 黒 2.5Y2/1 細砂混シルト
1. 暗灰 N3/0 中砂混シルト
2. 灰 7.5Y5/1 細砂～中砂混シルト (炭化物片、植物遺体を少し含む) <最上層>
3. 灰 7.5Y4/1 細砂～中砂混シルト (中央部分にシルトをラミナ状に含む 中砂～粗砂をラミナ状に含む 植物遺体を含む) <上層>
- 3'. *以東 灰 7.5Y4/1 細砂～中砂混シルト (細砂～中砂をラミナ状に多く含む 植物遺体を含む) <上層>
- 3''. *以西 3' にラミナ状に含まれている細砂～中砂が主体 最下部に2～3cm厚の褐灰 10YR5/1 シルト～極細砂 (ラミナ有 植物遺体を含む) <上層>
4. 灰 7.5Y6/1 細砂～中砂混シルト (オリブ灰 2.5GY6/1 細砂混シルト等のブロックを少し含む 植物遺体を少し含む)
5. 灰 N5/0 細砂混シルトとオリブ灰 5GY6/1 極細砂がブロック状に混じる (植物遺体を少し含む)
6. 黄灰 2.5Y4/1 シルト (極細砂をラミナ状に含む 肩部に細砂～中砂を含む 植物遺体を含む) <中層>
- 6'. *以東 黄灰 2.5Y5/1 シルト～極細砂 (細砂～中砂をラミナ状に多く含む 植物遺体を含む) <中層>
- 6''. 黄灰 2.5Y5/1 シルト～極細砂 (細砂をラミナ状に少し含む 植物遺体を含む) <中層>
- 6'''. *以西 黄灰 2.5Y4/1 シルト～極細砂 (ラミナ有 植物遺体を含む) <中層>
7. 灰 5Y5/1 細砂～中砂を多く含むシルト
8. 灰 5Y4/1 肩部に細砂～中砂をラミナ状に多く含む極細砂 (シルトをラミナ状に含む 植物遺体を含む) <中層>
- 8'. *以東 灰 5Y6/1 細砂～中砂 (シルトをラミナ状に含む 植物遺体を含む) <中層>
- 8''. 灰 5Y6/1 細砂～中砂 (シルトをラミナ状に多く含む 植物遺体を含む) <中層>
- 8'''. *以西 灰オリブ 7.5Y6/2 シルト (極細砂をラミナ状に含む 植物遺体を多く含む) <中層>
9. 明緑灰 7.5GY7/1 極細砂～細砂とオリブ灰 2.5GY5/1 細砂～中砂混シルトと灰 N4/0 細砂～中砂を多く含むシルトがブロック状に混じる (明緑灰 10GY7/1 極細砂のブロックを含む 植物遺体を含む) <下層>
- 9'. *以東 灰 7.5Y5/1 シルト～細砂 (中砂をラミナ状に含む シルトの小ブロックを多く含む 植物遺体を含む) <下層>
- 9''. *以西 9' に含まれる中砂ラミナ主体 (明緑灰 7.5GY7/1 極細砂～細砂と灰 N4/0 細砂～中砂を多く含むシルトの比較的大きなブロックを多く含む 植物遺体を含む) <下層>
10. 灰白 10Y7/1 中砂～粗砂 (ラミナ有)
- 10'. 10 と同一 (最下部にシルトをラミナ状に多く含む)
11. 灰 7.5Y5/1 細砂～中砂混シルト (シルトのブロックを含む 植物遺体を含む)

※ 断面位置は図 49

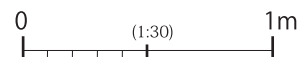


図66 13溝 断面図

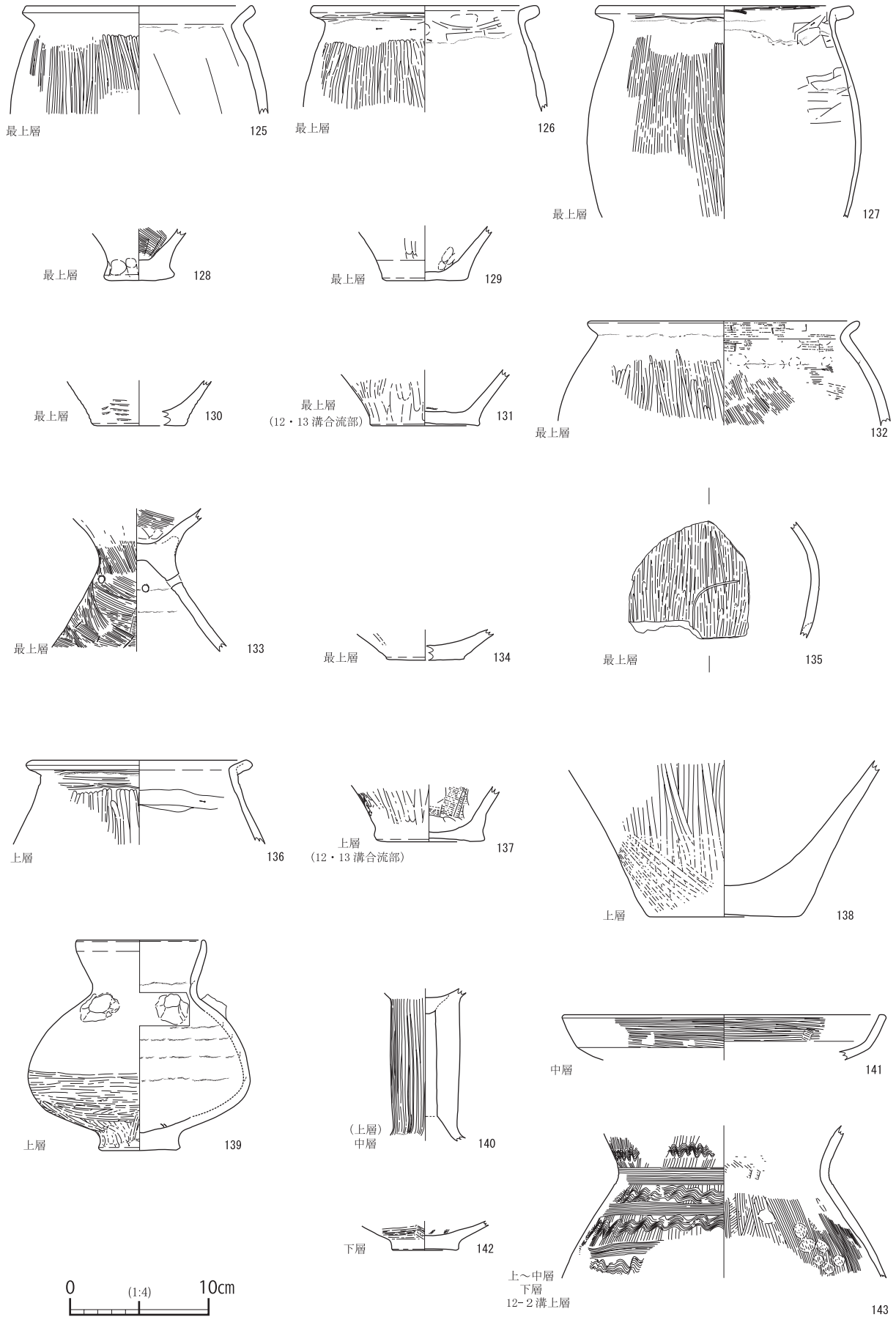


図67 13溝 出土遺物

14・15溝 (図49・68・図版39)

調査区西部に位置する、北北東 - 南南西方向の溝である。幅約0.2m、深さ0.1m未満で、1.1~1.3mの間をあけて並行している。埋土が5 b - 2層に似ており、下面の遺構の可能性はある。

遺物は出土していない。



図68 14・15溝 断面図

4. 第4 b 面 (図69 図版16)

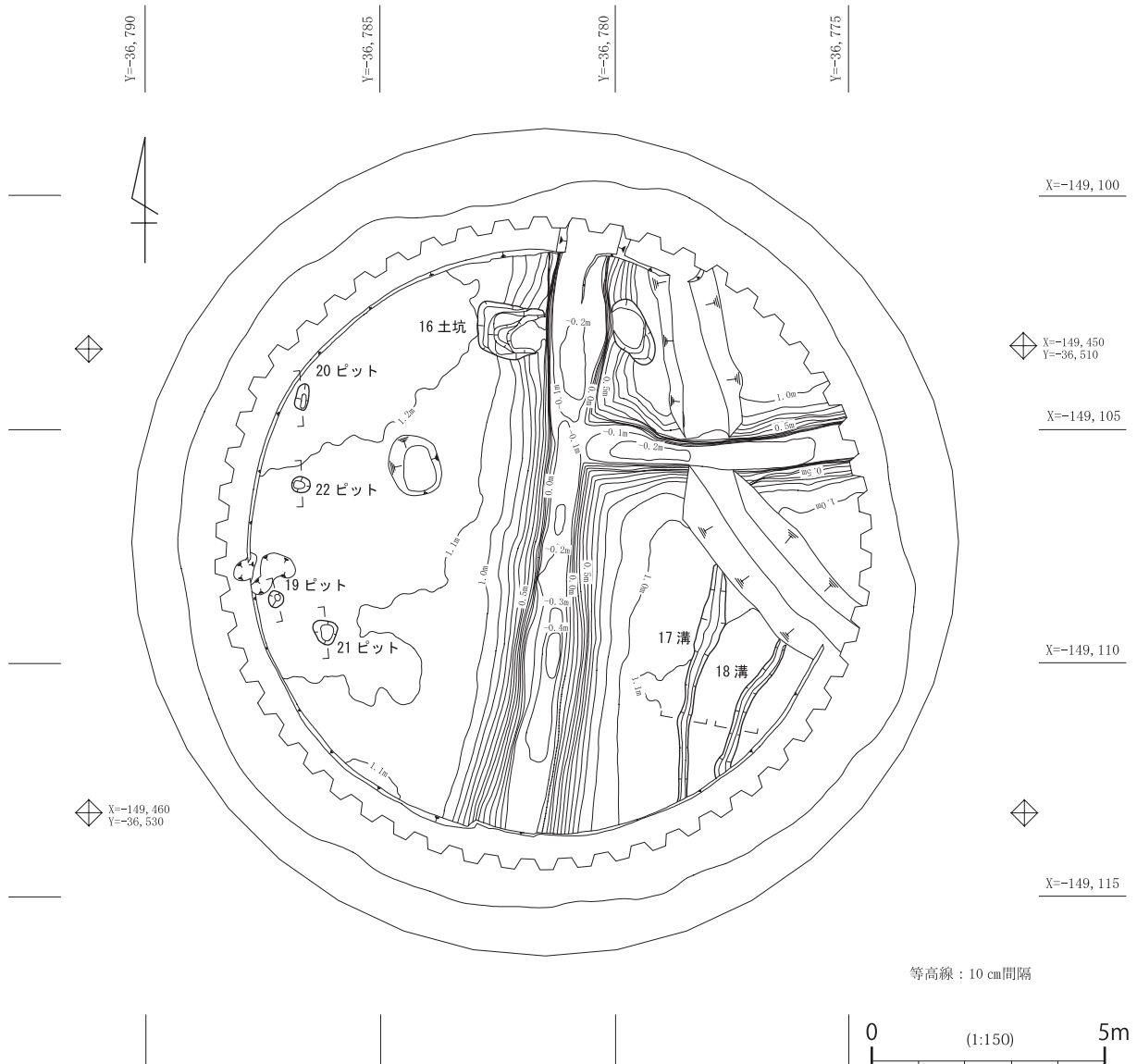


図69 第4 b 面 平面図

5 b - 3層下面である。基盤層である6層は、ラミナのみられる細砂～粗砂である。土坑、溝、ピットを検出した。

16土坑 (図70 図版39)

調査区北部に位置する。上面の12溝に切られている。溝の西側と東側で検出したものを同一の遺構と判断した。長さ約3.8m、幅約1.2mで、深さは約0.6mである。埋土はブロック土である。

遺物は出土していない。

17・18溝 (図69・71 図版39)

調査区南東部に位置する、北北東 - 南南西方向の溝である。幅約0.3m、深さ0.1m以下で、0.6～1.2mの間をあけて並行している。

遺物は出土していない。

19～22ピット (図69・72 図版40・41)

調査区西端部でピット4基を検出した。19ピットは、径約0.3m、深さ約0.4mである。断面観察から柱根の可能性が考えられる木片を検出した。樹種同定の結果はコナラ亜属である。20ピットは、長径約0.5m、短径約0.3mの楕円形で、深さは約0.3mである。埋土にブロック土が目立つ。21ピットは、径約0.5m、深さ約0.5mである。断面で柱痕を確認した。22ピットは、径約0.3m、深さ約0.3mである。埋土にブロック土を含む。21ピットから、弥生土器の小片が1点出土している。

調査区の西側に同様の遺構が展開している可能性がある。

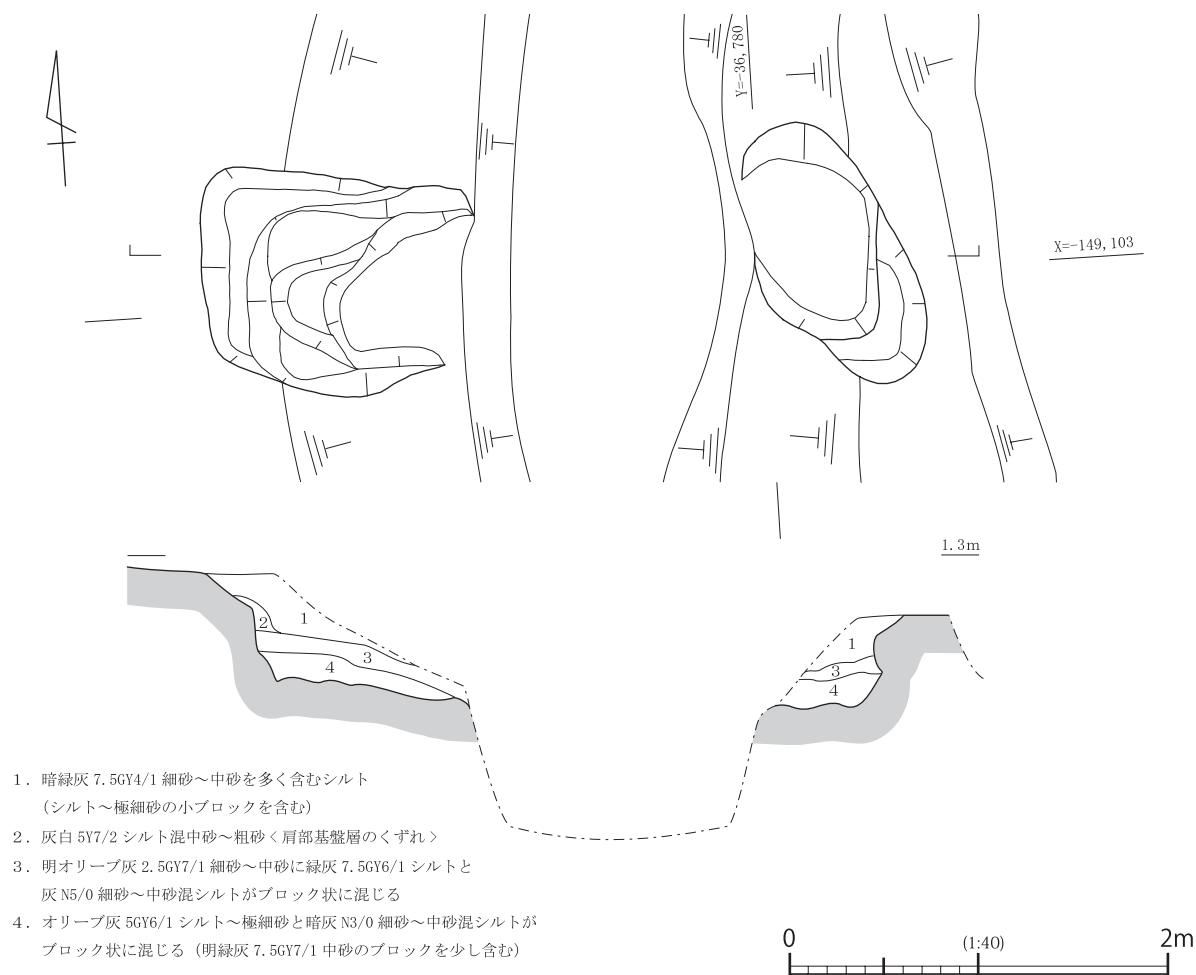


図70 16土坑 平面・断面図

5 a 層出土遺物 (図73 図版73・74)

主に12 - 1 溝等を埋める極細砂～粗砂等から、弥生土器甕 (144・146) ・鉢 (147) ・高杯 (148) ・脚 (149) 等の破片が出土している。また、12 - 1 溝内同層の下位には木片が含まれていた。自然木のほか、ミカン割材 (190・191)、分割材 (192) も認められる。付表12に、分割材の樹種同定結果を掲載している。

第4 a - 1 面を覆う5 a 層下層シルトからは、弥生土器甕 (145) 等の破片が出土している。弥生時代後期のものである。

5 b 層出土遺物 (図74 図版74)

5 b - 1 層から弥生土器壺 (150) ・鉢 (151) ・甕 (152)、サヌカイト剥片等、5 b - 2 層から脚 (153) ・甕 (154) ・鉢 (155) 等、5 b - 3 層から甕 (156・157) 等の破片が出土している。

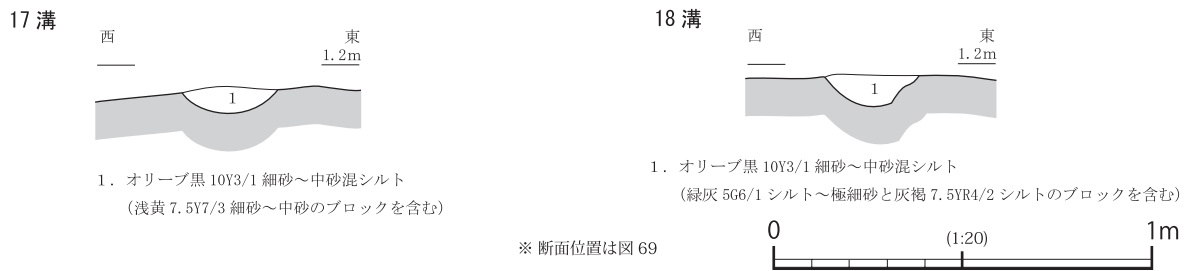


図71 17・18溝 断面図

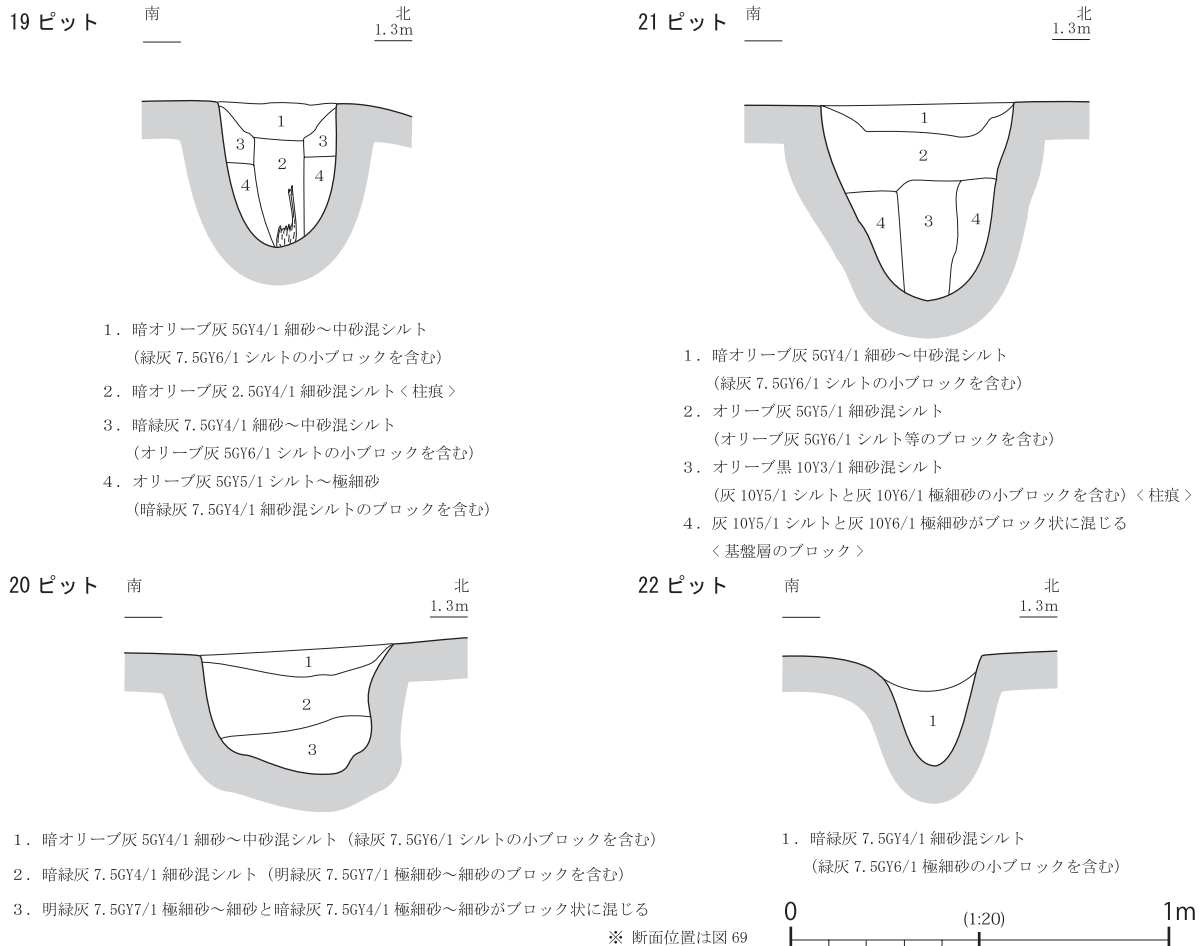


図72 19～22ピット 断面図

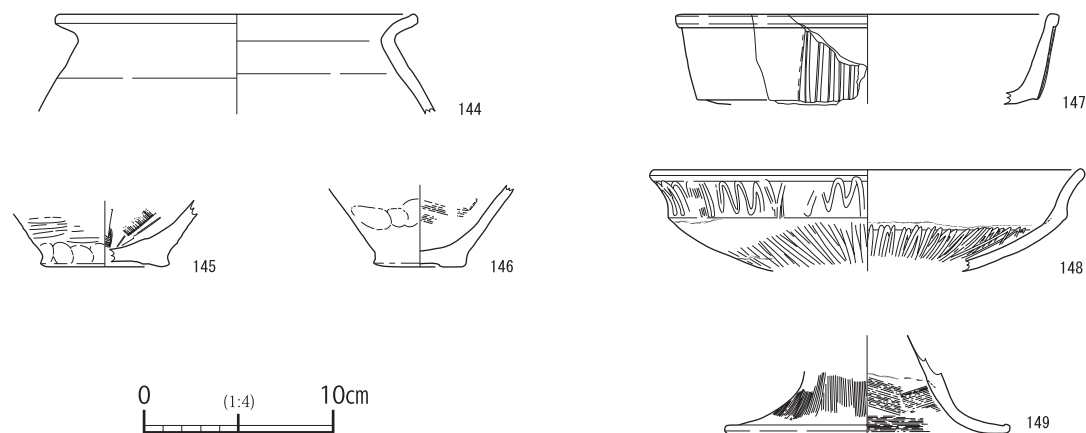


図73 5 a層 出土遺物

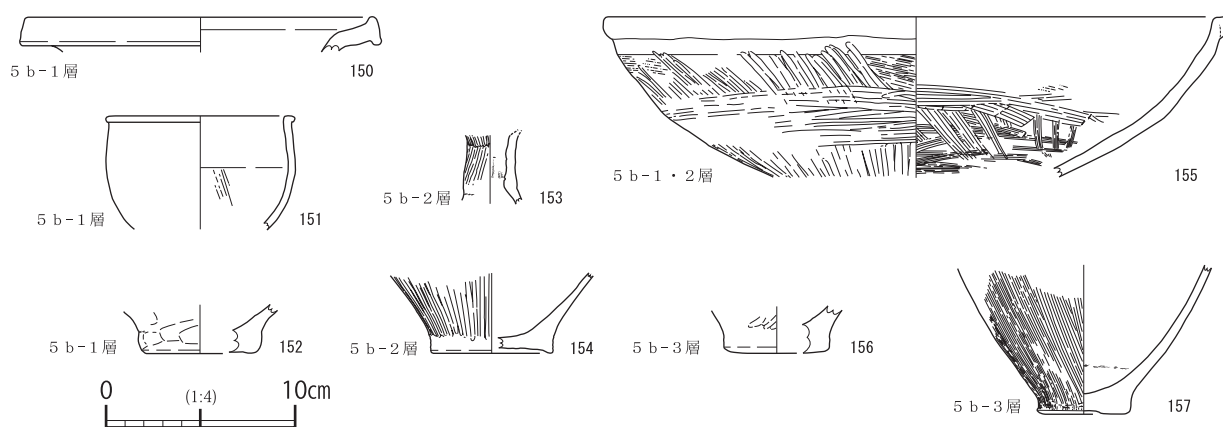


図74 5 b層 出土遺物

第5項 第6・7面（6～9層）（図75 図版16・42）

第5面は第4・5次調査の一部の調査区で認められた面で、今回の調査区では存在しない。

6・7層を除去した8層上面が第6面、8層下面が第7面である。

6層は細砂～粗砂、7層はシルト～極細砂と細砂～粗砂の互層で、いずれも堆積層である。8層はシルト混じり細砂で土壌層である。第7面の基盤層である9層は、シルトと細砂の互層で堆積層である。

第6面では、調査区中央やや南寄り、北西-南東方向にのびる高まりを検出した。遺構面の地形は、高まり以北がやや低くなっている。

高まりは、幅約2.5m、高さ約0.2mである。直下の9層中に断面凸レンズ状に粗砂が堆積していることから、基盤層である9層が堆積する際にできた地形であると考えられる。出土遺物はない。

なお、第6面では一部の既往調査区において畦畔が検出されている。そのため今回も確認作業を行ったが、認められなかった。

第7面では遺構を検出しなかった。遺物も出土していない。

9層出土遺物（図76 図版42・73）

層下部から弥生土器の小片が1点出土している。下部を中心に木片が含まれていた。自然木のほか板状木製品（158・193～196）も認められる。樹種同定の結果は、スギとヒノキである。

6～8層からは、遺物は出土していない。

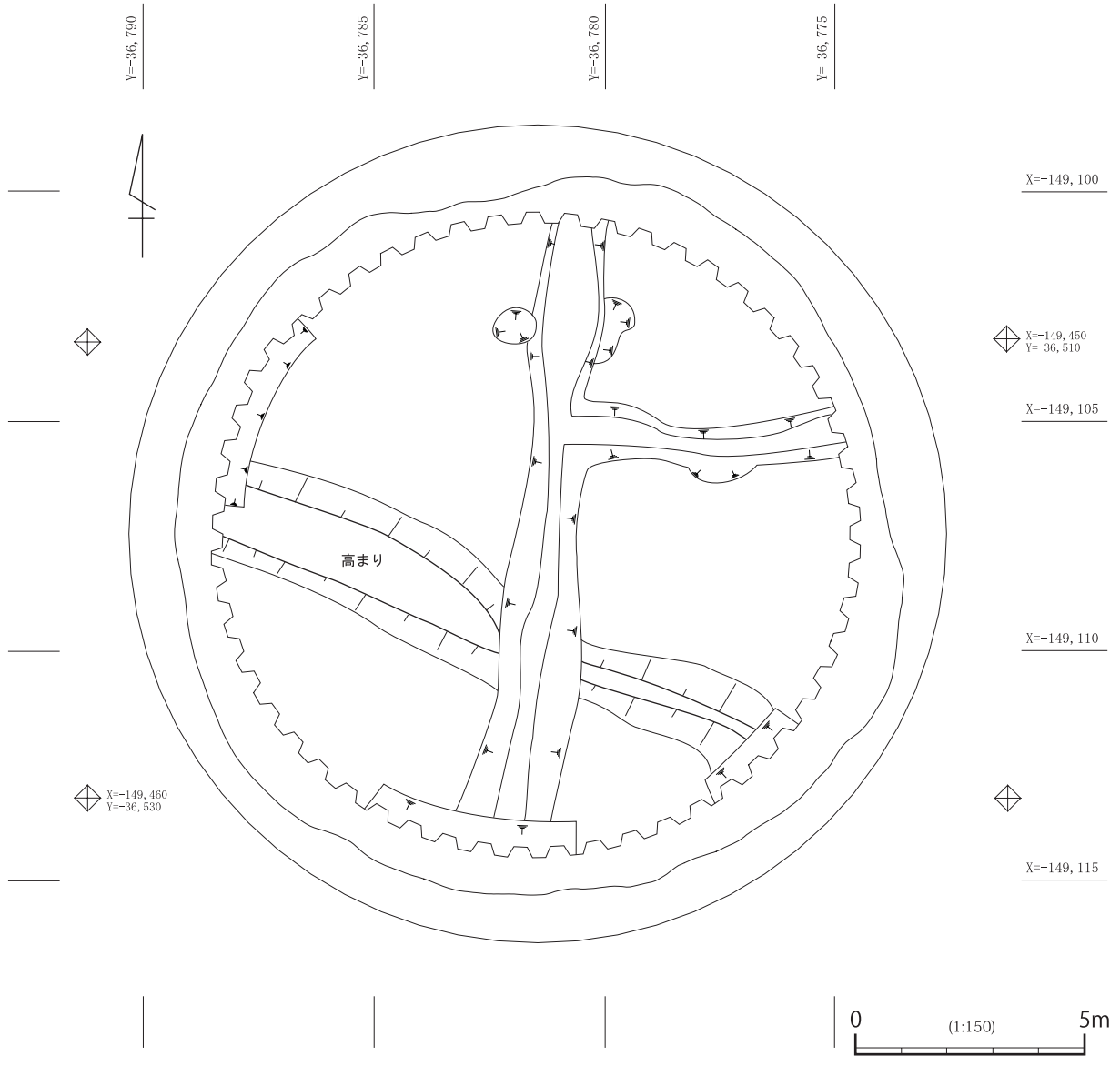


図75 第6面 平面図

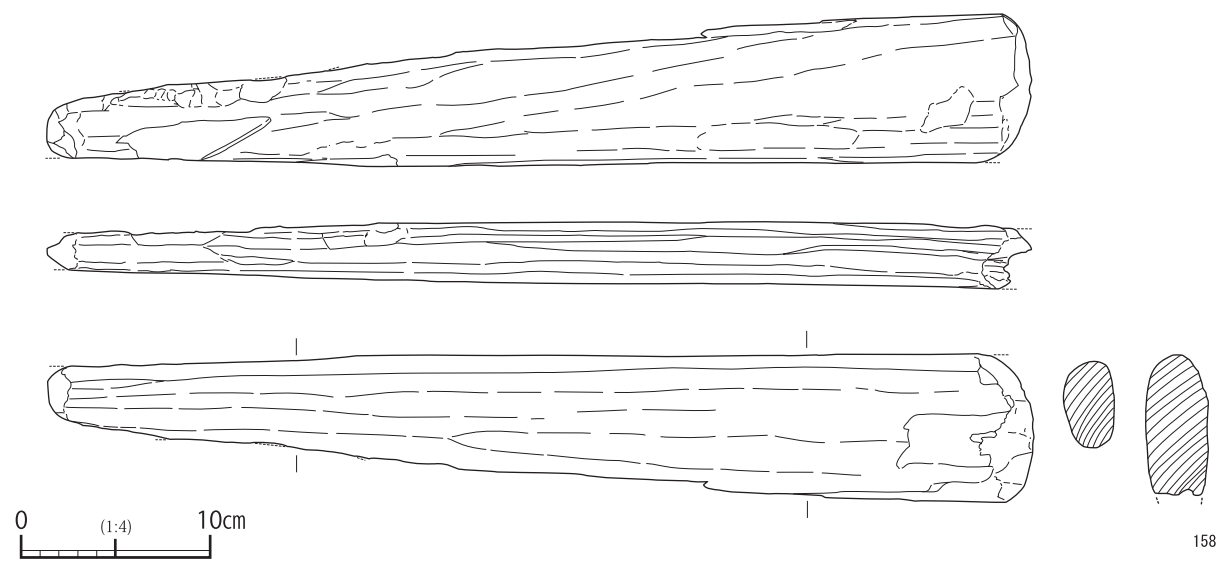


図76 9層 出土遺物

第6項 第8面 (11層) (図77 図版17・43)

9層を除去した11層上面が第8面である。溝を検出した。なお、10層は、第4・5次調査の一部の調査区で認められた層で、今回の調査区には存在しない。

11層は植物遺体を多く含むシルトで、厚さ0.1m未満である。上面は9層堆積層に覆われているが、直上に植物遺体の薄層がラミナ状に堆積しており、植物が繁茂する湿地状態であった可能性がある。

北部が落ち込み状に0.3m程低くなっている。その部分の11層は植物遺体を含むシルト～極細砂で、層相をやや異にしている。また、第9面時の南北方向の溝群が完全に埋没せず、窪み状に遺存している。

なお、畦畔を確認する作業を行ったが、認められなかった。地形に微細な起伏がみられることから、水田であったとは考え難い。

23溝 (図77 図版43)

調査区北部に位置する、北西-南東方向の溝である。落ち込み状に低くなっている部分の南肩に沿ってのびており、西端部は落ち込み部に開口している。検出長約9.2m、幅約0.2m、深さ0.1m未満である。9層最下層シルトで埋没している。遺物は出土していない。

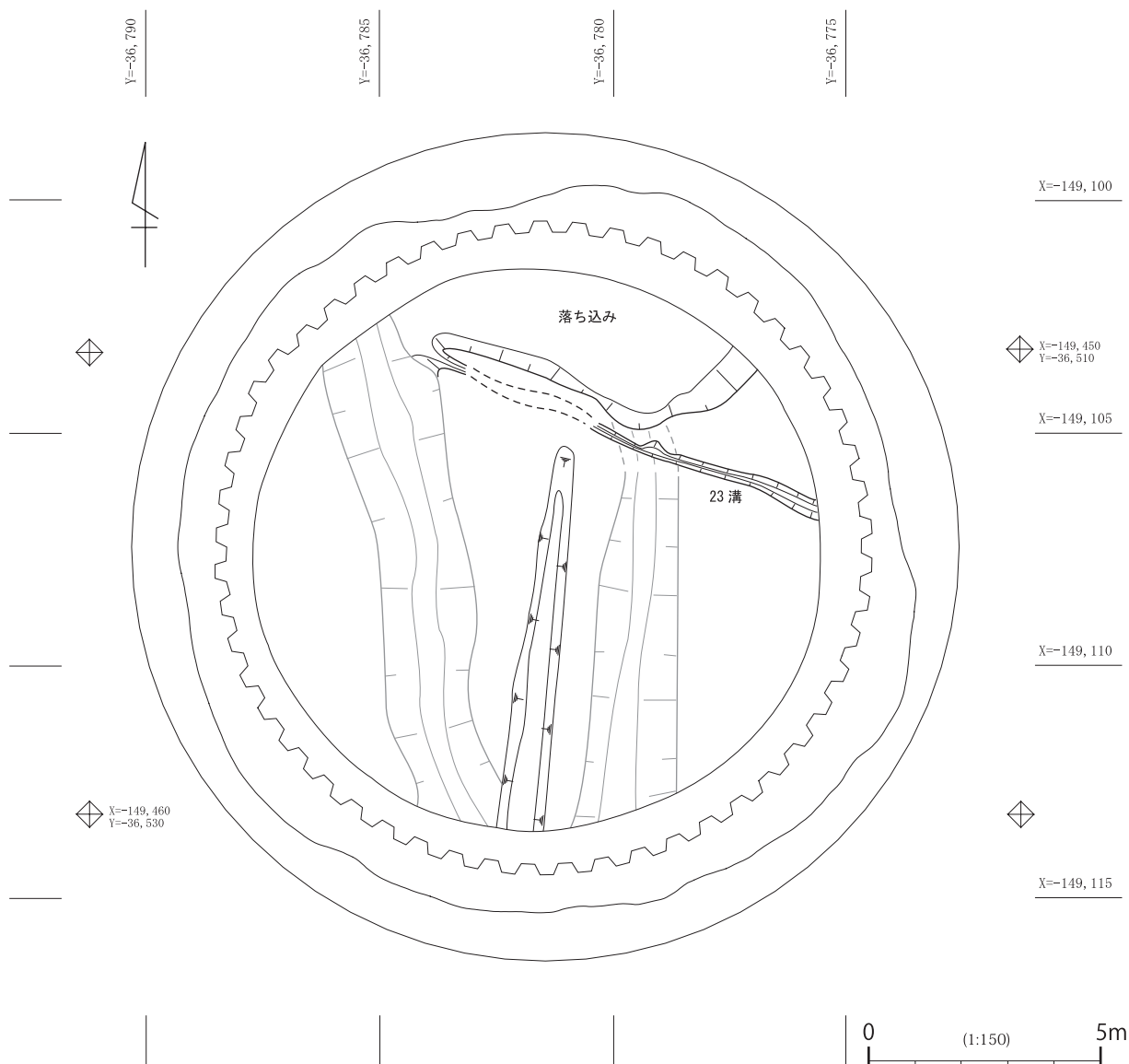


図77 第8面 平面図

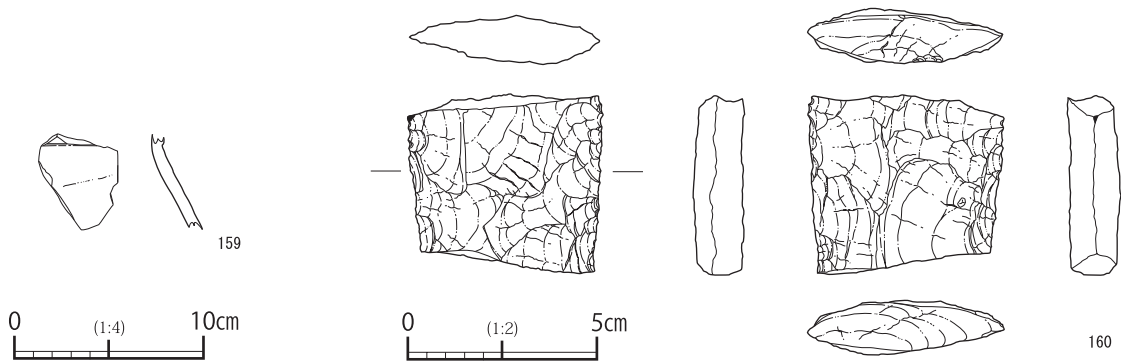


図78 11層 出土遺物

11層出土遺物 (図78 図版74)

弥生土器壺 (159) 等の小片が数点と、サヌカイト製の石剣 (160) が出土している。

第7項 第9面 (12層) - 弥生時代前期の遺構面 -

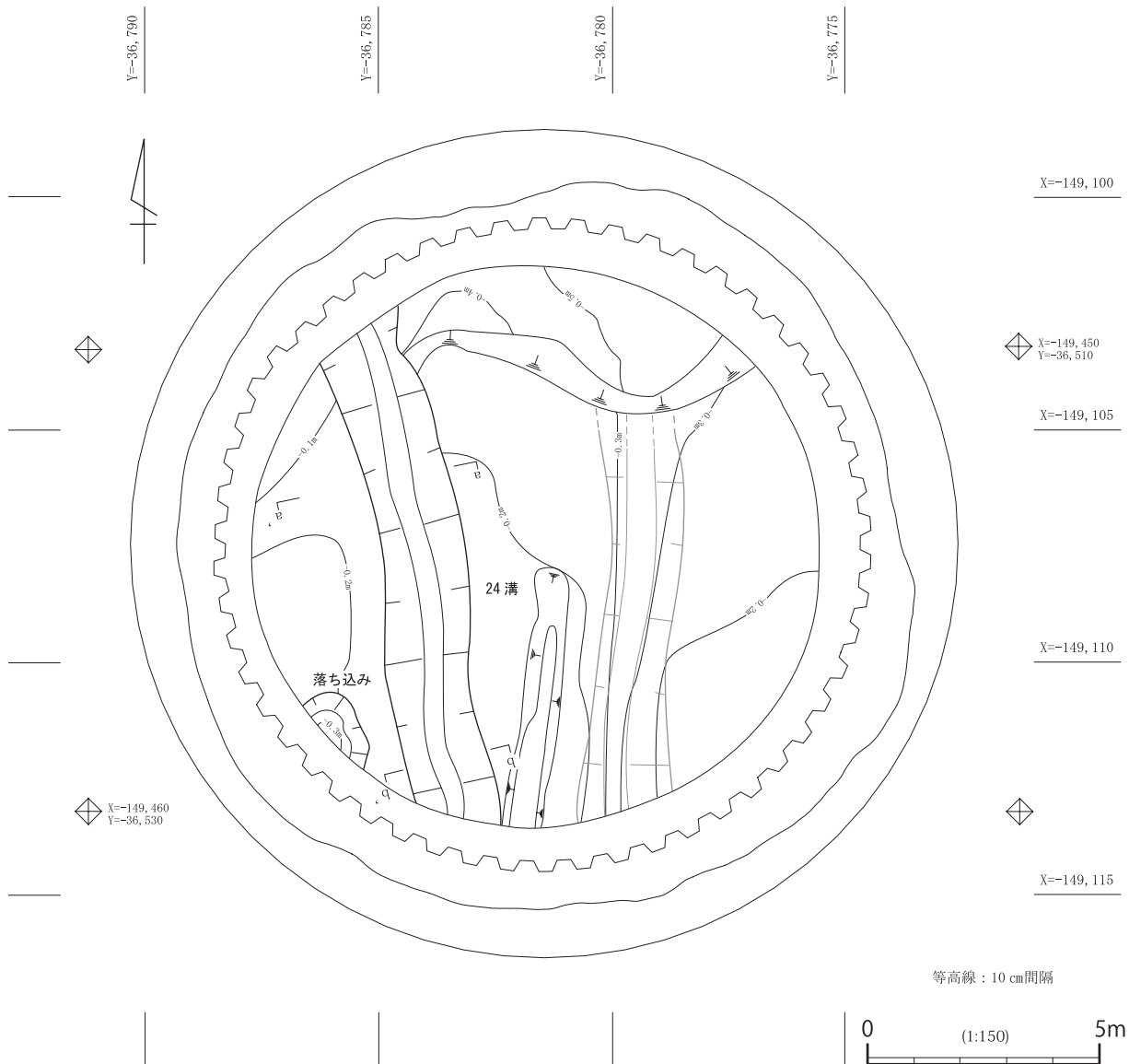


図79 第9 a面 平面図

11層を除去した12層上面が第9面である。12層は厚さ約0.3mの土壌層で、3層に分層できる。上から12a層、12b層、12c層で、それぞれの上面が第9a面、第9b面、第9c面である。12層下面是第9d面である。出土遺物から、弥生時代前期の遺構面であると思われる。

1. 第9a面 (図79 図版17)

12a層は細砂混じりシルトで、強く土壌化している。上面で溝を検出した。

調査区南西部で落ち込みを検出した。11層と同様の植物遺体を含むシルトで埋没しており、人為的なものではないと思われる。調査区東半部には第9c面の南北方向の27溝が完全に埋没せず、窪み状に遺存している。なお、北部が第8面と同様に落ち込み状に低くなっているが、12a～c層が落ち込みの肩部で途切れている状況(図19)がみられることから、第9a面時の地形ではないと考えられる。畦畔を確認する作業を行ったが認められなかった。地形に微細な起伏がみられることから水田とは考え難い。

24溝 (図79・80 図版44)

調査区西部に位置する、南北方向の溝である。調査区外に続いており、検出長約11.3mである。幅約1.8m、深さ約0.6mである。西肩部が周囲の遺構面より0.1m程度、高くなっている。底面のレベルは、ほぼ一定である。

底部0.1～0.2mに植物遺体を含む極細砂混じりシルトが堆積しているが、それ以上は9層堆積層で埋没している。肩部等に11層の堆積もみられる。

第9c面の26溝と重複している。遺物は出土していない。

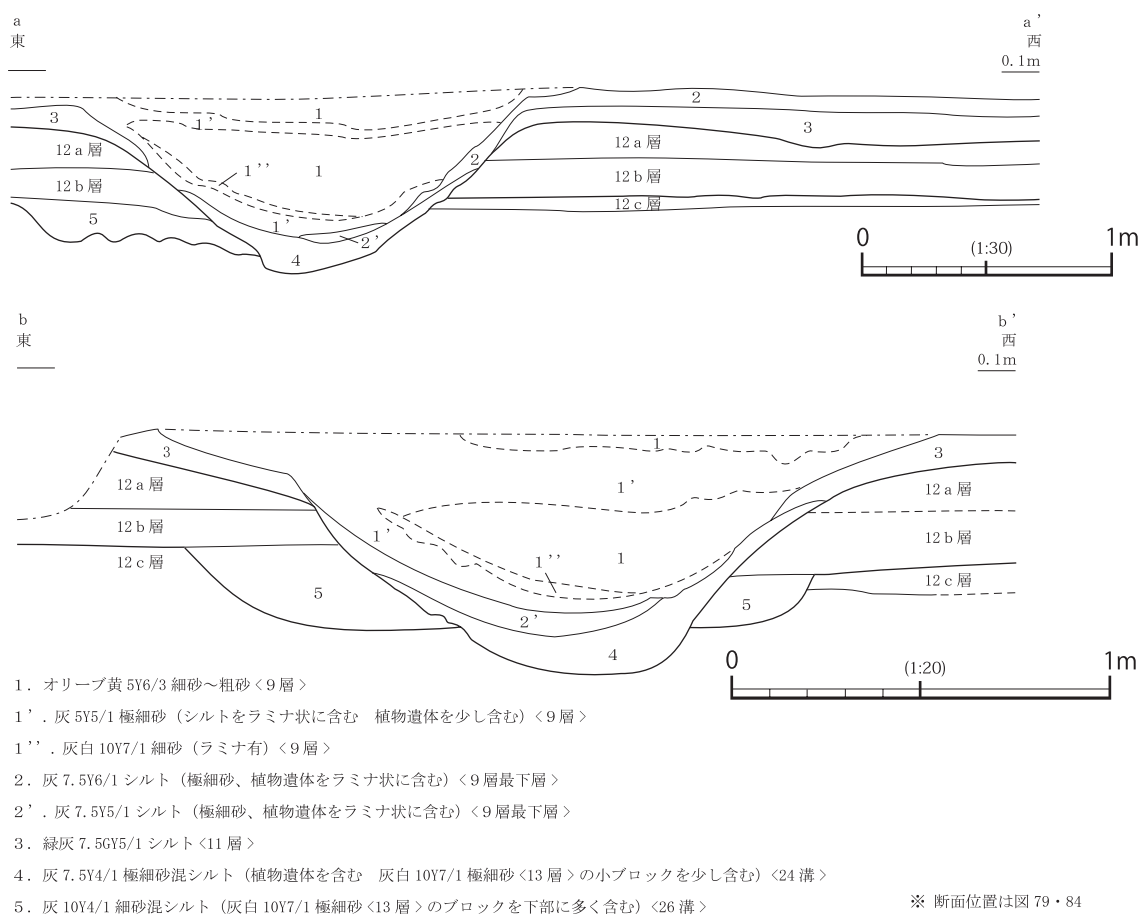


図80 24・26溝 断面図

2. 第9b面 (图81)

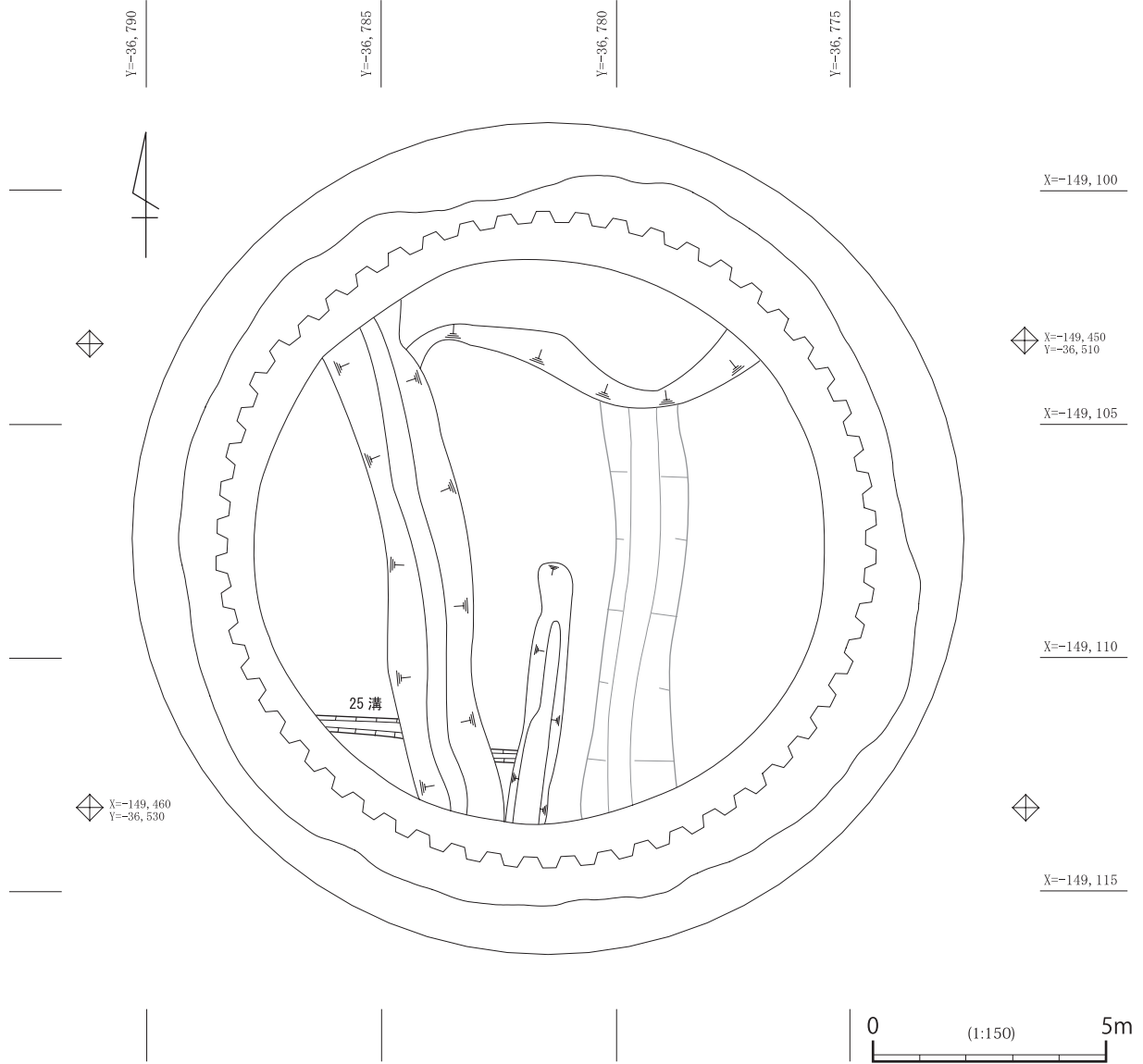


图81 第9b面 平面图

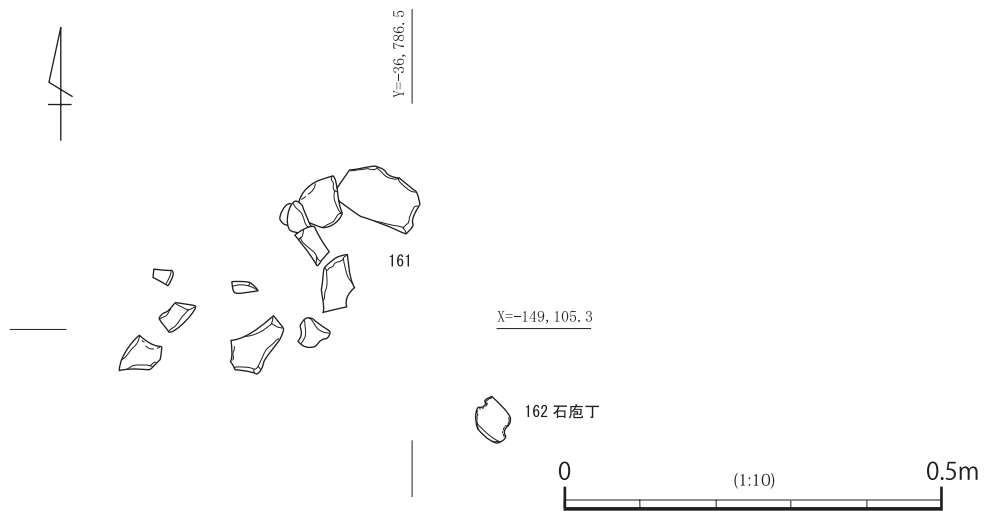


图82 12b层 遗物出土状况 平面图

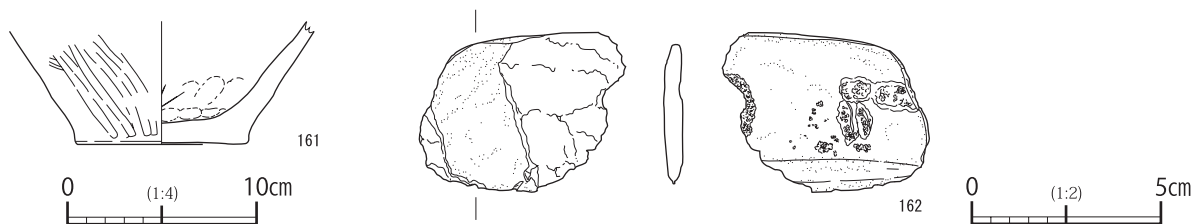


図83 12b層 出土遺物

12b層は細砂混じりシルトで、土壌層である。上面で溝を検出した。

25溝 (図81)

調査区南西部に位置する東西方向の溝である。検出長約4.4m、幅約0.4m、深さ約0.1mである。

埋土は、灰10Y5/1細砂混じりシルト（極細砂のブロックを含む）である。遺物は出土していない。

12b層出土遺物 (図82・83 図版45・74)

調査区北西部で、弥生土器甕 (161) の破片と石庖丁 (162) が出土した。

3. 第9c面 (図84 図版18)

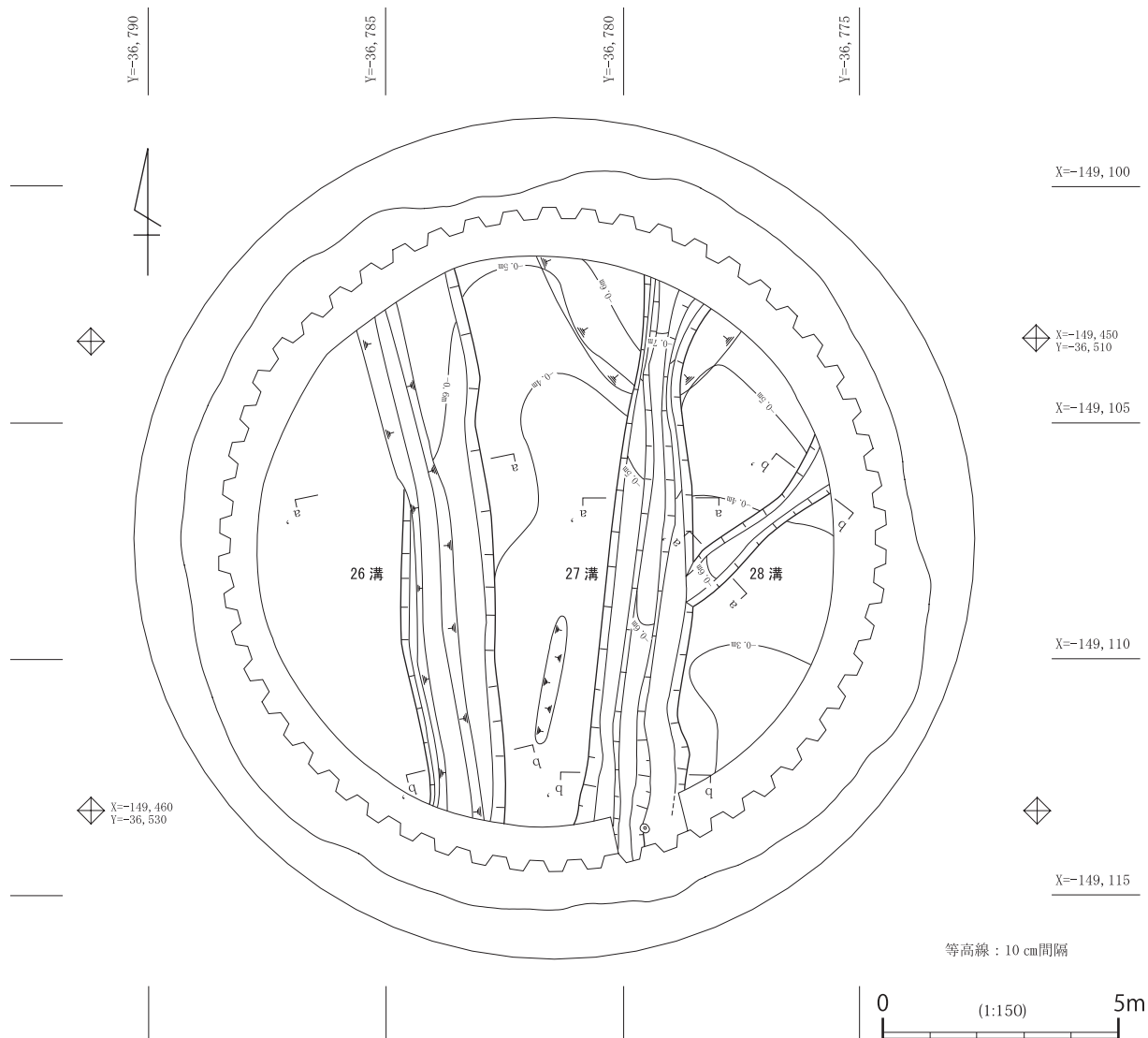
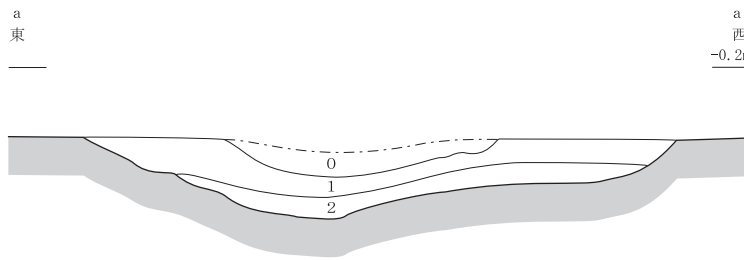
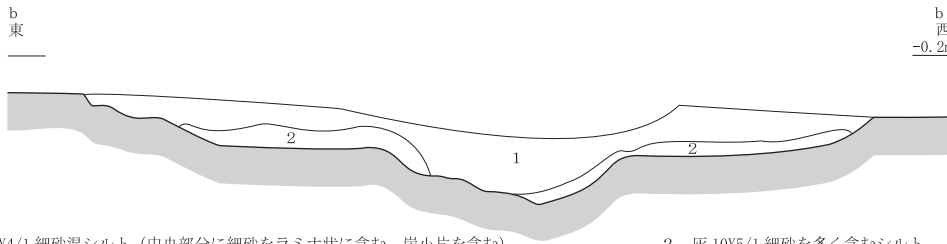


図84 第9c面 平面図

27 溝

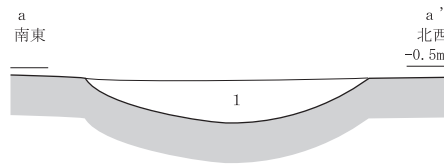


0. オリーブ黒 10Y3/1 細砂混シルト (炭小片を含む) <12 b 層> 2. 灰 10Y4/1 細砂混シルト (中央部分に細砂をラミナ状に含む 炭小片を含む)
 1. 灰 10Y4/1 細砂混シルト (ラミナ顕著でない)

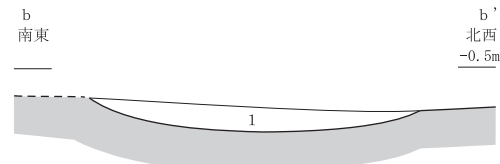


1. 灰 10Y4/1 細砂混シルト (中央部分に細砂をラミナ状に含む 炭小片を含む) 2. 灰 10Y5/1 細砂を多く含むシルト

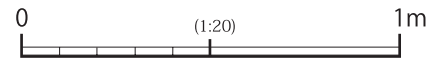
28 溝



1. 灰 10Y4/1 細砂混シルト



1. 灰 10Y6/1 細砂混シルト



※ 断面位置は図 84

図85 27・28溝 断面図



図86 27溝 遺物出土状況 平面図



図87 27溝 出土遺物

12c層はシルト混じり細砂で、強く土壌化している。上面で溝を検出した。なお、畦畔を確認する作業を行ったが、認められなかった。

26溝 (図80・84 図版45・47)

調査区西部に位置する、南北方向の溝である。調査区外に続いており、検出長約11.8m、幅1.7~2.0m、深さ0.1~0.2mである。第9 a面の24溝と重複しており、西半部が削平されている。底面のレベルはほぼ一定であるが、北端部で0.1m程度低くなっている。

埋土は、細砂混じりシルトで、下部に基盤層のブロックを含む。

遺物は出土していない。

27溝 (図84~87 図版46・47・74)

調査区東部に位置する、南北方向の溝である。調査区外に続いており、検出長約12.5m、幅1.5~2.1m、深さ約0.2mである。底面中央部が幅約0.7mの溝状にさらに深くなっている。底面のレベルは、北に向かって下がっており、南部と北部の比高差は約0.1mである。

埋土は下層が細砂を多く含むシルト、上層がラミナのみられる細砂混じりシルトである。第9 c面で完全には埋没せず、上面でも浅い窪みとして遺存していた。

遺物は、南端部で弥生土器壺底部 (163) が出土している。

28溝 (図84・85 図版48)

調査区東部に位置する、南西 - 北東方向の溝である。側溝断面でこの面に帰属することを確認していたものの、北東端部のみを土坑として認識してしまい、全形を検出したのは下面である第9 d面である。本来は、検出し得た状態よりも幅の広さと深さを有していたと思われる。調査区外に続いており、検出長約4.0m、幅約0.9mである。深さは、土坑として検出した際の記録から、約0.2mであったことがわかっている。位置関係から南西端が27溝とつながっていたと思われる。底面のレベルは、北東方向がやや低い。

埋土は細砂混じりシルトであるが、土坑として検出した際の記録から、上層が存在していたことがわかっている。上層は、オリーブ黒7.5Y3/1細砂を多く含むシルト (中砂を少し含む) である。

遺物は出土していない。

4. 第9 d面 (図88 図版18)

12c層の下面である。基盤層である13層は、極細砂~細砂とシルトの互層で、堆積層である。土坑とピットを検出した。

29土坑 (図89 図版49)

調査区北部に位置する。長径約1.0m、短径約0.5mの楕円形で、深さは約0.1mである。

埋土は、細砂混じりシルトで、下部にブロック土を含む。遺物は出土していない。

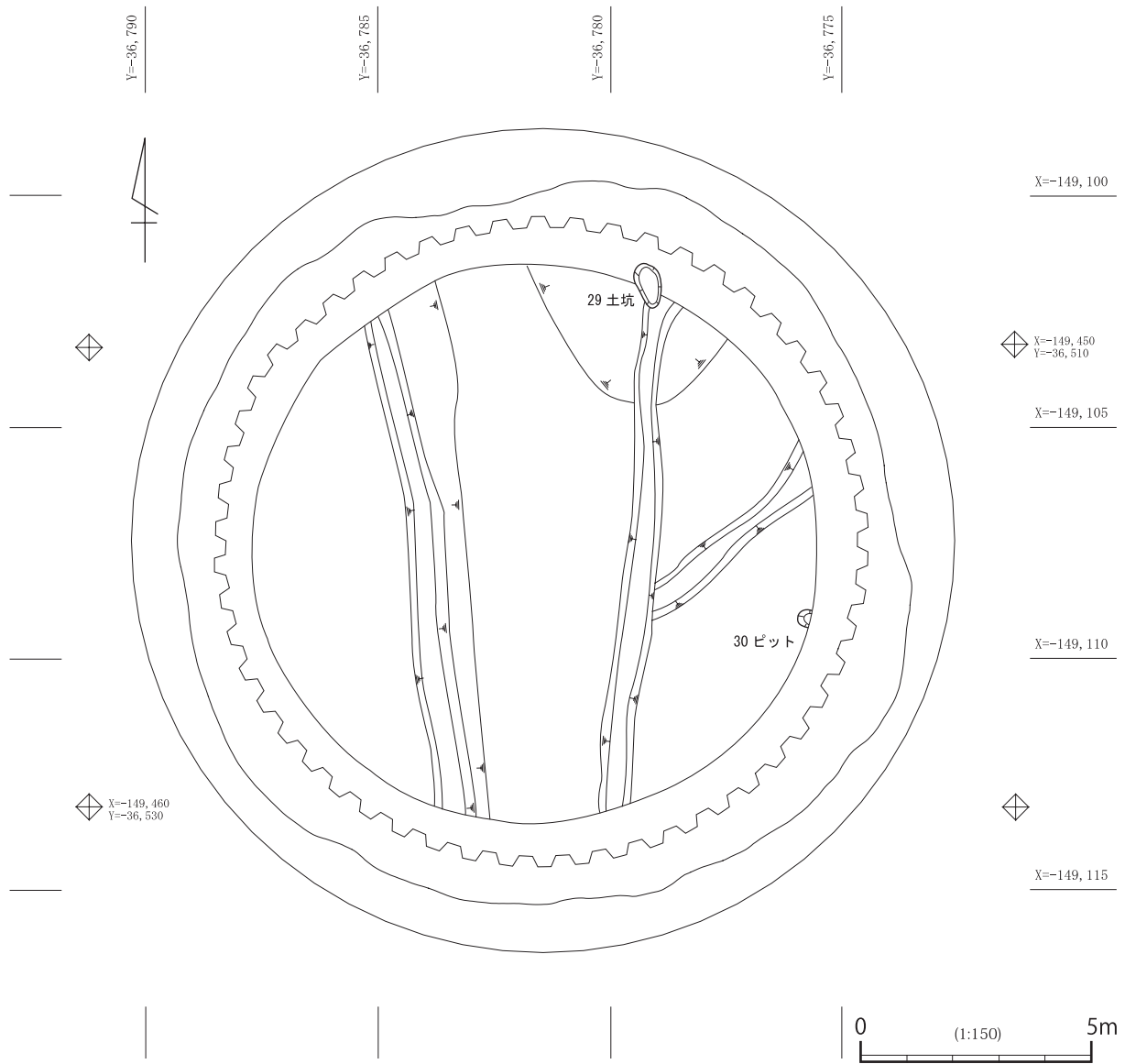


図88 第9d面 平面図

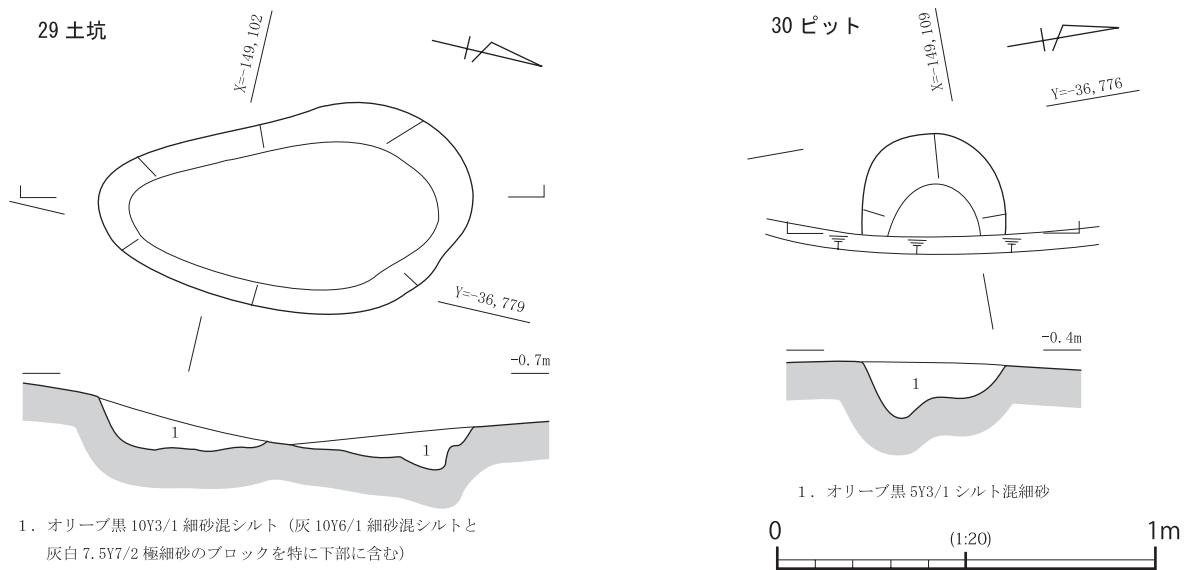


図89 29土坑、30ピット 平面・断面図

30ピット (図89 図版49)

調査区東端部に位置する。側溝と重なり東部を確認できなかったが、径約0.4mと思われる。深さは約0.2mである。

埋土は、シルト混じり細砂である。

遺物は出土していない。

12層出土遺物

12a層からは、弥生土器の小片が数点出土している。12b層からは、第9b面の項に図示したもの以外に、弥生土器の小片が数点出土している。12c層からは、遺物は出土していない。

第8項 第10面 (13~15層) - 縄紋時代晩期の遺構面 -

13層を除去した14層上面が第10a面、14層下面が第10b面である。今回の調査では遺物が出土していないが、既往の調査成果から、縄紋時代晩期の遺構面と考えられる。

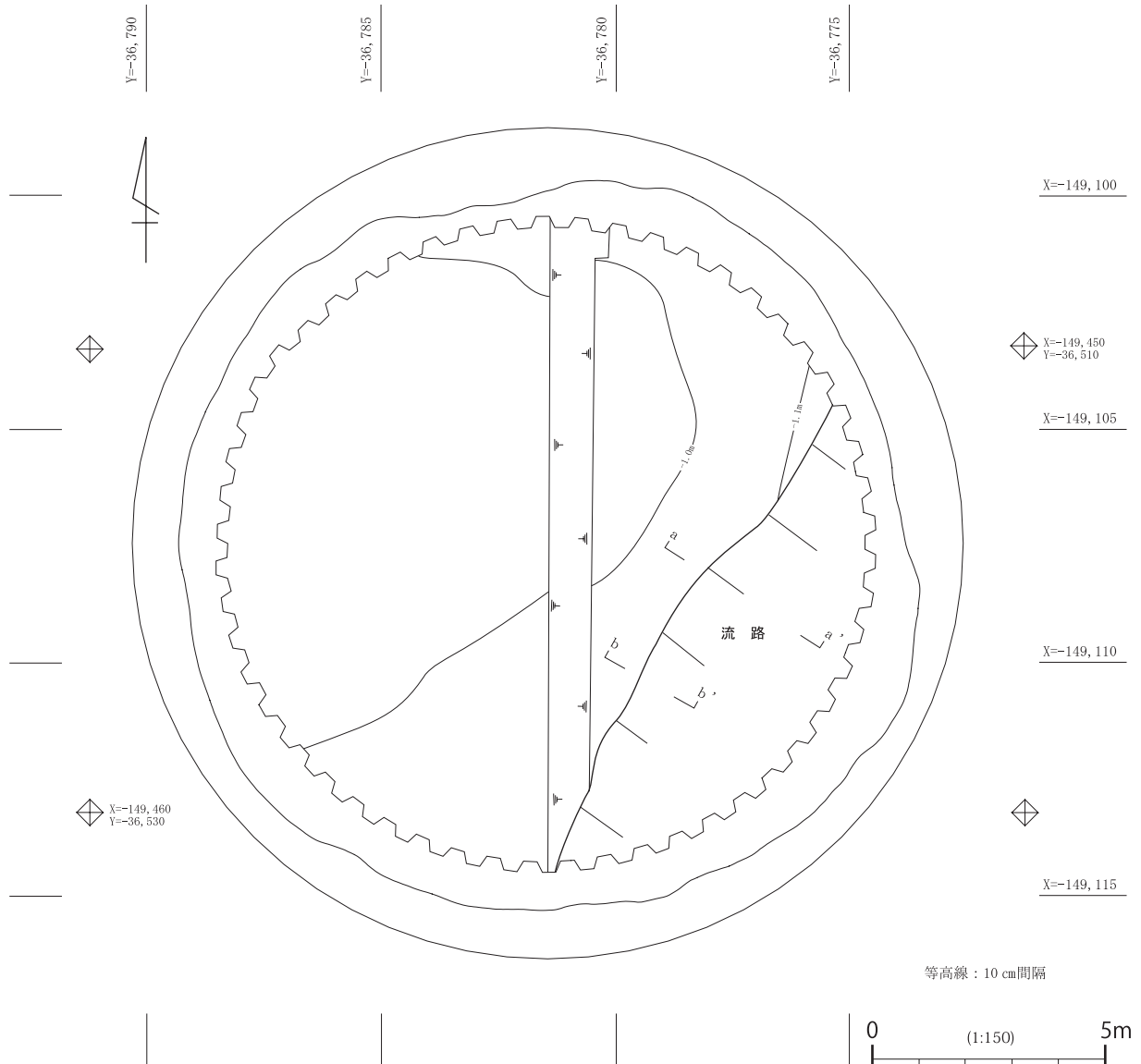


図90 第10a面 平面図

1. 第10 a 面 (図90・91 図版19・50)

13層は極細砂～細砂とシルトの互層で、堆積層である。14層は厚さ0.1m未満のシルトで、強く土壌化している。上面で流路を検出した。

調査区南東部で、南西 - 北東方向の流路を検出した。西肩部を検出し得たのみで、東肩は調査区外である。また、鋼矢板による施工の限界深度に達したため、完掘していない。幅は4.0m以上、深さは1.1 m以上である。

流路西肩部では、大部分が堆積層による侵食を受けているが、b - b' 断面箇所等に14層が遺存している。第10 a 面時に、流路として機能していたと考えられる。遺構面の地形も北西から南東の流路に向かって低くなっている。部分的に確認し得たのみであるが、14層より下の層も流路に向かってレベルを下げており、同様の地形が継続していた可能性がある。

流路の埋土は、肩部で一部を確認したのみである。上部は13層細砂で埋没しており、肩部ではその下に植物遺体を含むシルトと極細砂の互層や、肩部の基盤層のブロックを多く含む極細砂等がみられる。細砂層中には、最長1.0m程度の自然木群が含まれていた。流木であると思われる。

2. 第10 b 面 (図版19)

14層の下面である。基盤層である15層は、シルトの堆積層である。

遺構は検出していない。

今回の調査では、T.P. - 1.3mまで掘削を行った。13層以下の層からは、遺物は出土していない。

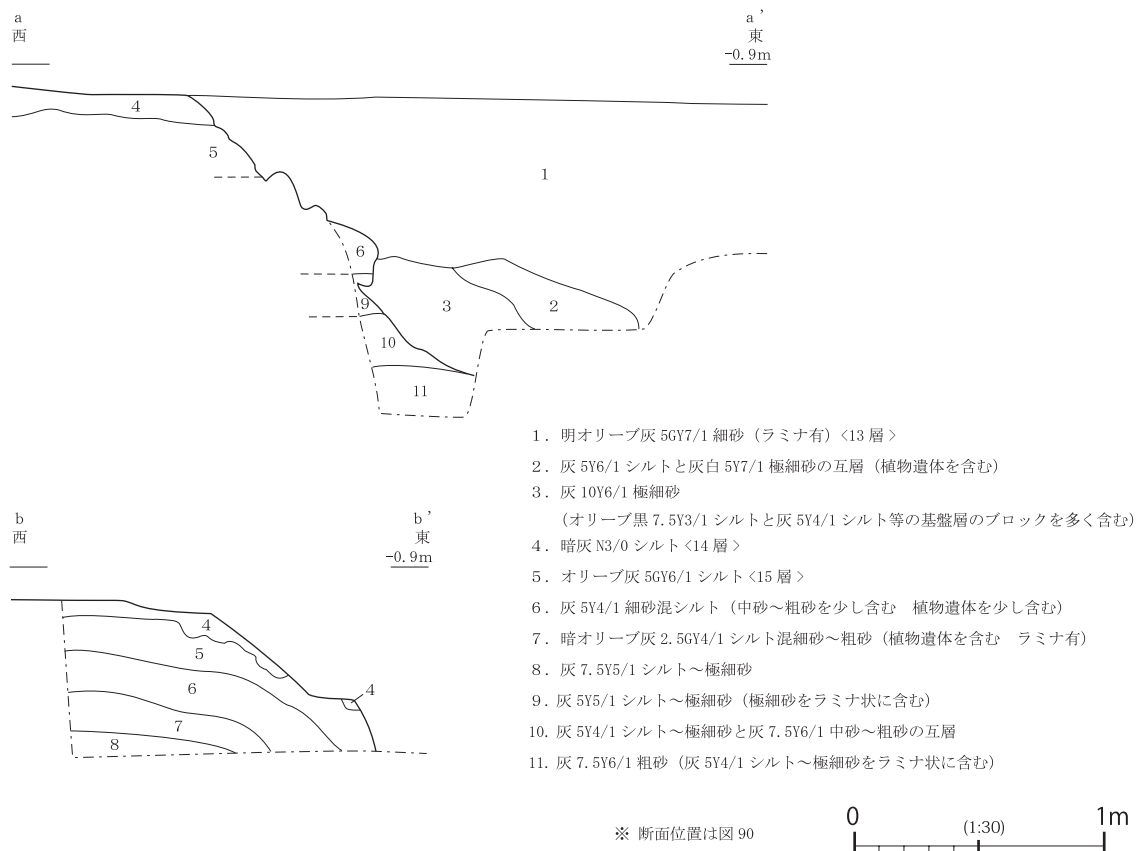


図91 流路 断面図

第3節 総括

第1項 第4 a - 1面出土土器群

第4 a - 1面で検出した8溝では図31 - 6層上面のA・Bの2箇所でもとまって遺物が出土した。このうちBについては西肩部の土器集積との接合関係が認められた。このことから少なくとも溝のBと西肩部の土器集積の一部とは一連の行為結果と推定でき、より敷衍すれば8溝の図31 - 6層上面遺物と西肩部土器集積の形成の同時期性が推定できた。

この妥当性を遺物から検討する。まず8溝のA・Bについて。この中で積極的な時期判断に使用できるのは甕と思えるので、両者の甕を検討する。Aの甕（図34 - 8）はやや肩部が張り、調整は外面がタタキ、内面がケズリである。内面のケズリは庄内式との関連よりも前代からの影響を考慮したい。Bには外面最終調整がハケとタタキの2種の甕がある。前者（図34 - 5）は肩部以上のみの残存だが、口縁部形態はAに似る。後者（同7）は胴部最大径が中位にあり、Aよりも型式学的にやや新しい。頸部から口縁部への形態は類似するが、口縁端部の調整がより雑である点もこれを支持する。外面の最終調整においてタタキとハケが共伴する例は、後期中葉～後葉で散見されるが、基本的に圧倒的なタタキ甕の中のイレギュラーな存在である。本例は個体数が少ないため比率については積極的な発言はできない。しかし、調整を除いた形態においては思いのほか近い形態である点からは、両者を同様な時期としてよいと思える。これら8溝A・Bの土器を同型式とは考えられない。しかし、後期後葉、もしくは後期中葉～後葉のある時期であれば共伴することにさほどの無理はないだろう。

次に土器集積だが、まず甕について。外面最終調整がタタキ（図43 - 45・48）とハケ（同47・49）の2種がある。全体の器形が窺える48は、上述の8溝例よりも小ぶりな例で、最大径が胴部中位にあり、やや球形化が進んでいる。これ以外の例についても、胴部最大径は中位にあり、口縁部が外反し、端部外面にごく弱い面を持つ点など、内外面の調整の差異に比べ、同様な形態を有する点にこそ着目したい。他の器種でも、長頸壺（図43 - 54・55）は頸部の屈曲が鈍く同形式の中でも新しい様相である。これらの時期も上述の8溝A・Bの時期幅から大きく逸脱するものではない。

なお、同一面の盛土東裾部では5 a層除去段階でもとまって土器が出土した（図39）。甕について見れば、これらの外面最終調整はタタキではない。39の形態は甕だが、調整は壺である。なお、被熱痕跡はある。これ以外では、34のようなごく低い台（脚）ながらも台付甕というべき資料がある点も注意される。これらは盛土層出土資料（図40）よりも新しく、盛土部分での層位的成果との矛盾はない。上記の8溝A・Bや土器集積との比較では、口縁端部にやや明瞭な面を持つ点や頸部の屈曲がやや明瞭である点などから、若干古相を呈するようにも思える。ただし、体部形態や口縁部の長さからは、さほど大きい時期差を見積もる必要はないと考える。これらから、いずれも大きな時期差はないと考えて良いだろう。

これら第4 a - 1面にかかわる遺物は、いずれも庄内式最古相まで下るものではない。また、弥生時代後期でも最新段階まで下るものではない。外面最終調整において、タタキとハケとが共伴する資料としては、新しい例といえよう。今回の時期判断はある程度体部調整を無視し、形態から推定したものである。なお特徴的な調整として、甕頸部外面の強いナデが挙げられる。この調整が、全てではないものの体部外面調整の差異を横断して見られた点から、上記の形態からの時期判断にさほど大きな問題はないだろう。

（市村慎太郎）

第2項 遺構面

今回の調査では、T.P.2.2～-1.3m間に、23層、19遺構面を確認した。

第1面は、中世以降の耕作面である。下層作土層には10～13世紀の時期が与えられる。

第2面は、古墳時代～古代の遺構面である。第2-1面は既往の調査区にない遺構面で、土坑を検出した。6～8世紀頃と思われる。第2-2面は既往の調査で古墳時代前期の水田が検出されている面にあたると思われるが、今回の調査区では畦畔は認められなかった。また時期を示す遺物もない。

第3面は、弥生時代後期末以降の水田面である。既往の調査で鍵層とされてきた4b層堆積層に覆われている。第1次調査(第VI遺構面)Aトレンチ周辺、第5次調査4Iトレンチ(第二寝屋川を挟み北に隣接する巨摩遺跡)で4b層に覆われた水田面が検出されており、これらと対応すると考えられる。今回の調査では時期を示す遺物が出土していないが、第4a面が後期後葉まで継続することを確認したため、後期末以降と思われる。区画の形状が方形に近い、比較的整然とした平面形の小区画水田である。

第4面は、弥生時代中期末～後期後葉の遺構面である。土壌層を3層に分層でき、それぞれの上面で遺構を検出した。今回の調査区は、既往の調査で集落が検出されている範囲のほぼ中央に位置している。

第4a-1面は5a層堆積層に覆われている。溝、盛土、土器集積、土坑を検出した。8溝は流水を伴い、北西流する。一方、南北方向の12-1溝は流水の痕跡が認められず、オープンな状態が一定期間継続していたと考えられる。底面直上に堆積している層には弥生時代後期の土器が含まれている。盛土は、下面の溝の影響で窪みになっている箇所を埋めているが、調査区東端部ではその限りではなく、8溝東肩部に沿っている。盛土下の土壌層が他所と同様に強く土壌化しており、盛土の施工時期は遺構面存続期間の初期ではないと思われる。遺構面上の土器集積は、8溝流水堆積層上出土土器群と一連のものと思われる。盛土東裾部出土土器群も同時期のものである。両者とも土壌層内に埋没せず5a層に覆われていることから、遺構面の最終時期を示す遺物群であると考えられる。前項のとおり、弥生時代後期後葉の時期が与えられる。8溝流水堆積層上土器群を覆う砂層は、12-1溝の肩部にも堆積している(図35-12層)。両溝ともにそれ以上の堆積は5a層堆積直前または一連のものである可能性がある。

第4a-2面の基盤層は、上下層と比べるとやや土壌化が弱い。土坑、ピット、集石等を検出した。

第4a-3面では溝を検出した。南北方向の12-2溝に東から13溝が合流している。流水を伴うが、堆積は13溝でより先に進む。12-2溝上層部は、後に滞水状態となった部分で、土器、木製品等の遺物が多量に投入されている。再掘削された可能性も考えられる。上層部については帰属面を明らかにできず、上面時に機能していた可能性も否定できない。また、第4a-1面の12-1溝は、12-2溝が埋まりきらずに遺存したものととも考えられる。

土壌層下面の第4b面では土坑、溝、ピットを検出した。ピットには柱痕の認められるものがある。

以下は、厚さ約1.4mの堆積層である。その中位に比較的弱く土壌化した層があり、その上下面を第6・7面とした。遺構、遺物ともに認められなかった。既往の調査で弥生時代中期とされている。

第8面は、弥生時代前期遺構面を覆う層の上面である。小規模な溝と落ち込みを検出した。

第9面は、弥生時代前期の遺構面である。土壌層を3層に分層でき、それぞれの上面で溝を、下面で土坑とピットを検出した。既往の調査成果から、標高の高い箇所で土壌層が厚く、分層される状況が看取できる。最も標高の高い第5次調査の13Cトレンチで集落が検出されており、次に標高の高い第1次調査区で水田が検出されている。今回の調査区は標高、土壌層の状況ともに西側の第1次調査区に近い。

第10面は、縄文時代晩期の遺構面である。北東流する流路を検出した。遺構、遺物は確認していない。

付 表

付表1 掲載土器等一覧表(1)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土構層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	調整等
北鳥池遺跡											
1	9		回転台土師器皿	第6層 17E-45h	(15.2)	2.7	(13.8)	10	反転復元	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：灰黄褐10YR6/2 断：灰黄褐10YR6/2	底部外面糸切り離し
2	9		瓦質土器羽釜	第6層 17E-45h	—	<3.3>	—	10	傾き復元	外：暗灰N3/0 内：灰7.5Y5/1 断：灰黄2.5Y7/2	口縁部に段を有するか 外面跨下ケズリ 内面ナデ(工具によるか)
3	9	51	瓦器皿	第9層	(8.9)	1.8	—	40	反転復元	外：明褐灰7.5YR7/1 内：明暗灰N3/0 断：明褐灰7.5YR7/1	内面摩滅しており、調整等不明
4	9	51	弥生土器甕	第4～9層	—	<3.5>	(4.7)	10 底部40	反転復元	外：にぶい橙7.5YR6/4 内：にぶい橙7.5YR7/3 断：黄灰2.5Y6/1	
若江北遺跡											
第1面(1層)											
1	21	51	瓦	1b層 8G-8b	長 <14.3>	幅 <7.1>	厚 1.8～ 2.0	—		外：灰5Y6/1 内：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	凹面布目痕 凸面縄タタキ痕
2	21	51	白磁碗	1b層 下層 8G-9a	—	<2.9>	(6.2)	30 底部10	反転復元	外：灰白5Y8/1(釉) 灰白5Y8/1(胎土) 内：灰白5Y8/1(釉) 断：灰白5Y8/1 灰白N7/0	底部外面露胎 畳付平滑
第2面(3層)											
3	24		須恵器杯	3a層 8G-8ab	(13.4)	<3.5>	—	20 口縁20	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	内面回転ナデ、底部中央静止ナデを施すか
4	24	51	須恵器杯	3a層 8G-9ab	13.5	4.1	10.2	70 口縁50		外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し、摩滅気味で調整の有無不明 底部内面回転ナデのち一定方向の静止ナデ
第4面(5層)											
第4a-1面											
5	34		弥生土器甕	8溝 B地点 土器集積	16.7	<9.4>	—	10 口縁100	反転復元 (体部)	外：橙7.5YR7/6 内：橙2.5YR6/6 断：灰5Y6/1	口頸部ハケのち口縁部横ナデ
6	34		弥生土器甕	8溝 B地点	—	<10.4>	5.5	10 底部100	反転復元 (体部)	外：にぶい橙7.5YR6/4 内：にぶい橙5YR6/4 断：橙5YR7/6	底部外面ケズリ スス付着
7	34	52	弥生土器甕	8溝 B地点	15.5	28.6	5.4	80		外：灰黄褐10YR6/2 内：にぶい黄橙10YR6/3 断：黄灰2.5Y5/1	口頸部外面横ナデ 口頸部内面ナデ 体部内面上半ナデ 外面口頸部から体部中位にスス付着
8	34	52	弥生土器甕	8溝 A地点	18.6	27.6	5.2	90		外：にぶい橙7.5YR7/4 にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい橙7.5YR7/4 にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	口頸部外面縦方向のハケのち横ナデ、横方向のハケ 体部外面上部タタキのち工具による横方向のナデ 口頸部内面横方向のハケのちナデ 体部内面ハケのちケズリ
9	34		弥生土器甕	8溝	(13.6)	<3.1>	—	10 口縁20	反転復元	外：灰黄2.5Y6/2 内：黄灰2.5Y6/1 断：黄灰2.5Y5/1	外面スス付着
10	34		弥生土器甕	8溝 B地点	—	<4.4>	5.4	10 底部100	反転復元 (体部)	外：にぶい黄褐10YR5/3 内：にぶい黄褐10YR5/3 断：にぶい黄褐10YR5/3	体部外面ハケ 底部外面ケズリか
11	34		弥生土器壺	8溝 B地点	(12.9)	<5.5>	—	10 口縁20	反転復元	外：にぶい褐7.5YR5/3 内：にぶい黄褐10YR5/3 断：にぶい黄褐10YR5/3	口縁部横ナデ 口頸部外面ハケのち横ナデ 口頸部内面ナデ
12	34		弥生土器壺	8溝 B地点	—	<7.9>	5.7	10 底部90	反転復元 (体部)	外：暗灰黄2.5Y5/2 内：灰黄褐10YR5/2 断：灰黄褐10YR6/2	内面ナデ 底部に焼成後穿孔
13	34		弥生土器高杯	8溝 最下層	(18.8)	<3.7>	—	10 口縁10	反転復元	外：灰黄褐10YR6/2 内：灰黄褐10YR6/2 断：黄灰2.5Y6/1	
14	34		弥生土器高杯	8溝	(18.8)	<5.4>	—	10 口縁30	反転復元	外：灰黄褐10YR6/2 内：灰黄褐10YR5/2 断：灰黄褐10YR5/2	口縁部外面ハケのち下半部にミガキ 口縁部内面ハケのち横ナデ 杯部内面ナデ
15	34		弥生土器脚	8溝 B地点	—	<7.2>	—	10	反転復元 (一部)	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：にぶい黄橙10YR7/2	3方向円孔透し
18	36		弥生土器甕	12-1溝底面 上シルト層 8G-89a	(20.2)	<10.1>	—	10 口縁20	反転復元	外：黒10YR2/1 内：暗灰黄2.5Y5/2 断：黄灰2.5Y4/1	口縁端面横方向のハケか 口頸部外面横方向のハケのちナデか 口頸部内面ハケのちナデか 体部内面横方向のケズリのち横方向のナデ
19	36		弥生土器甕	12-1溝底面 上シルト層 8F-89j	(16.2)	<6.5>	—	10 口縁10	反転復元	外：暗灰N3/0 内：にぶい黄褐10YR5/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	体部外面ケズリのちハケ 体部内面ケズリのちナデ 外面スス付着

付表2 掲載土器等一覧表(2)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	調整等
20	36	53	弥生土器甕	12-1 溝底面上シルト層 8F-89j	—	<8.7>	4.3	10 底部100	反転復元(体部)	外: 黒N2/0 内: 黄灰2.5Y5/1 断: 灰白5Y7/1	外面剥離しており、調整等不明瞭、縦方向のケズリ 内面ハケ
21	36	53	弥生土器甕	12-1 溝底面上シルト層 8G-89a	(15.6)	<12.3>	—	10 口縁30	反転復元	外: 黒N2/0~黒7.5YR2/1 内: 褐灰10YR4/1 断: 褐灰10YR4/1	口縁端面ハケか 体部外面ミガキのち上部横方向のナデ 体部内面ハケ 外面スス付着
22	36	53	弥生土器甕	12-1 溝底面上シルト層 8G-89a	—	<4.2>	5.1	10 底部100	反転復元(一部)	外: 黒N2/0~灰黄褐10YR6/2 内: 黒N2/0 断: 黒N2/0	体部外面剥離等のため調整不明瞭、縦方向のケズリ 内面ナデ 外面スス付着
23	36		弥生土器甕	12-1 溝底面上シルト層 8G-89ab	—	<5.1>	(5.8)	10 底部40	反転復元	外: 褐灰10YR4/1 内: 灰黄褐10YR5/2 断: 褐灰10YR4/1	底部外面ナデ
24	36		弥生土器甕	12-1 溝底面上シルト層 8G-89a	—	<2.6>	(8.0)	10 底部10	反転復元	外: 褐灰10YR4/1 内: 褐灰10YR4/1 断: 黒褐10YR3/2	底部外面ナデ 内面剥離しており、調整不明瞭
25	36	53	弥生土器台付甕	12-1 溝底面上シルト層 8G-89a	—	<5.8>	7.4	10 台部90	反転復元(一部)	外: 黒N2/0~暗灰黄2.5Y5/2 内: 黒N2/0 黄灰2.5Y4/1(台部) 断: 黒N2/0	体部外面剥離しており、調整等不明 台部外面ナデ、工具等の痕跡あり 台端部横方向のナデ、工具によるか
26	36	53	弥生土器壺	12-1 溝底面上シルト層 8G-89ab	17.4	<15.9>	—	10 口縁50	反転復元(一部)	外: 暗灰黄2.5Y5/2 内: 暗灰黄2.5Y5/2 断: 灰N4/0	外面口縁部横ナデのち縦方向のミガキのち下部横方向のミガキ 内面ハケのち口縁部横ナデ
27	36		弥生土器壺	12-1 溝底面上シルト層 8G-89a	—	<3.4>	6.7	10 底部100		外: 暗灰黄2.5Y5/2 内: 暗灰黄2.5Y5/2 断: 灰黄2.5Y6/2	体部外面ナデ 底部外周横ナデ 底部外面ナデ 内面工具によるナデ
28	36		弥生土器壺	12-1 溝底面上シルト層 8G-89ab	—	<3.2>	(7.8)	10 底部30	反転復元	外: 灰黄2.5Y6/2 内: 灰黄2.5Y6/2 断: 黄灰2.5Y5/1	体部外面縦方向のハケのち横方向のミガキ 内面ハケ
29	36	53	弥生土器器台	12-1 溝底面上シルト層 8G-89a	—	<7.8>	14.9	40 脚部70	一部転用	外: 灰黄褐10YR6/2 内: 暗灰黄2.5Y5/2 断: 灰黄褐10YR6/2	外面ナデ 脚端部外面ハケのちナデ 内面ハケのちナデ
30	36	53	弥生土器脚	12-1 溝底面上シルト層 8G-89ab	—	<7.3>	—	10 脚部60	反転復元(一部)	外: 黄褐2.5Y5/3 内: 黄褐2.5Y5/3 断: 黒N2/0	3方向円孔透し 内面ナデ
31	36	53	弥生土器脚	12-1 溝底面上シルト層 8G-89b	—	<9.4>	—	10 脚部80		外: 灰黄2.5Y6/2~灰N4/0 内: 褐灰10YR5/1 断: 灰黄2.5Y6/2	4方向円孔透し 内面縦方向のナデ
32	36		弥生土器脚	12-1 溝底面上シルト層 8G-89b	—	<9.5>	—	10	反転復元(脚裾部)	外: 褐灰10YR4/1 内: 黒褐2.5Y3/1 断: 暗灰黄2.5Y5/2 暗灰N3/0	脚柱部内面不調整 脚裾部内面ナデ、下部横ナデ
33	36		弥生土器脚	12-1 溝底面上シルト層 8G-8a	—	<2.3>	(17.9)	10 脚裾部10	反転復元	外: 褐灰10YR4/1 内: 褐灰10YR4/1 断: 灰黄褐10YR5/2	内外面ナデ、一部ハケ
34	39	54	弥生土器甕	盛土東裾部 8G-8a	13.8	14.4	7.2	90		外: にぶい黄橙10YR6/3 内: にぶい黄橙10YR6/3 断: 暗灰黄2.5Y5/2	体部外面ハケのち下半部ナデ 外面口縁部から体部上半スス付着
35	39	54	弥生土器甕	盛土東裾部 8G-8a	15.6	15.1	6.0	90		外: にぶい黄橙10YR6/3 内: にぶい黄橙10YR6/3 断: 褐灰10YR4/1	体部外面上部ナデ 外面口縁部から体部上半スス付着
36	39		弥生土器甕	盛土東裾部 8G-8a	(17.2)	<9.2>	—	10 口縁70	反転復元	外: 黄灰2.5Y4/1 内: 黄灰2.5Y4/1 断: 暗灰黄2.5Y5/2	外面スス付着
37	39	54	弥生土器甕	盛土東裾部 8G-8a	15.7	22.2	5.9	90		外: にぶい橙7.5YR6/4 内: にぶい橙7.5YR6/4 灰黄褐10YR5/2 断: 灰黄褐10YR5/2	体部外面上部ナデ、下部ハケ 口縁部内面ハケのちミガキ 外面スス付着
38	39	54	弥生土器鉢	盛土東裾部 8G-8a	21.8	11.7	5.5	40 口縁30 底部90	反転復元(口縁~体部)	外: にぶい黄橙10YR5/3 内: にぶい黄橙10YR5/3 断: 灰黄褐10YR4/2	
39	39	54	弥生土器甕	盛土東裾部 8G-8a	17.0	26.9	(6.4)	90	反転復元(底部)	外: 暗灰黄2.5Y5/2 にぶい黄橙10YR6/3 内: 暗灰黄2.5Y5/2 断: にぶい褐7.5YR5/4	体部外面上部ナデ 口縁部内面ハケのちナデ 外面スス付着
40	40		弥生土器甕	盛土上層 8G-8a	(11.8)	<3.1>	—	10 口縁10	反転復元	外: 黄灰2.5Y6/1 内: 暗灰黄2.5Y5/2 断: 灰黄2.5Y6/2	口頸部外面横ナデ 口頸部内面横方向のハケのちナデ 外面スス付着
41	40		弥生土器甕	盛土上層 8G-8a	—	<2.1>	4.6	10 底部80	反転復元	外: 黄褐2.5Y5/3 内: にぶい黄褐10YR5/3 断: 暗灰N3/0 にぶい黄橙10YR6/3	

付表3 掲載土器等一覧表(3)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土構層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	調整等
42	40		弥生土器甕	盛土 8G-8a	—	<4.5>	5.4	10 底部80	反転復元 (体部)	外：灰黄褐10YR6/2 黄灰2.5Y4/1 内：黒褐10YR3/1 断：灰黄褐10YR6/2	外面縦方向のハケ 内面剥離しており、調整等不明
43	40		弥生土器高杯	盛土 下層 8G-8a	(23.0)	<3.6>	—	10 口縁10	反転復元	外：にぶい黄褐10YR5/3 内：灰黄褐10YR4/2 断：灰黄褐10YR5/2	
44	43		弥生土器甕	土器集積 5 a 層 8G-8b	14.4	<7.6>	—	10 口縁100	反転復元 (体部)	外：にぶい橙7.5YR7/3 黒褐10YR3/1 内：明褐7.5YR7/2 断：橙7.5YR7/6	剥離しており、調整等不明瞭 口縁部外面ハケのち横ナデか 体部内外面ナデか 外面スス付着
45	43		弥生土器甕	土器集積 8G-8b	15.0	<7.8>	—	10 口縁80	反転復元 (体部)	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：灰黄2.5Y6/2	口縁部外面ハケのち横ナデ 体部外面上部剥離しており、調整等不明瞭 体部内面剥離しており、調整等不明
46	43	55	弥生土器甕	土器集積 8G-8b	(15.0)	<9.0>	—	20 口縁70	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：灰黄2.5Y7/2	剥離しており、調整等不明瞭 口縁部外面横ナデ 体部外面ハケのちナデか 体部内面ハケ 外面スス付着
47	43	55	弥生土器甕	土器集積 8G-8b	15.9	<12.2>	—	40 口縁100	反転復元 (体部)	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：灰白7.5YR8/2	口縁部外面ハケのち口縁部横ナデ 口縁部内面ハケのちナデか 体部内面ハケのち縦方向の粗いナデ
48	43	55	弥生土器甕	土器集積 8G-8b	(15.4)	20.8	5.3	60 底部100	反転復元 (口縁～ 体部)	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/3 断：浅黄橙7.5YR8/3	全体的に剥離著しい 胎土に1cm大までの礫多く含む
49	43	55	弥生土器甕	土器集積 8G-8b	16.1	26.8	5.2	70		外：灰黄褐10YR5/2 内：暗灰黄2.5Y5/2 断：灰黄褐10YR5/2	口縁部外面ハケのち横ナデ 体部外面上部ハケのちナデ 口縁部内面ハケのちナデ 外面スス付着
50	43	55	弥生土器甕	土器集積 8G-8b	—	<14.9>	4.5	40 底部100		外：にぶい黄2.5Y6/3 内：にぶい黄2.5Y6/3 断：黄灰2.5Y4/1	体部内面下部ナデ 外面スス付着
51	43		弥生土器甕	土器集積 8G-8b	—	<13.7>	4.3	20 底部60	反転復元 (体部)	外：黒褐2.5Y3/1 内：黄灰2.5Y6/1 断：灰白2.5Y8/2	外面剥離著しく、調整等不明、スス付着
52	43		弥生土器甕	土器集積 8G-8b	—	<2.8>	4.8	10 底部100		外：灰黄褐10YR6/2 にぶい橙2.5YR6/4 内：灰黄2.5Y7/2 断：黄灰2.5Y5/1	
53	43	55	弥生土器甕	土器集積 5 a 層 8G-8b	—	<5.5>	5.0	10 底部100		外：灰黄褐10YR6/2 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	内面ナデ スス付着
54	43	56	弥生土器壺	土器集積 5 a 層 8G-8ab	(13.4)	<15.7>	—	30 口縁40	反転復元	外：にぶい橙7.5YR7/3 にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい橙7.5YR7/3 にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部ハケのち横ナデ 頸部外面ハケ 体部外面ハケのちナデ 頸部内面ハケのちナデ 体部内面ナデ
55	43		弥生土器壺	土器集積 8G-8b	11.5	<10.1>	—	10 口縁80	反転復元 (頸部)	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：黄灰2.5Y5/1	頸部外面ハケ 頸部内面ナデ
56	43	56	弥生土器壺	土器集積 8G-8b	(15.6)	<11.9>	—	10	反転復元	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：黄灰2.5Y6/1	口縁部外面横ナデのちミガキ 内面ハケのちナデ
57	43		弥生土器壺	土器集積 8G-8ab	(12.4)	<4.0>	—	10 口縁20	反転復元	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：灰白7.5YR8/1 断：浅黄橙7.5YR8/4	剥離しており、調整等不明 頸部外面ハケのちナデか
58	43	56	弥生土器壺	土器集積 8G-8b	—	<13.2>	4.8	30 底部80	反転復元 (体部)	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：にぶい黄橙10YR6/3	底部焼成後穿孔
59	43	56	弥生土器壺	土器集積 8G-8b	—	<19.1>	(7.0)	40 底部30	反転復元 (底部)	外：黄褐2.5Y5/3 内：暗灰黄2.5Y5/2 断：にぶい黄2.5Y6/3	
第4a-3面											
61	54		弥生土器壺	12-1・2溝 境界部 8G-89ab	(15.2)	<6.2>	—	10 口縁20	反転復元	外：灰黄2.5Y6/2 内：灰黄2.5Y6/2 断：にぶい橙7.5YR6/4	口縁部ハケのち横ナデ 頸部内面ナデ
62	54	58	弥生土器壺	12-1・2溝 境界部 8G-8a	—	破片長 <4.4>	厚 0.8	10 口縁10		外：灰黄褐10YR4/2 内：灰黄褐10YR4/2 断：灰黄褐10YR5/2	内外面ナデ 外面下部に顔料塗布か(遺存部分少なく不明瞭) ※63と同一個体か
63	54	58	弥生土器壺	12-1・2溝 境界部 8G-8a	—	破片長 <7.7>	厚 0.8	10		外：褐灰10YR4/1 内：黒2.5Y2/1 断：暗灰黄2.5Y5/2	外面ハケのちミガキ 外面に顔料塗布(2条の横線) ※62と同一個体か
64	54		弥生土器甕	12-1・2溝 境界部 8G-89ab	(16.8)	<12.0>	—	10 口縁10	反転復元	外：黒N1.5/0 内：オリーブ黒5Y3/2 断：黄褐2.5Y5/3	外面ススが厚く付着しており、調整等不明瞭 口縁部内面横方向のハケのちナデか 体部内面ハケ(工具によるナデ)
65	54		弥生土器脚	12-1・2溝 境界部 8G-89ab	—	<5.6>	(8.6)	40	反転復元 (一部)	外：にぶい黄橙10YR6/4 にぶい赤褐2.5YR5/4 内：にぶい黄橙10YR6/3 断：赤褐10R5/4	体部外面ミガキ 脚部外面ケズリのちナデ 脚端部横ナデ 脚部内面ナデ
66	54		弥生土器脚	12-1・2溝 境界部 8G-89ab	—	<4.3>	(15.0)	10 脚部10	反転復元	外：黄灰2.5Y5/1 内：黄灰2.5Y5/1 断：灰黄2.5Y6/2	外面ミガキ 内面ナデ、脚裾部横ナデ

付表4 掲載土器等一覧表(4)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	調整等
68	55		弥生土器鉢	12-2 溝上層	(22.3)	<6.9>	—	10 口縁10	反転復元	外: 暗灰黄2.5Y4/2 内: 暗灰黄2.5Y4/2 断: 黄灰2.5Y5/1	外面ハケのち一部にナデを施すか 体部内面ナデ
69	55	62	弥生土器鉢	12-2 溝上層	(30.6)	<10.4>	—	10 口縁20	反転復元	外: 黄灰2.5Y5/1 内: 黒N2/0 断: 灰5Y5/1	
70	55		弥生土器鉢	12-2 溝上層	(27.1)	<4.0>	—	10 口縁10	反転復元	外: 黒7.5Y2/1 内: 灰5Y5/1 断: 灰5Y4/1	口縁部横ナデ 体部外面ハケのち弱いナデ 体部内面ハケのち横ナデ
71	55		弥生土器鉢	12-2 溝上層	—	<1.3>	3.5	10 底部90	反転復元 (体部)	外: 灰黄2.5Y7/2 内: 浅黄2.5Y7/3 断: 灰黄2.5Y7/2	底部外面ナデ 体部内面ミガキ 底部内面ナデ
72	55	62	弥生土器把手付鉢	12-2 溝上層	—	<4.9>	3.9	20 底部100	反転復元 (一部)	外: 褐灰10YR6/1 内: 灰黄褐10YR6/2 断: 明褐7.5YR5/6	体部外面ミガキのち把手周囲ナデ 底部外面ケズリ 内面ミガキ
73	55		弥生土器水差	12-2 溝上層	5.4	<5.4>	—	10 口縁90	反転復元	外: 灰褐7.5YR6/2 内: 灰黄褐10YR6/2 断: 灰白2.5Y8/2	外面縦方向のナデ 内面縦方向のケズリ(またはハケ)のちナデ
74	56	62	弥生土器蓋	12-2 溝上層	15.3	6.2	—	60		外: 黒褐10YR3/1 内: 黒2.5Y2/1 断: 黄灰2.5Y4/1	内面ハケのちナデ 内外面スス付着
75	56	59	弥生土器甕	12-2 溝上層	(11.1)	<11.8>	—	30 口縁20	反転復元	外: 褐灰10YR4/1 内: 灰黄褐10YR4/2 断: 灰黄褐10YR4/2 にぶい赤褐5YR4/4	口頸部外面横方向のハケのちナデか 体部外面縦方向のハケのち上部はナデ、下部は縦方向のミガキ 体部内面ハケのち口頸部内面から体部内面上部横方向のハケのちナデ スス付着
76	56	59	弥生土器甕	12-2 溝上層	(11.8)	<9.3>	—	20 口縁30	反転復元	外: 黒褐10YR3/1 内: 黒褐10YR3/2 断: 黒褐10YR3/2	外面口縁部横方向のハケのち横ナデのち体部ミガキ 口縁部内面横方向のハケのちナデか 体部内面ハケ スス付着
77	56	59	弥生土器甕	12-2 溝上層	18.1	<24.3>	—	60 口縁90		外: 黒褐10YR3/2 内: 暗褐10YR3/3 断: 灰黄褐10YR4/2	口縁部外面横方向のハケか 体部外面縦方向のハケのち縦方向のミガキ 口縁部内面横方向のハケのちナデか 体部内面ハケ(一部か)のち縦方向のケズリのちナデ
78	56	59	弥生土器甕	12-2 溝上層	—	<12.7>	5.7	50 底部100	反転復元 (一部)	外: 灰黄褐10YR4/2 内: 灰黄褐10YR4/2 断: 灰黄褐10YR4/2	体部外面ケズリのちミガキ 底部外面ナデ 体部内面ハケ
79	56	59	弥生土器甕	12-2 溝上層	(9.8)	<14.4>	—	40	反転復元	外: 灰黄褐10YR4/2 内: 灰黄褐10YR6/2 断: 褐灰10YR6/1	外面ハケのちミガキ、口縁部横ナデ 口縁部内面ハケ 外面スス付着
80	56	60	弥生土器甕	12-2 溝上層	(19.3)	<11.3>	—	10 口縁20	反転復元	外: 黒褐10YR3/1 内: 灰黄褐10YR4/2 断: 灰黄褐10YR4/2	口縁部から体部外面上部横方向のハケのちナデか 体部内面ナデ下部ケズリ 外面スス付着
81	56	60	弥生土器甕	12-2 溝上層	—	<4.6>	4.8	10 底部100	反転復元 (体部)	外: 橙2.5YR6/6 内: 赤橙10R6/8 断: 赤橙10R6/8	外面、上から下への縦方向のケズリのち縦方向のミガキ 内面ナデか
82	56		弥生土器甕	12-2 溝上層	—	<4.2>	4.5	10 底部100	反転復元 (一部)	外: 暗灰黄2.5Y5/2 内: 暗灰黄2.5Y5/2 断: 黄灰2.5Y5/1	
83	56	59	弥生土器甕	12-2 溝上層	—	<3.0>	6.2	10 底部90	反転復元 (体部)	外: 黄灰2.5Y4/1 内: 暗灰黄2.5Y5/2 断: 灰黄2.5Y6/2	底端部摩擦減気味 体部外面残存部分少なく、調整等不明 底部外面ナデ 内面指オサエのちナデ
84	56		弥生土器甕	12-2 溝上層 13溝最上層 (12溝合流部)	—	<5.9>	5.9	10 底部100	反転復元 (体部)	外: 黒褐10YR3/1 内: 灰黄褐10YR4/2 断: 灰黄褐10YR5/2	体部外面ミガキのち下部ナデ 底部外面ナデ 内面ナデ スス付着
85	56	60	弥生土器甕	12-2 溝上層	(26.0)	<7.2>	—	10 口縁20	反転復元	外: 灰褐7.5YR5/2 内: 灰黄褐10YR6/2 断: にぶい橙7.5YR7/3	口縁端面、口頸部内面横方向のハケのちナデか 体部外面ナデ 体部内面ハケ
86	56	60	弥生土器甕	12-2 溝上層	—	<6.7>	8.1	10 底部100	反転復元 (体部)	外: にぶい黄橙10YR7/3 褐灰10YR5/1 内: 褐灰10YR6/1 断: 灰白10YR8/2	剥離しており、調整等不明 内面粗いナデ
87	56	60	弥生土器甕	12-2 溝上層	—	<6.0>	6.2	10 底部100	反転復元 (一部)	外: 灰黄褐10YR4/2 内: 暗灰黄2.5Y5/2 断: 暗灰黄2.5Y5/2	ナデ 体部外面スス付着
88	56	60	弥生土器甕	12-2 溝上層	(19.5)	<5.8>	—	10 口縁10	反転復元	外: 黒褐10YR3/1 内: 暗灰黄2.5Y5/2 断: 暗灰黄2.5Y5/2	口頸部内面横方向のハケのちナデか 体部内面ナデ
89	56	60	弥生土器甕	12-2 溝上層	(18.0)	<5.8>	—	10 口縁10	反転復元	外: 黒褐10YR3/1 内: にぶい黄褐10YR4/3 断: 褐灰10YR6/1	体部外面ハケ、内面ナデ、のち口頸部から体部上部横ナデ
90	56	61	弥生土器台付甕	12-2 溝上層	—	<10.3>	—	40	反転復元 (一部)	外: 黄灰2.5Y6/1 内: 黒10YR2/1 断: オリーブ黒5Y3/1	外面剥離しており、調整等不明 内面ハケのちナデ 内外面スス付着

付表5 掲載土器等一覧表(5)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	調整等
91	56	60	弥生土器甕	12-2溝上~中層/西肩部13溝中層(12溝合流部)	—	<27.2>	8.6	20 底部100	反転復元(体部の一部)	外: 暗灰黄2.5Y5/2 内: 黄灰2.5Y6/1 断: 暗灰黄2.5Y5/2	体部外面ハケのち下部にミガキ 底部外面ナデ 内面ハケのち上部にナデか
92	57	61	弥生土器壺	12-2溝上層13溝上~中層(12溝合流部)	28.4	<12.3>	—	20 口縁30		外: 灰黄褐10YR4/2 内: 黒褐10YR3/2 断: 黄灰2.5Y4/1	頸部外面に赤色顔料塗布(遺存状態悪く、範囲等不明瞭) 口縁端面横方向のハケか 内面横方向のナデ(工具によるか)のち放射状に暗紋状のミガキ(9方向か)
93	57	61	弥生土器壺	12-2溝上層	(25.0)	<14.8>	—	20 口縁50	反転復元	外: 灰黄褐10YR5/2 内: 灰黄褐10YR5/2 断: 灰5Y6/1 灰N4/0	口縁端面に櫛描波状紋と円形竹管浮紋、円形竹管浮紋に赤色顔料塗布 内外面ともハケのち口縁部横ナデ 頸部外面下部から体部外面横方向のナデ
94	57		弥生土器壺	12-2溝上層	(12.5)	<1.8>	—	10 口縁10	反転復元	外: 灰黄2.5Y7/2 内: 灰黄2.5Y6/2 黄灰2.5Y6/1 断: 灰白2.5Y8/1	口縁端面ハケのち櫛描列点紋のち凹線 内外面横ナデ
95	57	61	弥生土器壺	12-2溝上層	(14.6)	<5.9>	—	10 口縁30	反転復元	外: 黄灰2.5Y5/1 内: 黄灰2.5Y5/1 断: 黄灰2.5Y5/1	
96	57	61	弥生土器壺	12-2溝上層	(17.0)	<8.0>	—	10 口縁30	反転復元	外: にぶい黄褐10YR6/3 内: にぶい褐7.5YR6/3 断: 黄灰2.5Y6/1	口縁端面ハケのち横ナデか 外面ナデ 内面ハケのちナデ
97	57	61	弥生土器壺	12-2溝上層	—	破片長<9.7>	厚1.2	10		外: オリーブ黒5Y3/1 内: 黄灰2.5Y4/1 断: 灰5Y4/1	
98	57		弥生土器壺	12-2溝上層	—	<2.8>	6.8	10 底部100	反転復元(一部)	外: 褐灰10YR4/1 内: 褐灰10YR5/1 断: 褐灰10YR6/1	体部外面縦方向のミガキ 底部外周横ナデ 内面ナデ
99	57		弥生土器壺	12-2溝上層南端部	—	<3.1>	6.5	10 底部100	反転復元(一部)	外: 灰黄2.5Y6/2 内: 灰黄2.5Y6/2 断: 灰黄2.5Y6/2	体部外面ハケのちミガキ 底部外面ナデ 体部内面ハケのちナデ
100	57	61	弥生土器高杯	12-2溝上層	(18.4)	<5.8>	—	20 口縁40	反転復元	外: 灰黄褐10YR4/2 内: 灰黄褐10YR4/2 断: 暗灰黄2.5Y5/2	口縁部外面横方向のハケのち下部に横方向のミガキ 口縁部内面横方向のハケのちナデ 杯部内面ナデ 口縁部中心にスス付着か
101	57		弥生土器高杯	12-2溝上層/西肩部5b-3層	(20.9)	<6.2>	—	30 口縁30	反転復元	外: 暗灰黄2.5Y5/2 内: 黄灰2.5Y4/1 断: 黄灰2.5Y6/1	口縁部横方向のハケのちナデ 杯部ミガキ 口縁部内面横方向のハケのち横方向のミガキ
102	57	61	弥生土器高杯	12-2溝上層	22.2	<7.3>	—	60 口縁30		外: 黒褐10YR3/2 内: 黒褐10YR3/1 断: 黄灰2.5Y4/1	口縁部外面横ナデ 杯部内面厚くスス付着、調整等不明
103	57	61	弥生土器高杯	12-2溝上~中層	(21.6)	<5.5>	—	20 口縁30	反転復元(一部)	外: 灰黄褐10YR5/2 内: 灰黄褐10YR5/2 断: 黄灰2.5Y5/1	内面杯部上部ハケのち口縁部横ナデのちミガキ
104	57	61	弥生土器台付鉢	12-2溝上層	(30.6)	<7.0>	—	10 口縁10	反転復元	外: 明赤褐5YR5/6 内: 明赤褐5YR5/6 断: 灰5Y6/1	杯部外面に棒状浮紋一對3本以上 杯部外面に突帯のはがれた痕跡 口縁部横ナデ 杯部内面横方向の強いナデ
105	57		弥生土器脚	12-2溝上層南端部	—	<18.1>	—	10 脚柱部90	反転復元(一部)	外: 褐灰10YR5/1 灰黄2.5Y6/2 灰N4/0 内: 褐灰10YR5/1 灰黄2.5Y6/2 断: 灰黄2.5Y6/2	脚裾部内面ハケ
106	57		弥生土器脚	12-2溝上~中層	—	<7.2>	—	10 脚柱部100		外: にぶい褐7.5YR6/3 内: 灰黄褐10YR4/2 断: 灰黄褐10YR5/2	スス付着、特に杯部内面顕著
107	57		弥生土器脚	12-2溝上~中層	—	<2.8>	(12.6)	10 底部30	反転復元	外: 黄褐2.5Y5/3 内: 黄褐2.5Y5/3 断: にぶい黄褐10YR5/3	2孔一對の円孔透し、5方向か 脚端部外面横ナデ 内面ケズリ
108	57		弥生土器脚	12-2溝上層	—	<1.1>	(9.8)	10 底部20	反転復元	外: 褐灰10YR4/1 内: 黄灰2.5Y4/1 断: 黄灰2.5Y4/1	2孔一對の円孔透し 内外面ナデ
109	57	62	弥生土器脚	12-2溝上層	—	<7.0>	10.9	30 脚部90		外: 褐灰10YR4/1 内: 灰黄褐10YR5/2 断: にぶい黄褐10YR5/3	外面、摩滅気味で調整等不明瞭
110	58		弥生土器鉢	12-2溝西肩部	(10.7)	<2.9>	—	10 口縁10	反転復元	外: 黄褐2.5Y5/3 内: 黄褐2.5Y5/3 断: 黄褐2.5Y5/3	遺存部分が少なく、調整等不明瞭 内面ナデ
111	58		弥生土器脚	12-2溝西肩部	—	<4.4>	(15.0)	10 底部10	反転復元	外: 褐灰10YR4/1 内: 暗灰黄2.5Y5/2 断: 褐灰10YR4/1	円孔透し2箇所確認、何方向かは不明 内面下部ケズリ、上部ナデ
112	59		弥生土器甕	12-2溝中層	(13.9)	<6.6>	—	10 口縁20	反転復元	外: オリーブ黒5Y3/1 内: 黒褐2.5Y3/1 断: 黄灰2.5Y4/1	口頸部外面横ナデ 口頸部内面ハケのちナデか スス付着、特に体部外面上部に厚く付着しており、調整等不明
113	59	62	弥生土器飯蛸壺	12-2溝中層	—	<9.4>	—	40	反転復元(体部)	外: 灰黄褐10YR6/2 内: 灰黄2.5Y6/2 断: 灰黄2.5Y6/2	内外面ナデ(体部外面剥離しており、調整不明瞭)

付表6 掲載土器等一覧表(6)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	調整等
114	59	62	弥生土器脚	12-2 溝中層	—	<8.0>	(14.3)	10 脚部20	反転復元	外: 灰5Y4/1 内: 灰5Y4/1 断: 黄灰2.5Y4/1	円孔透し、5方向か剥離しており、調整等不明瞭 内外面ナデか
115	59	62	弥生土器脚	12-2 溝下層	—	<5.6>	9.7	50 脚部100		外: にぶい赤褐5YR5/3 内: 灰褐7.5YR5/2 断: 明褐灰7.5YR7/2	8方向円孔透し 脚部外面上部にミガキのち脚部外面中に横ナデ 脚端部横ナデのち脚部外面に櫛描列点紋 杯部内面ハケのちナデか
125	67	71	弥生土器甕	13溝最上層	(16.3)	<7.8>	—	10 口縁20	反転復元	外: オリーブ黒5Y3/1 内: 黄灰2.5Y4/1 断: 褐灰10YR5/1	体部内面縦方向の粗いナデ 外面スス付着
126	67	71	弥生土器甕	13溝最上層	(16.2)	<7.7>	—	10 口縁20	反転復元	外: 灰褐7.5YR5/2 内: 灰褐7.5YR5/2 断: 灰褐7.5YR5/2	口頸部外面横方向のミガキ 頸部外面横方向のケズリ 体部内面ケズリのちナデ
127	67	71	弥生土器甕	13溝最上層	(18.1)	<15.3>	—	10 口縁20	反転復元	外: 黒褐5YR2/1 内: 黒褐10YR3/1 断: 黄灰2.5Y5/1	口頸部内面ハケのちミガキ 体部内面ケズリのちナデ 外面スス付着
128	67	71	弥生土器甕	13溝最上層(12溝合流部)	—	<3.8>	5.0	10 底部100	反転復元(体部)	外: 灰白5Y7/2 内: 黒5Y2/1 断: 灰白5Y7/2 黒5Y2/1	体部外面ナデ
129	67		弥生土器甕	13溝最上層	—	<3.9>	6.2	10 底部60	反転復元	外: オリーブ黒5Y3/1 黄灰2.5Y4/1 内: 灰5Y4/1 断: 黄灰2.5Y5/1	底部外周横ナデ 底部外面ハケのちナデか 内面ナデ
130	67		弥生土器甕	13溝最上層(12溝合流部)	—	<3.3>	(6.9)	10 底部10	反転復元	外: 灰黄2.5Y6/2 内: にぶい黄橙10YR6/3 断: 黄灰2.5Y6/1	
131	67		弥生土器甕	12・13溝合流部最上層	—	<4.1>	7.9	10 底部100	反転復元(体部)	外: にぶい黄褐10YR5/3 内: にぶい褐7.5YR5/3 断: 青灰5B5/1	体部外面縦方向のハケのちミガキ 底部外面ハケのちナデ 内面ハケのちナデ
132	67	71	弥生土器甕	13溝最上層	(19.2)	<7.6>	—	10 口縁10	反転復元	外: 黒5Y2/1 オリーブ黒5Y3/1 内: 灰黄2.5Y6/2 断: 灰オリーブ5Y6/2	口頸部外面から体部外面上部横ナデ 体部外面ミガキ 外面スス付着
133	67	71	弥生土器脚	13溝最上層	—	<10.3>	—	10	反転復元(一部)	外: 灰黄褐10YR5/2 内: 灰黄褐10YR5/2 断: 灰黄褐10YR5/2	5方向円孔透し 脚部内面ナデ
134	67		弥生土器壺	13溝最上層	—	<2.2>	(5.5)	10 底部50	反転復元	外: 褐灰10YR6/1 内: 褐灰10YR6/1 断: 灰褐7.5YR6/2 褐灰7.5YR4/1	
135	67	71	弥生土器壺	13溝最上層	—	破片長<8.3>	厚0.6	10		外: 灰黄褐10YR4/2 内: にぶい黄橙10YR6/3 断: 暗灰黄2.5Y5/2	外面に線刻 内面ナデ 外面スス付着
136	67	71	弥生土器甕	13溝上層(12溝合流部)	(15.3)	<6.1>	—	10 口縁20	反転復元	外: 黒10YR2/1 内: 黒褐10YR3/1 断: 黄灰2.5Y6/1	体部内面ケズリのちナデ 外面スス付着
137	67	72	弥生土器甕	12・13溝合流部上層	—	<4.1>	7.8	10 底部100		外: 黄灰2.5Y4/1 内: 黄灰2.5Y5/1 断: 黒褐2.5Y3/1	底部外面ケズリ 内面ハケのち粗いナデ
138	67	72	弥生土器甕	13溝上層	—	<11.3>	(10.9)	10 底部60	反転復元	外: 褐灰10YR5/1 内: 黄灰2.5Y5/1 断: にぶい黄2.5Y6/3	
139	67	72	弥生土器水差	13溝上層	(9.1)	15.2	5.9	90 口縁10	反転復元(口縁部)	外: オリーブ黒5Y3/1 灰黄褐10YR6/2 内: 灰黄褐10YR5/2 断: 灰黄褐10YR6/2	体部外面下半ミガキ、それ以外はナデ 外面スス付着
140	67	72	弥生土器脚	13溝上層/中層	—	<11.1>	—	脚柱部80	反転復元(一部)	外: 浅黄2.5Y7/3 内: 灰黄2.5Y7/2 断: 黄灰2.5Y6/1	
141	67		弥生土器高杯	13溝中層(12溝合流部)	(23.1)	<3.3>	—	10 口縁10	反転復元	外: 黒褐2.5Y3/1 内: 灰5Y4/1 断: 灰5Y5/1	杯部外面剥離しており、調整等不明、ミガキか 杯部内面ナデか
142	67		弥生土器壺	13溝下層	—	<2.1>	4.8	10 底部100	一部転用	外: オリーブ黒5Y3/1 内: 褐灰10YR4/1 断: 灰5Y6/1	外面剥離しており、調整等不明瞭
143	67	72	弥生土器壺	13溝上~中層/下層 12-2 溝上層	—	<11.0>	—	10	傾き復元 反転復元	外: 灰黄褐10YR5/2 灰N4/0 内: 灰黄褐10YR5/2 断: 灰黄褐10YR6/2 灰N4/0	外面縦方向のハケのち9条一対の櫛描紋 内面ハケのち頸部ナデ
(5層)											
144	73		弥生土器甕	5 a層砂層 8G-8a	(18.8)	<5.3>	—	10 口縁10	反転復元	外: 黒褐10YR3/2 内: 黒褐10YR3/2 断: にぶい黄褐10YR5/3	外面スス付着
145	73		弥生土器甕	5 a層シルト層(第4 a-1面直上) 8G-9ab	—	<3.5>	(6.8)	10 底部40	反転復元	外: 黄灰2.5Y6/1 内: 暗灰黄2.5Y5/2 断: 黄灰2.5Y6/1	体部外面剥離しており、調整等不明瞭
146	73		弥生土器甕	5 a層シルト~砂層 8G-8a	—	<4.3>	4.8	10 底部50	反転復元(体部)	外: にぶい黄橙10YR6/3 内: 黄灰2.5Y6/1 断: 灰5Y4/1	外面ナデ 内面ハケのちナデ

付表 7 掲載土器等一覧表 (7)

遺物 番号	挿図	写真 図版	種類 器種	出土遺構 層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図 方法	色調	調整等
147	73		弥生土器 台付鉢	5 a 層 シルト ～砂層 8G-8a	(19.3)	<4.8>	—	10 口縁10	反転復元	外：オリーブ黒5Y3/1 内：黒5Y2/1 断：黒N2/0	
148	73		弥生土器 高杯	5 a 層 8G-8ab	(22.6)	<5.4>	—	10 口縁20	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：灰7.5Y4/1	
149	73		弥生土器 脚	5 a 層 シルト ～砂層 8G-8a	—	<5.2>	(15.0)	20 脚部50	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：にぶい橙7.5YR7/3 断：灰7.5Y4/1	脚裾部外面横ナデのち脚部外面ハケ 内面ハケのちナデ
150	74		弥生土器 壺	5 b-1 層 8G-9ab	(18.2)	<1.8>	—	10 口縁10	反転復元	外：黒10YR2/1 内：にぶい黄褐10YR5/3 断：暗灰黄2.5Y5/2	
151	74		弥生土器 鉢	5 b-1 層 8G-9ab	(9.0)	<6.0>	—	10 口縁10	反転復元	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄褐10YR4/3 断：にぶい黄橙10YR6/3	剥離しており、調整等不明瞭
152	74		弥生土器 甕	5 b-1 層 8G-9a	—	<2.6>	(6.2)	10	反転復元	外：灰黄2.5Y6/2 内：灰黄2.5Y6/2 断：浅黄2.5Y7/3	外面ナデ 内面遺存部分少なく、調整等不明瞭
153	74		弥生土器 脚	5 b-2 層 8G-9ab	—	<3.6>	—	10		外：にぶい橙7.5YR6/4 内：にぶい黄橙10YR6/3 断：にぶい黄橙10YR7/4	
154	74		弥生土器 甕	5 b-2 層 8G-8b	—	<4.2>	(6.5)	10 底部40	反転復元	外：黒褐10YR3/2 内：黒褐2.5Y3/1 断：灰黄褐10YR5/2	
155	74		弥生土器 鉢	5 b-1・2 層 8G-9ab	(32.5)	<8.5>	—	20 口縁30	反転復元	外：灰黄褐10YR4/2 内：暗灰黄2.5Y5/2 断：灰黄褐10YR5/2	体部外面ハケのちミガキ 体部内面ハケのち上半部ナデ
156	74		弥生土器 甕	5 b-3 層 8G-8b	—	<2.5>	(5.6)	10 底部30	反転復元	外：黒褐10YR3/1 内：黒褐2.5Y3/1 断：灰黄2.5Y7/2	
157	74	74	弥生土器 甕	5 b-3 層 8G-8a	—	<7.9>	4.9	10 底部100	反転復元 (一部)	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：オリーブ黒5Y3/1	底部外面ナデ 内面ナデ
第8面 (11層)											
159	78	74	弥生土器 壺	11層 8G-9a 落ち込み部	—	<5.0>	—	10	傾き復元	外：暗灰黄2.5Y5/2 内：黄灰2.5Y5/1 断：灰5Y4/1	薄く剥離しており、調整等不明瞭、ナデか
第9面 (12層)											
(12層)											
161	83	74	弥生土器 甕	12 b 層 8G-9a	—	<6.5>	9.0	10 底部60	反転復元	外：灰黄2.5Y6/2 内：灰黄2.5Y6/2 断：灰黄2.5Y6/2	
第9c面											
163	87	74	弥生土器 壺	27溝	—	<11.5>	8.1	30 底部100		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y6/2 断：黄灰2.5Y5/1	外面剥離しており、調整等不明 内面ナデ
図版のみ掲載分											
164		62	弥生土器 把手	12-2 溝 上層	—	幅 2.7	厚 1.7	10	—	外：灰黄褐10YR5/2 断：黄灰2.5Y5/1	
197		74	弥生土器 体部	5 a 層 シルト ～砂層 8G-8a	—	破片長 <5.7>	厚 0.7	10	—	外：黄灰2.5Y4/1 内：黄灰2.5Y5/1 断：灰黄2.5Y6/2	外面ミガキ 内面ハケ

付表8 若江北遺跡 掲載石器、石製品一覧表

遺物 番号	挿図	写真 図版	種類 器種	出土遺構 層位	長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	特徴
60	46	58	石製品 砥石	第4 a-2面 9土坑 8G-9a	<7.2>	2.4	1.8	38.3	キメの細かい砥石 いわゆる青砥といわれるものか 中砥または仕上げ砥であろう 一部欠損するものの、四側面と小口側の計5面を使用する 四側面には細くシャープな擦痕が多くみられる
116	60	63	打製石器 石鏃	第4 a-3面 12-2溝 上層 南端部 8G-9b	5.1	2.0	1.0	9.6	サヌカイト製凸基式石鏃 先端部付近および身部下半の最大幅付近の側面には、複数回敲打を行ったツブレが計3箇所みられる これは現状では肉厚になっているため、厚みを減じようとして試みたものであろうか もしそうであるならば成品と考えるよりも、失敗品と捉える方がいいのかもしれない
117	60	63	礫石器 敲・磨石	第4 a-3面 12-2溝 上層 8G-9a	10.4	4.6	4.6	379.5	四側面に敲打痕 頭頂部は研磨痕がみられ、下端部は研磨のち敲打に使用したと考えられる 明瞭ではないが表裏面の敲打の著しい部分には、線状或いはV字状の痕跡とみえるものがあるため、両極技法に用いられた可能性も考えられる
160	78	74	打製石器 石剣 (大型尖頭器)	11層 8G-9a	<4.7>	5.2	1.3	45.8	サヌカイト製打製石剣と思われる 先端部側・基部側ともに折損している 折れにかかわる方の方向は明瞭でないが、長軸に対して垂直方向でなく、やや斜め方向からの打撃によるものか
162	83	74	磨製石器 石庖丁	12 b層 8G-9a	<5.5>	<4.2>	0.5	14.2	片刃の石庖丁 粘板岩製か 刃がつけられている面の両端には、紐孔を穿つための敲打の痕跡がみられる 両者とも敲打のち研磨されており、痕跡は比較的滑らかになっている なお、右側敲打痕の下にある打痕は風化が進んでいないので、新しい傷かもしれない また、峰の一部にも研磨以前に施された敲打痕がみられる

付表9 若江北遺跡 第4a-2面集石等一覧表

番号	写真図版	出土遺構 層位	長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
第4a-2面 集石							
1	57	上部	54.5	25.5	27.5	53.2	端部に欠けあり
2	57	上部	65.0	25.8	21.6	41.8	
3	57	上部	67.6	23.9	22.6	39.6	欠けあり 39と接合
4	57	上部	50.8	28.6	22.8	42.0	
5	57	上部	34.5	29.0	21.1	24.8	折れている 30と接合
6	57	上部	64.7	32.4	32.3	67.1	
7	57	上部	61.0	25.0	17.3	35.4	
8	57	上部	59.0	26.8	27.7	48.5	
9	57	上部	48.6	29.6	25.0	50.2	
10	57	上部	65.4	20.5	19.4	35.5	
11	57	上部	84.8	33.0	26.1	78.8	
12	57	上部	46.0	30.5	22.9	43.6	折れている
13	57	上部	70.2	31.3	31.0	73.4	
14	57	上部	62.4	29.3	22.5	50.2	
15	57	上部	83.0	29.4	21.7	60.7	
16	57	上部	75.6	31.2	26.8	77.7	
17	57	上部	56.2	35.0	24.7	65.2	
18	57	上部	62.2	26.0	16.6	35.7	
19	57	上部	59.0	28.6	22.9	45.9	
20	57	上部	53.7	30.0	21.0	47.5	
21	57	上部	59.4	30.4	22.3	51.7	
22	57	上部	57.0	27.2	24.8	45.8	
23	57	上部	58.7	29.0	16.5	43.4	
24	57	下部	60.4	28.0	23.4	47.7	
25	57	下部	56.6	36.3	20.4	43.8	
26	57	下部	60.5	28.5	19.0	39.5	
27	57	下部	57.3	33.3	30.4	65.9	
28	57	下部	56.8	31.3	30.6	57.3	
29	57	下部	64.0	28.5	20.0	53.9	
30	58	下部	31.0	28.6	18.0	18.7	折れている 5と接合
31	58	下部	62.0	29.0	28.2	54.7	
32	58	下部	58.5	30.5	22.8	50.7	
33	58	下部	63.5	23.5	20.9	43.7	
34	58	下部	60.0	37.1	27.7	75.3	
35	58	下部	62.8	26.8	28.9	53.4	
36	58	下部	58.5	33.4	25.3	59.4	
37	58	下部	68.6	30.6	21.8	49.1	
38	58	最下部	59.1	23.2	27.8	41.3	
39	58	最下部	22.5	19.0	6.3	2.9	破片 3と接合
第4a-3面 12-2溝・13溝							
40		12-2溝 上層	67.5	20.5	21.4	43.4	欠けあり
41		12-2溝 上層	78.4	29.5	20.8	59.2	
42		13溝 最上層(12溝合流部)	63.6	24.2	23.0	47.9	

付表10 若江北遺跡 木製品等一覧表(1)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	最大径(cm)	樹種	備考
第4a-1面										
16	34		板状	8溝 図31-6層	<11.9>	4.3	<1.9>	—	ヒノキ	加工痕
17	34	52	直柄鍬 鍬柄	8溝 図31-6層	<12.1>	—	—	3.0	サカキ	鍬身と組み合せて 出土
17	34	52	直柄鍬 鍬身	8溝 図31-6層	<11.6>	7.2	3.4	—	アカガシ亜属	蟻溝型広鍬を狭鍬に 転用
198			杭	8溝 杭1	<53.0>	—	—	5.0	コナラ亜属	加工痕
199			杭	8溝 杭2	<20.0>	5.0	4.5	—	コナラ亜属	加工痕
200			炭化材	8溝	6.0	4.0	1.7	—	ニレ属	
201			炭化材	8溝	5.5	2.0	1.5	—	ケヤキ	
202			炭化材	8溝	3.5	2.7	2.2	—	スギ	
203			板状	12-1溝底面上シルト層 8F-89j	<26.6>	7.5	2.2	—	スギ	
204			分割材	12-1溝底面上シルト層 8F-89j	15.5	14.0	4.0	—	ニレ属	
205			自然木	根株	—	—	—	—	ミズキ属	
第4a-3面										
67	54		棒状	12-1・2溝境界部 8G-89ab	<32.9>	1.2	0.4	—	ヒノキ	
206			棒状	12-1・2溝境界部 8G-89ab	<26.4>	1.3	1.2	—	コウヤマキ	
207			板状破材	12-1・2溝境界部 8G-8a	8.0	3.0	0.5	—	ヒノキ	摩滅顕著
208			板状破材	12-1・2溝境界部 8G-8ab	20.7	3.0	1.2	—	ケヤキ	
118	61	64	横樋	12-2溝 上層	<32.6>	8.3	5.0	—	ヤブツバキ	
119	61	64	横樋	12-2溝 上層 南端部	<37.5>	8.9	7.9	—	ヤブツバキ	
120	61	68	背負子 縦木	12-2溝 上層 南端部	<43.4>	3.8	2.2	—	サカキ	
121	61		杭 (ミカン割材)	12-2溝	<23.7>	7.4	4.8	—	アカガシ亜属	加工痕 柱を転用か
122	62	65	樋	12-2溝 上層	84.7	12.7	5.5	—	スギ	
123	63	66	樋 (未成品)	12-2溝 上層 南端部	66.7	20.2	13.5	—	スギ	
124	64	67	一木鋤	12-2溝 上層	<102.8>	20.0	<3.2>	—	アカガシ亜属	
165		68	杭 (ミカン割材)	12-2溝 上層	<27.0>	7.5	<5.2>	—	コナラ亜属	加工痕 柱を転用か
166		68	杭	12溝 西肩部	<29.0>	—	—	7.0	ミズキ属	加工痕 樹皮残存
167		68	棒状 (樋横木か)	12-2溝 上層	<86.0>	2.3	1.5	—	クリ	圧痕

付表11 若江北遺跡 木製品等一覧表(2)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	最大径(cm)	樹種	備考
168		68	棒状	12-2 溝 上層 南端部	<15.3>	2.5	1.5	—	クリ	
169		68	棒状	12-2 溝 上層 南端部	<15.5>	2.5	1.7	—	サカキ	加工痕
170		68	棒状	12-2 溝 上層	<8.0>	3.2	2.5	—	クリ	
171		68	棒状	12-2 溝 上層	<12.5>	—	—	2.3	サカキ	
172		68	棒状	12-2 溝 上層	<21.5>	5.5	<2.5>	—	コナラ亜属	加工痕
173		69	板状	12-2 溝 上層	<13.3>	<2.8>	<0.9>	—	ヒノキ	
174		69	板状	12-2 溝 上層	<9.3>	<3.7>	<1.3>	—	スギ	
175		69	板状	12-2 溝 上層	<17.0>	<7.4>	1.3	—	ヤナギ属	加工痕か
176		69	板状	12-2 溝 上層	<8.0>	<5.0>	0.9	—	ケヤキ	
177		69	板状	12-2 溝 上層 南端部	13.0	10.5	2.2	—	クリ	加工痕
178		69	板状	12-2 溝 上層	<11.5>	<5.5>	1.1	—	ケヤキ	加工痕
179		69	板状 (泥除けか)	12-2 溝 上層 南端部	<14.5>	5.5	1.0	—	アカガシ亜属	
180		69	板状	12-2 溝 上層 南端部	<53.0>	<4.5>	1.1	—	スギ	加工痕
181		69	板 (矢板か)	12-2 溝 上層 南端部	<44.5>	8.6	2.0	—	クリ	
182		70	分割材	12-2 溝 上~中層	17.0	<6.5>	3.0	—	コナラ亜属	加工痕
183		70	分割材	12-2 溝 上~中層	<8.0>	<6.8>	2.5	—	コナラ亜属	加工痕
184		70	ミカン割材端材	12-2 溝 上層	<13.0>	4.8	2.5	—	ケヤキ	加工痕
185		70	分割材	12-2 溝 上層	<13.5>	5.5	<6.0>	—	コナラ亜属	加工痕 樹皮残存
186		70	分割材 (未成品)	12-2 溝 上層 南端部	9.3	8.0	5.8	—	コナラ亜属	加工痕
187		70	分割材か	12-2 溝 上層 南端部	<16.5>	—	—	9.0 短径7.5	ヤブツバキ	
209			ミカン割材破片	12-2 溝 上層	4.5	3.5	2.0	—	ケヤキ	
210			分割材 (柱材か)	12-2 溝 (側溝)	<51.5>	—	—	12.0	カヤ	
211			分割材 (建築材か)	12-2 溝 上層	235.0	—	—	8.0	クリ	
212			分割材	12-2 溝 上層 南端部	14.5	5.0	5.0	—	ヒノキ	
213			分割材	12-2 溝 上層	39.0	8.0	5.0	—	スギ	劣化顕著
214			分割材	12-2 溝 上~中層	8.4	2.7	0.5	—	スギ	
215			剥離材	12-2 溝 上層 南端部	—	—	—	—	スギ	

付表12 若江北遺跡 木製品等一覧表(3)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	最大径(cm)	樹種	備考
216			炭化材	12-2 溝上~中層	3.5	6.0	4.0	—	ヤブツバキ	
217			炭化材	12-2 溝上~中層	3.8	5.0	2.0	—	ヤブツバキ	
218			自然木	12-2 溝上~中層	15.0	6.0	3.5	—	アカガシ亜属	
219			自然木	12-2 溝下層	<11.0>	<5.5>	<3.5>	—	ヤマグワ	
220			自然木	12-2 溝上層	6.5	—	—	1.8	アカガシ亜属	
221			自然木	12-2 溝上層	61.2	—	—	3.0	マツ科	
188		70	棒状	13溝上層(12溝合流部)	20.6	1.4	0.6	—	スギ	
189		70	分割材	13溝下層	<22.5>	—	—	3.2 短径2.5	ハンノキ	加工痕 樹皮残存
222			炭化材	13溝下層	7.0	4.0	2.0	—	ヒノキ	摩滅顕著
223			自然木	13溝上層か	24.5	2.2	1.5	—	コナラ亜属	
224			自然木	13溝上層か	8.5	6.0	3.5	—	スギ	
第4 b 面										
225			柱根か	19ピット	—	—	—	—	コナラ亜属	
5 a 層										
190		73	ミカン割材	5 a 層砂層	<27.0>	7.0	4.0	—	クリ	
191		73	ミカン割材	5 a 層砂層	<13.5>	7.5	4.7	—	コナラ亜属	
192		73	分割材	5 a 層砂層 8G-89ab	<21.0>	7.0	3.7	—	ヤマグワ	
226			分割材か	5 a 層砂層	21.0	10.0	<7.5>	—	コナラ亜属	
9 層										
158	76	73	板状	9 層下部 8G-8a	<52.1>	<7.9>	3.3	—	スギ	
193		73	板状	9 層下半 8G-8ab	<19.0>	10.0	2.0	—	ヒノキ	
194		73	板状	9 層 8G-9ab	<21.5>	7.2	1.3	—	ヒノキ	
195		73	板状	9 層下半 8G-8ab	<34.0>	3.0	0.8	—	スギ	
196		73	板状	9 層上半 8G-8ab	<17.5>	3.2	1.0	—	ヒノキ	

版 圖

図版1 北鳥池遺跡 調査地周辺

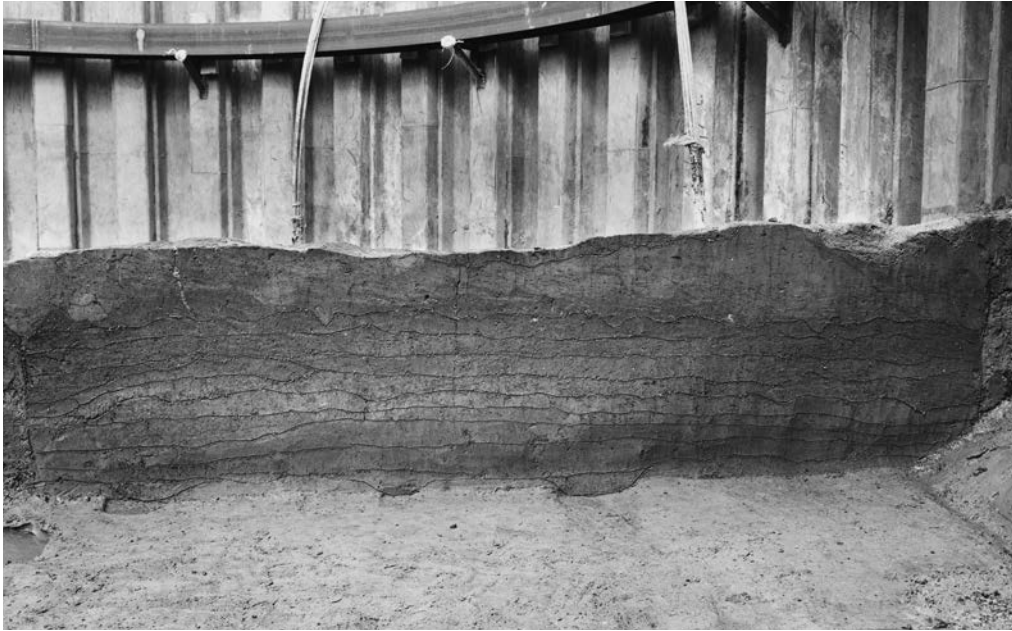


西から



南西から

図版2 北鳥池遺跡 土層断面 (1)



第1～9層
南から



第10・11層
南から



第11層
南西から

第11層(図6-16層)
立木
(放射性炭素年代
測定試料4)
南から



図6-18~24層
南から



図6-25・26層
南から

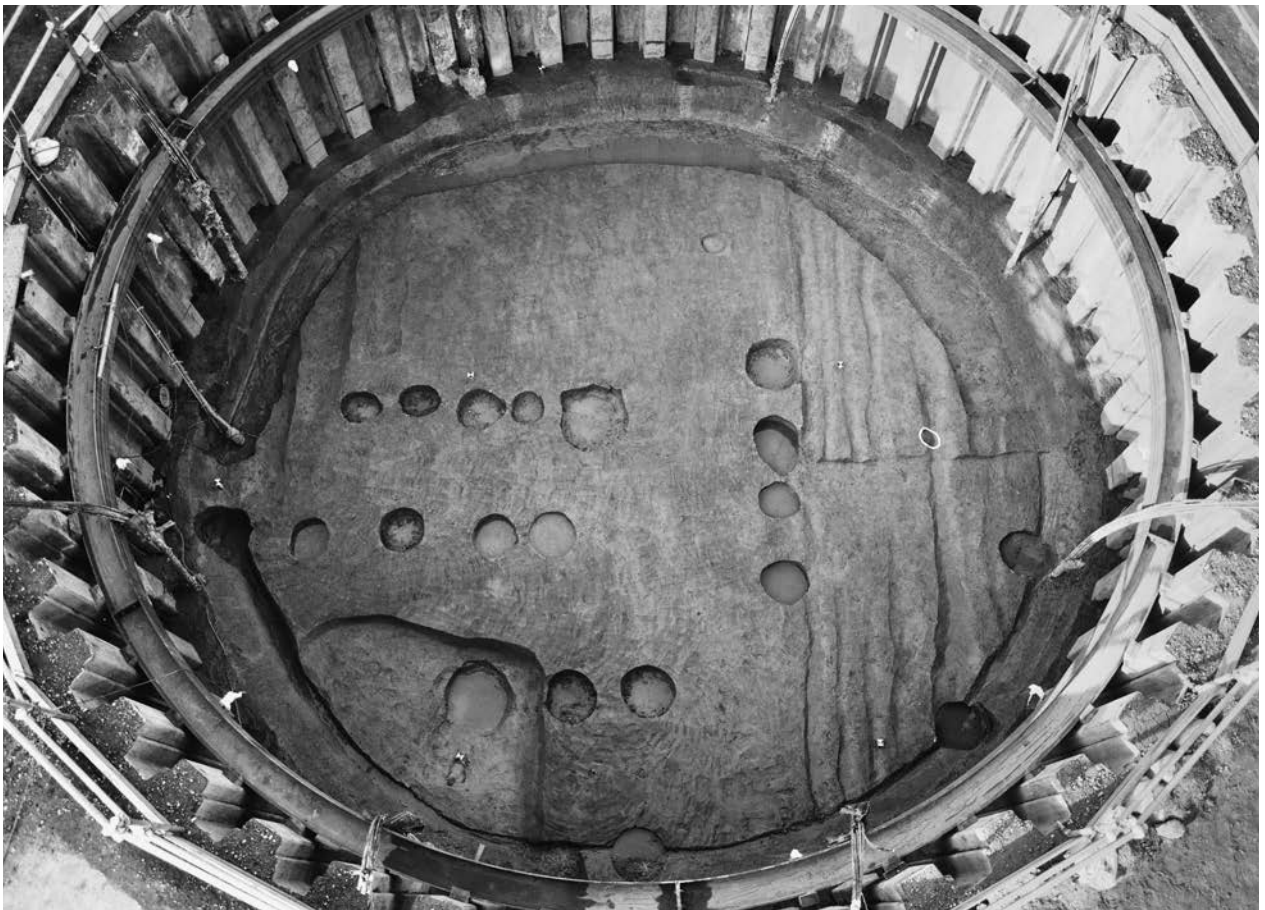


図版4 北鳥池遺跡 全景（1）



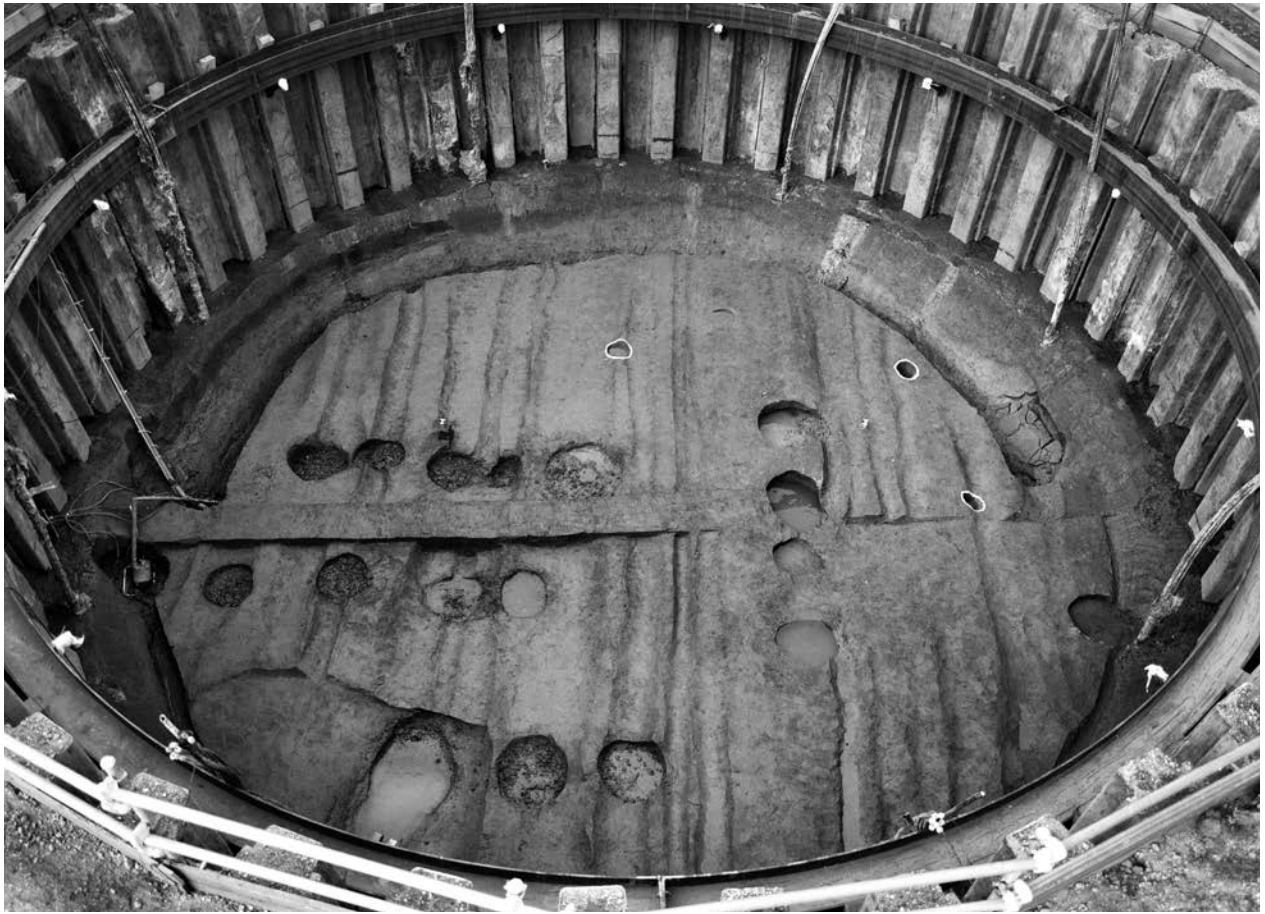
第6面

南から



第10面

南から



第11面

南から



図6 - 22層上面

南から

図版6 北鳥池遺跡 第11面



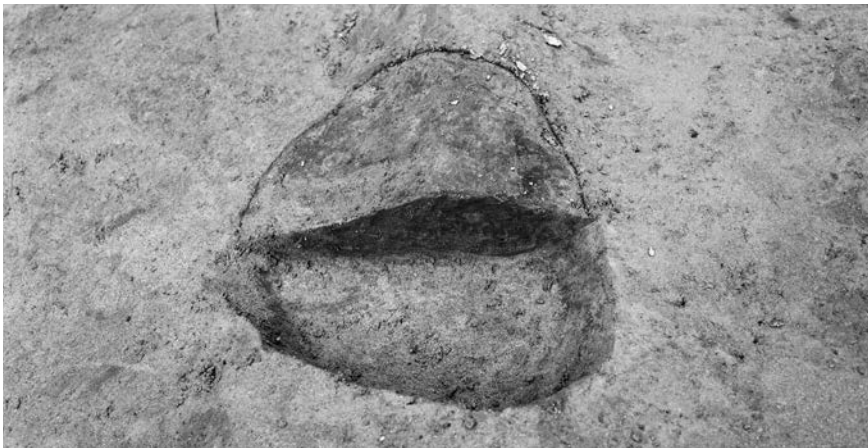
11・12ピット
南から



11ピット
南から



12ピット
南から



19ピット
南から



南から

図版8 若江北遺跡 土層断面（1）



1～4層
北東から



1～6層
南から



7～9層
南西から



9層
南東から



12~15層
北東から



図19-44~46層
南から

図版10 若江北遺跡 全景（1）



第1面（1b層下面）

南から



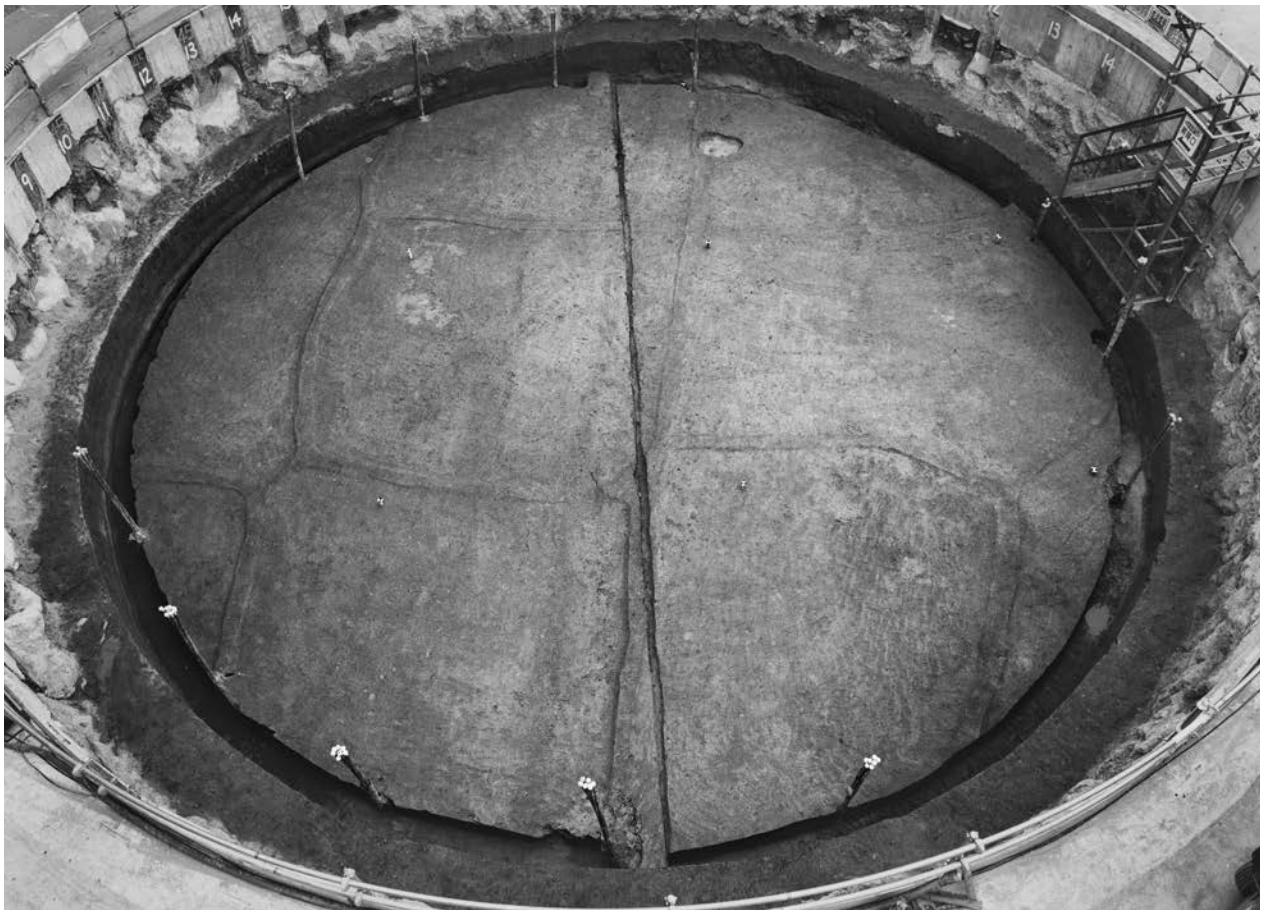
第2 - 2面

南から



第3 a - 1面畦畔検出状況

南から



第3 a - 1面

南から

図版12 若江北遺跡 全景（3）



第3 a - 2面

南から



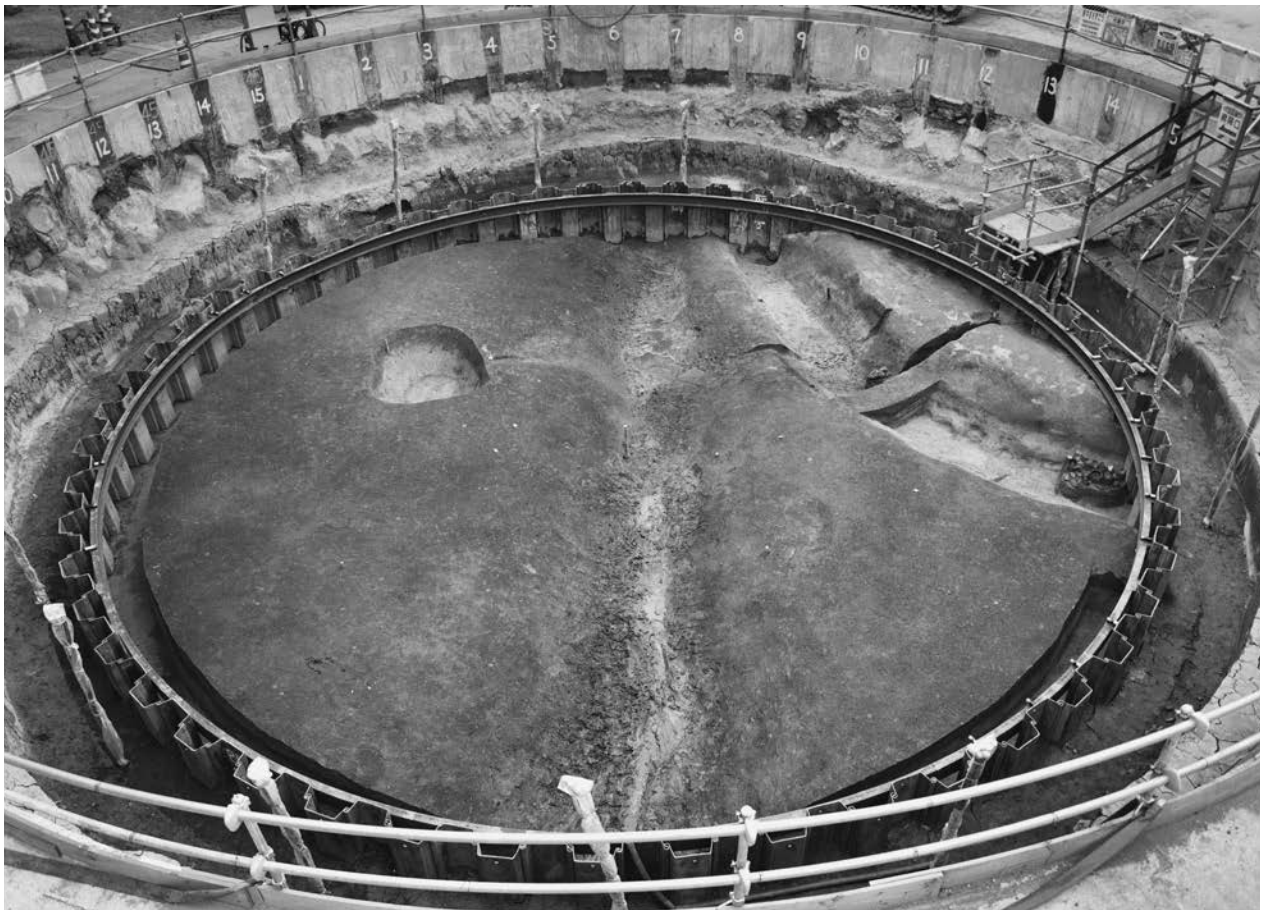
第3 b面

南から



第4 a - 1面（8溝のみ検出状況）

南から



第4 a - 1面

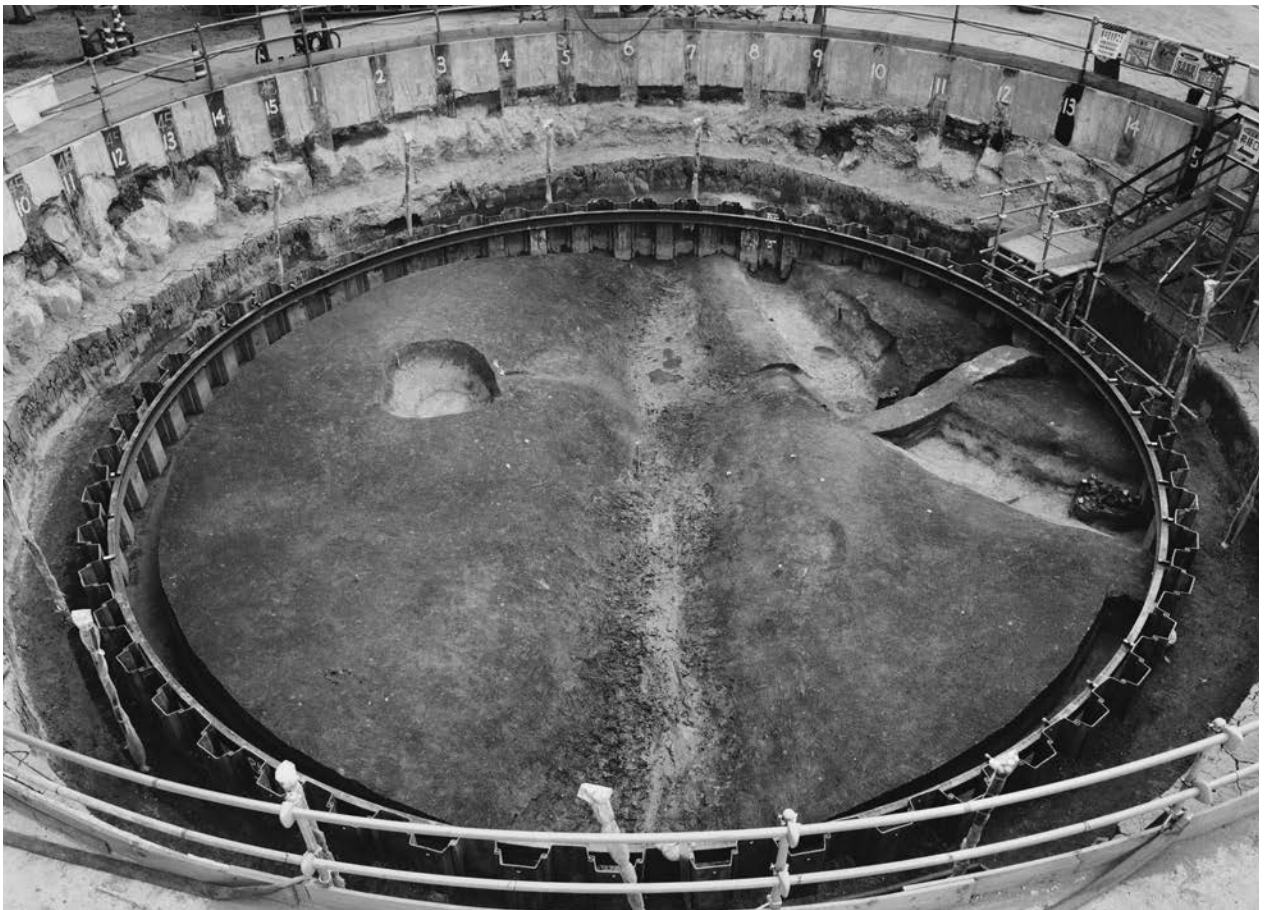
南から

図版14 若江北遺跡 全景（5）



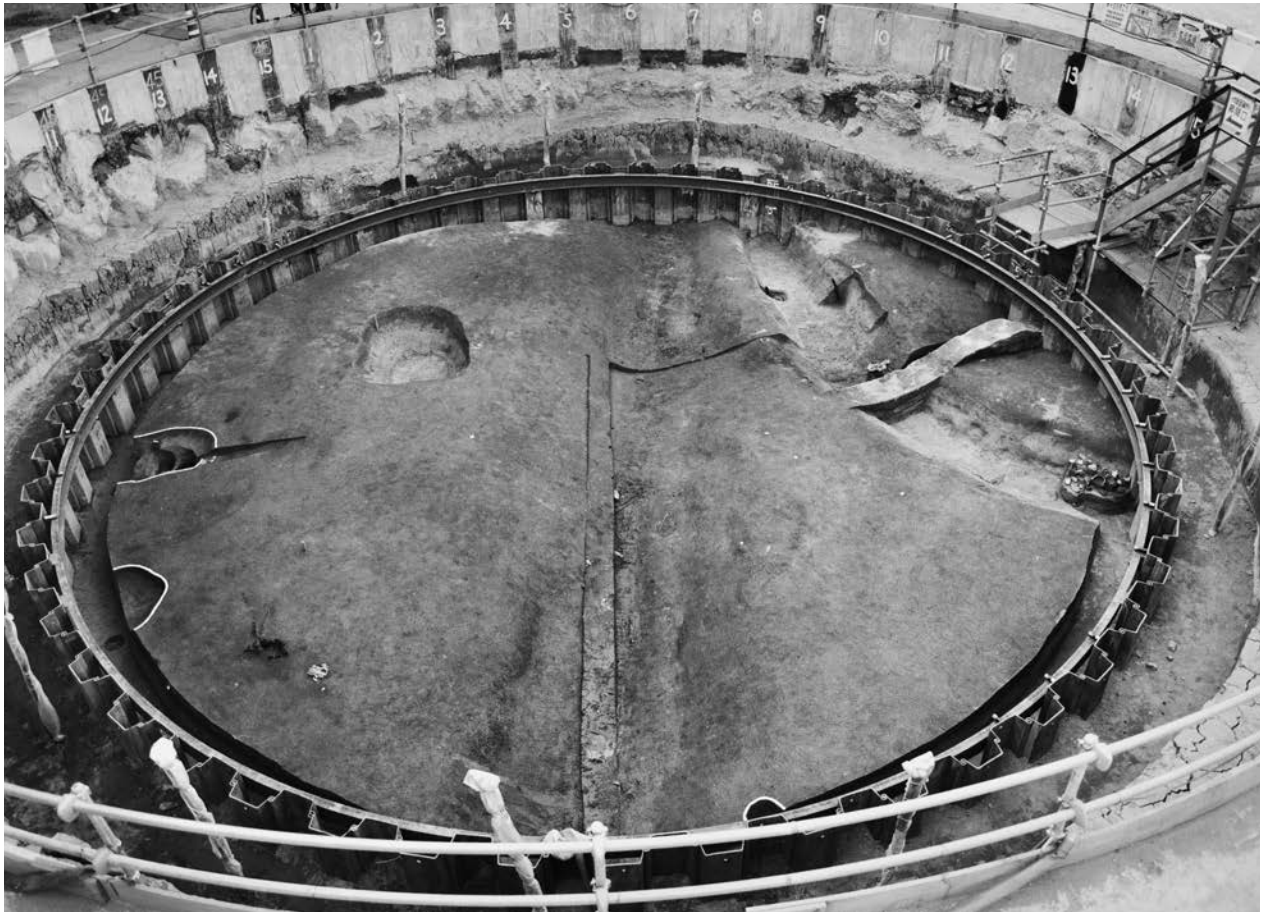
第4 a - 1面盛土上層除去状況

南から



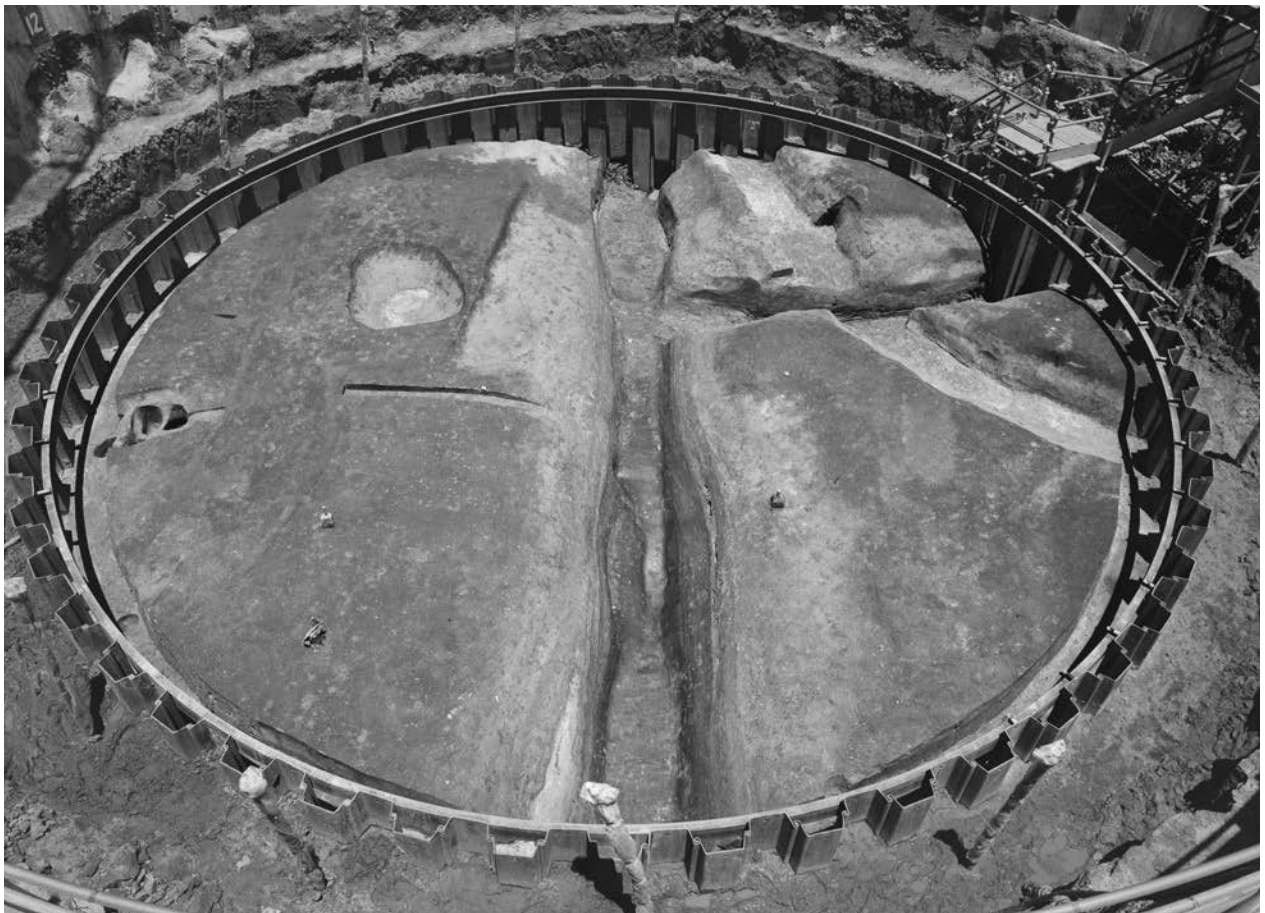
第4 a - 1面盛土下層除去状況

南から



第4 a - 2面

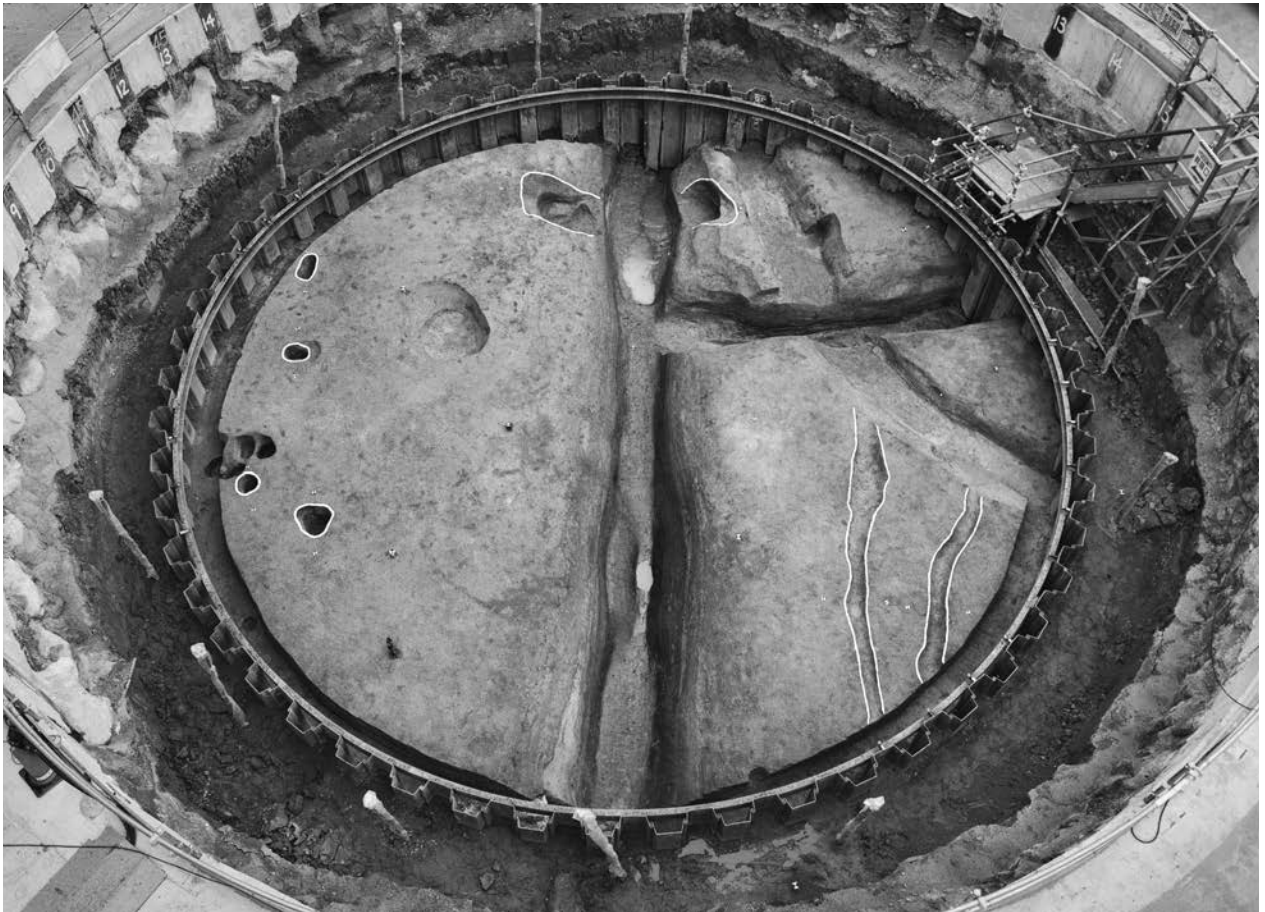
南から



第4 a - 3面

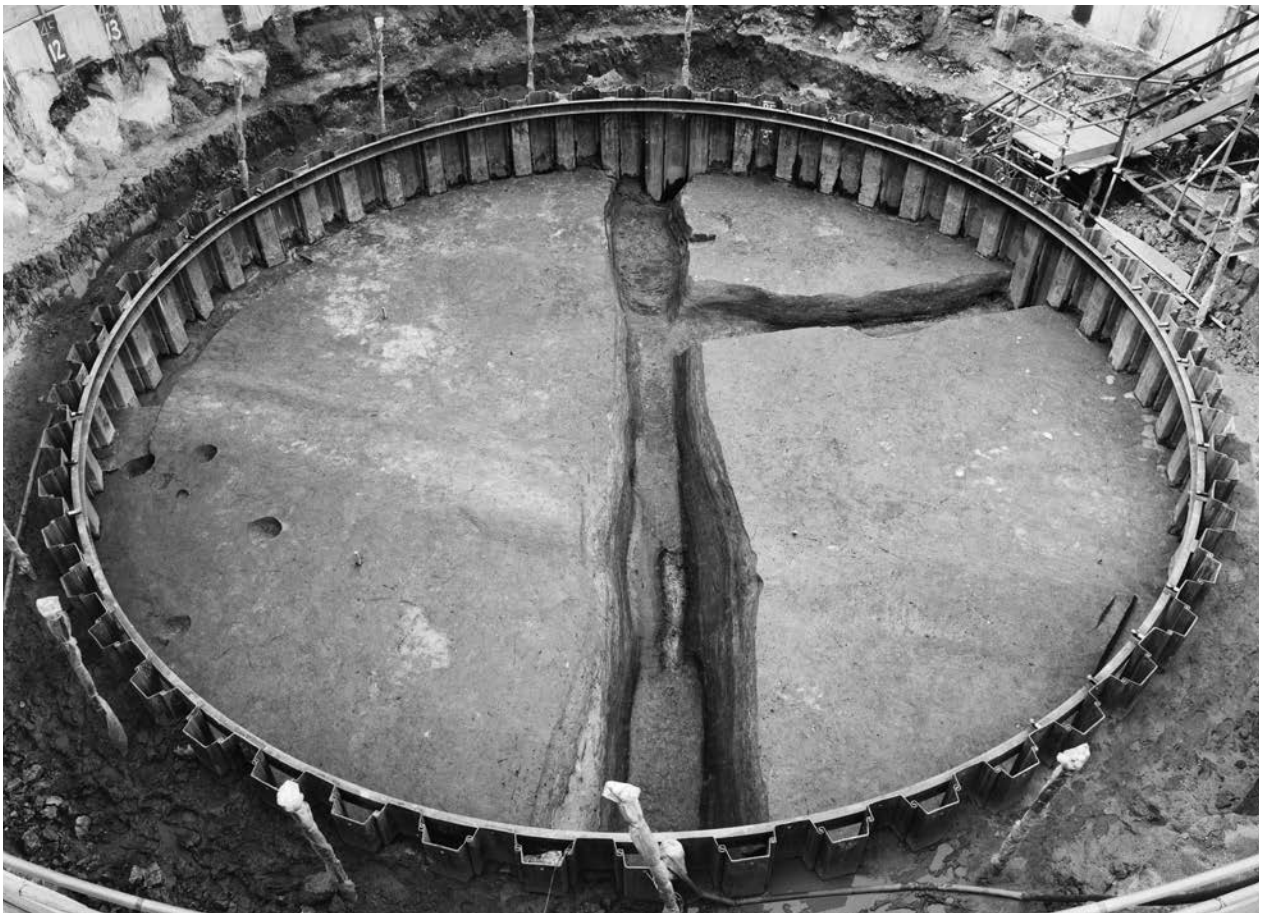
南から

図版16 若江北遺跡 全景（7）



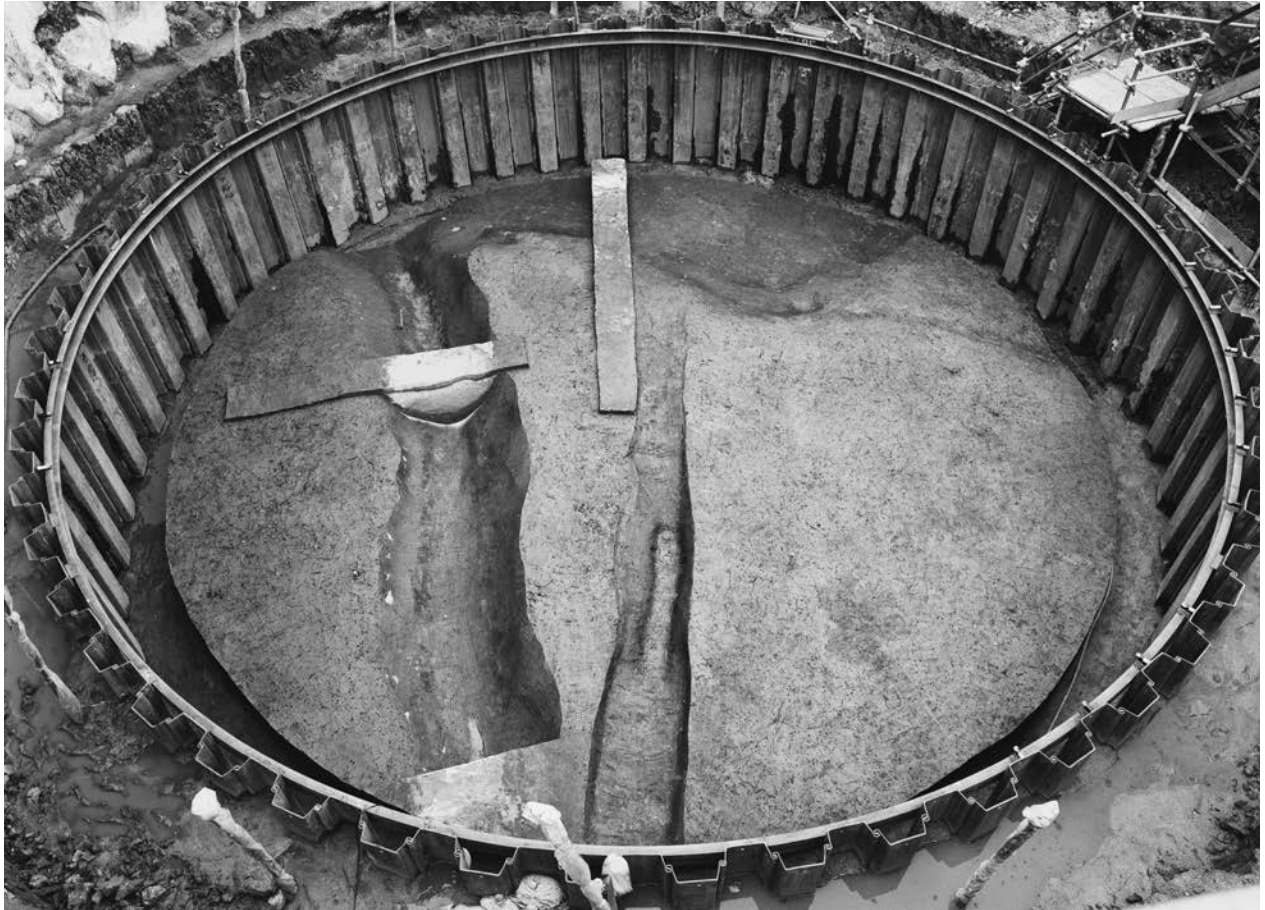
第4b面

南から



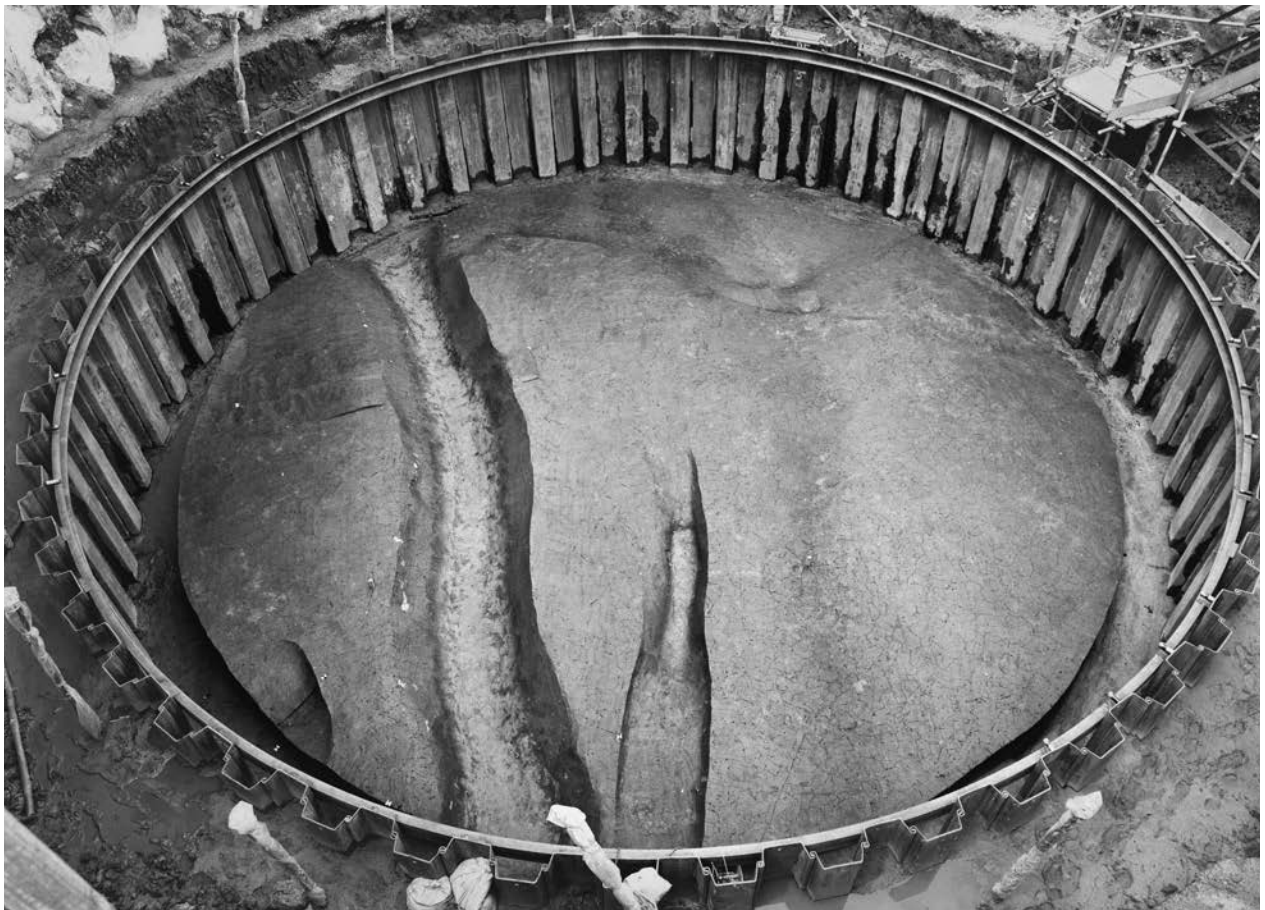
第6面

南から



第8面

南から



第9 a 面

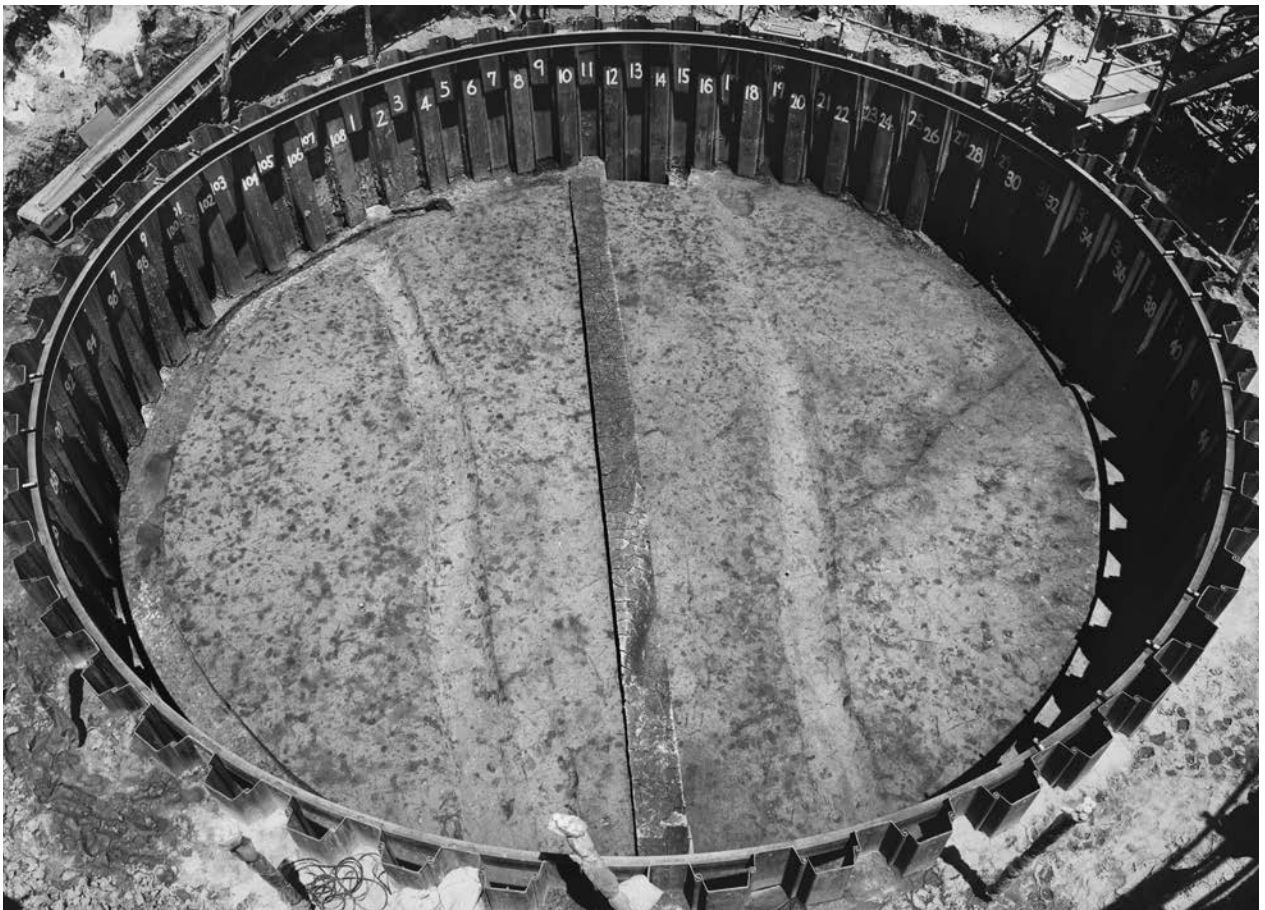
南から

図版18 若江北遺跡 全景（9）



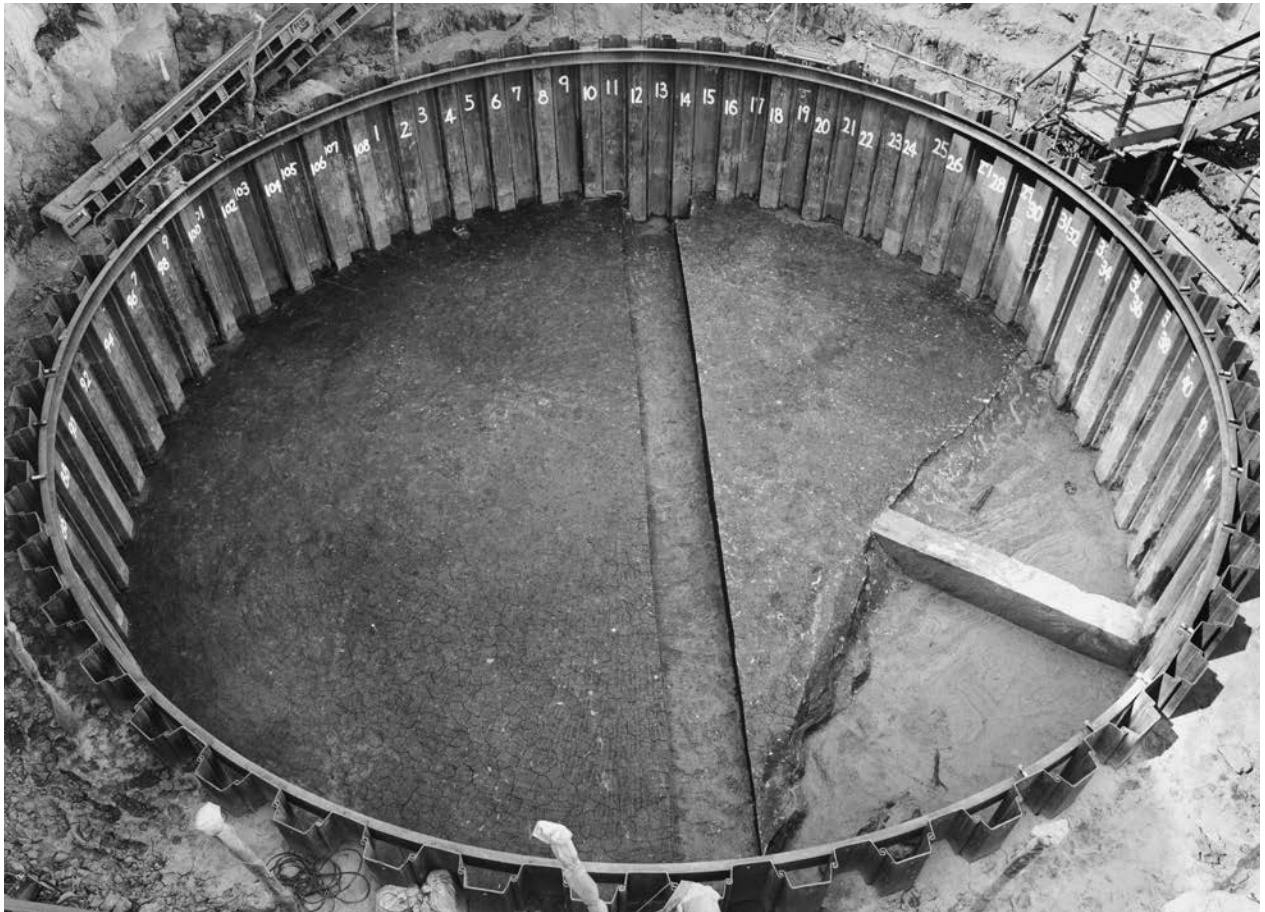
第9c面

南から



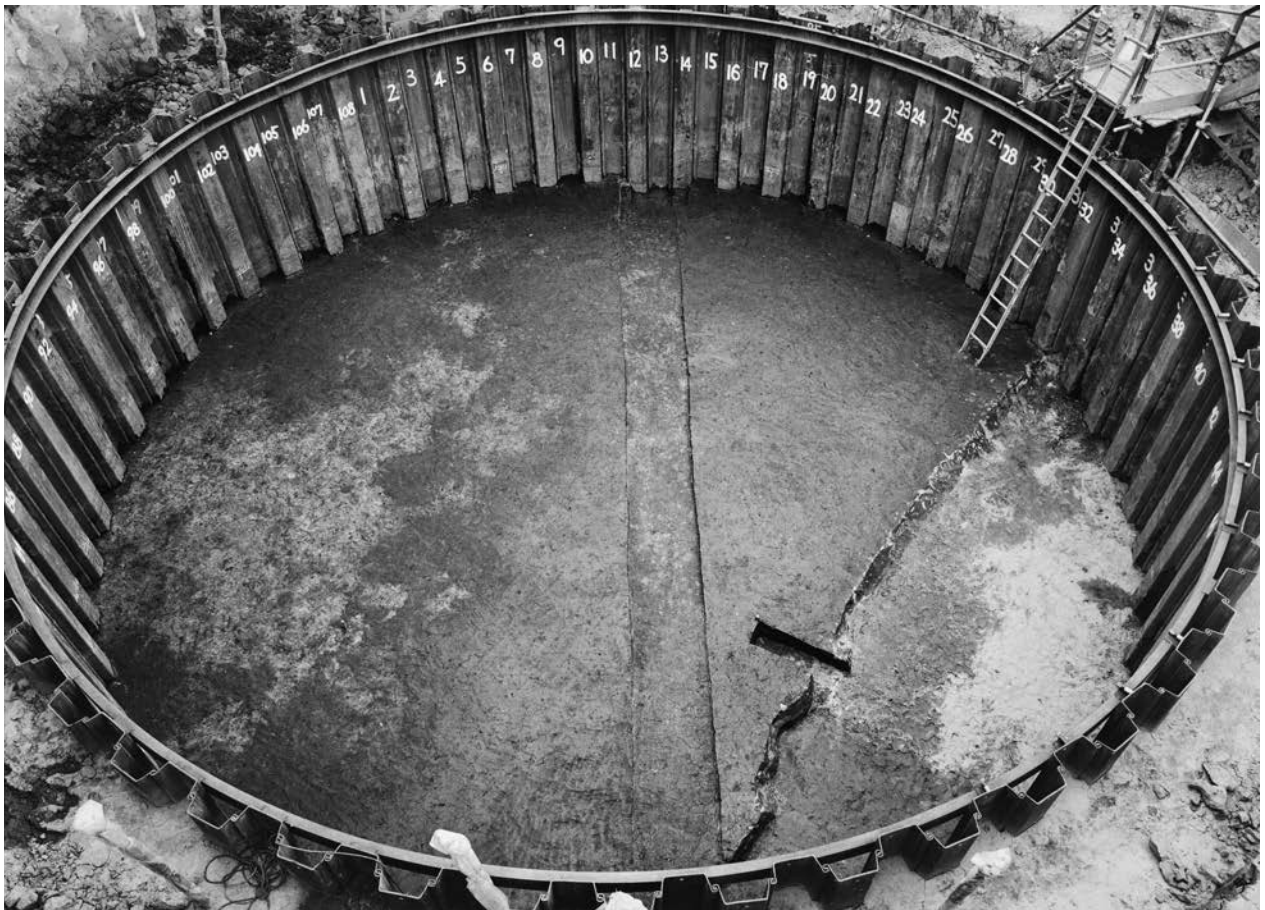
第9d面

南から



第10 a 面

南から



第10 b 面

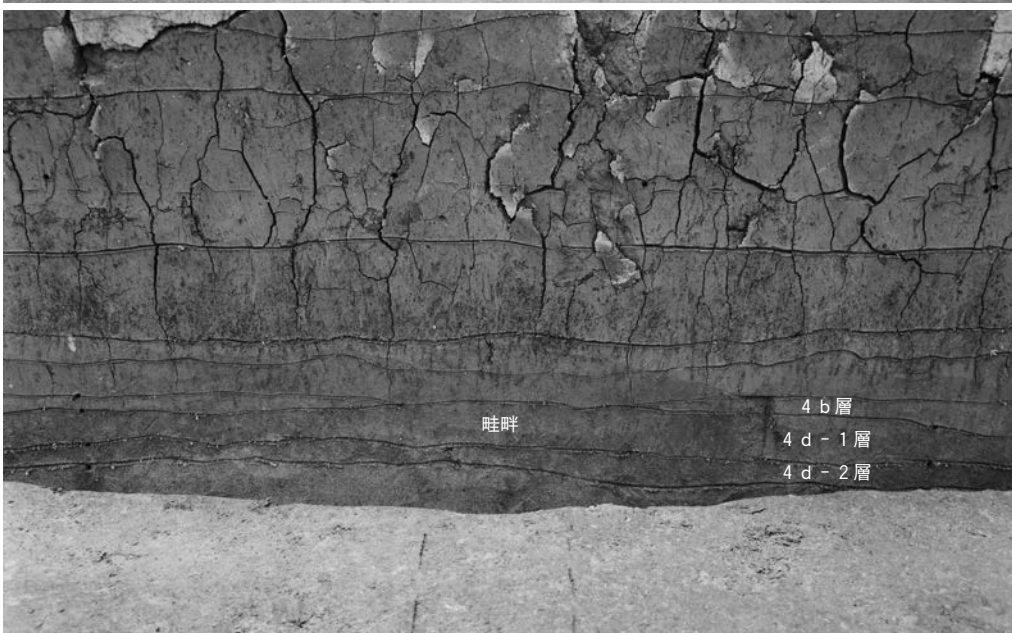
南から



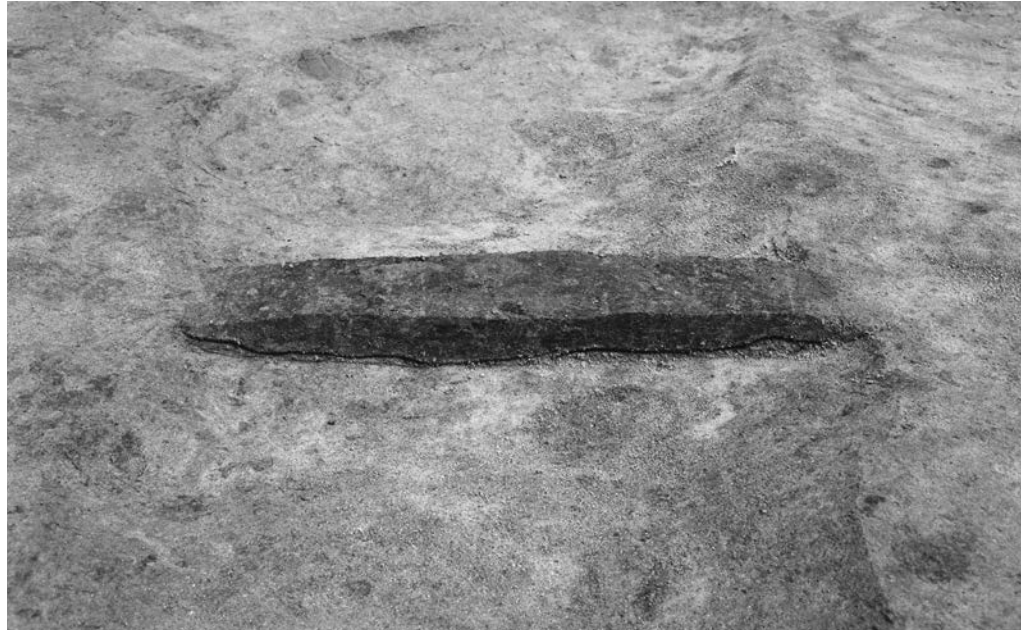
第2 - 1面
1土坑
南から



第2 - 1面
2土坑 断面
東から



第3 a - 1面
畦畔 断面
東から



3 土坑 断面
南東から

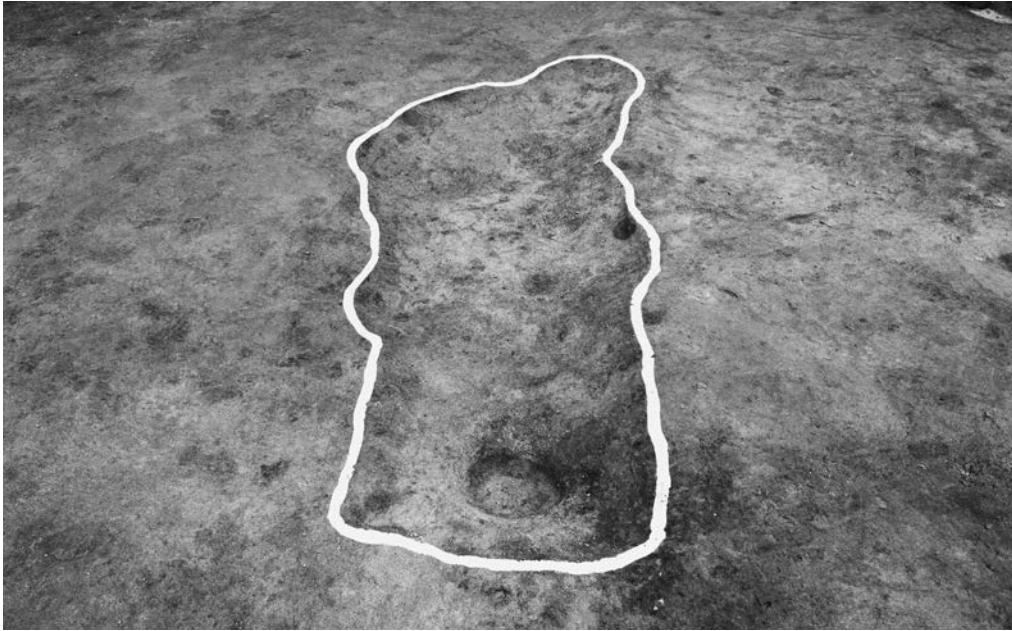


4 土坑 断面
南西から

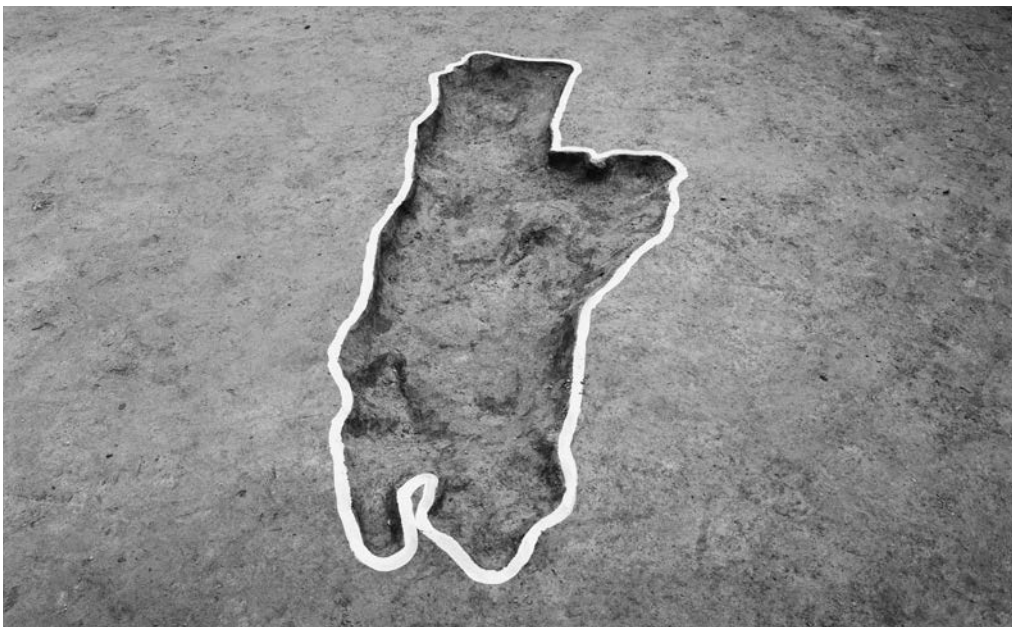


6 土坑 断面
南東から

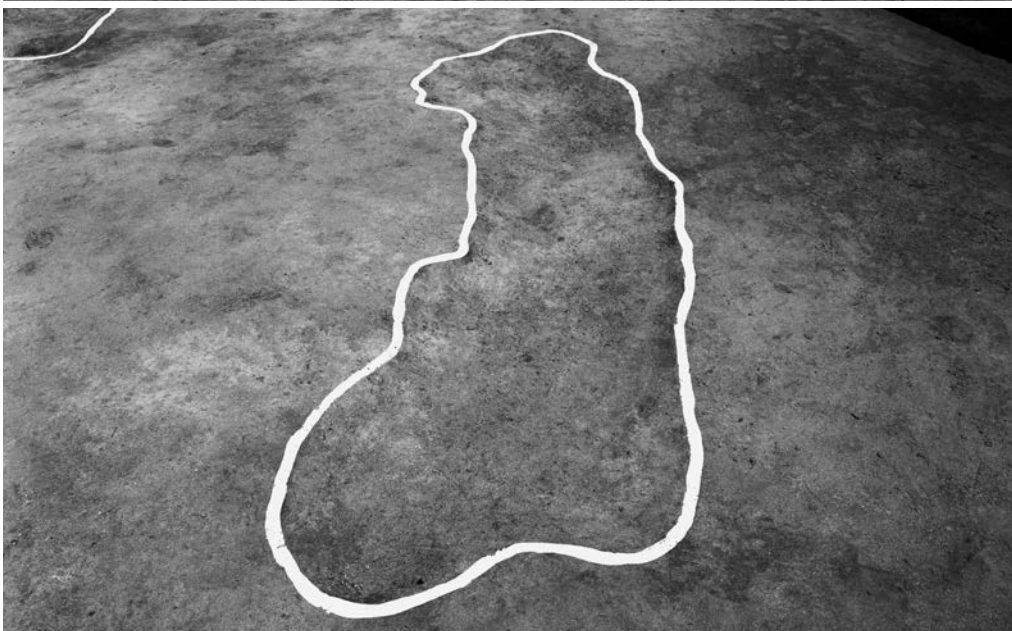
図版22 若江北遺跡 第3b面(2)



3 土坑
南東から



4 土坑
南西から



6 土坑
南東から

5 a 層下層シルト上面
検出状況 (北東部)
南東から



7 土坑 断面
南から



7 土坑
南から



図版24 若江北遺跡 第4 a - 1面 (2)



8溝 (検出状況) ・ 12 - 1溝

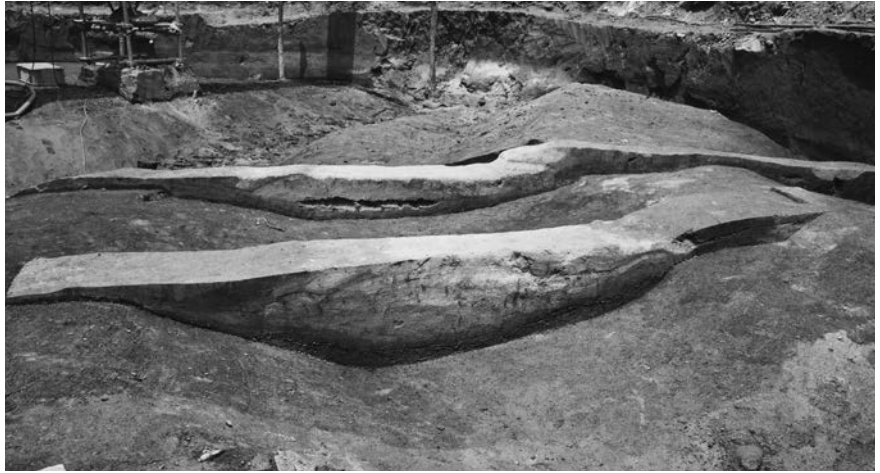
北西から



8溝 ・ 12 - 1溝

北西から

8 溝上部 5 a 層堆積状況
南東から



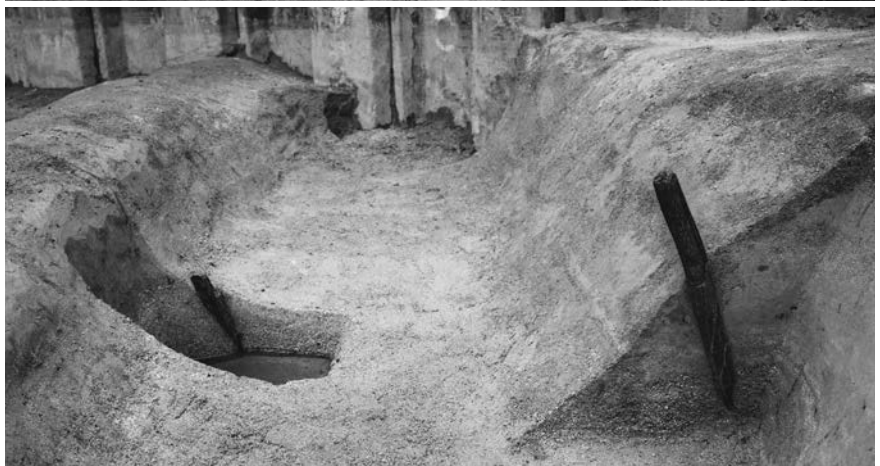
8 溝 断面
南東から



8 溝 杭
南から



8 溝 杭 断面
南から





8溝 遺物出土状況
北西から



8溝 遺物出土状況 (A地点) 南西から



8溝 遺物出土状況 (B地点) 西から



8溝 遺物出土状況 (A地点) 南東から



8溝 遺物出土状況 (B地点) 南西から



12-1 溝
南西から



8 溝・12-1 溝 5 a 層等堆積状況 (図35) 南東から



12-1 溝 5 a 層堆積状況 (図50) 南から



12-1 溝 5 a 層堆積状況 (調査区北壁) 南から



12-1 溝 5 a 層堆積状況 (調査区南壁) 北から

図版28 若江北遺跡 第4a - 1面 (6)



盛土 (8溝検出状況)

南西から



盛土 (8溝完掘)

南から



盛土(8溝検出状況)
北西から



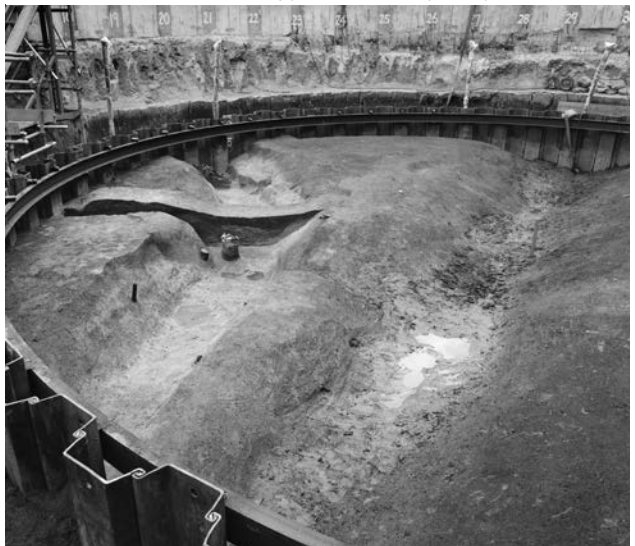
盛土東裾部 遺物出土状況 北西から



盛土上5 a層堆積状況(図38) 北西から



盛土東裾部 遺物出土状況 北西から



盛土下層上面 北西から

図版30 若江北遺跡 第4a-1面(8)



盛土 断面 (図38)
北西から



盛土、8溝上部 断面
(調査区東壁) 北西から



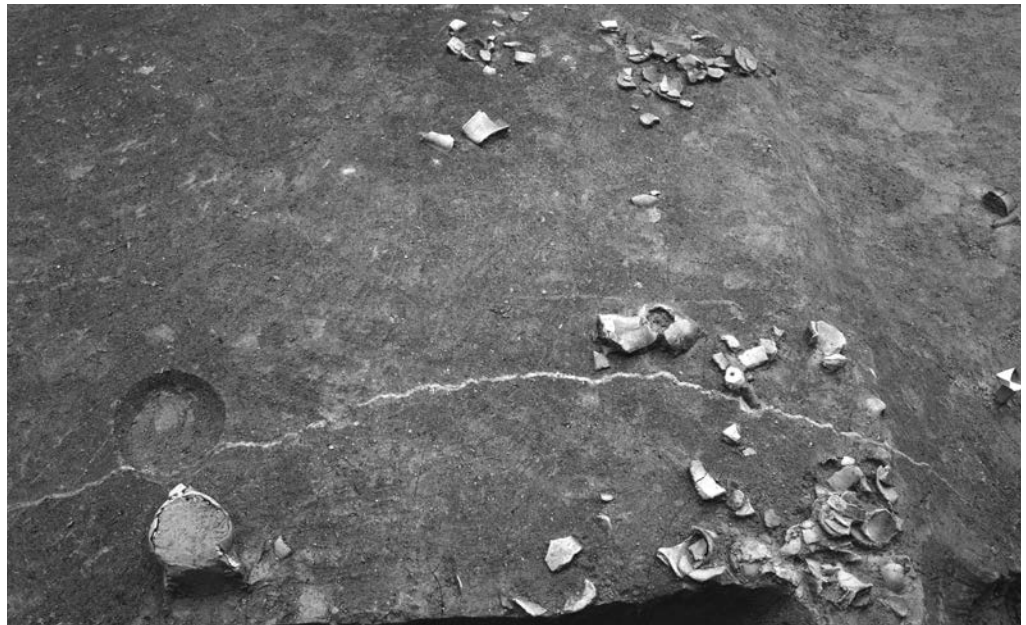
盛土 断面 (図38)
南西から



盛土 断面 (図38)
南西から



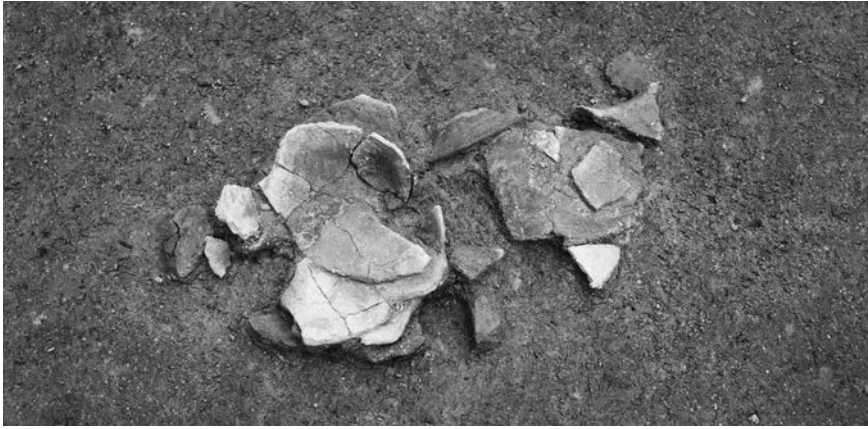
土器集積
北西から



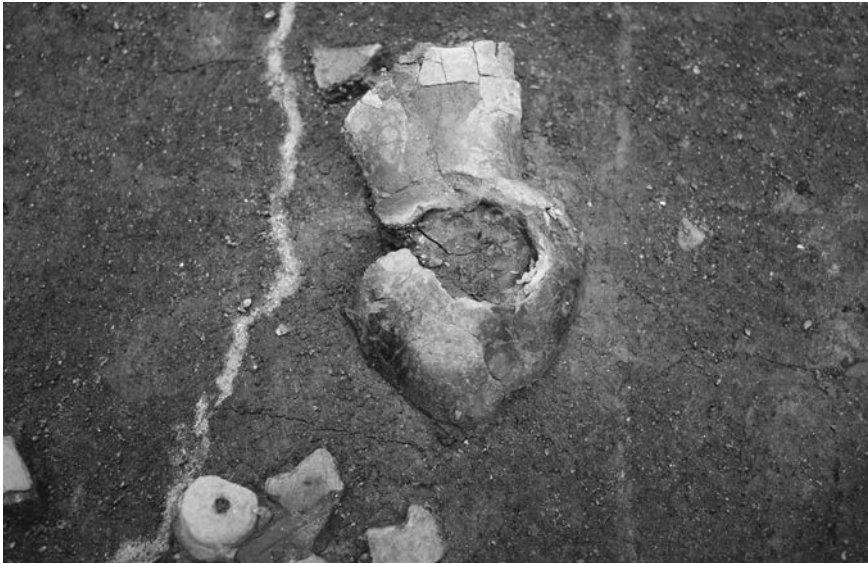
土器集積
南東から



土器集積上
5 a 層堆積状況
北西から



土器集積 (49)
南から



土器集積
北東から

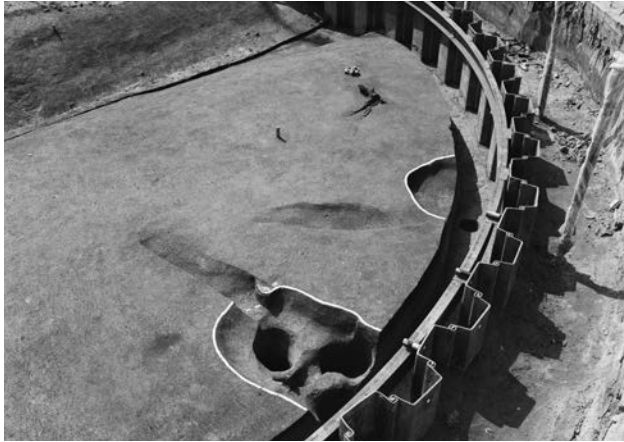


土器集積 (48)
北西から



土器集積 (59)
北から

図版33 若江北遺跡 第4 a - 2面 (1)



9・10土坑 北西から



9土坑 砥石出土状況 北東から



9土坑 断面 北西から



9土坑 東から



10土坑 断面 南東から



10土坑 南東から



11ピット 断面 南から

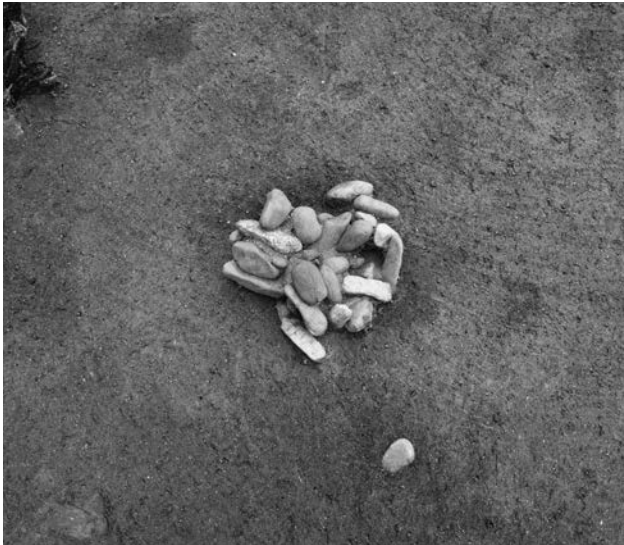


11ピット 南から

図版34 若江北遺跡 第4a - 2面 (2)



集石
北西から



集石 南から



集石下部 南から



集石 南から



集石 南東から



12 - 2 溝・13溝

北西から



13溝

西から



12 - 2 溝 断面

南から



12 - 2 溝

南西から



12-2溝 杭 南から



12-2溝 杭 南から



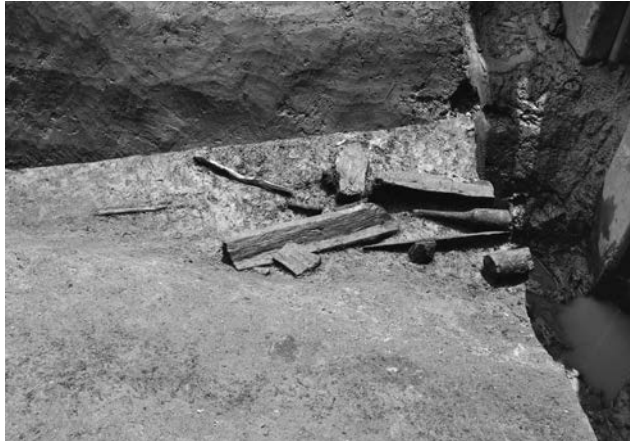
12-2溝 木製品出土状況 北東から



12-2溝 鋤出土状況 北から



12-2溝南端部 木製品出土状況 北西から



12-2溝南端部 木製品出土状況 西から



12-2溝 樁出土状況 北東から



12-2溝 土器(77)出土状況 北東から

図版38 若江北遺跡 第4 a - 3面 (4)



13溝 断面
西から

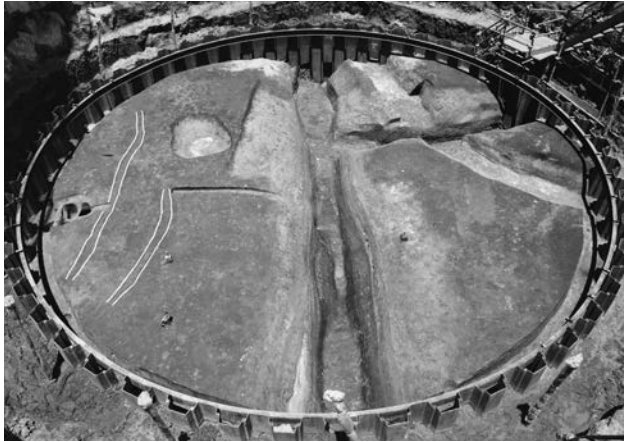


13溝 断面
北から

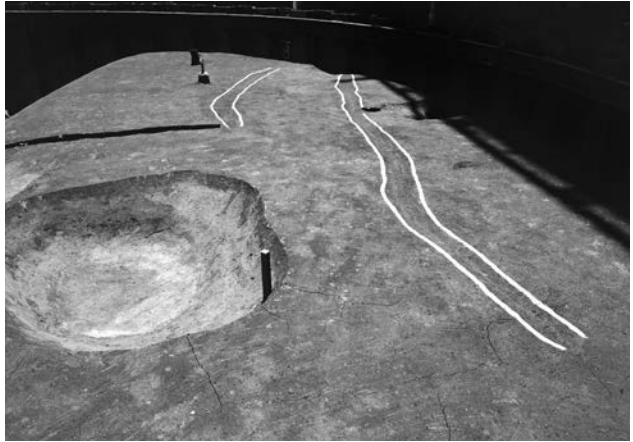


13溝 遺物出土状況
北東から

図版39 若江北遺跡 第4 a - 3面 (5) 第4 b面 (1)



第4 a - 3面 14・15溝 南から



第4 a - 3面 14・15溝 北から



第4 b面 16土坑西部 断面 南から



第4 b面 16土坑東部 断面 南から



第4 b面 16土坑 南西から



第4 b面 17・18溝 北から



第4 b面 17溝 断面 南から



第4 b面 18溝 断面 南から

図版40 若江北遺跡 第4b面(2)



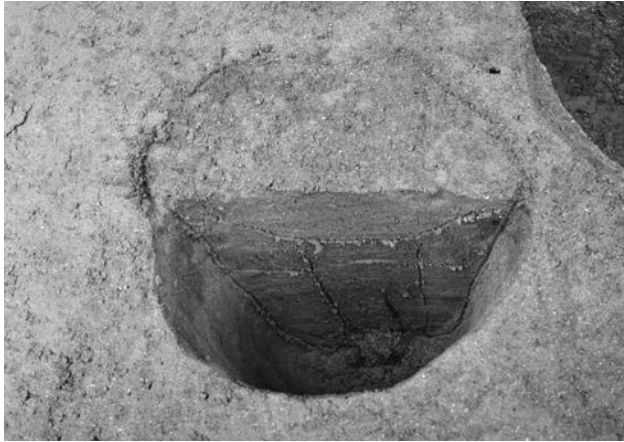
ピット群

南東から



ピット群

北から



19ピット 断面 東から



19ピット 東から



20ピット 断面 東から



20ピット 東から



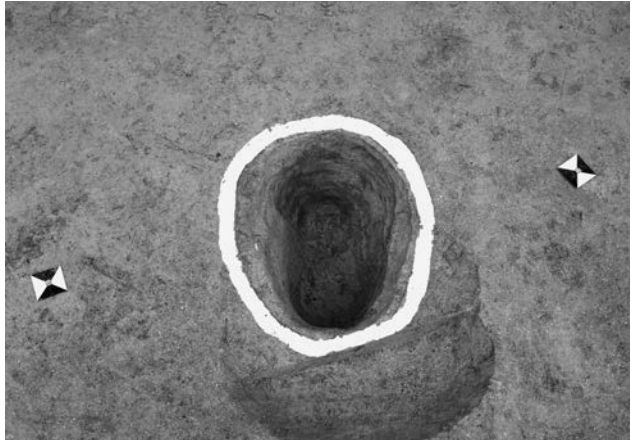
21ピット 断面 東から



21ピット 東から



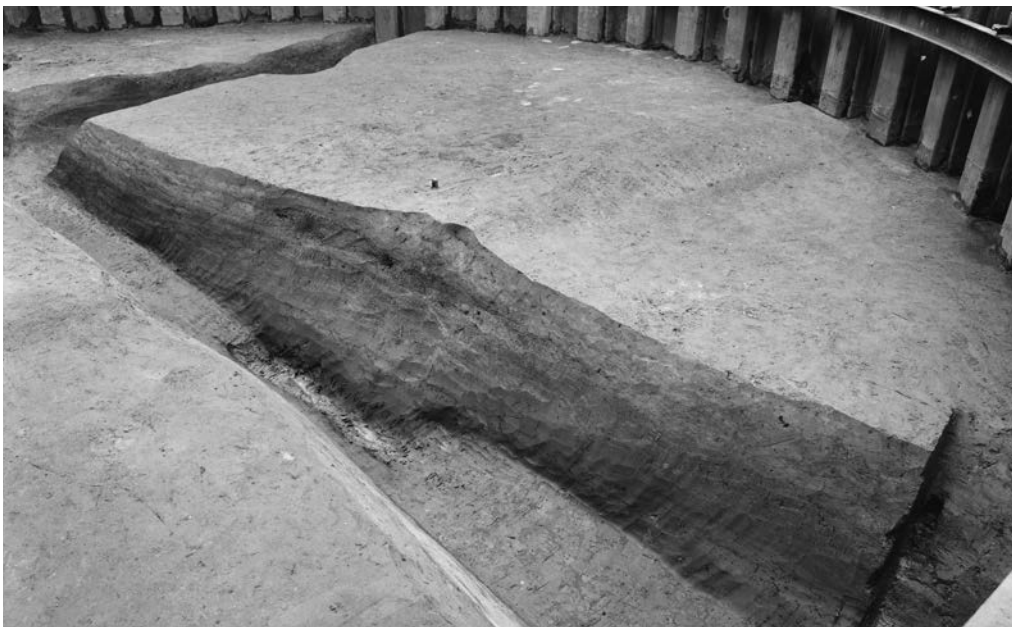
22ピット 断面 東から



22ピット 東から



第6面 高まり
北西から



第6面 高まり
南西から



9層 木製品(158)
出土状況(北東部)
南西から



23溝、落ち込み

南東から



落ち込み部 9層下部～11層 断面

東から

図版44 若江北遺跡 第9 a 面



24溝 断面
北から



24溝 断面
北から



24溝
南東から

図版45 若江北遺跡 12b層 第9c面(1)

12b層 遺物出土状況
北東から



第9c面 26溝 断面
北から



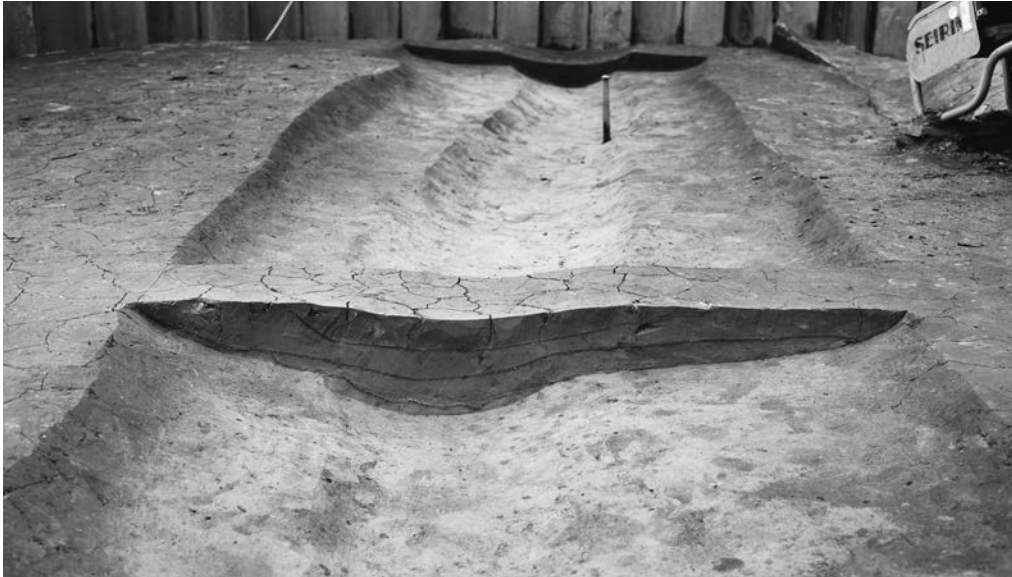
第9c面 26溝 断面
北から



第9c面 26溝
南東から



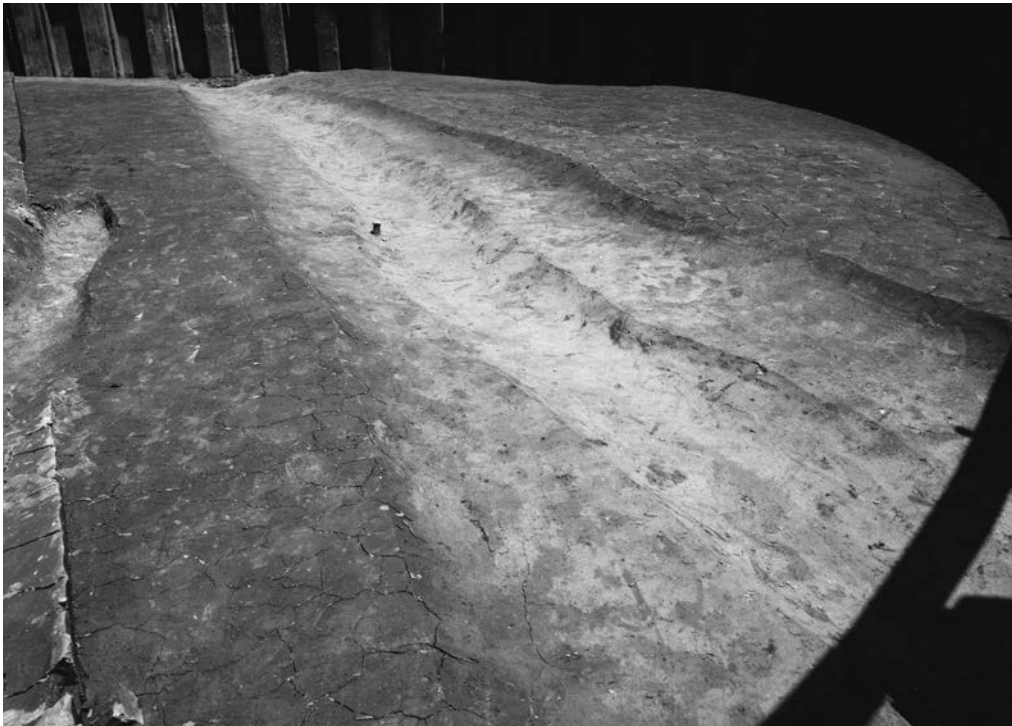
図版46 若江北遺跡 第9c面(2)



27溝 断面
北から



27溝 断面
北から



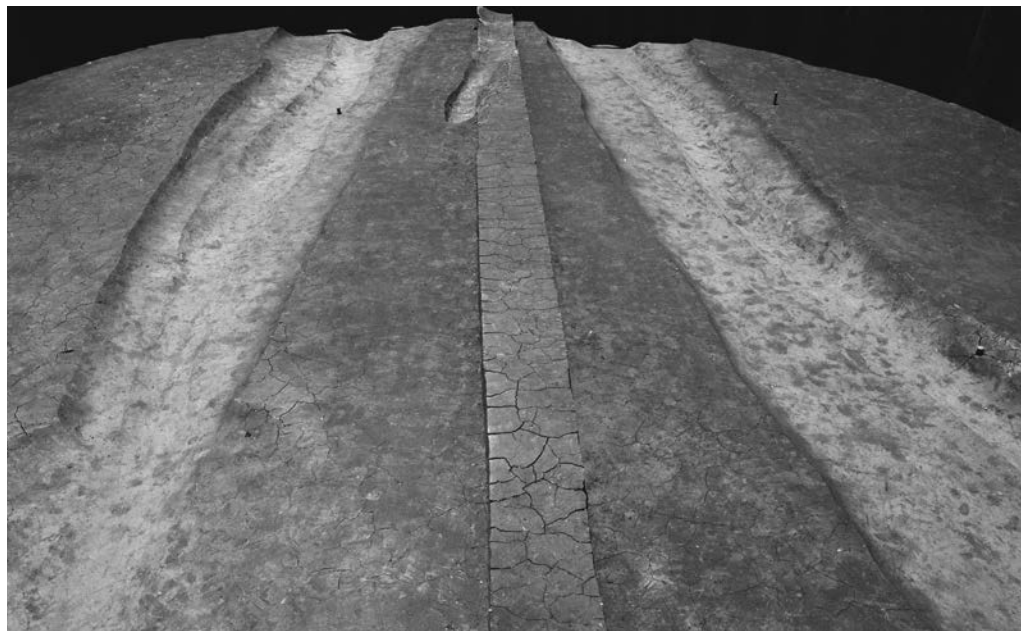
27溝
南西から



27溝 遺物出土状況
北西から



27溝 遺物出土状況
北東から



26・27溝
北から

図版48 若江北遺跡 第9c面(4)



28溝 断面
北東から



28溝 断面
北東から



28溝
北東から

29土坑 断面
東から



29土坑
東から



30ピット 断面
東から



30ピット
西から





流路
北から

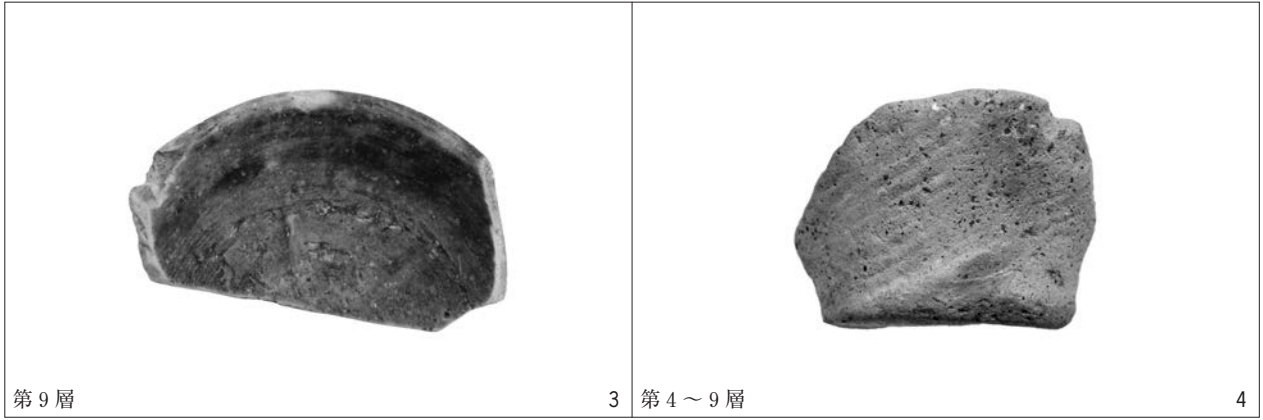


流路
南西から

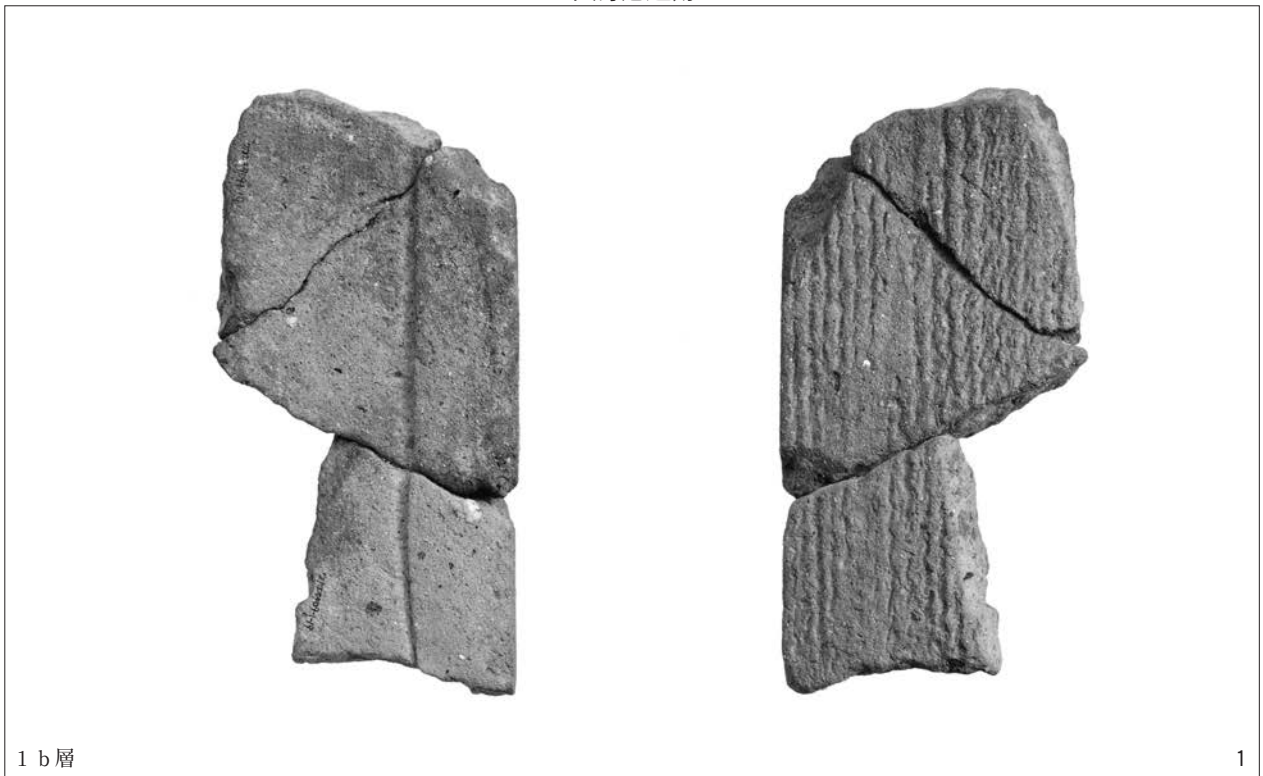


流路西肩部 断面
南から

図版51 北鳥池遺跡 出土遺物 若江北遺跡 出土遺物 (1)

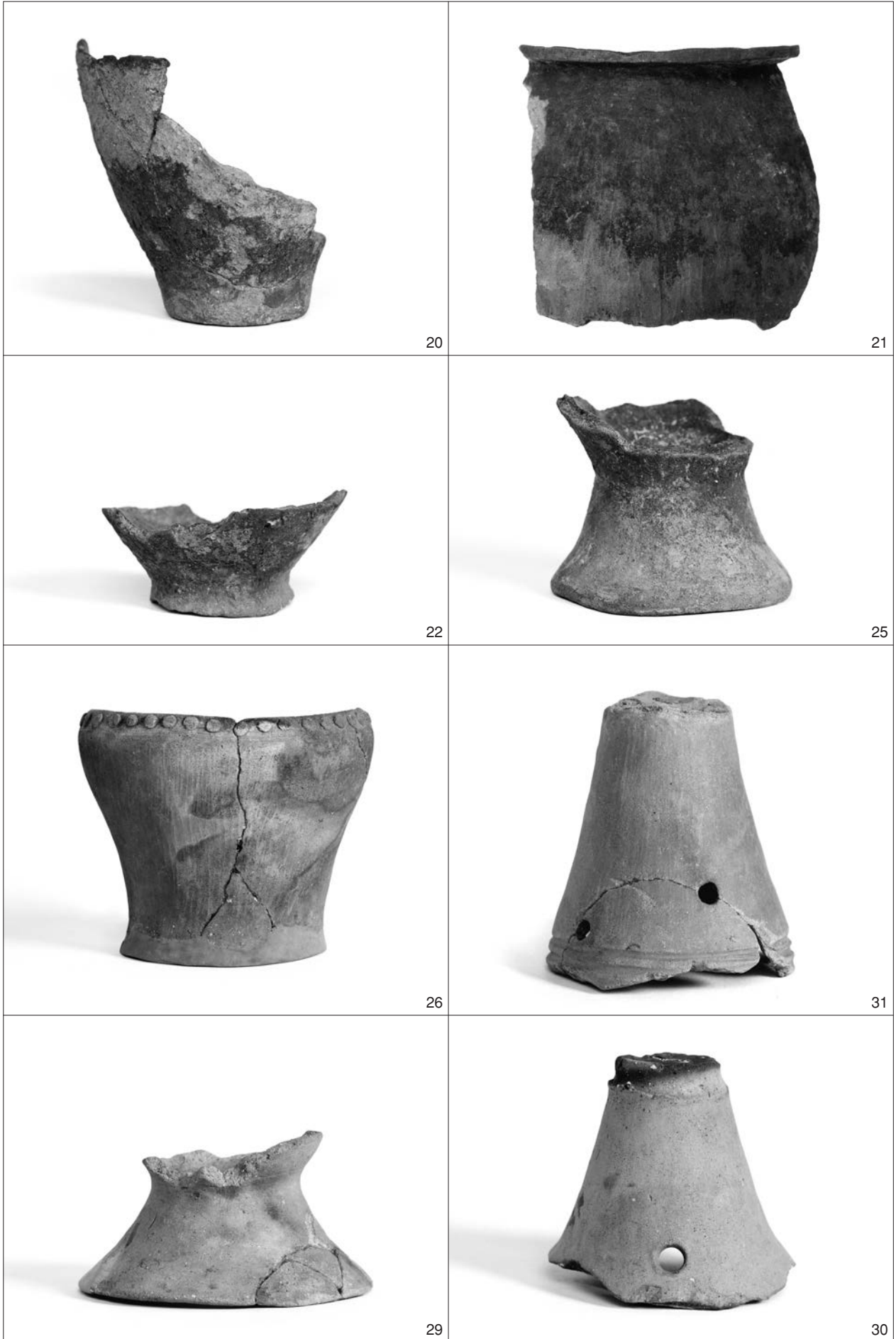


北鳥池遺跡



若江北遺跡

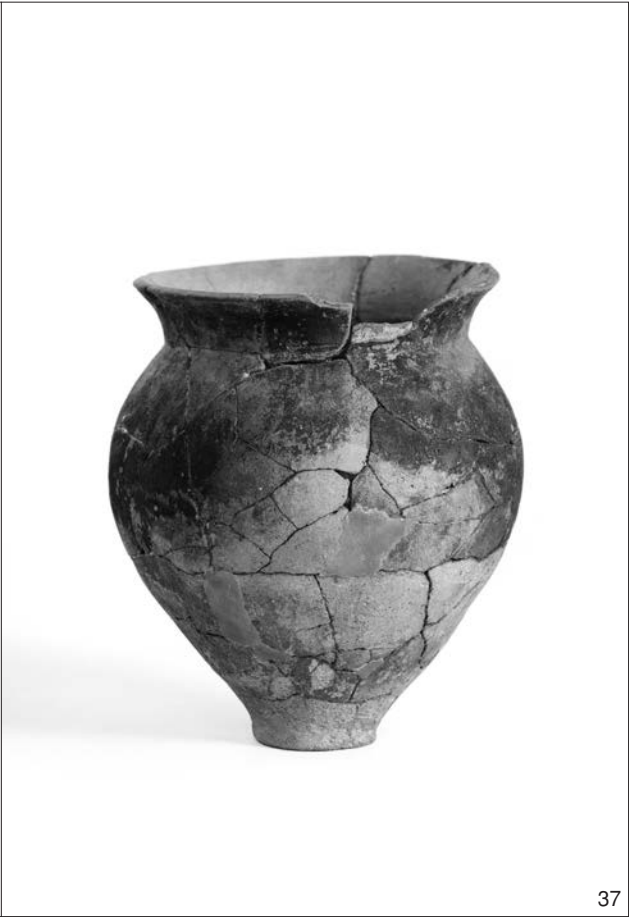




第4 a - 1面12 - 1溝底面上堆積シルト層



34



37



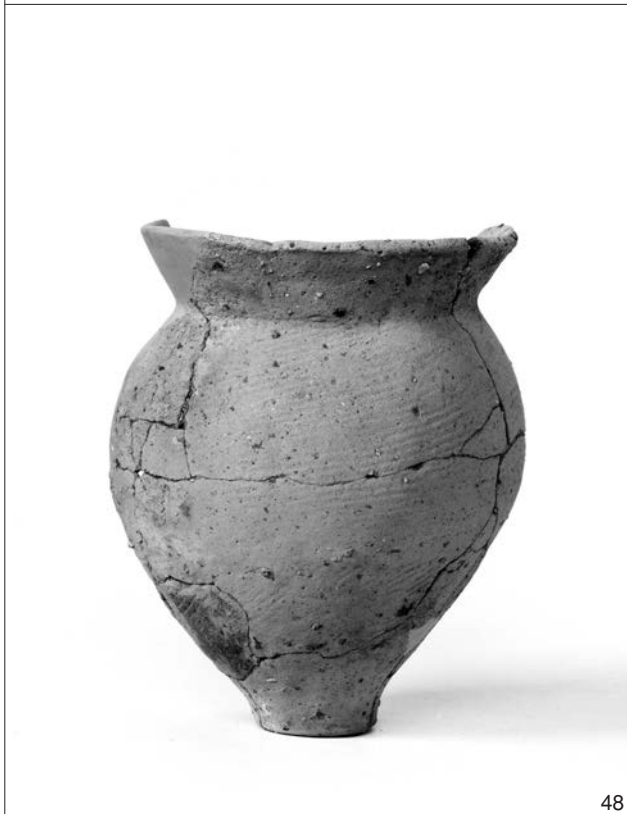
35

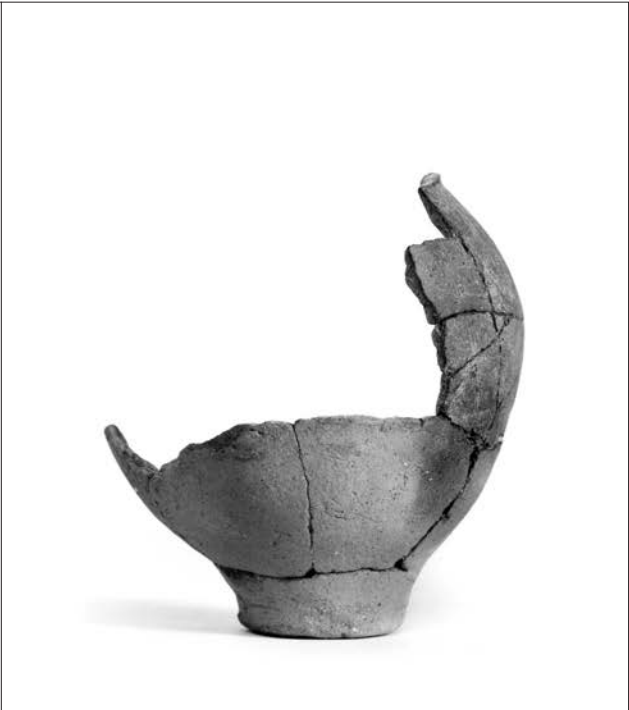


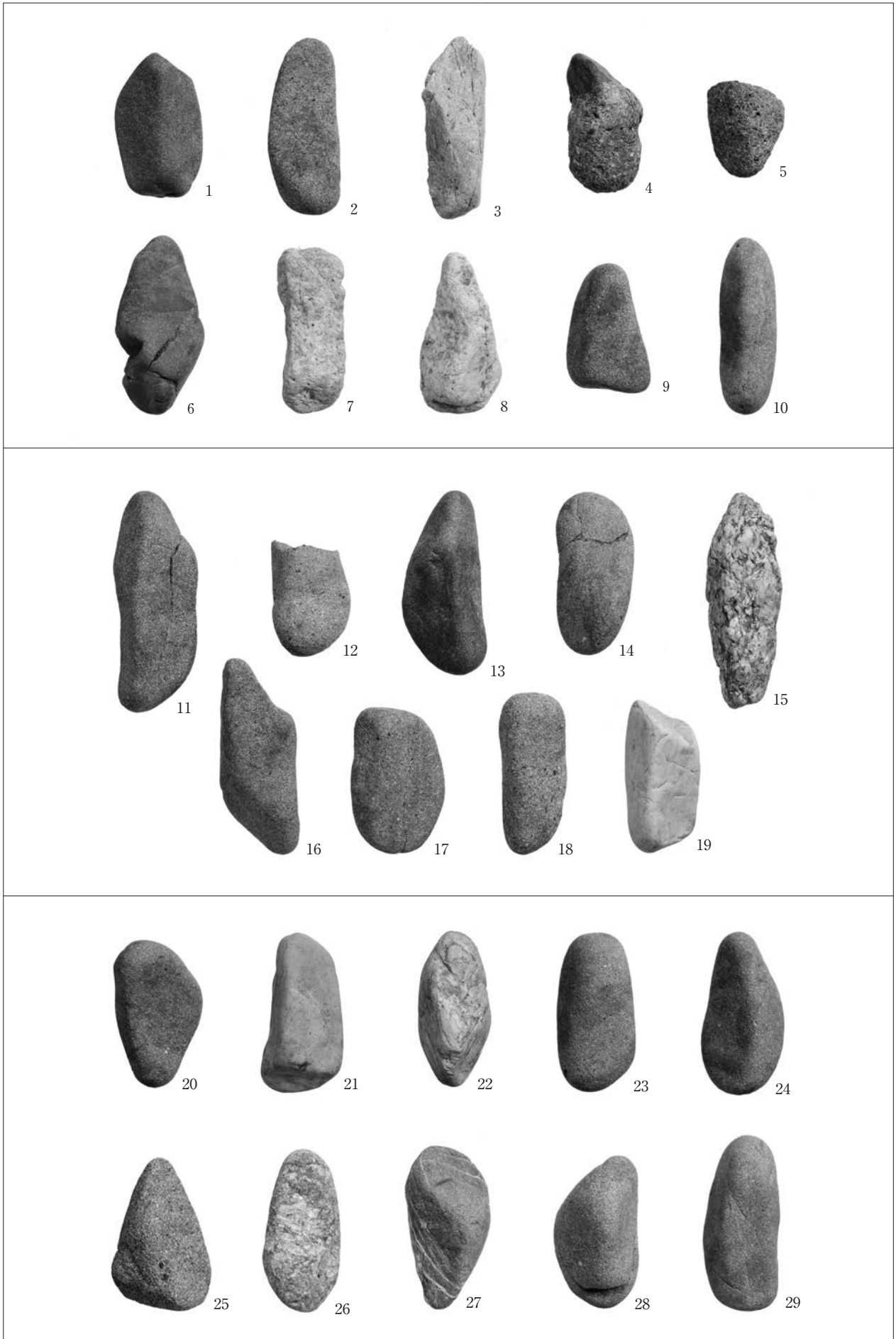
38

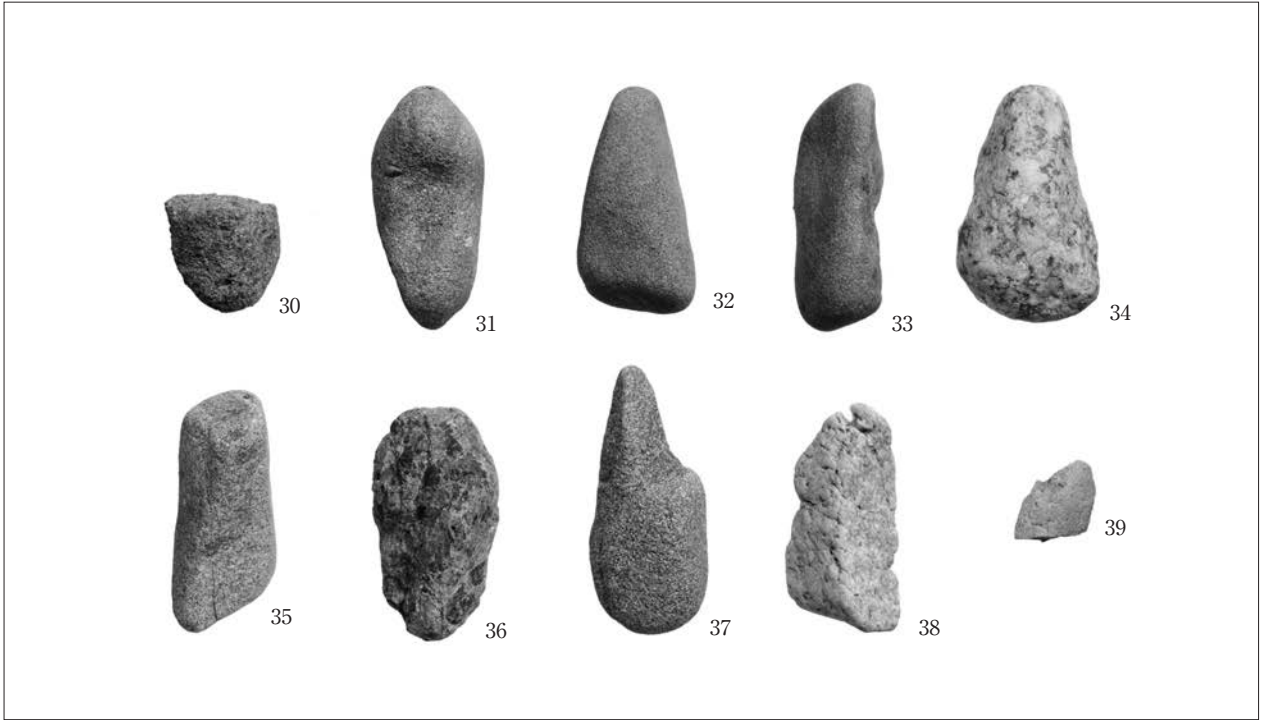


39

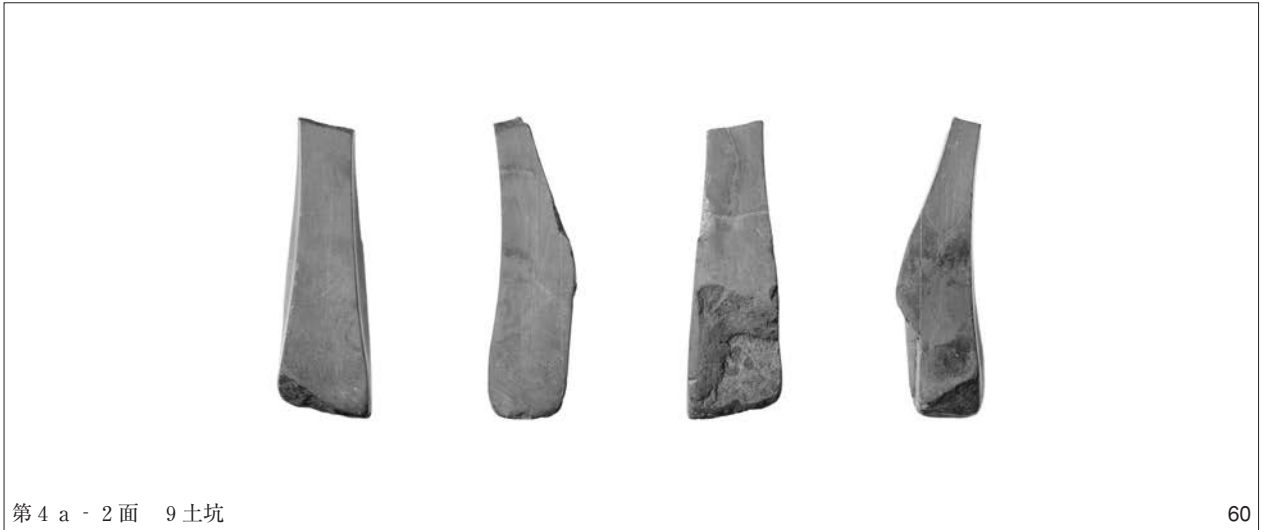








第4 a - 2面 集石 (2)



第4 a - 2面 9土坑

60



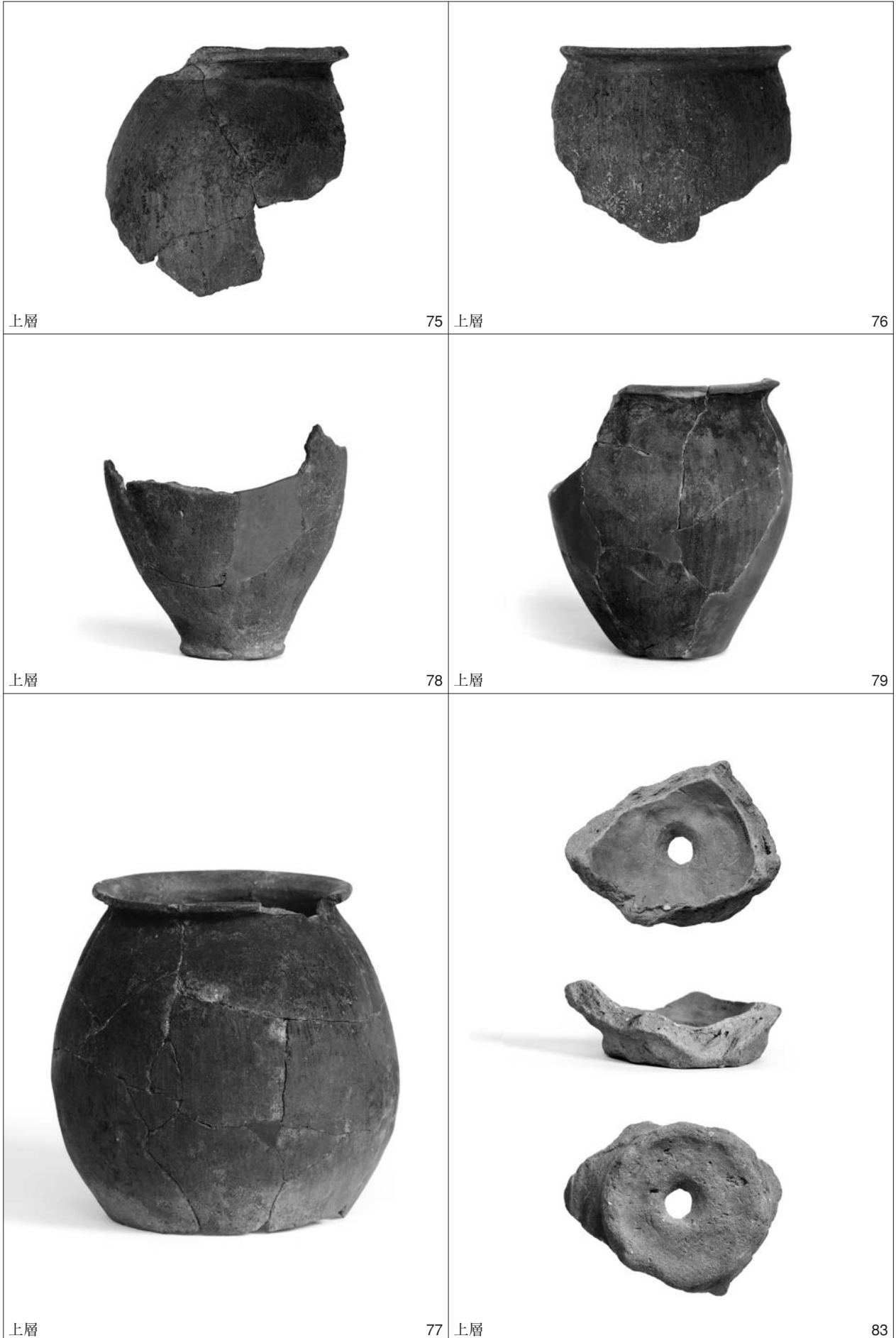
第4 a面 12 - 1・2溝境界部

62

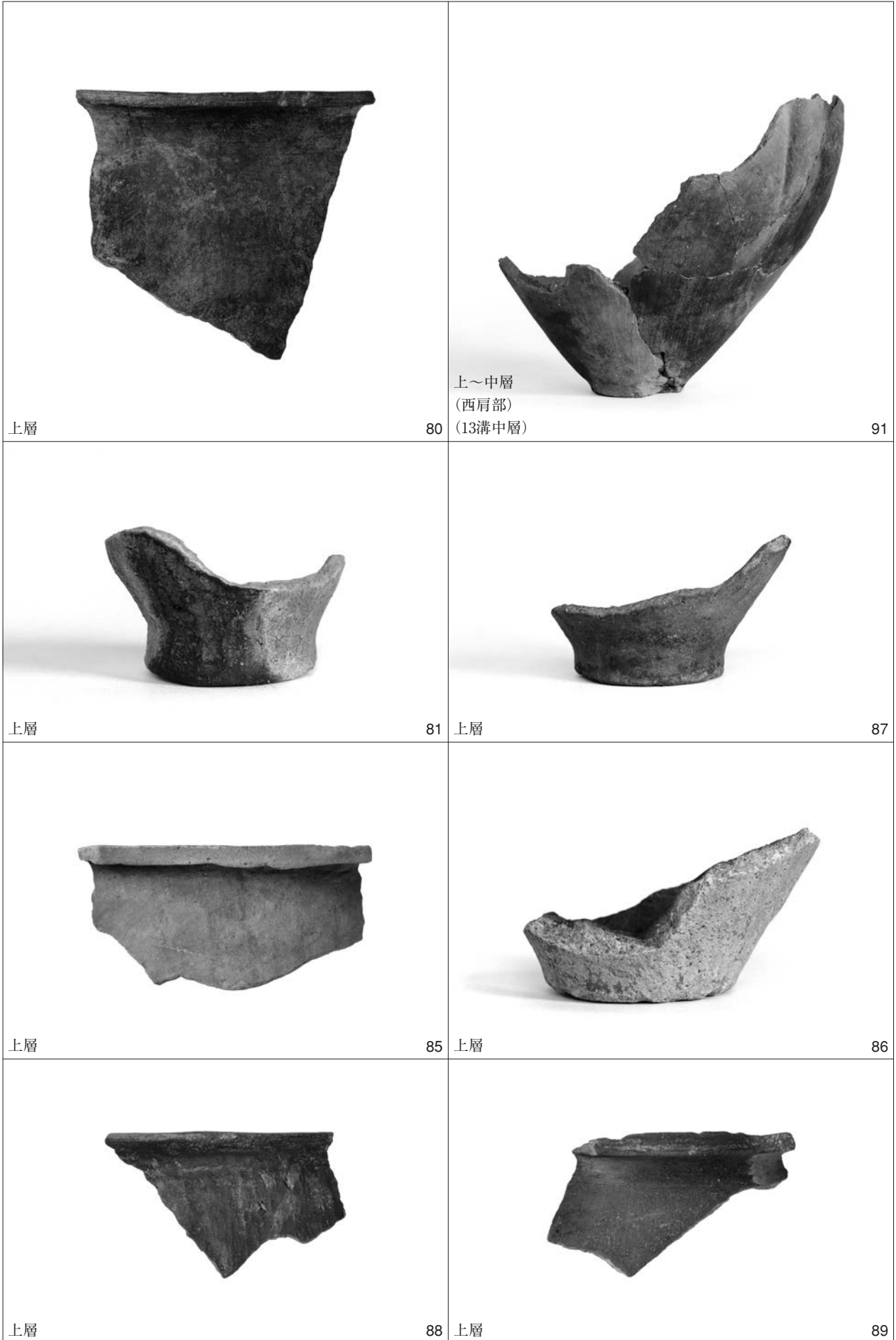


第4 a面 12 - 1・2溝境界部

63



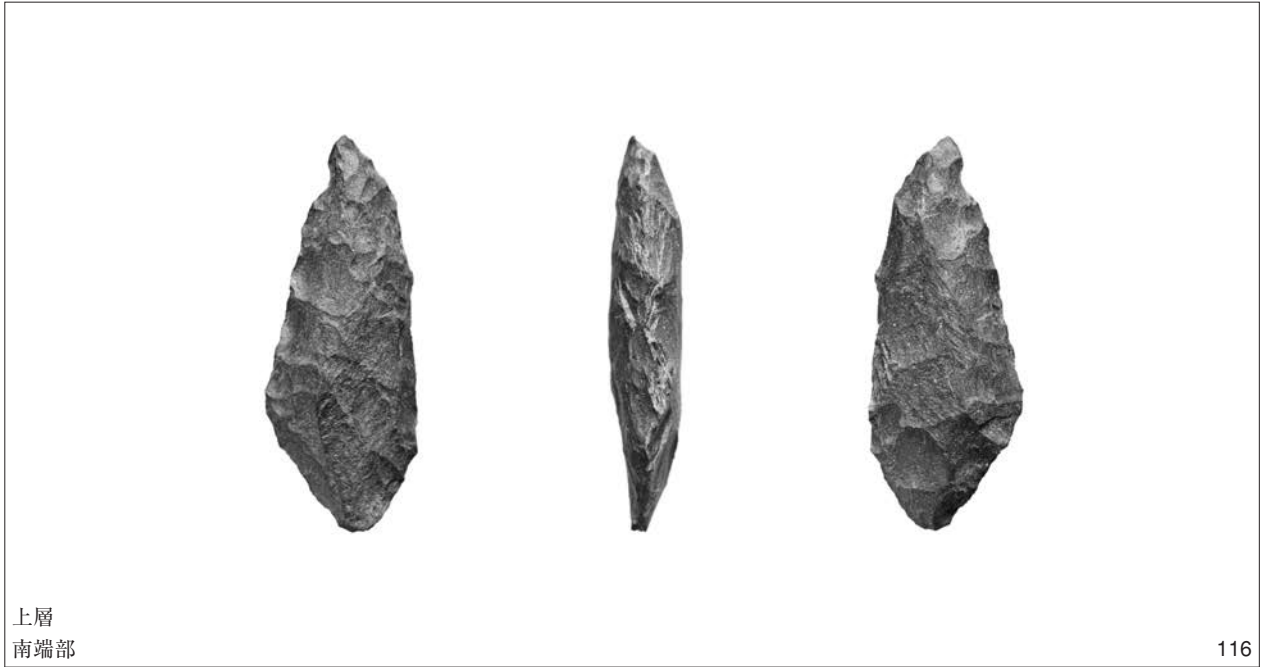
図版60 若江北遺跡 出土遺物 (10)





図版62 若江北遺跡 出土遺物 (12)







上層

118



上層
南端部

119



上層

122

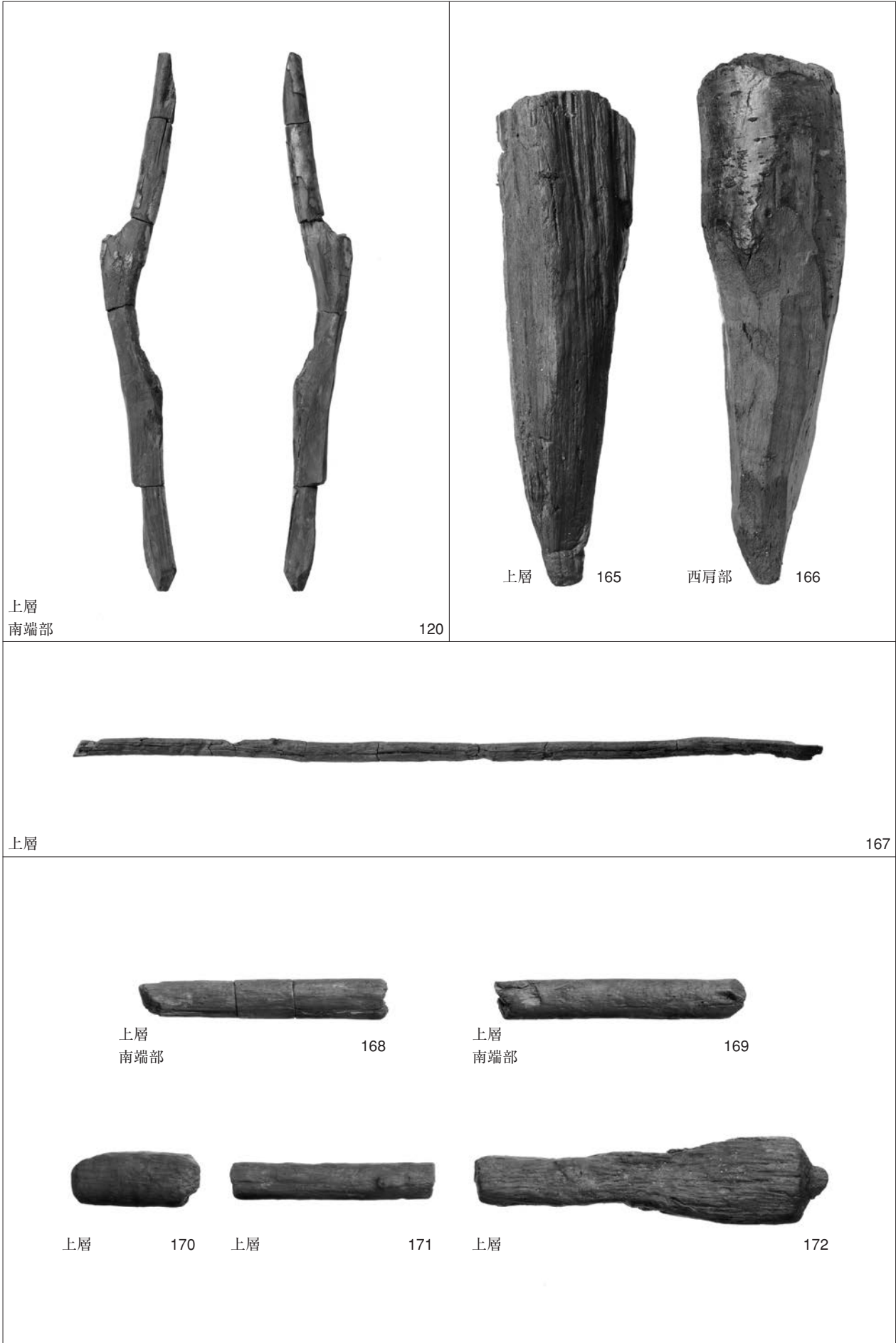
第4 a - 3面 12 - 2溝 (7)



上層
南端部

第4 a - 3面 12 - 2溝 (8)





上層
南端部

120

上層 165

西肩部 166

上層

167

上層
南端部

168

上層
南端部

169

上層

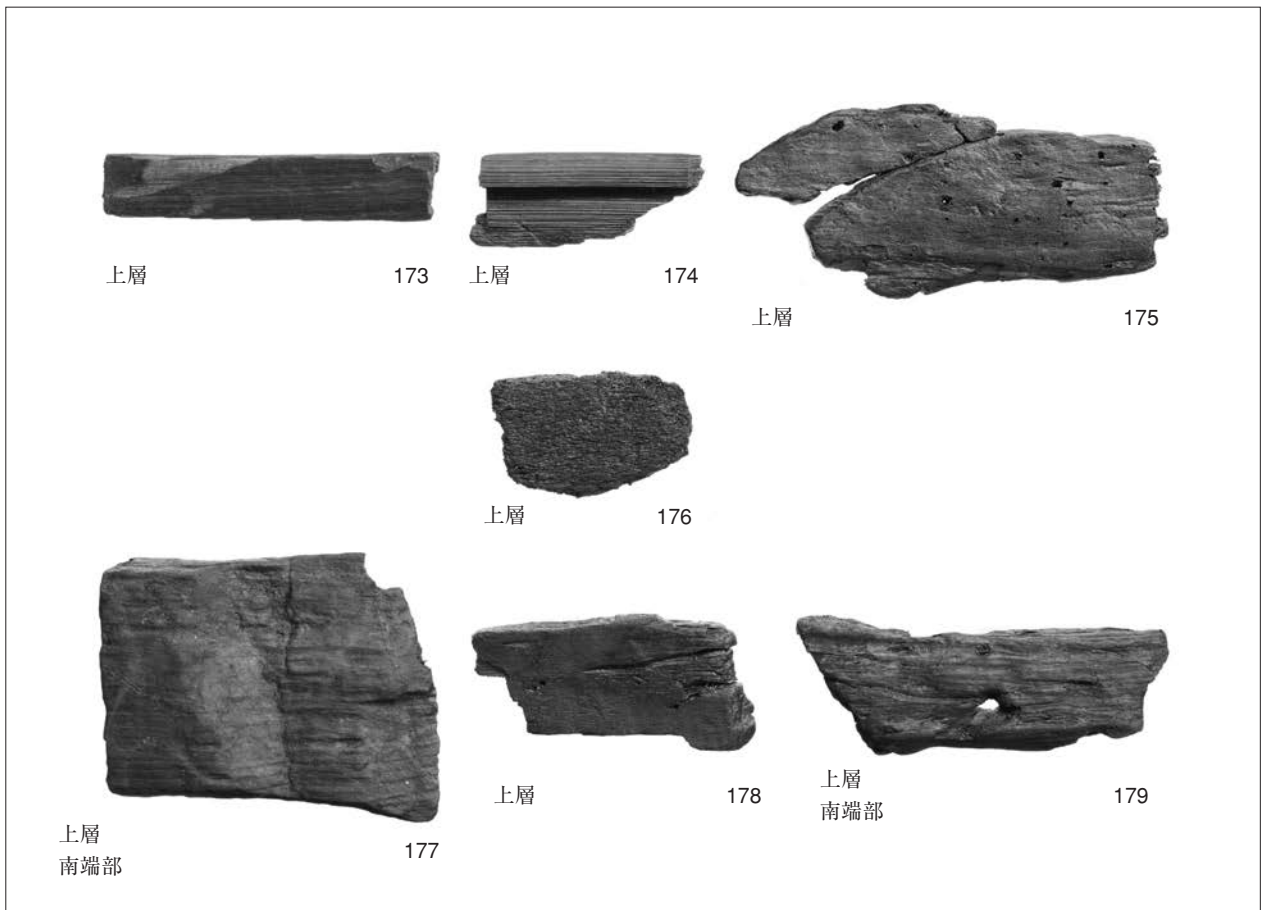
170

上層

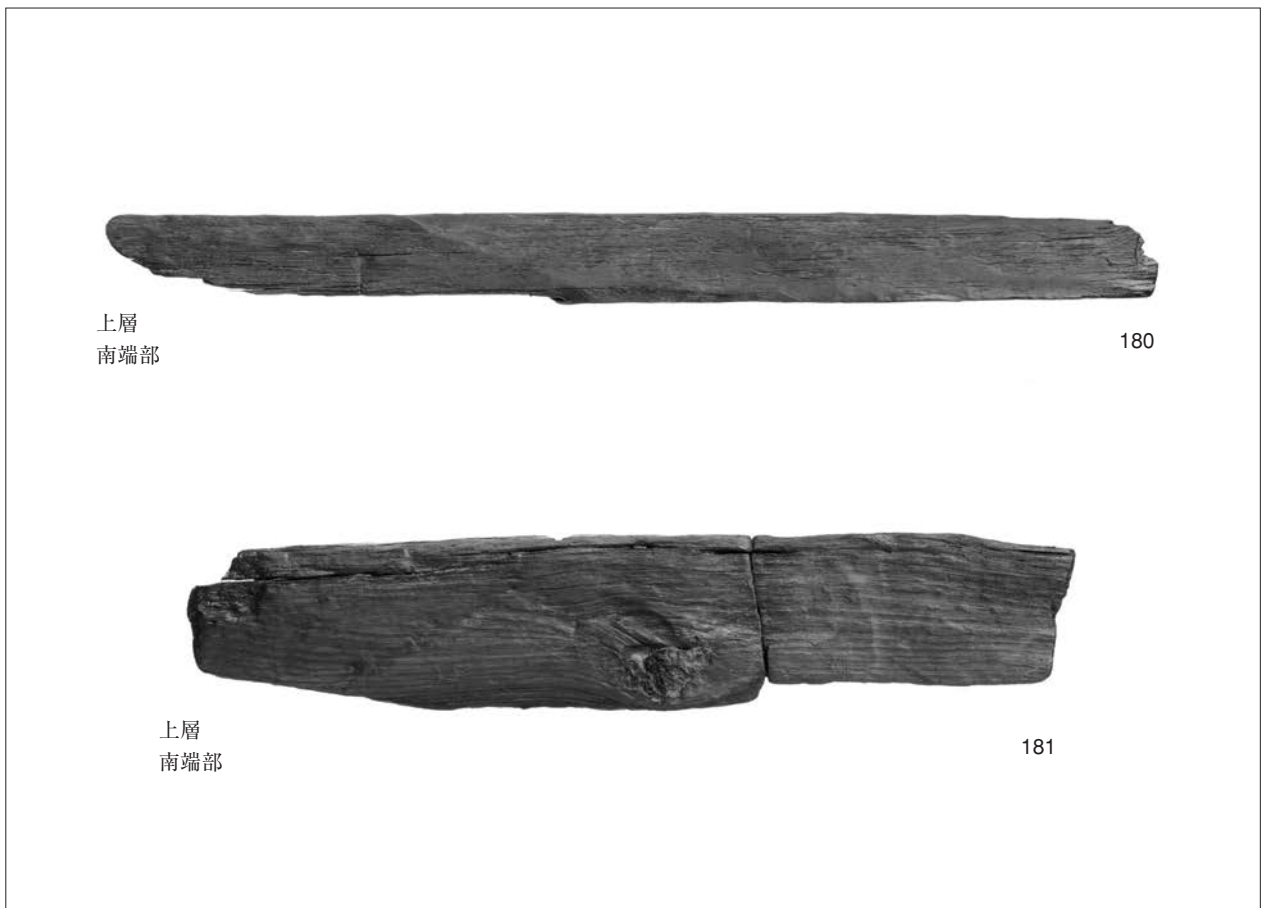
171

上層

172

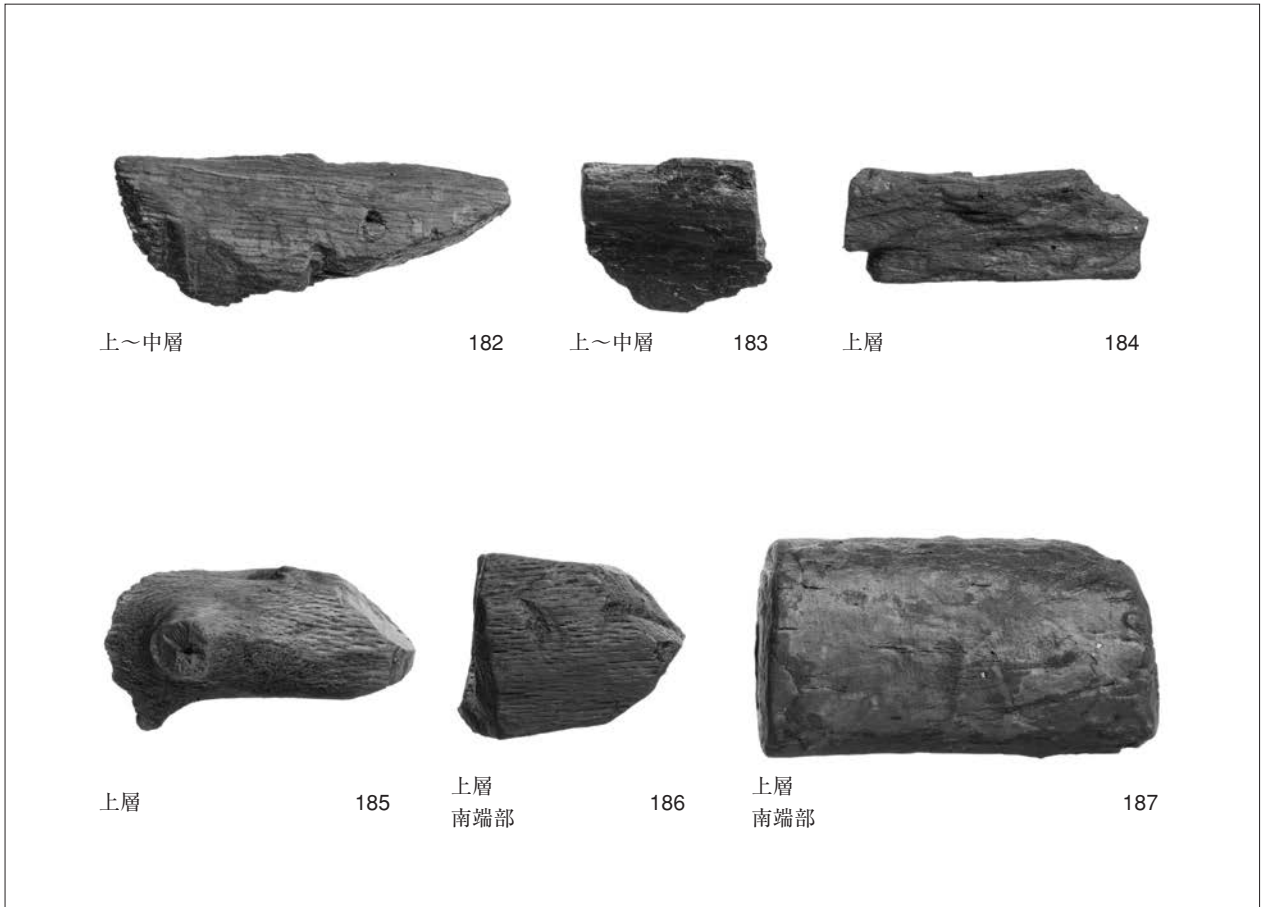


第4 a - 3面 12 - 2溝 (11)



第4 a - 3面 12 - 2溝 (12)

図版70 若江北遺跡 出土遺物 (20)



第4 a - 3面 12 - 2溝 (13)



第4 a - 3面 13溝 (1)



図版72 若江北遺跡 出土遺物 (22)



上層 (12・13溝合流部)

137



上層

138



上層

139



(上層)
中層

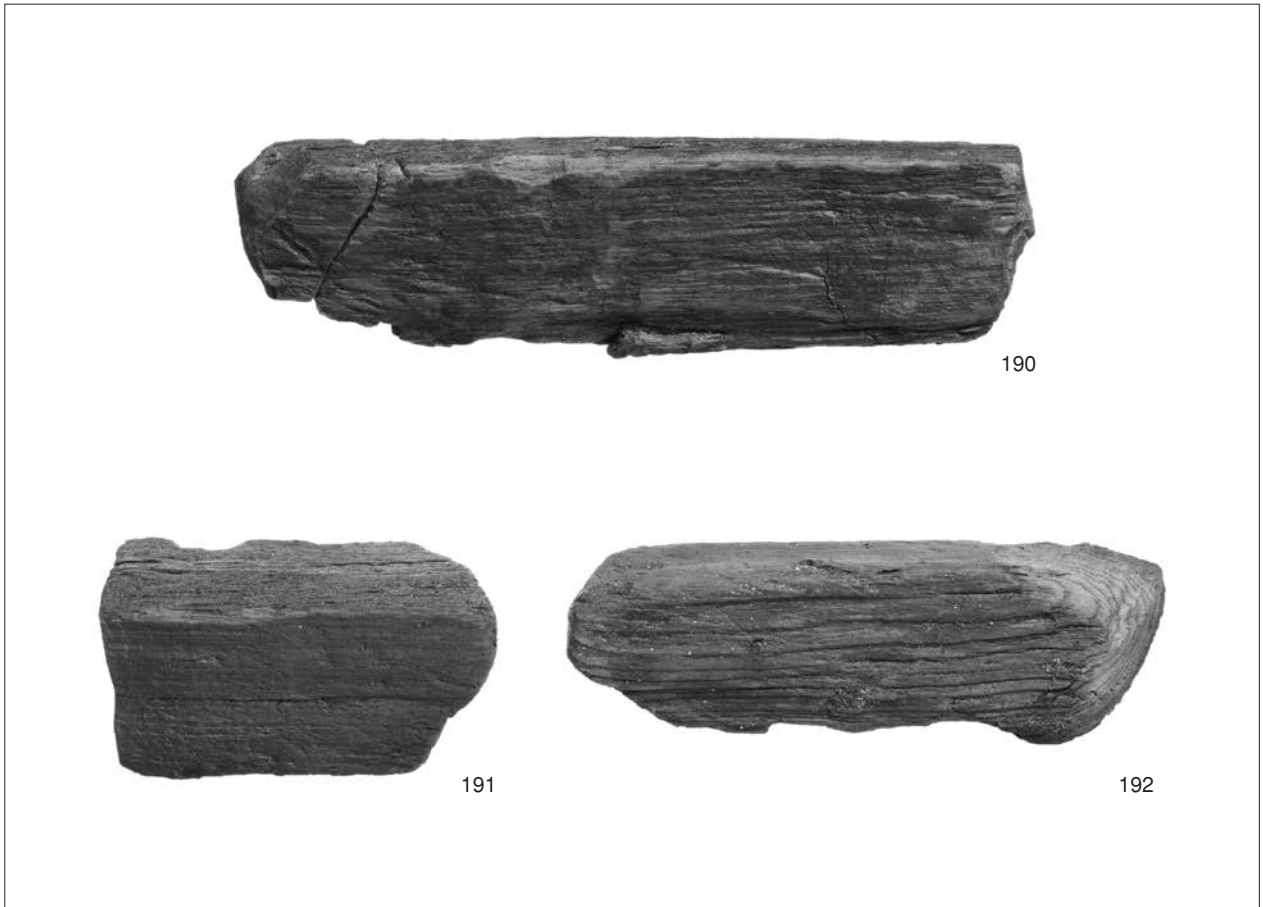
140



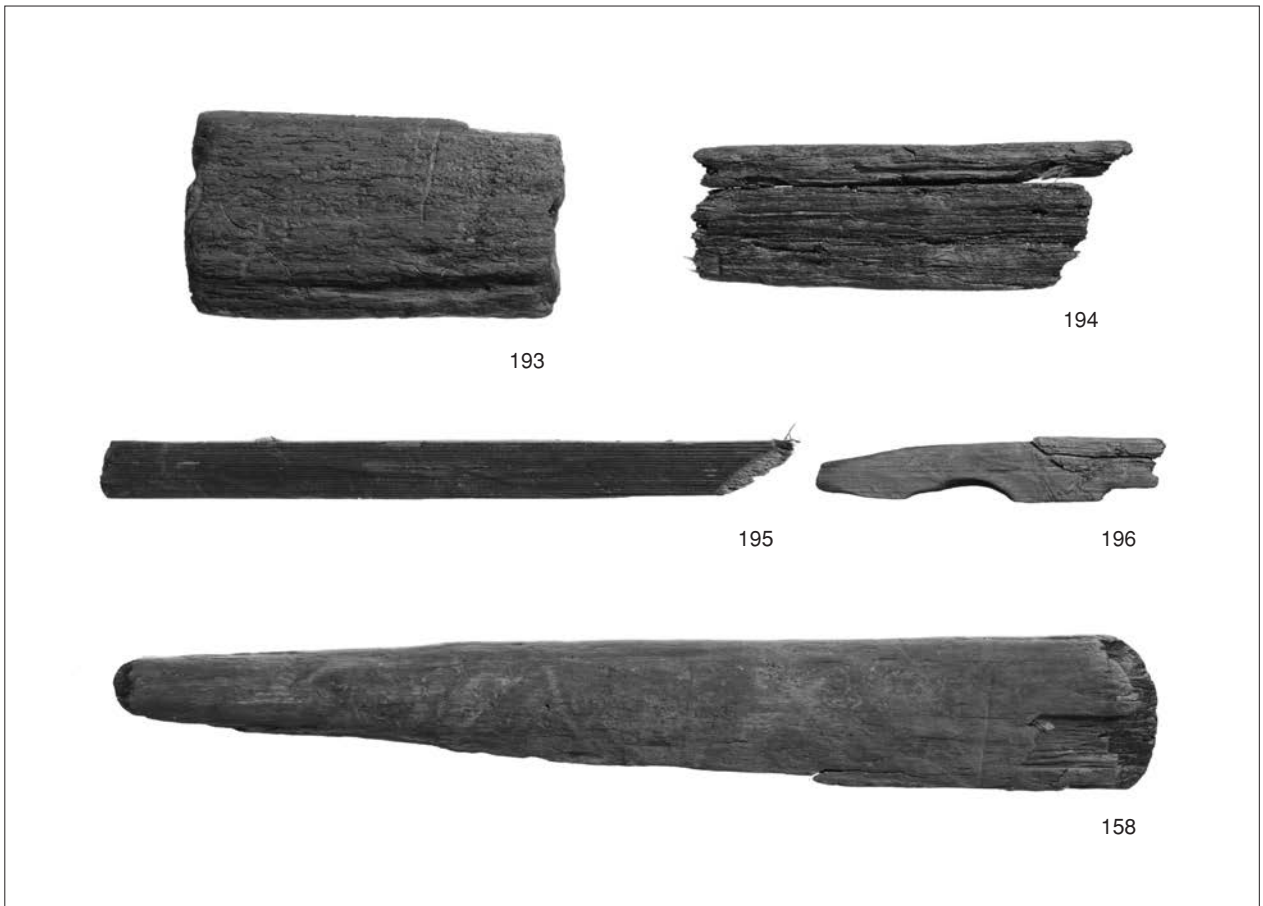
上～中層
下層

12 - 2 溝上層

143

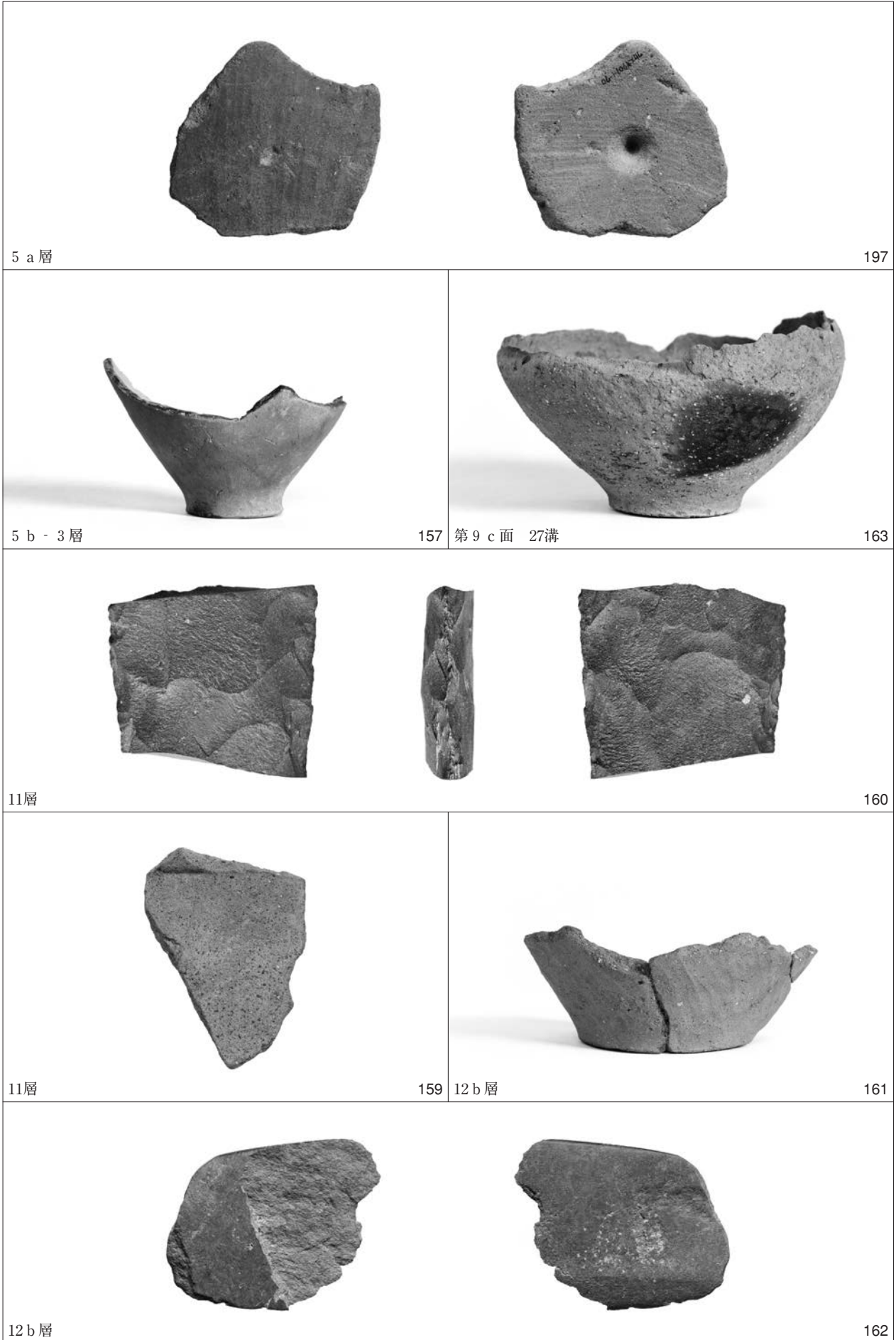


5 a 層砂層



9 層

図版74 若江北遺跡 出土遺物 (24)



第9 c 面 27溝 5 a 層 5 b - 3 層 11層 12 b 層

報告書抄録

ふりがな	わかえきたいせき・きたとんのいけいせき						
書名	若江北遺跡・北鳥池遺跡						
副書名	大阪府営水道 中期整備事業 系統連絡送水管布設工事に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第213集						
編著者名	信田真美世(編著) 別所秀高・市村慎太郎ほか						
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 電話072-299-8791						
発行年月日	2011年2月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
きたとんのいけいせき 北鳥池遺跡	おおさかふ ひがしおおさかし 大阪府東大阪市 わかくさちよう 若草町	27227	71	北緯 34° 39' 23" 東経 135° 37' 59"	2010. 1. 8 ～ 2010. 2. 17	111	大阪府営水道 中期整備事業 系統連絡送水管 布設工事
わかえきたいせき 若江北遺跡	おおさかふ ひがしおおさかし 大阪府東大阪市 わかえにししんまち3ちようめ 若江西新町3丁目	27227	97	北緯 34° 39' 19" 東経 135° 35' 56"	2010. 4. 8 ～ 2010. 7. 28	174	大阪府営水道 中期整備事業 系統連絡送水管 布設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
北鳥池遺跡	田畑	中世	ピット・溝・畦畔・土坑	弥生土器・土師器・ 須恵器・瓦器・瓦質 土器・備前焼・白磁・ 瓦	条里地割		
若江北遺跡	田畑 集落	弥生時代～中世	ピット・土坑・溝・集石・ 盛土・土器集積・畦畔	弥生土器・石器・石 製品・木製品・須恵 器・瓦	弥生時代後期末以降の小区 画水田 弥生時代中期末～後期後葉 の遺構群と、土器、木製品 等の一括出土資料 弥生時代前期の溝		
要約	<ul style="list-style-type: none"> ・北鳥池遺跡では、14世紀頃に耕作地の造成が行われ、それ以降現代にいたるまで連続と条里地割で区画された耕作地であったことを確認した。また、弥生時代以前の層準について分析を行い、遺跡周辺の地形形成に関するデータを提示した。 ・若江北遺跡では、弥生時代後期末以降の小区画水田を検出した。また、弥生時代中期末～後期後葉の遺構面では、溝をはじめとする遺構群を検出した。土器、木製品等の一括資料が出土している。弥生時代前期の遺構面でも、溝等の遺構を検出した。 						

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第213集

若江北遺跡 ・ 北鳥池遺跡

大阪府営水道 中期整備事業 系統連絡送水管布設工事に伴う発掘調査報告書

発行年月日／2011年 2 月28日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台 3 丁21番 4 号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南 2 丁目 6 番 8 号

